20. 6. 764.7
ナ

ビートルズは終わらない

行方 均

4

THE BEATLES FOUR EVER

Hitoshi Namekata

CamScannerでスキャン

はじめに

2020年はビートルズの事実上の解散から50年だ。1970年4月10日、ポールは英大衆紙「デイリー・ミラー」にビートルズ脱退を表明している。翌5月にはビートルズ最後の作品『レット・イット・ビー』（録音は『アビイ・ロード』が最後）が英米で発売され、同月中に前後して映画「レット・イット・ビー」が公開されている。日本では6月5日に国内盤LPが発売、8月25日に映画が公開されている。

僕は1964年春、国内デビュー・シングル〈抱きしめたい I Want To Hold Your Hand〉で出会い、1970年の解散まで同時代でビートルズの“進撃”に立ち会った。中学校1年生から6年間の多感な時代だ。“ビートルズ”という新しい音楽と文化を、自分たちのものとしてダイレクトに受け容れた最初の世代であったと思う。ロックンロールやロカビリーの延長でビートルズと出会った諸先輩方々の参加と貢献には大いに教えられ助けられたが、それでもあえて僕（ら）を“日本のビートルズ・ファン第一世代”と呼ぶのは、音楽と同時に彼らから“われらの時代 Our World”という世界的なメッセージをダイレクトに受け取り、その時代を生きてきたからだ。

日本におけるその最初の6年間、ビートルズは僕らとともに実在した。そして1970年以降ビートルズは、「解散後のビートルズ」というさらに巨大で普遍的な存在になったと思う。

あれから50年のこの機に、第一世代の自負をもってビートルズの現役時代とその後を語りたい。そんなことを考えて、現在世界最長の公認ファンクラブ「ザ・ビートルズ・クラブ」会員限定月刊誌「ザ・ビートルズ」2016年4月号（3月発行）から連載を引き受けた時、タイトルを「僕らのビートルズ」とさせていただいた。もちろん計算したわけではないが、連載は50周年の5月号（4月発行）で第50回を迎えた。あの60年代の日々に加えて、1997～2013年の「ザ・ビートルズ1」「LOVE」、20年ぶりの再発盤リマスター・プロジェクトをカヴァーする解散後の最も充実した時期、僕はレコード会社（東芝EMI～EMIミュージック・ジャパン～ユニバーサルミュージック）でビートルズ国内盤の制作・宣伝を統括する立場にあった。ビートルズを囲む大小二つの過去の様々なエピソードをご提供できると思う。

本書は3部構成からなり、第1部「僕らのビートルズ」は、その名の通り上記連載の第1回～第50回に加筆・修正を加えてまとめたものだ。第2部はビートルズの英米日のオリジナル・アルバム全58タイトルをリスト・アップし、各タイトルに僕なりの解説というか、長短自在のわがままなメモワールを加えている。第3部は対談編だ。3回4人の出席者をお願いしたが、第1回の高嶋弘之さんは、国内盤ビートルズの初代担当者で、日本デビュー・シングル〈抱きしめたい〉（1964年2月5日発

売）の名邦題を付け、デビュー・アルバム『ビートルズ!』の名選曲を手掛けた方で、東芝EMIの前身、東芝音楽工業で大活躍された僕の大々先輩だ。第2回のピーター・バラカンさんは、僕と同年齢で、ビートルズのデビューから解散までをロンドンで体験している。第3回の藤村美智子さんは、1997年～“解散後のビートルズ”の至近な時代を担当され、そのセールスはこれもEMIの僕の大先輩、“70年代日本のビートルズ中興の祖”石坂敬一さんが先頭に立って築いた“解散後のビートルズ”の時代をはるかに凌ぐ。今回藤村さんと“共演”をお願いしたシンコーミュージック・エンタテイメント取締役の吉田聡志さんは、持っていないビートルズのレコードや書籍なら何でも手に入れる。ビートルズの記憶は散財の記憶だという。解散後のビートルズと出会い、シンコー入社後の80年代後半以降、同社のさまざまなビートルズ本やプロジェクトと関わる。藤村さんの担当したビートルズ作品のメディア側の助っ人だった。

“記憶”と“作品メモ”と“対談”、これら3部門が互いに補足し合いながら60年代に始まる“ビートルズの時代”を立体的に伝えてくれれば、というつもりで本書を構成した。そしてもちろん、その時代は今も続いている。ビートルズは終わらない。

CamScannerでスキャン

目　次

はじめに …… 002

第 1 部　僕らのビートルズ …… 007

第 2 部　英米日オリジナル・アルバム58タイトル解説 …… 211

第 3 部　新旧・日英ビートルズ対談 …… 283

高嶋弘之（初代ビートルズ担当ディレクター） …… 284

ピーター・バラカン（ブロードキャスター） …… 307

藤村美智子（元ビートルズ担当ディレクター） …… 323
＋
吉田聡志（シンコーミュージック・エンタテイメント）

謝　辞 …… 350

追悼文　湯川れい子 …… 356

索　引 …… 360

CamScannerでスキャン

第1部

僕らのビートルズ

ここに掲載する50本は
ビートルズの公認ファンクラブ「ザ・ビートルズ・クラブ」の会報誌
月刊「ザ・ビートルズ」の2016年4月号～2020年5月号に
連載した原稿を改訂したものです。

CamScannerでスキャン

01 ビートルズと“再会”する

ビートルズの会社に就職

1976年4月、僕は東芝EMI（当時）に入社した。志望というより希望はしていたけれど、あの頃のレコード業界の門は狭い広いという以前にどこが入口なのかも判然としなかった。第1次オイルショック後の不景気の中で就職シーズンの風に吹かれて右往左往しているうち、幸運が重なって気がつくと望む場所に立っていた。そんな感じだった。

学生時代はジャズ・レコードに熱中し、大学にはめったに顔を出さず、バイトの他はジャズ喫茶やジャズ・レコード専門店に日参するような日々を過ごしていた。だからその頃の僕にとって、東芝EMIとはブルーノート、プレスティッジやインパルスといったジャズの名門レーベルを多数有する（その後順次手放してしまったけれど、ブルーノートは数年後に戻ってくる）ジャズ・レコードの会社以外の何物でもなかった。

この時、ビートルズのことがまったくというほど頭の中になかったのは不思議だ。仕事にするには大きすぎると思ったのか、あるいは後述するように身近すぎる存在だったのか。実際、入社試験の最終面接でもジャズのこと以外話した記憶がないし、「この会社で何をやりたいのか

若き日の行方 均

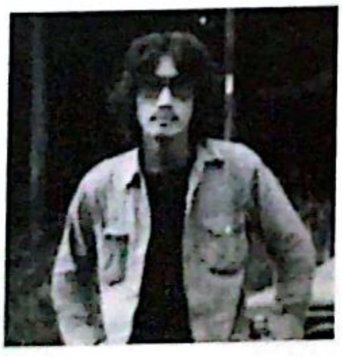
CamScannerでスキャン

ね?」という社長の質問にも、「いくつかのアルバムに分散しているブルーノートのバド・パウエル*初期のセッションをまとめたい」と答えた。こんな学生を採用したのだから社長も会社もエラかった。僕にとっては、ですが。

"ビートルズの会社"に就職したことを初めて実感したのは、5月に洋楽部に配属された時だ。目の前を石坂敬一さん(その後東芝EMI専務を経てユニバーサルミュージック、ワーナーミュージック・ジャパンの会長を歴任)が普通に歩いている。長髪にサングラスで、モッズ風のファッションに身を包んでフロアを往く石坂さんは、全身で"ビートルズ"を発信しているようだった。『赤盤』『青盤』をはじめとする解散以降のビートルズの国内盤を担当され、あらためてその音楽、さらにその文化を日本に広めた方だ。「11PM」(日本テレビ系)などのテレビ番組はじめ幅広いメディアに登場され、ビートルズの魅力を音楽や流行のみならぬさまざまな方面から語られていた。思えば石坂さん以降、日本のビートルズは"大人の文化"の仲間入りをしたのではないか。

"国旗オビ"シリーズ登場!

6月になると、会社の倉庫に工場から山のようなビートルズのサンプル盤(もちろんLP盤)が届き始めた。価格移行に伴い、当時の英米日



若き日の石坂敬一

*1940年代終わり~50年代、ブルーノート・レコードにいくつも名演を残したモダン・ジャズ・ピアノの父。

の公式盤を6、7月にまとめて発売したのだ。多くは再発売だが、最初期のイギリス盤2作、及び2枚組のドキュメント作品『ビートルズ物語』を除くすべてのアメリカ盤は、この時が最初の国内プレスだ。オビには各オリジネーターの国旗があしらわれ、通し番号が振られている。最後尾が最新コンピ（つまりこの時期の英国発の新譜）の『ロックン・ロール・ミュージック』2枚組の29番、従って全29タイトルのシリーズだった（後に"国旗オビ"の名で呼ばれるようになるこのシリーズは、1980年の新譜『レアリティーズVol.2』の35番までこの後も散発的に発売を重ねる**）。ものすごい数のレコードの山の整理を手伝いながら、僕はビートルズとの"再会"を確かめ、心の底から喜んだ。

〈抱きしめたい〉との出会い

ビートルズとの出会いは、1964年の初夏のことだ。日本の歌手が洋楽を歌う「ザ・ヒット・パレード」（フジテレビ系）という番組で楽曲を知ったに間違いないが、並行してビートルズのアメリカ上陸のニュースもあちこちで見聞きしていたと思う。中学校に進学してひと月ほど経った頃、朝礼のラジオ体操で体を動かしながら、「今日学校が終わったらビートルズのレコードを買いに行こう!」と不意に思ったことを覚えている。新しい体験をしたかったのだ。ドーナツ盤シングルが確か1枚300

国旗オビ付きの『ロックン・ロール・ミュージック』

** 国旗オビ・シリーズ全35作の全タイトルと発売年は第6回参照。

円（ラーメンが50円前後）の時代。僕が知っていたビートルズは「抱きしめたい I Want To Hold Your Hand」と「プリーズ・プリーズ・ミー」の2曲だった。

自転車で10分ほどの吉祥寺の雑居ビルにレコード店があった。ビートルズのシングル1枚分の小遣いを握りしめて店内に入ると、僕は店員のお姉さんにこれら2曲を1枚に収めたシングル盤がほしい旨を伝えた。すると彼女は、「何も知らないのね、坊や」という顔で、それらは2枚のドーナツ盤に分かれていること、ドーナツ盤には有名なB面の曲が付随していること、東京ビートルズ（というグループがビクターからいち早くデビューしていたのだ！）だったら両曲の日本語カヴァーをA面B面に収めていることなどを優しく教えてくれたものだ。僕はさんざん迷った挙句、本家のビートルズの「抱きしめたい」を買って帰り、夕食を挟んで何度も何度も聴き返し（B面の「こいつ This Boy」はそれほど気に入らなかったが）、翌朝クラスメートと会う時には結構なビートルズ・ファンになっていた。

（2016年4月号）

「抱きしめたい」
（1964年／オデオン／東芝）

「プリーズ・プリーズ・ミー」
（1964年／オデオン／東芝）

「抱きしめたい／プリーズ・プリーズ・ミー」
東京ビートルズ（1964年／ビクター）

02 アビイ・ロードのジョージ・マーティン

“5人目のビートル”と会う

ジョージ・マーティンとは一度だけ、ロンドンで会うことが出来た。

2006年の夏の終わりだったと思う。ダブリンでEMIの国際会議があり、マイク・ヒートリーに誘われて帰路ロンドンのアビイ・ロード・スタジオに寄ることになった。ラスヴェガス、ミラージュ・ホテルのシルク・ドゥ・ソレイユのショー「LOVE」*は既に開幕し見ていたけれど、いよいよ秋に世界発売されるCD版の音を試聴できるということだった。マイクは英EMIの古参社員のひとりで国際的な発売作品の制作／編成を担当し、アップルとの付き合いも長くビートルズの生き字引として知られていた。たとえば「ビートルズが初来日した時……」と言いかけると、「1966年6月だね！」というような反応がたちどころに返ってくる。2009年9月9日に1987年の初CD化以来のリマスター版CDが世界発売された時、全14タイトルそれぞれのライナーノーツに“Historical Notes”を寄せているのがこのマイク・ヒートリーだ。

スタジオの受付に着くと、マイクが待ちかねたように現れた。「僕らの友人が待っているよ!」。そう言って案内された2階のマスタリング・ルー

ジョージ・マーティン
PIC：Koh Hasebe

ミラージュ・ホテルの「LOVE」ポスター

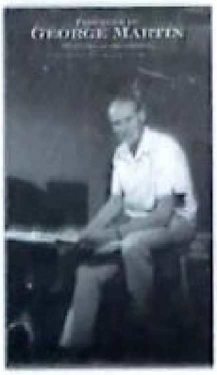
＊2006年6月30日初演。ラスヴェガスの呼び物のひとつとなり、2019年末現在も続演中。

ムの扉の中で、「ようこそ!」と手を差し伸べてくれた“友人”がジョージ・マーティンだった。感激より驚きが先だった。この長身痩躯の紳士が“5人目のビートルズ”なのか、抱腹絶倒のあのピーター・セラーズ版〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉(『ジョージ・マーティン・ボックス』所収)もこの英国紳士が制作したのか。握手をしながらそんなことを思った。

ラスヴェガスのアトラクションのサウンドトラックとして始まった『LOVE』は、ひとたびプロデュースの現場を退いていたジョージ・マーティンが久々に手掛けた作品で、息子のジャイルズがアシスタントを務めている。ビートルズの全213曲のうち、断片も含めて120曲を80分に詰め込むという離れ業は、ビートルズの音楽をマルチトラックの隅々まで熟知していればこそ可能なことだ。複雑なリミックス作業でまとめられた新たな音楽は、今やCD化の最終段階にあった。この日はアビイ・ロード沿いのレストランで私的な集まりがあり、これに合わせてスタジオに立ち寄ったのだという。

ビートルズ14番目のアルバム

こうして僕は21世紀のビートルズの“最新作”の音を、その新旧ともどもの音を作った人物とスタジオに椅子を並べて聴くことになった。ミラージュの円形劇場の宙に浮かんだあの〈ビコーズ〉のアカペラがス

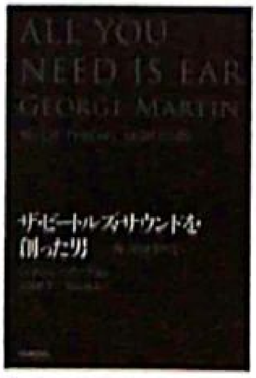


『ジョージ・マーティン・ボックス』
(2001年/パーロフォン/東芝EMI)

CamScannerでスキャン

ピーカーから流れ出ると、僕の気分も負けずと空を舞うようだった。アビイ・ロードたたき上げのベテラン・エンジニア、アラン・ラウズがコンソールに座っていた。アランは『LOVE』に続いてリマスター・プロジェクトの音作りも監修し、マイクの“Historical Notes”と並んでCDライナーに“Recording Data”を寄稿している。2009年9月のリマスター版CD発売に先がけて、僕らは7月にアランを招いて試聴会を開催した。恵比寿（東京）の日本マランツ・ショールームを会場に選んだのは、同社がアビイ・ロード・スタジオの標準機であるB&Wの代理店で、リスニング・ルームにその大型スピーカーを常設していたからだ。

2006年11月の『LOVE』発売時にジョージは来日しなかったけれど、代わって息子のジャイルズが大任を果たしてくれた。さぞかしビートルズ漬けで育ったのだろう、そう思って尋ねたら、子供の頃、家ではビートルズの音楽も話も一切タブーだったのだそうだ。ジョージの自伝『ザ・ビートルズ・サウンドを創った男――耳こそはすべて――』（原書『All You Need Is Ears』は1979年刊行／2016年〈日本語版新装版〉吉成伸幸、一色真由美・訳／河出書房新社）を読むと、ハウス・プロデューサー時代（～1965年）も独立以降も、EMIの提示するジョージの契約条件はシビアにすぎるものがあるが、これに対する不満が家庭にも影を落としていたのだ。同じ思いが『レット・イット・ビー』の制作現場からジョージを遠ざけたもの（のひとつ）であった可能性を考え



「ザ・ビートルズ・サウンドを創った男
――耳こそはすべて――」（新装版）
（2016年／河出書房新社）

CamScannerでスキャン

ると、EMIの対応によってはあり得たかもしれない歴史に思いを馳せてしまう。つまり、最終録音『アビイ・ロード』より前に"裸の"『レット・イット・ビー』が普通に発表されるという(正しい順番の)歴史だ。

なんであれ、2006年、ジョージ・マーティンはビートルズの"最新作"の制作現場に戻ってきてくれた。"The Beatles – The Brand New Album"というロンドンのコピーに倣って、僕らはCDのオビに「ザ・ビートルズ、最新作」と入れた。これには「メンバーが誰も直接制作に参加していないのに最新作とは何事か」という否定的な意見も一部から頂いたが、馬鹿を言うな。ジョージ・マーティンを"5人目のビートルズ"と呼ぶならば(5人目以上だ)、『LOVE』は"ザ・ビートルズ14番目のアルバム"であってしかるべきだ、と僕は思っている。

ジョージ・マーティン(2016年3月8日没、享年90)、そしてアラン・ラウズ(同年2月21日没)のご冥福をお祈りします。(2016年5月号)

03 ビートルズ来日の頃

それどころではない1年

50年前、ビートルズ最初で最後の来日の年は、思えば「それどころではない」年でもあった。この年、1966年のビートルズの主たる国内盤発売は以下のように並ぶ

①1／15 シングル〈恋を抱きしめよう〉／〈デイ・トリッパー〉（英米は前年末発売）
②3／15 LP『ラバー・ソウル』（同上）
③4／15 シングル〈ひとりぼっちのあいつ〉／〈消えた恋〉（『ラバー・ソウル』より。米は2月発売）
④5／25 LP『ステレオ!これがビートルズVol.1』（来日記念盤）
⑤5／30 LP『同Vol.2』（同上）
⑥6／15 シングル〈ペイパーバック・ライター〉／〈レイン〉（米が5月に先行。英は6／10）
⑦9／5 シングル〈イエロー・サブマリン〉／〈エリナー・リグビー〉（『リボルバー』より。英米は8月発売）
⑧10／5 LP『リボルバー』（同上）

〈恋を抱きしめよう〉
（1966年／オデオン／東芝）

CamScannerでスキャン

これらに加えて、当時比較的買い易くて人気だった4曲入りのEP盤（33回転17センチ盤）が何枚も出ている*。来日記念盤の2巻は英国の最初の2枚のLP『プリーズ・プリーズ・ミー』と『ウィズ・ザ・ビートルズ』のステレオ版それぞれの曲順を入れ替えた内容だが、他はいずれも新作・新曲だ。しかも①⑥の4曲はいかなるアルバムにも属さず、ずっと後のCD時代に拾遺集『パスト・マスターズ』に収録される。たった1年の間に、あの『ラバー・ソウル』とあの『リボルバー』と2枚の両A面シングルを発表しているのだ。当時のビートルズ（及び制作チーム）の創造力と生産力にはただ驚くしかない。しかも"合間に"ワールド・ツアーまでこなし日本にやってきたのだ。

ビートルズの新ネタは途切れることを知らず、その中に紛れたのか、ビートルズ来日決定のニュースをいつどこで知ったのかまったく記憶にない。ミュージック・ライフ誌（新興楽譜出版社:現シンコーミュージック・エンタテイメント）が前年から毎号のように「来日決定か!?」という"速報"を掲載していたから、気分的にはとうに織り込み済みだったかもしれない。僕は杉並区の公立中学校の3年生で、生徒がビートルズ公演に行くことを学校が奨励するわけはもちろんなかったが、近隣の私立校から噂が伝わってくるような"禁止令"もなかった。大いに楽しみではあったけれど、しかし自分自身が行くという積極的な気分にはならなかった。ビートルズを呼んだ読売グループの日本テレビが中継するこ

ビートルズ来日直前の記事
（「ミュージック・ライフ」1966年6月号）

＊66年中だけで以下の4曲をフィーチャーした4作が出ている。〈恋のアドバイス You're Gonna Lose That Girl〉（1月）、〈アンナ〉（3月）、〈ミッシェル〉（5月）、〈ペイパーバック・ライター〉（12月）。LPになかなか手を出せない中学生には有り難いお買い得盤だった。シングル盤330円の時代に倍の4曲入って500円だったかな。

CamScannerでスキャン

とはわかっていたし、ビートルズと出会って以来レコードに夢中だったので、小遣いがあれば僕は1枚でも多くレコードがほしかったのだ。

ロックは非行の始まり？

昭和40年前後のあの当時、なぜか流行歌は非行化の入口のように扱われていた。小6か中1の時、松尾和子とマヒナスターズがヒットさせていた〈お座敷小唄〉を僕（ら）が遠足のバスの中で歌ったというので、学級委員会（って今もありますか？）で問題になったことがある。そんな時代だから（それにしても、遠足のバスでは皆何を歌っていたんだ？）、ロックで長髪で「抱きしめたい」なんて叫ぶビートルズが学校に歓迎されるはずはなかった。そもそもロックンロール転じてロック**自体が生まれたばかりで、世の中一般にとっては流行歌以前の得体のしれない西洋音楽であり奇妙な新語でしかなかった。混声合唱に熱心だった中学の音楽の教師はなぜかビートルズを目の敵にしており、ある音楽の授業中、ビートルズの長髪を批判し始めた。僕は思わず、「先生……」と音楽室の壁に貼られた大作曲家たちの肖像画を指差した。ビートルズの4人の誰よりも、バッハやベートーヴェンやモーツァルトの髪の方が長かった。「ウエストサイド物語」のレナード・バーンスタインが「ビートルズはモーツァルト以来の天才」と語ったとラジオで耳に

待望の日程決まる
ザ・ビートルズ

ビートルズ来日日程決定の新聞記事
（『読売新聞』1966年6月3日朝刊）

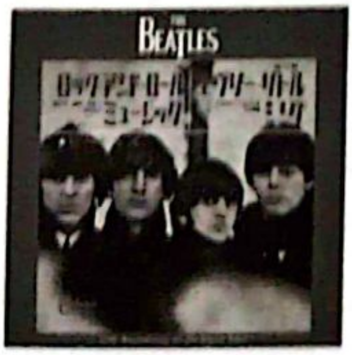
** [illegible]

した時は、僕らの時代の新しい文化が世の中の正統に認められたことが誇らしかったし、“大人”にもいろいろいるもんだと思った。

誕生日に羽田着陸

ビートルズが来日した日のことはよく覚えている。当初6月30日の予定が28日に早まり、最後の最後、台風の影響で半日遅れの29日未明に羽田に到着したのだ。そしてこの日は僕の15歳の誕生日だった。僕は自分の誕生日をことさら大事にする人間ではまったくないが、お陰でビートルズの来日記念日を忘れないし、僕の誕生日を覚えていてくださる方々もいる。5年前の来日45周年の時、僕らEMIミュージック・ジャパンは来日公演のオープニング曲にして当時のビートルズの日本最大ヒットの45回転シングル盤〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉を連番入り6,000枚限定で復刻した。29日の発売当日は星加ルミ子さんと初代ビートルズ担当者高嶋弘之先輩をお招きしてトークショーを開催し、終了後打ち上げ***に流れたが、敬愛するおふたりと仲間たちから、この夜幸福にも僕は自分の60周年もお祝いしていただくことになった。

（2016年6月）



〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉
50周年のシングル

*** ビートルズゆかりの東京ヒルトンホテル（1984年よりキャピトル東急ホテル、2010年よりザ・キャピトルホテル 東急）の、ジョンが愛したレストラン「オリガミ」で。

CamScannerでスキャン

04 ライヴ・アット・ブドーカン

武道館の11曲

50年前の1966年。武道館に積極的に出かける気にはならなかったが、7月1日21時半からの録画中継（日本テレビ）の晩は一瞬も見逃すまいと早くからテレビの前に陣取っていた。録画とはいえ当日昼の部の収録で、夜の部の演奏が終わってまだ1時間足らずという時間帯の放映だ。しかも翌日には3日目の昼夜のコンサートを残している。見ている側の気分としては限りなく生放送に近い。僕の最大の関心は、ビートルズが一体どんな曲を演奏してくれるのかということだった。以下がこの夜（そして日本の全5公演で）ビートルズの演奏した11曲と、それらの楽曲の国内盤の発売日だ（Ⓢはシングル盤の発売日、Ⓐは収録アルバムの発売日とタイトル）。

---

①〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉（Ⓢ1965／2／5 Ⓐ1965／3／15「ビートルズ'65」）
②〈シーズ・ア・ウーマン〉（Ⓢ1965／1／5 Ⓐなし）
③〈恋をするなら If I Needed Someone〉（Ⓢなし Ⓐ1966／3／15「ラバー・ソウル」）
④〈デイ・トリッパー〉（Ⓢ1966／1／15 Ⓐなし）
⑤〈ベイビーズ・イン・ブラック〉（Ⓢなし Ⓐ1965／3／15「ビートルズ'65」）
⑥〈アイ・フィール・ファイン〉（Ⓢ1965／1／5 Ⓐなし）
⑦〈イエスタデイ〉（Ⓢ1965／11／15 Ⓐ1965／9／15「ヘルプ！～4人はアイドル」
⑧〈アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン〉（Ⓢなし Ⓐ1964／6／5「ビートルズNo.2！」）

⑨〈ひとりぼっちのあいつ Nowhere Man〉(Ⓢ1966／4／15 Ⓐ1966／3／15『ラバー・ソウル』)
⑩〈ペイパーバック・ライター〉(Ⓢ1966／6／15 Ⓐなし)
⑪〈アイム・ダウン〉(Ⓢ1965／8／15 Ⓐなし)

ジョンがいきなり①〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉をシャウトする。前年の『ビートルズ'65』(英盤『フォー・セール』と同内容)からの日本の先行シングル(同じアルバムの〈ノー・リプライ〉／〈エイト・デイズ・ア・ウィーク〉と同日発売)で、チャック・ベリーのカヴァー曲ながらビートルズの日本最大のヒット・シングルになっていた。数10万という単位で売れた最初のビートルズ・ナンバーだ。当時はるかに一般的だったベンチャーズ並みの数字だ。

世界的にはあまりシングル・カットもされていない曲だし、僕はビートルズが日本公演のために選んだものと長く信じていたが、実際はこの年6月24日のミュンヘンから8月29日サンフランシスコの最終公演まで、この時の(結局最後のものになった)世界ツアーのセットリストは基本各国共通だ。初の日本公演を含むツアーだからこその選曲だったかもしれないが、ならばポールがシャウトする終曲も〈のっぽのサリー〉*であるべきだったというのは欲張りかな。ミュージック・ライフ誌がラジオCMに使用し(楽曲の版権を出版社のシンコーが持っており、使用料がか

武道館のステージ
PIC : Koh Hasebe

＊リトル・リチャードでヒットした曲のカヴァー。日本では1965年2月5日にシングル・カットされ、5月5日発売の日本編集アルバム「ビートルズNo.5」に収められた。

からなかったらしい※編注：確認取れず）、日本でもシングル・カット＊＊された曲だが、ツアー終盤の米国ではポールは⑪〈アイム・ダウン〉ではなく専らこちらをクロージングに歌っている。

②〈シーズ・ア・ウーマン〉と⑥〈アイ・フィール・ファイン〉は前年のシングルの両A面だ。④〈デイ・トリッパー〉と⑪〈アイム・ダウン〉はそれぞれ〈恋を抱きしめよう We Can Work It Out〉と〈ヘルプ！〉の裏面だが、出来れば"主役"のほうの曲を聴きたかった。最新シングル⑩〈ペイパーバック・ライター〉冒頭のアカペラ・コーラスが流れてきた時は感激したものだ。③〈恋をするなら〉、⑧〈アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン〉はジョージとリンゴのフィーチャー曲で、③は⑨〈ひとりぼっちのあいつ〉とともに来日時の最新アルバム「ラバー・ソウル」より。当時僕が溺愛していたアルバムである。⑦〈イエスタデイ〉はカントリー曲〈アクト・ナチュラリー〉とペアを組み、米日で両A面シングルとして発売された。女性ファン間のリンゴ人気にあやかろうとしたものか、両国ともに比重は〈アクト〜〉にかけられていたが、そうした思惑とは無関係に⑦は既に大名曲への道を歩み始めていた。当時も今もナゾは⑤〈ベイビーズ・イン・ブラック〉で、アルバムの片隅の1曲としか思えないが、前年のツアーのレパートリーにもなっている。ジョンとポールのハーモニーのプレゼン曲ということだろうか。

それなりに考えられてはいるものの、当時の僕が期待していた演目

武道館公演プログラム

同チケット

＊＊急上昇する日本のレコード・マーケットは英EMIもブライアン・エプスタインも大いに注目するところだった。

CamScannerでスキャン

に対して100点満点中60点くらいのコンサートと思った記憶がある。今こうしてあらためて眺めても、その採点は下がりはしても上がることはない。〈ヘルプ!〉はもとより〈シー・ラヴズ・ユー〉も〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉もないではないか。

「聞こえなかった」ビートルズ

もっとも、ビートルズの武道館は音楽以前に"現象"であったから、この時の演目自体が殊更話題になったことはなかった(と思う)。ビートルズの最初のファンであった少女たち(僕らのお姉さん世代)は本物のビートルズを悲鳴と嬌声を上げて歓迎し、そもそも現象にしか関心のなかったメディアや文化人たちは、その結果音楽が聞こえなかったと書いた。しかし本当のところはどうだったのだろう。武道館に行ったという後年の友人知人の多くは「よく聞こえた」と言うし、ポールは「日本の観客は静かだった」と語っている。

おそらく、聞こえない人々には最初からビートルズの音楽は聞こえていなかったのだ。それは必ずしも世代論ではない。ビートルズは明らかに僕らの世代の音楽だけれど、その誰もが諸手を挙げてビートルズを歓迎していたわけではない。来日当時中学3年生の僕らのクラス中のビートルズ・ファンは2〜3人、300人程度の学年で10人に満たないといったところだ。眉を顰(ひそ)めるクラシック好きの女の子だっていたのだ。先にも書いたように、レコードも日本ではベンチャーズのほうが10倍も売れていた。

60年代のビートルズ・ファンは少数派であった。嬌声も騒音もないところにビートルズの音楽が流れたところで、多くの人々にはそれ自体が騒音だった。僕らは少数派であることを明らかに自覚していたと思うが、しかしそんな"少数派"が日本中に無数にいたのだ。　(2016年7月号)

05 幻の来日記念盤

4匹のヒヨコはどこへ？

東芝音楽工業（1973年より東芝EMI）の初代ビートルズ担当者、高嶋弘之先輩は1966年、来日記念盤『ベスト・オブ・ザ・ビートルズ』を選曲し、数枚の試聴用ラフ・テスト盤までプレスしたが、英EMI本社から最終の発売許可が下りなかった。

「なんていうことだ。天才少年画家クロード・岡本*描くジャケット画も出来上がっていたのだ。印象派風の黄色いヒヨコが4羽、白地に並んでいて、見るからにビートルズなんだ。これは素晴らしいジャケットになる。世界でも絶対売れると確信した」

そういうお話を以前伺い、僕はすっかりヒヨコ・ジャケを目にしたつもりになっていた。顔の向きを違えた小さなヒヨコが横に4羽並んでいるのだ。しかしサイト上にも一切載っていないし、あらためて高嶋さんに確かめたところ、このジャケットは結局印刷されず、原画もデザイン部にあずけたまま行方不明らしい。お話の印象が強かったので、僕はきっと夢を見たのだ。ヒヨコは「縦横10センチほど」で、4羽横並びでも田の字でもなく、「実にいいバランスで不規則に」配置されていたという。

「ベスト・オブ・ザ・ビートルズ」
白盤

* 当時20歳くらい？ パリで生まれたが8歳で来日、昭和20〜30年代に天才少年画家として話題を呼んだ。1954年に『クロード岡本少年のえ』（王様芸術部）、59年に『クロード・岡本』（みすず書房）、63年に『こどものとも』8月号（福音館）として絵本『てじなしとこねこ』を刊行。

CamScannerでスキャン

「50年後にこんなこと聞かれるとわかっていたらちゃんと保存していたよ！」

“来日記念盤”選曲の謎

「ベスト・オブ・ザ・ビートルズ」には、ジャケットの他にも気になるところがある。選曲だ（P.27参照）。この際この件も伺ってみる。――全16曲中の最新曲が「ハード・デイズ・ナイト（ヤァ！ヤァ！ヤァ！）」（日本発売1964年9月）のタイトル曲と〈恋する二人〉だが、1966年6月の来日までにはシングル〈アイ・フィール・ファイン〉（同1965年1月）と〈恋を抱きしめよう〉（同1966年1月）、アルバム「ビートルズ '65」（同1965年3月）、「ヘルプ！」（同65年9月）、さらに「ラバー・ソウル」（同1966年3月）が出ている（ビートルズは本当に驚くべき働き者だ）。これらから1曲も選ばれていないのは不自然ではないか？　ヒヨコ盤は、そもそも来日前年（1965年来日の噂もあった）のベスト盤企画だったのではないか？

ステレオ仕様だから、モノラルの日本デビュー盤「（ミート・ザ・）ビートルズ!」と重複する楽曲の多さ（9曲）も説明できる。

「それは違うな。僕は1966年1月から2月の3週間ヨーロッパに初出張してね、帰国してから選曲したのをよーく覚えている」「あえて初期のものから選曲したのではなかったかな。LP盤が売れ始めていた時代だったから」

画集『クロード・岡本』
（1969年／みすず書房）

『てじなしとこねこ』クロード・岡本
（1963年／福音館書店）

「「ビートルズ!」をつくった男」

それにしても高嶋先輩は、素晴らしく刺激的な時代のレコード業界に過ごされた（今も現役だが）。あるいは先頭に立ってそういう時代を作られたと言うべきか。著書『「ビートルズ!」をつくった男 レコード・ビジネスへ愛をこめて』（DUブックス／2014復刊**）は、アダモやビートルズの洋楽から俺ジュン、フォーク・クルセダーズの」ポップ創世記に及ぶ、60年代のヒット・ディレクターの奮戦記だ。主人公はアイディアマンで、行動的で、時に慌て者で、「あ、そうか」と勘違いの訂正も早い。

電話での問い合わせの最後に、僕はもうひとつだけ確認をさせて頂いた。現存するのは高嶋さんの手元の1枚だけというラフ・テスト盤（ジャケットなしの白盤）のレーベルには、OP-7177とレコード番号が記されている。"OP-" はオデオンのステレオ盤で、「'65」が同シリーズの7179、「ヘルプ!」は7387なのだ。ならばヒヨコ盤はやはり65年の企画かも（具体的に「'65」直前の2月発売予定だったという説もある）。

「あ、そうか」と言って先輩は続けた。「あなたはいいところに気がついた。ちょっと考えてみよう」

その結果、やがて記憶は修正された。――「65年に来日の噂があったから企画したのを思い出した。自分が広めた噂がブーメランのように自分の耳に戻ってきてすっかり騙された、わはは」

『「ビートルズ!」をつくった男 レコード・ビジネスへ愛をこめて』（2014年／DUブックス）

**原本は『ヒットチャートの魔術師 レコード・ビジネスの世界』（1981年／紀尾井書房）

CamScannerでスキャン

であればヒヨコ盤の選曲の辻褄は合うが、しかし別の矛盾が生まれる。65年5月に最後の日本編集盤「ビートルズNo.5」が出ているのだ。EMIがヒヨコ盤を却下してこれを許可する理由が僕には思いつかない。「それはね、確かEMIはベスト盤を出すのは待ってくれということだった」そうだ。

（2016年8月号）

高嶋弘之選曲『ベスト・オブ・ザ・ビートルズ』

A面

①抱きしめたい I Want To Hold Your Hand
②プリーズ・プリーズ・ミー
③ア・ハード・デイズ・ナイト
④プリーズ・ミスター・ポストマン
⑤ラヴ・ミー・ドゥ
⑥ロール・オーバー・ベートーヴェン
⑦オール・マイ・ラヴィング
⑧アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア

B面

①ツイスト・アンド・シャウト
②恋する二人 I Should Have Known Better
③シー・ラヴズ・ユー
④キャント・バイ・ミー・ラヴ
⑤アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン
⑥のっぽのサリー Long Tall Sally
⑦ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット
⑧P.S.アイ・ラヴ・ユー

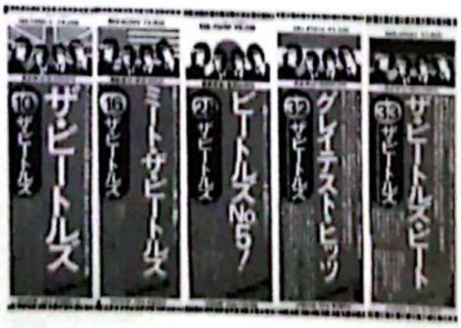
CamScannerでスキャン

06 “国旗オビ”シリーズとは

各国盤のビートルズ

本連載の第1回で触れた“国旗オビ”シリーズ35タイトルの内容はP.31表1の通り。1973年の『赤盤』『青盤』以来のコンピ『ロックン・ロール・ミュージック』の発売（1976年6月20日）に合わせて、英米日の公式盤を6、7月に3回に分けて発売したもので、オビには通し番号が振られ、生まれた国の国旗があしらわれている。オリジナルは①〜⑮が母国英国産、⑯〜㉕が米国産、㉖〜㉘が日本産、当時の“最新作”の㉙が再び英国産だ。しかしレーベルはすべてアップルを使用するなどオリジナル仕様へのこだわりがなく、後のマニアの評価は必ずしも高くはない。だから現在も意外に語られることが少ないし、入手もやたら難しくはない（と思う）。

当時にしても、大半は値上げ（2,500円／モノラル2,300円／2枚組4,600円）の再発だったし、曲はさまざまに重複するばかりで、全部買いそろえたところで旧知の録音曲以上のものが手に入ったわけではない。しかしマスターは各国から取り寄せたものを使っており、音質やテイクは異なる。そしてジャケットが異なる。ビートルズという音楽の



国旗オビ・シリーズ

＊軽視されてきたのは事実と思うが、その反動か独特の存在感を主張しつつある。

世界はすでに完結（1970年に事実上の解散）していたが、ビートルズが僕らにもたらしたアルバム文化とその各国の違いを、リリース自体があらためて主張し伝えるシリーズではあった。*

現在ビートルズの全公式録音213曲は、基本的に13作（及び2枚の"拾遺集"「パスト・マスターズVol.1&2」）の世界基準アルバムが収めるものとされているが、それらはリストの①～⑬の英盤中のベスト盤⑧を米盤の㉔「マジカル・ミステリー・ツアー」と入れ替えた13作だ。日英ではEP盤2枚に収められた同TV映画のサントラ6曲を米国はLPのA面に収め、賢明にも当時LP未収録だったシングル盤（すなわちヒット曲）をB面に並べている。〈ハロー・グッドバイ〉、〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉と〈ペニー・レイン〉の両A面、そして〈愛こそはすべて〉が並ぶ目の眩むような傑作群だ。67年の初登場時、輸入盤は極めてレアかつ高価だったけれど、無理して手に入れてB面ばかり聴いていた記憶がある。

ビートルズのアメリカ盤

1960年代の後半、輸入盤が手に入る場所は限られていた。米盤の違いを初めて目の当たりにしたのは、新宿の小田急デパート別館ハルクにあったブティックの様なレコード売り場だった。タイトル文字に金色を使った「ラバー・ソウル」や、見たこともない「ビートルズⅥ」が飾られていた。前者は曲順も曲目も曲数も国内盤と異なり、後者は〈バッド・ボーイ〉というタイトルさえ聞いたことのない曲を収めていた。

ようやく手に入れて針を落とした時、驚いたのはサーフェス・ノイズの多さと、これを跳ね返すイキのいいサウンドだった。だから1967年に鳴り物入りの「サージェント・ペパーズ～」が世に出た時、迷ったけれど3割がた高価な米盤を銀座のヤマハで手に入れた。シングル・カットのないアルバムだったが、すべてがシングル・ヒットのような作品だった。中で

もラストの〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉は、ビートルズの音楽が新たな段階に達したことを誇らしげに伝えるシンフォニーのように心に響いた。

翌日、友人と話していた時だ。「それにしても『サージェント～』の最後の騒ぎ声おもしろいよね」と言う。「騒ぎ声？」。なんのことだかわからない。帰宅して聴き返してもそんな音はない。結局、後の国内盤で「騒ぎ声」は確認したけれども、謎が残った。「騒ぎ声」なしにアルバムが幕を閉じるのは初期の自分の版だけの“事故”なのか、米盤すべてなのか？ その答えが、最初の29タイトル以降も続いた“国旗オビ”シリーズ表2の最終作㉟にあった。国内盤は『Vol.2』とタイトルされているものの、これは㉞の英盤に対する米盤の『レアリティーズ』で、米国のアルバム未収録曲集だ。「騒ぎ声」はこの最後に〈サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ〉というタイトルで収められている。つまり米国では『サージェント～』の確信的な未収録曲だったわけだ。

なぜ？ 最初は米国のカッティング・エンジニアのミスかくらいに思っていたけれど、やがて初期の米盤の曲数が少ないのと同じ理由ではと思うようになった。著作権印税がアルバム単位で徴収される日欧と異なり、米国では曲数に比例して増額されるという話を知ったので。それにしても、これが「曲」ならビートルズの全公式録音は214曲になるのだけれど。しかしあらためて著作権の専門家に確認してみると、〈～インナー・グルーヴ〉は曲ではなく、アルバムのアウトロ扱いではな

＊＊ 国内盤は〈インナー・グルーヴ〉を1回演奏後フェイド・アウトするようマスターが編集されていた。後のCD版は、9回ほど繰り返した後フェイド・アウトする。

CamScannerでスキャン

いかということだ。

すると、これを米国があえてカットした確かな理由はオート・チェンジャーのいち早い普及ではないか。英国オリジナル盤は針を上げるまで最内周の2秒を延々と繰り返すが、オート・チェンジャーは針が最内周に至るや自動でアームを戻してしまう**。　(2016年9月号)

表1：76年6、7月発売の"国旗オビ"シリーズ

①EAS-80550「プリーズ・プリーズ・ミー／ステレオ！これがビートルズ Vol.1」 ※以下⑮まで英盤
②EAS-80551「ウィズ・ザ・ビートルズ／これがビートルズ Vol.2」
③EAS-80552「ビートルズがやって来るヤア！ヤア！ヤア！（ハード・デイズ・ナイト）」
④EAS-80553「ビートルズ・フォー・セール（ビートルズ'65）」
⑤EAS-80554「4人はアイドル（ヘルプ！）」
⑥EAS-80555「ラバー・ソウル」
⑦EAS-80556「リボルバー」
⑧EAS-80557「オールディーズ」
⑨EAS-80558「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」
⑩EAS-77001／2「ザ・ビートルズ（ホワイト・アルバム）」
⑪EAS-80559「イエロー・サブマリン」
⑫EAS-80560「アビイ・ロード」
⑬EAS-80561「レット・イット・ビー」
⑭EAS-77003／4「ザ・ビートルズ／1962年～1966年（赤盤）」
⑮EAS-77005／6「ザ・ビートルズ／1967年～1970年（青盤）」
⑯EAS-80562「ミート・ザ・ビートルズ」 ※以下㉕まで米盤
⑰EAS-80563「ザ・ビートルズ・セカンド・アルバム」
⑱EAS-80564「サムシング・ニュー」
⑲EAS-77007／8「ビートルズ物語」
⑳EAS-80565「アーリー・ビートルズ／ビートルズ初期傑作集」
㉑EAS-80566「ビートルズⅥ」
㉒EAS-80567「ヘルプ！／（四人はアイドル）」
㉓EAS-80568「イエスタデイ・アンド・トゥデイ」
㉔EAS-80569「マジカル・ミステリー・ツアー」
㉕EAS-80570「ヘイ・ジュード」
㉖EAS-70100「ビートルズ！」 ※以下㉘まで日本盤
㉗EAS-70101「ビートルズNo.2！」
㉘EAS-70102「ビートルズNo.5！」
㉙EAS-77009／10「ロックン・ロール・ミュージック」 ※英盤

表2：その後に続いた"国旗オビ"シリーズ（発売日は日本盤のもの）

㉚EAS-80830「ザ・ビートルズ・スーパー・ライブ！（アット・ハリウッド・ボウル）」（1977／5／20） ※英盤
㉛EAS-50007／8「ラヴ・ソングス」（1977／11／5） ※英盤
㉜EAS-81056「グレイテスト・ヒッツ」（1978／4／5） ※オランダ盤
㉝EAS-81057「ザ・ビートルズ・ビート」（1978／4／5） ※ドイツ盤
㉞EAS-63010「レアリティーズ」（1979／10／5） ※英盤
㉟EAS-81325「レアリティーズVol.2」（1980／5／5） ※米盤

CamScannerでスキャン

07 ビートルズとアメリカン・スタンダード

なぜレノン=マッカートニーか？

ジョン・レノンとポール・マッカートニーによるビートルズの楽曲は、仮にどちらかひとりが100パーセント書き上げたものでもレノン=マッカートニー作とクレジットされ、印税も分配される。かつて初めてそう聞いた時には単純にふたりの仲のよさを思ったが、そこには早熟のメロディ・メイカー、ポール・マッカートニーの夢も込められていた。

後にポールが語るところでは、「僕らもロジャーズ&ハマースタインやラーナー&ロウみたいなソングライター・チームになりたかったんだ」。前者はミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」他、後者は同じく「マイ・フェア・レディ」他、“グレイト・アメリカン・ソングブック”を形成する大スタンダード曲の数々を生み出した名チームだ。父親がアマチュアのジャズ・ピアニストで子供の頃からスタンダード曲に親しんできたポールは、自らもその作曲家の華やかな系列に連なることを早くから夢見ていたのに違いない。英ファースト・アルバムなど、初期にはマッカートニー=レノンと表記されているものも少なくない*。

そう、ビートルズは革新的なロック・バンドである一方で、米ポピュラ

* 当初は貢献度の高い方を前に出すという発想もあったようだが徹底されず、レノン=マッカートニーの方がイニシャルL・Mのアルファベット順で、語呂も明らかにいいという理由で定着したようだ。

ー音楽の伝統的な作曲家チームのようであろうという意志を最初から持っていたのだ。成果は言うまでもない。ビートルズのオリジナル曲中には、アメリカ生まれのスタンダード曲に伍して“グレイト・アメリカン・ソングブック”に連なるべき名曲が多数ある。史上最も多くカヴァーされているポピュラー曲とされる〈イエスタデイ〉は、言うまでもなくその代表だろう。『ラバー・ソウル』収録の〈ミッシェル〉は、米国でシングル・カットされることなくグラミー賞のソング・オブ・ジ・イヤーに輝いている。いずれもポール主導の作品だ。

ジャズ・ファンの愛するビートルズ

一過性のヒットではなく、時代を超えて演奏され続け聴き継がれる楽曲がいずれスタンダードと呼ばれる。そしてスタンダードを育み、スタンダードから力を得て寄り添うように進んできたジャンルと言えば、まずはモダン・ジャズだ。

隔月刊のジャズ専門誌「ジャズ批評」(ジャズ批評社)の最新193号が、「ジャズ・ファンの愛したビートルズ&ビートルズ・ジャズ」を特集している。ジャズとビートルズが出会うCDは世に数限りなくあるけれど、同様の雑誌や書籍となると意外に前例がないのでは。ジャズ・ファンや関係者55人が3問のアンケート(ビートルズ・ナンバー・ベスト5、ビ

〈ミッシェル〉の国内盤EP

「ジャズ批評」2016年9月号(通巻193号)ビートルズ・ジャズ特集

ートルズ・アルバム・ベスト5、ビートルズ・ジャズ・ベスト3）に答えている。詳細は是非とも同誌を手に取っていただくとして、同アンケートから「名ジャズ演奏（演奏者問わず）を残したビートルズ・ナンバー・ベスト5」を集計してみた。以下の通りだ。

①〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉 15票
②〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉 14票
③〈ミッシェル〉 11票
④〈ブラックバード〉 10票
④〈エリナー・リグビー〉 10票
④〈イエスタデイ〉 10票

2、3位及び同票4位の3曲にポール・マッカートニー作の名曲5曲が並ぶ。ティン・パン・アリー（NYの楽譜店街）やブロードウェイ、ハリウッドが生んだスタンダードに負けない魅力的なメロディ揃いだ。他のロック・バンドと一線を画すビートルズの（革新性と同居する）大衆性は、若き日のポールが一方で目指した通りの伝統的で普遍的な曲作りがあったからこそではないか。

とは言え、1位はジョン・レノン主導の〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉だ。収録アルバム『サージェント・ペパーズ～』（1967年）発売直後のウェ

CamScannerでスキャン

ス・モンゴメリーの名カヴァー（A&M／CTI『ア・デイ・イン・ザ・ライフ』収録）が15票のほぼ全票（13票）を占めている。"ジャズの素材としてのビートルズ・メロディNo.1" はジョンの高踏的な1曲というのが、一筋縄ではいかないビートルズの（さらにはビートルズ・ジャズの）魅力の深さではないか。

ちなみにウェスのこの演奏でジャズを知った僕（1951年生まれ）らの世代のビートルズ・ファンや、これでビートルズを知った僕らより年長のジャズ・ファンは数多いと思う。

（2016年10月）

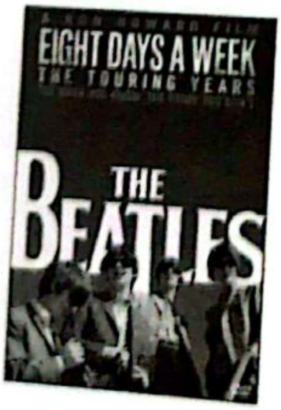
『ア・デイ・イン・ザ・ライフ』ウェス・モンゴメリー
（1967年／A&M/CTI）

08 ビートルズがやって来た

超ドキュメンタリー映画
「ビートルズがやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!」

「アポロ13」「ダ・ヴィンチ・コード」などなどエンタテインメントの名手ロン・ハワードがビートルズを撮るという。えっ! 一体どんな映画になるのだろう? だが、よくよく聞いてみると、残されたライヴ映像を集めたドキュメンタリーということだ。これまた意外だが、ハワードらしい機知と刺激に溢れた構成が施されているものと期待したい(「ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK – The Touring Years」2016年9月22日公開済*)。

ジャズのジャンルでは、チェット・ベイカーの「ブルーに生まれついて」、マイルス・デイヴィスの「マイルス・アヘッド」というふたりの個性あるアーティストの伝記映画が年末に向かって続けて公開される。役者は本物に似ても似つかないが、ドラマの進行が彼らを限りなくチェットあるいはマイルスに見せて行く。ロック映画にはかつて名匠オリヴァー・ストーンの「ドアーズ」(1991年)という名作もあった(この時のヴァル・キルマーは結構ジム・モリソンに似ていたと思う)。しかしビートル



「ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK – The Touring Years」
DVD スタンダード・エディション
(2016年作品/KADOKAWA)

* よくはまとまっていたけれど驚きのない作品だった。最後は結局ルーフトップだし。「ダ・ヴィンチ・コード」の監督だからといってどこかにサスペンスを期待したのが間違いだった。

ズをテーマにこうした劇映画作りは可能なのだろうか？「バック・ビート」（1994年）や「ノーウェアボーイ」（2009年）の描いた“ビートルズ以前”ではなく、まさしく“ビートルズ”になってからのビートルズだ。

ましてやビートルズ映画は「ヤァ！ヤァ！ヤァ！〜ハード・デイズ・ナイト」（1964年）という、ビートルズが他ならぬビートルズを演じる劇映画から始まっているのだからなおさら難しそうだ。しかも映画として極めて水準が高い。劇映画とは言え超ドキュメンタリーとでも呼びたくなる独特の作品だ。そしてこの作品の存在が、世界進出を果たしたこの年のビートルズのさらなる展開に果たした役割は計りしれない。

奇跡の出会いの連鎖

1964年、僕（中学1年生）は日本初シングル〈抱きしめたい〉をはじめ何枚かのシングルを手に入れていっぱしのファン気取りだったが、東銀座の松竹セントラルの夏休みロードショーには行かなかった。お姉さん世代がポールだかリンゴだかの映像に抱き着いてスクリーンを破ったという伝説の封切りだ。中学生だけで繁華街の映画館に行くなんて、という時代でもあった。近所の吉祥寺の二番館に降りてくるのを待って、友人と出かけたのは秋の終わり頃でなかったかと思う。

東銀座のお姉さん世代の積極的鑑賞法はいろいろ伝え聞いてお

CamScannerでスキャン

り、スクリーンに向かって飛び交う悲鳴や嬌声には驚かなかった、と言うとウソになる。女性とはかくも騒々しいものなのかと思った。そして映画の作りそのものにも驚かされた。話題の洋画や東宝の特撮もの（モゲラの「地球防衛軍」最高!）は親に連れられて見ていたし、同じ年には「007」最初の2作も友人と見に行った。しかし「ヤァ! ヤァ! ヤァ!」のような映画は他になかったぞ。これはドキュメンタリーなのかフィクションなのかはたまたドタバタなのか。

物語は1日の旅とコンサートの記録の体裁を取るが、列車のコンパートメントにいたはずのビートルズが次の瞬間車窓の外を自転車で走っている。貨物車両で突然演奏が始まる。入浴中のジョンが排水口からシャボンと共に流れ去ってしまう。こうした突飛なシーンのひとつひとつが、ビートルズの、そしてメンバーひとりひとりの魅力や個性をさらに浮彫にして見せてくれる。PV（プロモーション・ヴィデオ）の元祖とされるのもむべなるかな、演奏シーンもことごとくが美しく、あるいは工夫があり、完成されている。

その後僕は2,000本を越える映画を見たけれど、「ヤァ! ヤァ! ヤァ!」は紛れもなく映画史上ベスト100級の傑作だと思う（映画の批評家投票では専ら音楽映画は損をする）。ノンフィクションでもいわゆるドキュメンタリーでももちろんないが、ここにはビートルズの映画的リアリズム**がある。そして、ここに描き分けられた4人の個性——仕切る

映画
「ハード・デイズ・ナイト」
新旧ポスター

** ありのままに現実を撮影する、というのではなく、時には過剰な演出を加えてそこにある本質を浮彫にする。黒澤明的リアリズムなんていう言葉もあったな。

ジョン、頷くポール、従うジョージ、はぐれるリンゴ――は続く2作「ヘルプ!」「イエロー・サブマリン」に踏襲されていく。

ビジネス的な不安もあり制作費を抑えてモノクロで撮影されたとされるが、制作陣は内容を考えて確信的にモノクロを選んだのではないか。とにかく監督リチャード・レスターのセンスが素晴らしい。ビートルズというそれ自体が奇跡の出会いのようなグループは、サウンド面でジョージ・マーティンと出会い、ここに映像（&物語）面でレスターと出会ったのだ。奇跡の才能たちが奇跡の出会いを重ねて、やがて"ビートルズ"の完成に至ったものかとあらためて思う。　（2016年11月号）

CamScannerでスキャン

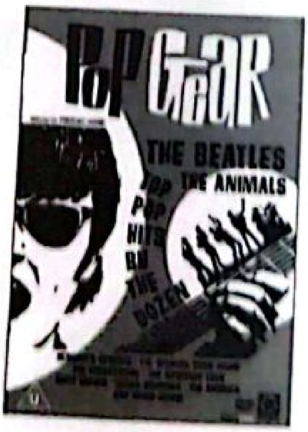
09 ブリティッシュ・インヴェイジョン元年

1964年の「ポップ・ギア」

いかなる神の差し金か、しばらく病室に幽閉されています。だから2016年末現在"新作"映画「ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK－The Touring Years」も見ていませんが、というタイミングで友人から代わりにこれでも見てみたら、と差し入れをいただいた。「ポップ・ギア」(1965年。米公開時のタイトルは「Go Go Mania」)のDVDだ。

1964年にビートルズは〈抱きしめたい〉を初の全米No.1ヒットとし、米公演を大成功させ、これにピーター＆ゴードン、アニマルズ、マンフレッド・マン、ハニーカムズら英国勢の攻勢が続いた。「ポップ・ギア」はブリティッシュ・インヴェイジョン元年と言うべき同年の終わりに制作された英国の"音楽ショー"映画で、スタジオで様々なアーティストの演奏が次々と繰り広げられる。ショーにビートルズは出演しないが、映画全体がビートルズのコンサート映像（1963年）でサンドイッチされている。オープニングが〈シー・ラヴズ・ユー〉でクロージングが〈ツイスト・アンド・シャウト〉だ。といって、当時ファンの間で話題になっていたという

映画「ポップ・ギア」
日本公開時ポスター



「ポップ・ギア」DVD
(1965年作品／廃盤)

わけでもない（と思う）。1965年のある日、デイヴ・クラーク・ファイヴの主演映画「5人の週末 Having A Wild Weekend」（これも話題になっていなかったと思う）を見に行ったら、オマケのように併映されていた。

いきなり〈シー・ラヴズ・ユー〉が流れてきた時は体が「おおっ」と反応しつつ「なんだか普通のライヴ映像だな」とも思った。「ヤァ!ヤァ!ヤァ!〜ハード・デイズ・ナイト」のPVレヴェルの演奏シーンをさんざん見た（何度か通い、映画館に居座った）後だったから、目が贅沢になっていたのだ。他のスタジオ内の映像はTVショーそのものという印象だったが、スペンサー・デイヴィス・グループやナッシュヴィル・ティーンズはこの時初めてインプットされたように思う。

1964年の「ポップ・ギア」

さて52年目の「ポップ・ギア」だ。〈シー・ラヴズ・ユー〉のビートに乗って1964年の英国ロックがイケイケで並んだものと記憶していた。ところが大英帝国の歴史のゆとりというのか、悠然として慌てるところがない。「1964年、新しい音楽が誕生しました。それがポップ・ギアです」——進行役のジミー・サヴィル*のそんな一言に続くのは、ビリー・J・クレイマーとダコタズのスローな〈リトル・チルドレン〉、女性歌手ス

* BBCラジオが当時放送していた「トップ・オブ・ザ・ポップス」のホスト

ーザン・モーンのポップな〈メイク・ヒム・マイン〉で、いずれも従来からの米国型ポップスだ。フォー・ペニーズの〈ジュリエット〉(B面ヒットのようだ)で少々“らしい”雰囲気になってきて、次がアニマルズ〈朝日のあたる家〉。見る側の気分はここからが“新しい音楽”で、さらにハーカムズ〈ハウ・アイ・ザ・ライト〉、ピーター＆ゴードン〈愛なき世界 A World Without Love〉、ハーマンズ・ハーミッツ〈朝からゴキゲン I'm Into Something Good〉、再びアニマルズ〈悲しき願い Don't Let Me Be Misunderstood〉などが登場し、記憶の中よりはるかに主役級の曲が多い。スタジオも大きい。

「007ロシアより愛をこめて」(1963年)のテーマ曲を歌った英国の人気歌手マット・モンローが要所を締める。エンド・テーマの〈ポップ・ギア〉では、「ついに聴きたい音楽が現れた激動の1年」をシナトラ風に歌い上げている。「音楽で叫びたい君に必要なもの、それがポップ・ギアなんだ」。それがなんでシナトラ風なの？——こういうアンバランスこそ1964年という時代だったのだ。

「5人の週末」

ところで「5人の週末」は、リチャード・レスターの「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」同様、後の名監督ジョン・ブアマン(「未来惑星ザルドス」面白いよ)の

映画「5人の週末」ポスター

「5人の週末 Having A Wild Weekend」DVD
(1965年作品／Warner Achive／輸入盤のみ)

CamScannerでスキャン

デビュー作だ。邦題は多分に「ヘルプ!」の副題"4人はアイドル"を意識しているようだから、本国の順番とは違って日本では「ヘルプ!」後に公開されたのだろう。広告業界とモデルが絡む、これも追跡劇だった。

「ヤァ!ヤァ!ヤァ!」と同じく印象的なモノクロ映画だったが、当時まことに残念に思ったことに演奏シーンがない。音楽は背景に流れるのみだ。大名曲〈忘れえぬ君 When〉など、あの映画がただ1本の"PV"さえ残していればDC5人気もさらに広がっていたかもしれない。1964年のリチャード・レスターと「ヤァ!ヤァ!ヤァ!」のチームは、本当に進んでいたのだ。

(2016年12月号)

『「5人の週末」サウンドトラック盤』
(1965年/オデオン/東芝)

10 激レア盤、茶オビの『ビートルズ'65』

「ひゃ、ひゃくごじゅうまんえん！」

2015年11月開店、関西のレコード・ファンを大喜びさせているディスクユニオン大阪店が『ビートルズ'65（フォー・セール）』の国内盤珍品を売りに出す、というニュースが東京のユニオンの友人から飛び込んできた。2016年10月末のことだ。茶色のオビ付美品だそうだ。「150万円だそうです」「ひゃ、ひゃくごじゅうまんえん！」。そんなビートルズあるのか。高嶋弘之先輩（東芝レコード初代ビートルズ担当者）が発売できなかった来日記念盤『ベスト・オブ・ザ・ビートルズ』（第5回参照）のラフ・テスト盤（ジャケなし白レーベル）を、娘のヴァイオリン奏者ちさ子さんが「開運！なんでも鑑定団」（テレビ東京系）に出品した時だって80万円だったぞ。

『フォー・セール』の国内盤『'65』のことなら任せてほしい。僕が待ちに待って発売のその日に買ったビートルズの最初のアルバムだ。発売日はデータ本によって1965年2月15日と3月15日の2説あるが、前者に間違いないと思う。春休みまでそんなに近くなかったので。だから僕は翌日少々風邪気味なのをいいことに、中学校（まだ1年生）を

『'65』茶帯ヴァージョン

CamScannerでスキャン

休んで1日中寝床で聴いていたのだ。家が中学校のすぐ近くだったから、1時間ごとにチャイムが聞こえてくる。半分以上はかけっていられただから、楽しいはずがどこか後ろめたい気分が強かった。

このデザインは、どうやら本を含めてそんな気分にマッチする。僕にとって、『65』のジャケットはビートルズの13作品中、哀しみのトップデザインなのだ。しかしあれがひゃくごじゅうまんえんなのか。でもオビは赤色だっただろうか。

本連載を始めてから、幾度となく半世紀前の自分の記憶を探っている。結論から言うと、世の多くの自伝が証明しているように本人の記憶はあてにならないものはないが、しかしこれは断言できる。僕が発売日に買った『65』のオビは断じて赤色ではない。そんな映像は、頭の中のどこを探しても微塵も出てこない。微かに浮かんでくるオビの色は緑か水色、僕の初版は間違いなく緑色だった。

ディスクユニオン大阪のサイトを確かめてみると、そこには間違いなく赤オビ現物の写真がある。やはりこんなものは過去に一度たりとも見たことはない。つまりこれは、初版ではないが珍品なのだ。高嶋先輩に電話してみる。

「『65』の赤色オビって憶えてますか？」

「オビの色なんてねえ、ひとつも憶えてないんだ。わっはっは」

「150万円だそうです」

CamScannerでスキャン

「ひゃ、ひゃくごじゅうまんえん?!」

初版ではないが大珍品

現物の写真を子細に見ると、妙なことに気がついた。定価が1,750円とある。当時の東芝音楽工業(73年より東芝EMI)の値付は、モノラル1,500円、ステレオ1,800円だったはずだ。そんな半端な価格あったか? グーグルを駆使して調査すると、1966年3月31日に物品税法というのが改正され、東芝はこの時ステレオ盤を一時的に値下げ(!)したようなのだ。つまり茶オビは、初版から1年以上経った時期の増刷分ということになる。この時期の東芝のオビは基本的に水色だったはずだから、つまり茶オビはエラー版なのだ。印刷の指定ミスに間違いないが、後に大珍品になる程のわずかな数がなぜか出荷されてしまったわけだ。

それにしてもビートルズ国内盤のオビは恐ろしい。『'65』オビなしは多分数万円だと思うから、茶オビ自体が140数万円ということだ。これは別格としても、オビならなんでも10万円以上なのではないか。僕はあの頃、捨てはしないがオビは外して別にしまっておいた。当たり前だがオビよりジャケットの方が大事で、オビを付けっぱなしにして日焼け跡の線がつくのが嫌だったのだ。壁に飾ったりしていたし。そしてなんと

浅はかなことか、引っ越しや掃除を繰り返すうち、どこかにまとめておいたオビは永遠にどこかに行ってしまった。今あればいくらになったんだ、ってレース後に馬券の話するのと同じだよね。ちょっと違うか。

ちなみに150万円の茶オビ『'65』は申し込み制で、12月17日に店頭でガラポン抽選会が行なわれたはずです。どなたかゲットしましたか？

（2017年1月号）

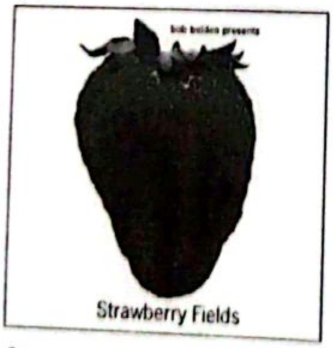
CamScannerでスキャン

11 米国盤を知る

米盤『ラバー・ソウル』の魅力

1996年、ジャズ・ミュージシャンたちにビートルズ・ナンバーをカヴァーしてもらい、『ストロベリー・フィールズ』というアルバムを制作した。レーベルはサムシンエルス。1988年に僕が東芝EMI内に創設したブルーノートの日本発の弟分だ（子分かな？）*。ジャズ・ヴォーカルの当代ふたりの女王、ダイアン・リーヴスとカサンドラ・ウィルソンが〈カム・トゥゲザー〉を（現在のところ最初で最後の）競演するなど、ビートルズ・ジャズ数あれどそれなりの作品になったと思う。

カナダの歌手ホリー・コールにも参加を依頼し、何を歌いたいか尋ねた。〈夢の人 I've Just Seen A Face〉という意外な答が返ってきた。『ヘルプ！』のB面に収められた一聴地味な1曲だ。そもそも僕はLP『ヘルプ！』のB面が好きではない。曲調から並びから、すべてがちぐはぐなのだ。カントリーの〈アクト・ナチュラリー〉に始まりバラード〈イエスタデイ〉からロックンロール〈ディジー・ミス・リジー〉へという妙なつながりで終わる。同じバンドの音楽かよ、といいたくなる。〈夢の人〉は、そんな中のシングルでもなんでもない1曲だ。そのうち、「あ」と気づい



『ストロベリー・フィールズ』V.A.
（1996年／サムシンエルス／東芝）

* 1939年創立のブルーノートは史上最長・最強のジャズ専門レーベルで、79年以来キャピトル傘下にあった。その協力で日本に設立されたサムシンエルス（ブルーノートの大名盤のタイトルより）は現在まで200作近くを制作、この間ゴンサロ・ルバルカバ、大西順子、ロン・カーターらの作品を多数世界に送っている。

CamScannerでスキャン

た。カナダ（もちろんアメリカも）では、〈夢の人〉の意味が僕らと決定的に違う。彼らにとってはあの『ラバー・ソウル』のオープニング・トラックなのだ。

1966年後半だと思う。僕は『ラバー・ソウル』で初めて米国盤というものを知った。前にも書いたが、新宿の小田急デパート別館ハルクにあったブティック風のレコード売場に陳列されていたのだ。タイトルのロゴは金色で、1曲目はどういうわけか〈夢の人〉だった。

米キャピトルが突飛な改竄（かいざん）を加えたビートルズのオリジナル・アルバムは『ビートルズ'65』『ラバー・ソウル』『リボルバー』の3タイトルが特に目立つが、後の"悪名"はさておき、中では『ラバー・ソウル』の出来が圧倒的にいいと思う。当時としては超ヘヴィなロック〈ドライヴ・マイ・カー〉が〈夢の人〉に入れ換わることによって、アルバムのフォーク・ロック色が強調されている。そしてこれこそ、『ラバー・ソウル』の一方の個性なのだ。かくて『ヘルプ！』B面の地味な1曲も際立って聞こえる。

デイヴ・デクスターJr.のこと

こうした一連の米キャピトルのビートルズ・プロジェクトを仕切っていたのがデイヴ・デクスターJr.（1915年〜1990年）だ。音楽ライター／批評家を経て1943年創立間もないキャピトルに入社。40年代にはジ

CamScannerでスキャン

ャズの変遷を記録する大作『ジャズの歴史』を編纂して高評価を得、50年代には制作のヘッドとしてフランク・シナトラ、ナット・キング・コール、スタン・ケントン楽団、デューク・エリントン楽団、ペギー・リーら華やかなスターを揃え、西海岸の名門キャピトルの名を不動のものにした。ジャズ史上にはしかるべき名を残した人物だが、プレスリーに始まる「子供じみた音楽」には基本耳を貸そうとしなかったという。

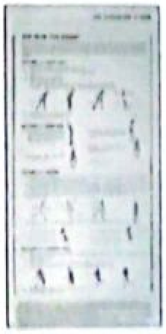
1955年英EMIがキャピトルを買収すると、米マーケット向けのEMI音源を選別する任にも就いた。アメリカで他国の音楽がヒットすることなど皆無に近かった時代、デクスターはEMIが米発売を望むほぼすべてを却下し（クリフ・リチャードはトライしたが失敗した）、それは1963年、イギリスで〈プリーズ・プリーズ・ミー〉が大爆発した後のビートルズも同様だった。ようやくEMIの説得に応じたのが、同年末の〈抱きしめたい〉だ＊。

この曲に関してはデクスターが「本当に気に入った」という話もあるが、であればデクスターの"耳"はある程度正しかったと言えなくもない。なぜなら、キャピトルが却下した結果ヴィージェイ、スワンといったレーベルから出た〈プリーズ・プリーズ・ミー〉や〈シー・ラヴズ・ユー〉は、〈抱きしめたい〉がブレイクするまでまったくヒットしていないのだから。もっとも、これらマイナー・レーベルとキャピトルではブランド力も宣伝力も販売力も比較にならないが。

＊この年、デクスター[illegible]

デクスターのロックのセンスを伝えるエピソードがある。結局、英EMIのビートルズ以外のブリティッシュ・インヴェイジョン勢は、当時壊滅的にキャピトルから出ていない。アニマルズやヤードバーズやデイヴ・クラーク・ファイヴを米国で発売したのは、エピックやMGMなどのライバルたちだ。しかしデクスターにはただひとつ、自ら率先してキャピトル～EMIに招致したバンドがある。なんとフレディ＆ザ・ドリーマーズだ。エド・サリバン・ショーで、皆で片足を蹴り上げて〈ドゥ・ザ・フレディ〉を歌う（踊る）コミック・バンド風の彼らを見て、僕は「困ったものだ」と思った記憶がある。デクスターもジャズ通だったら、アニマルズやヤードバーズのブルース感覚に注目してほしかったぞ！　（2017年2月号）

「Do The "Freddie"」Freddie & The Dreamers
（1965年／Mercury）



裏ジャケには踊り方の指南が……

12 石坂敬一氏のこと

石坂先輩と出会った頃

2016年12月31日、石坂敬一先輩が急逝された。この数年パーキンソン病を患っておられ、私の白血病といいお互いレアな病気に出会ったものですね！ 長く生きてきましたからね！とお話しさせていただいたばかりだった。この時は大変お元気で、パーキンソン病は死病ではないから、大晦日に訃報が届いた時は愕然とした。その日の朝、入浴中に心臓麻痺に襲われたのだという。71年の濃密な人生だった。

石坂さんのキャリアは1968年の東芝音楽工業（73年より東芝EMI）入社に始まる。僕はその8年後輩だ。本連載の第1回（2016年4月号）から一部を引用させていただく。

「"ビートルズの会社"に就職したことを初めて実感したのは、5月に洋楽部に配属された時だ。目の前を石坂敬一さん（その後東芝EMI専務を経てユニバーサルミュージック、ワーナーミュージック・ジャパンの会長を歴任）が普通に歩いている。長髪にサングラスで、モッズ風のファッションに身を包んでフロアを往く石坂さんは、全身で"ビートルズ"を発信しているようだった。『赤盤』『青盤』をはじめとする解散以降のビ

レコード会社などにより共同開催されたお別れ会にて

ートルズの国内盤を担当され、あらためてその音楽、さらにその文化を日本に広めた方だ。「11PM」（日本テレビ系）などのテレビ番組はじめ幅広いメディアに登場され、ビートルズの魅力を音楽や流行のみならぬさまざまな方面から語られていた。思えば石坂さん以降、日本のビートルズは“大人の文化”の仲間入りをしたのではないか」

入社からしばらく経った頃、何かの機会に意を決して石坂さんにこう聞いてみた。「ビートルズの曲は何が一番お好きですか?」。40年後の今考えても間抜けな質問だが、まずは伺うべきところだろう。すると石坂さんは、凡庸な質問を救出するような返答を下さったものだ。「〈今日の誓い Things We Said Today〉だな」。虚をつかれて、僕は一瞬うろたえたように思う。〈今日の誓い〉って〈ヤァ！ヤァ！ヤァ！A Hard Day's Night)〉のシングルB面のあの地味な曲かよ、マジかよ。そんな僕の動揺を見透かしたかのように、先輩は付け加えた。──「あの最初のデゲデンがいいんだ」。デゲデンはイントロのギターのラインだ。

その後長くお付き合いを続けるにつれ、ビートルズに限らず僕の常識を根底から考え直させるような“虚をつく”一言を石坂さんから何度も頂いた。自然なのか、あるいは石坂さん一流の“話術”であったのか、僕は後者の要素が強かったと思っているが。

石坂さんの「独善的ビートルズ論」

石坂さんのお気に入りの1曲に、僕はもちろん〈レット・イット・ビー〉や〈イエスタデイ〉を期待していたわけではない。上の会話から間もない頃だろう、石坂さんがお書きになった「独善的ビートルズ論」*(1977年) は次のように始まる。——「何故こうもビートルズというと年がら年中、〈レット・イット・ビー〉や〈イエスタデイ〉なんだろう」

以前も書いたように、ビートルズはティン・パン・アリー伝統のメロディ・メイカーの大衆性と、新しい文化としてのロック・バンドの先鋭性の両面を併せ持っている。そしてビートルズが(たとえばローリング・ストーンズに対して) 遥かに巨大なのは、前者があればこそだ。石坂さんはそんなことは百も承知の上で、読者(あるいは一般のビートルズ・ファン) を挑発しているのだ。そして原稿はこう結ばれる。——「〈トゥモロー・ネバー・ノウズ〉〈アイ・アム・ザ・ウォルラス〉〈ヘイ・ブルドッグ〉〈バースデイ〉、そして〈レボリューション〉。これがビートルズ・パワーの証(あかし)」。これらの5曲は当時より現在の評価が高いものばかりで、“虚をつく”というより予見的だ。石坂さんの技は多彩だ。

＊1977年2月刊『ビートルズ・カタログ』石坂敬一ほか(講談社)所収→1984年9月『ビートルズってなんだ?』(講談社文庫)に再録。

正月の2日、お寺に安置されたご遺体にお別れさせていただいた。口を一文字に結んだ凛々しい死に顔は、立派に戦いを終えた侍大将を思わせた。

石坂先輩、本当にいろいろありがとうございました。安らかにお眠りください。

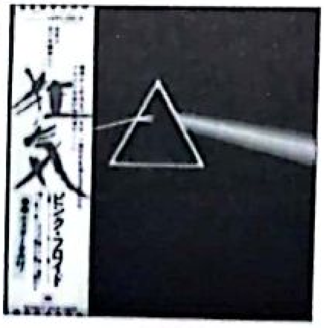
（2017年3月号）

CamScannerでスキャン

13 ビートルズの邦題

ビートルズ文化の"翻訳"

前号にも書いたように、石坂敬一先輩はビートルズ解散後の東芝EMIのビートルズ担当者だ。ピンク・フロイドの『原子心母 Atom Heart Mother』(1970年)や『狂気 The Dark Side Of The Moon』(1973年)、あるいはT・レックス『ズィンク・アロイと朝焼けの仮面ライダー Zinc Alloy And The Hidden Riders Of Tomorrow Or A Creamed Cage In August』(1974年)などなど、及びこれらのアルバムの収録曲、たとえば『原子心母』中の〈デブでよろよろの太陽 The Fat Old Sun〉などを加え、数々の名邦題、怪邦題でも知られる洋楽マン時代の石坂さんだが、ビートルズ作品には一切邦題をつけていない。洋画と同様、邦題は昔も今も洋楽マンの最も重要な仕事のひとつだが、石坂さんは現役時代のビートルズにはほんの少し遅れてきたのだ。しかし『赤盤』『青盤』(1973年)以降の若いファンの開拓に加えて、ビートルズという巨大な新しい文化を旧来のアカデミズムに"翻訳"して伝えたと思う。美術誌や文化誌、言論誌がビートルズに触れ、そこにはしばしば石坂さんの言葉や文章が引用されていた。



「原子心母」「狂気」初版のオビ付きジャケ

ビートルズ邦題史

ビートルズ初期〜中期の名邦題を連発したのは、初代担当者の高嶋弘之先輩（ヴァイオリン奏者ちさ子さんの父親）だ。日本デビュー盤〈抱きしめたい I Want To Hold Your Hand〉に始まり、〈恋する二人 I Should Have Known Better〉〈悲しみはぶっとばせ You've Got To Hide Your Love Away〉〈恋を抱きしめよう We Can Work It Out〉など、原題のカタカナ表記だったらここまで広く知られるに至ったかどうか。しかも"手を握りたい"をより率直に"抱きしめたい"とは素晴らしいではないか。もっとも僕ら（中学1年生）は原題も懸命に覚えたもので、助動詞もto不定詞もshould+現在完了もビートルズから学んだ。

ところでビートルズの邦題史は前後期に分かれる。来日（1966年6月）前の『ラバー・ソウル』までが前期、離日後の『リボルバー』からが後期だ。上述したような名邦題が前期には並ぶ一方、後期はほぼカタカナ表記で、2曲の例外があるだけだ。中3になって英語に慣れていた僕らは、特に違和感なくこれを受け止めたと思う。ファンと共にタイトルもオトナになって行くのだ。しかし真実は、武道館で自分の中の何かが一段落したと感じた高嶋さんが部下の水原健二さんにビートルズを委ね、黛ジュン〈恋のハレルヤ〉（1967年）に始まる"和製ポップス"の開拓に乗り出したところにあるらしい。フォーク・クルセダーズ〈帰っ

CamScannerでスキャン

て来たヨッパライ〉(1967年)や由紀さおり〈夜明けのスキャット〉(1969年)のミリオンセラーが続き、高嶋さんは洋楽本部内の邦楽大ヒット・メイカーになった。そして1969年、フジサンケイグループが創設したキャニオン・レコードの制作トップに引き抜かれる。

2代目ビートルズ担当水原健二さんは、高嶋さんによれば「英語は僕よりずっと出来るが思慮深い人」だった。「僕やファンやビートルズに遠慮して邦題をつけなかったのではないか?」

「でも1曲だけ、後で文句を言ったことがあるんですよ。『ホワイト・アルバム』(1968年/日本1969年)中の〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉、さすがにこれはないだろう。〈ギターは泣いている〉とか〈むせび泣くギター〉だろうと言って」。実は僕も当時同じことを思った。水原さんには2曲だけ邦題がある。〈愛こそはすべて All You Need Is Love〉(1967年)と〈ジョンとヨーコのバラード The Ballad Of John And Yoko〉(1969年)だ。ともに最初はシングル盤のみの発売だった。

そしてビートルズ解散後のジョン・レノン第1作で、水原さんは"実力"をフルに発揮する。今や"ジョンタマ"で通用する『ジョンの魂 John Lennon / Plastic Ono Band』(1970年)だ。収録曲には〈しっかりジョン Hold On〉〈悟り I Found Out〉〈労働者階級の英雄 Working Class Hero〉と、これでもかとばかり邦題が並ぶ。名高い〈Mother〉も

〈愛こそはすべて〉
(1967年/オデオン/東芝)

〈ジョンとヨーコのバラード〉
(1969年/アップル/東芝)

CamScannerでスキャン

（母）とある。思うにこれらは水原さんとヨーコの"共作"だったのではないか。日本語を理解した上で最終的にオーソライズしてくれる人がアーティスト側にいれば、邦題も遠慮なくつけられるというものだ。

"ジョンタマ"への貢献を感謝されて、水原さんは次作「イマジン」（1971年）録音の数週間、アスコット・サウンド（ロンドン近郊のジョンの私有スタジオ）に招待されたのだそうだ。「水原はおとなしいから人に言わないけれど、俺なら何倍にもふかしてるけどね。わっはっは」と高嶋さん。

タイトルと並んで、僕が東芝EMIに入社した70年代半ばにはレコードのキャッチコピー作りも洋楽マンの大事な仕事になっていたけれど、オビやジャケにいかに余白があっても60年代末には何も書かれていないものがほとんどだった。キャッチコピーの存在を僕に強力に伝えてくれたのは『原子心母』のオビだ。「ピンク・フロイドの道はプログレッシヴ・ロックの道なり」―― もちろん石坂敬一作だ。　（2017年4月号）

『ジョンの魂』ジョン・レノン
（1970年／アップル／東芝）

14 EMI対キャピトル

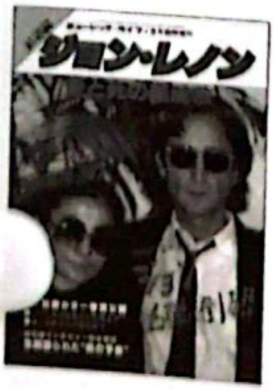
ジョン・レノンだって完璧ではない

ビートルズの本格的米国（さらには世界）デビューを"遅らせた"デイヴ・デクスターJr.については第11回に書いた。1955年から英EMI系列に入っていた米キャピトルの制作部門を統括したジャズ派の大物だ。ビルボード誌の1980年12月20日号に、彼がジョン・レノンについて書いた文章はこう始まっている。

「1960年代以降、ジョン・レノンほど音楽的才能に恵まれたミュージシャンはいない。そしてビートルズの4人のうち、レノンは音楽産業でともに働く人々の一番の嫌われ者だった」

日付からもお判りのように、これは1980年12月8日に凶弾に斃（たお）れた直後のジョン・レノン追悼特集中の一文なのだが……。1974年にキャピトルを退いたデクスターは、ビルボード誌のスタッフ・ライターとなっていた。「完璧な人間はいない」と題された（悪名高き）この文章は、「レノンのエゴが周囲の人間を不快にさせた」とサブタイトルされ、こんなエピソードを紹介する。

「（〈抱きしめたい〉の大爆発の後、）キャピトルの社内では、ビートル



「ミュージック・ライフ」
1981年1月号臨時増刊

ズのLPを一刻も早くレコード店に送りこむべく私たちは忙しく動き回っていた。LPに足りるだけのマスターテープが英国から到着すると、私たちは何時間もかけて英パーロフォン（ビートルズが契約したEMI内のレーベル）の音作り（イコライズ）を調整し、残響（リヴァーヴ）を加えてキャピトルの水準を充たすものとした」「（最初のUSツアーで滞在中のマイアミのホテルから）レノンとマッカートニーは私に電話をくれて、全米発売に向けてキャピトルのエンジニアたちが創り上げた“いかした”サウンドを称賛してくれたものだ」

しかし蜜月も束の間だった。――「レノンはキャピトルの経営陣に、キャピトル盤のジャケットが好きではないと伝えた。裏ジャケットも気に入らなかった。それどころか、キャピトル盤のビートルズのサウンドも認めないというのだ。当初の称賛から、突然180度の転向だ」「マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スターに不満はなかった。レノンだけだ」

キャピトルの当時の社長アラン・リヴィングストン邸のカクテル・パーティでのジョンの尊大な態度にも触れている。1964年8月23日のハリウッド・ボウルのコンサートの晩、パーティを知った近隣の若いファンが屋敷の窓の下に礼儀正しく集まっていた。デクスターは、窓の近くにいたジョンに、顔を見せてあげたら、と声をかけたのだという。すると答えは「いまいましいガキどもになんのために？」「こいつらが俺たちのプライヴァシーを台無しにするんだ」

CamScannerでスキャン

さらにデクスターは、キャピトル盤の選曲でレノンと衝突したことも書いている。──「キャピトルのアルバムの私の選曲について、誰よりも声高くののしったのもレノンだった。キャピトルがやったことごとくに、彼は反対した」

そして文章はこう結ばれる。「彼自身の性格とは異なり、彼の芸術性はエキセントリックでも不快なものでもない。それこそ私たち皆が永遠に記憶すべきところなのだ」

ジョージ・マーティンも怒っていた

当初自分たちの創造物を軽視し、あげくは改変した人物や組織に、ジョンが辛辣に対したであろうことは容易に想像できる。カクテル・パーティの一件にしても、ファンではなくむしろデクスターやリヴィングストンに腹を立てていたのではないか。EMIの英国紳士ジョージ・マーティンもまた、1979年の自伝『ザ・ビートルズ・サウンドを創った男──耳こそはすべて──』(吉成伸幸、一色真由美・訳／河出書房新社)中でキャピトル勢に怒っている。

「〈プリーズ・プリーズ・ミー〉が成功するとすぐ、私は『よし! ビートルズをアメリカに売り出そう!』と声をかけたが、キャピトル社長のアラン・リヴィングストンからは、『こちらの市場ではビートルズはものにならない

「ザ・ビートルズ・サウンドを創った男──耳こそはすべて──」(新装版)(2016年／河出書房新社)

CamScannerでスキャン

と思う」とそっけない返事が返ってきた」――この判断の背後には、もちろん制作部長デクスターがいる。

さらに〈フロム・ミー・トゥ・ユー〉〈シー・ラヴズ・ユー〉も「容赦なくはねつけ」られた後、「懲りずに4回目のチャンスに体当たりした」「1964年のはじめ、ついにキャピトルは折れた」。この曲、〈抱きしめたい〉はラジオで紹介されるや瞬く間に火が付き、キャピトルは当初の予定を早めて1963年12月26日に発売している、

かくてビートルズは米国、そして世界へ大きな一歩を踏み出すが、1964年2月7日にグループと共に米上陸したマーティンの存在をキャピトルは隠そうとしたらしい。「すでにビートルズは自分たちの制作物であると触れ回っていたので」都合が悪かったのだ。ニューヨークの最初の記者会見もリヴィングストンがすべての進行を取り仕切り、マーティンは記者団から遠ざけられた。そしてビートルズはこう紹介される。

――「キャピトルのレコーディング・アーティストです！」

「彼の唇から出てくる言葉は、病的な響きを伴っていた。これがビートルズを3回も足蹴にした男なのだ!」　(2017年5月号)

15 キャピトルのビートルズ

キャピトル盤ベスト3

1964年2月のアメリカ上陸の時点でビートルズ勢、とりわけジョン・レノンが米キャピトルに対して不満や不快を抱いていたであろうことは前回書いた。1955年以来英EMI傘下に入り、ビートルズの音源を米発売する優先権を持っていたにも関わらず、キャピトルは1年間これを行使しなかった。ようやく発売された同社第1作アルバム『ミート・ザ・ビートルズ』は、英国の第2作『ウィズ・ザ・ビートルズ』をベースとしながらタイトルやジャケットの色合いやサウンドを改変し、曲目を減らした上に大幅に入れ替えている。

こうした変更が英国側に相談なしというから乱暴だが、当時はポピュラー音楽といえば問答無用で“アメリカ・ファースト”の時代ではあった。アメリカ盤という別ヴァージョンの存在を知った僕らは、むしろホンモノ感を感じたりもしたものだ。金色でタイトルが刷られ、収録曲を大幅に入れ替えてフォーク・ロック色を強調した米盤『ラバー・ソウル』など、僕は今も“傑作”と思っている。英盤とは別世界に生まれたもうひとつの傑作だ。大きくは1曲目が〈ドライヴ・マイ・カー〉から（米盤『へ

『ミート・ザ・ビートルズ』
（1964年／キャピトル）

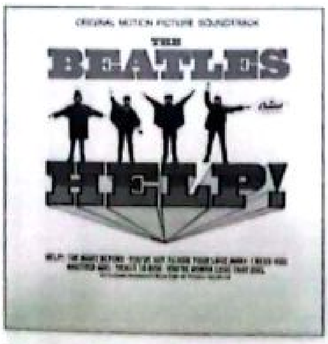
ルプ！』に漏れた）〈夢の人〉に変更されているが、これがアルバムの示唆する世界を一変させる。まるでロールシャッハ・テストだ。

米盤『ヘルプ！』はインスト（ケン・ソーン楽団）も含めて正しくサントラ曲のみが収録されている。僕は英盤『ヘルプ！』B面（カントリーに始まり〈イエスタデイ〉を経てロックンロールで閉じる非サントラ曲サイド）のバラバラな構成が好きになれなかったこともあり、米盤もほしくてたまらなかった。冒頭、〈007ジェームズ・ボンドのテーマ〉が〈ヘルプ!〉を導入するのも魅力的だった。2枚目の『ヘルプ！』には結局手が出なかったけれど。

これら2作に加えて『マジカル・ミステリー・ツアー』が僕の米キャピトル盤ベスト3であろうか。英盤が17センチEP2枚に収めた6曲を30センチLPのA面にまとめ、B面に〈ハロー・グッドバイ〉〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉〈愛こそはすべて〉など同時期（1967年）の目の眩むようなシングル曲を集めている。これこそキャピトルの名企画、ビートルズの全アルバム中屈指の片面と言いたい。

同ワースト3

対して一番の困りものは米盤『リボルバー』ではないか。定率で割り出した金額をアルバム収録曲数で按分する日欧と異なり、曲数



『ヘルプ！』
（1965年／キャピトル）

『マジカル・ミステリー・ツアー』
（1967年／キャピトル）

CamScannerでスキャン

に応じて著作権料が増減する米国のアルバム収録曲は一般に少ない。米『リボルバー』もまた英盤の14曲を3曲減らしており、しかもこれらを達磨落しのように機械的に中抜きしている。既にアルバム文化の時代に、ビートルズや英制作陣の立場はあったものではない。ましてやこれら3曲〈アイム・オンリー・スリーピング〉〈アンド・ユア・バード・キャン・シング〉〈ドクター・ロバート〉は、いずれもジョン・レノン最新の名曲ばかりだ。それはジョンも怒るだろう（もっと前から怒っているわけだけれど）。

これら3曲は『ラバー・ソウル』と『リボルバー』の間に出現した米国のみの新作『イエスタデイ・アンド・トゥデイ』（66年6月、来日月の発売だった）にいち早く収録されて「トゥデイ」部分を形成する。といって主役扱いされているわけでもない。キャピトルに追加の大セールスをもたらし、ブッチャー・カヴァー*という超ド級のコレクターズ・アイテムを生んだアルバムだが、作品的にはあらずもがなの感がある。

これらに英盤『サージェント・ペパーズ〜』B面最内周で繰り返される数秒の〈サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ〉をなぜかカットした同米盤を加えた3作を、今の気分のワースト3としておこう。ちなみに〈インナー・グルーヴ〉は英盤では針を上げるまで繰り返され、日本盤では1回でフェイド・アウトする。米国でもこれは1曲換算とは思いにくいから、当時世界に先駆けて普及していたオート・リターンのプレイヤ

『イエスタデイ・アンド・トゥデイ』
ブッチャー・カヴァー

＊ビートルズが肉屋を演じる初版カヴァーは、残酷という理由で発売後すぐ回収され差し替えられた。

CamScannerでスキャン

ーとの兼ね合いでカットされたものかもしれない。最内周まで進むと、アームが自動的に上がるのだ。

ビルボードだって完璧ではない

ジョン・レノンの暗殺直後の生々しい時に発表された、元キャピトルの制作部長デイヴ・デクスターJr.によるジョンの"性格批判"「Nobody's Perfect」(前項参照)を掲載したビルボード誌にはさすがにクレームが殺到し、広告を引き上げるというスポンサーも相次いだ。次号のエディトリアル(編集雑記)に、同誌は謝罪とも言い訳ともシャレともつかない文章を載せている。——偏りのない意見を載せるのが本誌の使命だ。不快な思いをした読者には陳謝したい。誰もが完璧なわけではない。ビルボード誌だって同じだ。　(2017年6月号)

CamScannerでスキャン

16 〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉

ビートルズ初の大ヒット曲

ビートルズの全“公式録音”213曲中、他アーティストのカヴァーは1963年のデビュー・アルバムから1965年の『ヘルプ!』まで(後に『パスト・マスターズ』にまとめられたこの間のアルバム未収録曲を含め)24曲ある。半数がいわゆるロックンロールだ。1965年末の『ラバー・ソウル』以降、(トラディショナルをアレンジした〈マギー・メイ〉は例外として)カヴァー曲はない。

こんな風に書き始めたのは、チャック・ベリーの訃報(2017年3月18日90歳で逝去)に接し、66年の来日当時、圧倒的に売れていたビートルズ最大のシングルはベリー作〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉のカヴァーだったな、とあらためて思ったので。前年の日本独自のシングル・カット(1965年2月5日発売)はロックンロール好きを自認する高嶋弘之先輩(東芝レコードの初代ビートルズ担当ディレクター)の英断で、セールスはこれ以前のビートルズのシングルの水準を遥かに凌駕し50万枚を越えたそうだ。ビートルズに必ずしも前向きではなかったプレスリー世代のポピュラー・ファンを動員し、さらに音楽の形態を単純

明快に伝えるタイトルと楽曲に幅広い一般層が反応した結果と思われる。日本を含むこの時の世界ツアーのオープニング曲が〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉だったのは、おそらくこの成功と無関係ではないだろう。

2011年の“ビートルズの日”（来日記念日の6月29日）、僕らEMIミュージック・ジャパンは来日45周年を記念して、45回転シングルを製造ナンバー入りで6,000枚限定復刻した。当初4,500枚の予定だったが、追加オーダーに応えてこの数字になった。

ロックンロールからロックへ

これより前、ビートルズが歌ったチャック・ベリーには〈ロール・オーヴァー・ベートーヴェン〉がある。「既成の権威を覆せ」という、当時の僕ら（中学生）がどこかに抱えていた気分を代弁してくれた曲だ。これにジョンが〈カム・トゥゲザー〉（1969年）に曲想を借りた（パクった?*）〈ユー・キャント・キャッチ・ミー〉を加えれば、ビートルズの“公式録音”中チャック・ベリーのカヴァー曲は2.5曲強といったところだ。

さらに『BBCライヴ』や『アンソロジー』などの後の“発掘音源”も含めれば、ベリーがビートルズ最多のカヴァーの対象に間違いないが、“公式録音”に限れば〈スロウ・ダウン〉などのラリー・ウィリアムズ、

『ロックン・ロール』ジョン・レノン（1975年　アップル／東芝）

＊訴訟になったが、ジョンのソロ・アルバム『ロックン・ロール』（1975年／EMI　アップル）に元曲を含めベリー作の数曲を収めることで和解。

〈ハニー・ドント〉などのカール・パーキンスがそれぞれ3曲と上回る。リトル・リチャードは2曲で、〈のっぽのサリー〉はミュージック・ライフ誌のラジオCM曲にも使用されていた。

初期の人気ロックンロール、元歌がアイズレー・ブラザーズの〈ツイスト・アンド・シャウト〉は後に至るも人気は高く、最新リマスター版CDが発表された2009年にEMIミュージック・ジャパンが集計した全213曲の人気投票（26万人参加）でも、カヴァー曲中断トツのNo.1に輝いている。全体の23位だ。59位に〈ミスター・ムーンライト〉が、85位に〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉が続く。ロイ・リー・ジョンソン（Dr.フィールグッド＆ジ・インターンズ）作の前者も、後者同様『フォー・セール（'65）』からの日本独自のシングル（1965年3月）で、武道館のライヴ中継（日本テレビ系）冒頭、羽田からビートルズを乗せた車が首都高速を走るシーンの背景に印象的に流れた。

米キャピトルがカップリングし1964年8月（日本は11月）に発売した"ロックンロール・シングル"はA面に〈スロウ・ダウン〉、B面に〈マッチボックス〉を収める。後者はカール・パーキンス作とされるが、元曲は1920年代のブルース歌手ブラインド・レモン・ジェファーソンだ。日本盤はなぜかAB面を逆にしていたが、米のA面が当時の僕のヘヴィ・ローテーション・ナンバーだった。

しかし、たとえば初期のローリング・ストーンズやアニマルズにリズム

〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉の新旧シングル

CamScannerでスキャン

&ブルースを、同じくヤードバーズにブルースを感じたほどには、僕はビートルズにロックンロールの直な肌触りを感じたことはない。ビートルズというサウンドは、EMIからレコード・デビューした時点で既にそうした影響を自家のものとして消化していたように思う。そんな新しい音楽を、だから僕らの世代は従来のロックンロールならぬロックと呼ぶことを瞬時に共有できたのではないか。

お決まりのラヴ・ソングであることを超えた歌詞の世界を含め、チャック・ベリーのスタイリッシュなロックンロールはその巨大な礎となった。

（2017年7月号）

CamScannerでスキャン

17 石坂敬一のロック革命

『それはビートルズから始まった』

昨年末急逝された石坂敬一先輩のビートルズ本が出た。題して『我がロック革命　それはビートルズから始まった』(東京ニュース通信社／2017年5月23日刊)。「2015年9月27日から2016年8月9日までの計13回、約20時間にわたって半生を語り下ろしたものをまとめたもの」という。石坂さんは『赤盤・青盤』(1973年)をはじめとする解散以降のビートルズの国内盤制作を担当し、"女子供"のみならず"大人"あるいは文化人も聴くべき音楽、知るべき文化に育て上げたことで知られるが、これ以前のビートルズとの関わりについて語ったことは殆どなかったように思う。

『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』が世に出て(英米6月、日本7月)、同じセッションからのシングル盤〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉がこれより前(英米2月、日本3月)に出ていた50年前の1967年、慶応義塾大学経済学部の学生だった石坂さんは当時についてこう語っている。――「この頃になっても、大学にはビートルズに興味を持つ人はいなかった。当然のこと、『サージェント・ペ

『我がロック革命 それはビートルズから始まった』
石坂敬一
(2017年　東京ニュース通信社)

パーズ〜』を聴いている人は皆無。また、「ミュージック・ライフ」などの音楽雑誌を読んでも、ビートルズはまだアイドルとされていて、彼らの革新的な音楽性を評価している人は少ない。(中略) ビートルズはこんなに凄い音楽をやっているのに、なぜメディアや日本のファンはわかってくれないんだと、日々憤っていた」

うーむ、石坂さんは僕ら1967年の高校1年生と話すべきだったのだ。僕ら(といってもクラスに数人だが)は日々驚きの『サージェント・ペパーズ〜』を語り合い、ビートルズを"アイドル"とは誰も思っていなかった。65年の映画「ヘルプ!」を「4人はアイドル」の邦題で呼んだことは、思えば一度もなかったと思う。

〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉のシングル盤

日本公演を見て以来「ビートルズは自分がやらなければならない」と思っていたという石坂さんが大学を卒業し、東芝音楽工業(後の東芝EMI→EMIミュージック・ジャパン)に入社したのは1968年のことだ。洋楽部に配属され、クリフ・リチャード、エルトン・ジョン、ピンク・フロイドなどを担当しながら、ビートルズに関しては(高嶋弘之さんを継いだ) 2代目担当者水原健二さんのアシスタントを務め、主にラジオ局を走り回ってオンエアを稼いでいたのだという。『ホワイト・アルバム』

（英米1968年11月、日本1969年1月）からのシングル・カットは英米では当時一切なかったが、日本では〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉（〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉とカップリング）のシングル盤が1969年3月に出ている。どういう経緯でそうなったのか不思議に思っていたが、水原さんから「放送局用の推薦ナンバー」を選ぶように指示された石坂さんの判断なのだという。英EMIが録音した西インド諸島出身のレゲエ・バンド、ザ・ベッドロックスによるカヴァーが日本でも小ヒットしていたこともあり、例外的にシングル発売が許可されたのだ。「単に自分の好みや思い入れだけではない。自分に何が求められているかを考えた末の選曲だった」

僕は童謡のような〈オブ・ラ・ディ～〉が当時も今もまったく好きではないが、4人のメンバーそれぞれの個性と楽曲の足し算のような『ホワイト・アルバム』の収録曲をあらためて眺めるにつけ、名曲はあれど、これぞシングルという曲は見つからない。ラジオの送り手やリスナーの間を繋いでいく伝播力や、想定するべきファンの幅の広さを考えれば、確かに〈オブ・ラ・ディ～〉こそ最も現実的、最大公約数的なチョイスだったに違いない。石坂敬一先輩は理想家だが、時に恐ろしいほどリアリストだ。

（2017年8月号）

〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉
（1969年／アップル／東芝）

〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉ザ・ベッドロックス
（1968年／オデオン／東芝）

18 最強のペパー軍曹

世界的高評価の『サージェント・ペパーズ～』

3kgはあろうかというデラックス版ボックス・セット（4CD+Blu-ray+DVD）発売とともに、6月『サージェント・ペパーズ～』が50歳を迎えた。終曲〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉のエンディングの長いフェイド・アウトを放心の思いで聴いたのがつい昨日のことのようだ。万華鏡の世界を旅したような気分だった。なんて凄いんだ。これが僕らの時代のロックなんだ。あれから50年経ったって、マジかよ。フェイド・アウト後の短い騒ぎ声は、前も書いたように僕はアメリカ盤を奮発したので入っていなかった。後に〈サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ〉と呼ばれるそのオマケは、なぜか米キャピトル盤からはカットされていたのだ。

50周年の歓迎は（初出当時と同様）、とりわけイギリスで熱狂的だ。記念盤（普及版2CDなど4形態）が49年ぶりにニュー・ミュージカル・エキスプレス（NME）誌のチャートの1位に輝いている。50年ではなく49年なのは、初出時、翌年まで27週（!）にわたってトップの座にあったからだ。NME誌が昨年発表したアルバム歴代トップ60で『サージェント～』はビートルズ全作品中1位、全体でも3位の座にある（1位は

『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド
［スーパー・デラックス・ボックス・セット］』
（2017年／アップル／ユニバーサル）

CamScannerでスキャン

クイーン『グレイテスト・ヒッツ』)。ちなみにビートルズの2番手は、2000年のベスト盤『1』が20位に入っている。

『サージェント〜』が強いのはアメリカも同じで、やはり昨年発表されたビルボード誌のオールタイム・アルバム200(1963年〜2015年)では、ビートルズは『サージェント・ペパーズ〜』54位、『ハード・デイズ・ナイト』105位、『1』131位と並ぶ(ビートルズはマドンナを凌いでホット100アーティストの1位であることも付記しておく)。また、ローリング・ストーン誌が業界関係者のアンケートから2012年にまとめた500グレイテスト・アルバム・オブ・オールタイムは、1位に『サージェント・ペパーズ〜』を(そして3位に『リボルバー』、5位に『ラバー・ソウル』を)選んでいる。今回の50周年記念盤もビルボード誌3位に初登場だ。

頑張れ日本の『サージェント・ペパーズ〜』

日本ではしかし、セールス、評価、人気いずれも『サージェント・ペパーズ〜』がビートルズ作品のトップであったことはないように思う。日本にNMEやビルボードのような60年代を含む歴代セールス・チャートは存在しないので、長く東芝EMI及びEMIミュージック・ジャパンで過ごした僕の“感覚”(LP、CDそれぞれ再発を繰り返しており、正確な数字の集計は不可能に近い)で言うと、300万枚の『1』を筆頭に、ビー

トルズのセールス順位は「赤盤」「青盤」「レット・イット・ビー」「アビイ・ロード」と並び、次がようやく（「ホワイト・アルバム」または）「サージェント・ペパーズ～」というところだ。

それではオリジナル・アルバム13作の人気や評価はどうか？ EMIミュージック・ジャパンが2009年のリマスターCD発売時に実施したファン投票では、「アビイ・ロード」「ホワイト・アルバム」に次いで「サージェント・ペパーズ～」は3位だった。ビートルズの某ランキング書*（2013年）は"ビートルズの達人100人"の"お気に入りアルバム"ベスト5を集計しているが、「サージェント・ペパーズ～」は「アビイ・ロード」「ラバー・ソウル」「ホワイト・アルバム」「リボルバー」の後塵を拝して5位だ。"達人100人"がどうしたんだよ、と一瞬ムッとしますが、日本におけるこうした「サージェント・ペパーズ～」過小評価の理由は、そもそもの出会いにあるのではないか。

60年代、日本のビートルズは現象ではあったけれど決してメジャーではなかった（セールスはベンチャーズが遥か上を行った）。「サージェント・ペパーズ～」の出現を大事件として受け止めたのは、僕らビートルズ第一世代だけだったのかもしれない。高校1年のクラスに3～4人という少数派だ。その後ビートルズは1970年の「レット・イット・ビー」、そして1973年の「赤盤」「青盤」を経て名実ともに日本でもメジャーになったけれど、後から振り返って聴く「サージェント・ペパーズ～」は同

＊『ランキング ザ・ビートルズ』（2013年／シンコーミュージック・エンタテイメント）

時代の衝撃と共にあるわけではない。『サージェント・ペパーズ～』に学んだ後追いのプログレ系というかニュー・ロック系アルバムは既に何枚も出ていた。しかも『サージェント・ペパーズ～』には世代を繋ぐシングル・ヒットがない。米国を含め、そもそも世界的にシングル・カットがなかったし（これ自体斬新なチャレンジだ）、今あらためて聴いても名曲はあれど「これぞ万人向きのシングル・ヒット」という曲はない。スタンダード曲のような〈レット・イット・ビー〉や〈ヘイ・ジュード〉がやがて日本のビートルズを一般化し巨大化したことを思えば、『サージェント・ペパーズ～』は70年代以降のファンが最初に手を出す作品では決してなかったのだろう。

50周年盤は、オリコンの洋楽1位を2週連続記録（総合では7位→5位）するなど、日本でももちろん好スタートを切っている。今回を機にこの驚くべきアルバムの真の価値があらためて認識され、さらに輝き続けることを祈りたい。

（2017年9月号）

CamScannerでスキャン

19 ビートルズ後のビートルズ その1

解散前より売れる

前々項でご紹介した石坂敬一著『我がロック革命 それはビートルズから始まった』(2017年／東京ニュース通信社)にこんな記述がある。――「64年1月に日本で初めてビートルズのレコードが出て、80年までの約17年間に約300億円を売り上げた」「約100億円が60年代の現役時代の頃で、200億円が70年代」「音楽を聴くメディアがシングルからLPに変わったことによる金額の差もあるが、解散したバンドが解散前の数字を上回るのは異例のことだった」「(現役のミュージシャン同様に)ビートルズのアルバムの再開発をマーケティングした結果だった」

ビートルズの70年代は、初のオールタイム・ベスト『赤盤』『青盤』(1973年)に始まる。ジャンル別ベスト『ロックン・ロール・ミュージック』(1976年)、『ラヴ・ソングス』(1977年)、1964、65年のライヴ音源のLP化『ザ・ビートルズ・スーパー・ライヴ! (アット・ハリウッド・ボウル)』(1977年)が後半に並ぶが、日本ではこれら3作を内包する石坂さん渾身の国旗オビ・シリーズ35作(1976～78年／本連載第6回参照)が発売され、ビートルズの実働レコードには質量ともに強力なものがあ

った。上に引用した言葉が裏付けているように、日本のファンの大多数はこの10年間以降にビートルズと出会っている。

「悪霊島」に始まる80年代

続く1980年代、日本のビートルズは角川映画「悪霊島」(1981年)とともに始まる。原作は月刊誌「野生時代」(角川書店)での連載を終えて間もない横溝正史最後の長編で、金田一耕助シリーズ最後の作品だ。「鵺の鳴く夜は恐しい……」(原文ママ)というコピーで知られたこの怪奇探偵映画のサントラに、ビートルズの〈レット・イット・ビー〉と〈ゲット・バック〉が使われたのだ。2曲をカップリングしたシングル盤のジャケットは、岩下志麻ら白装束の女優陣のスティルを使用している。ビートルズ相手によくも実現した奇跡の珍品だが、拡大する日本のレコード・マーケット、さらには音楽を飛び道具にヒット作品を連発する角川映画の力を知ってEMIとアップルが了解したものか。一般的な劇映画とビートルズの音楽の、世界最初の合体であったかと思う。

洋楽と映画の共存共栄といえば、ビートルズ初代担当者(石坂敬一は3代目)高嶋弘之は、荒業を行使して無名の映画をヒットさせ、ひとりのスターを誕生させたことがある。クロード・チアリのギターの調べを前面に押し出したギリシャ映画「夜霧のしのび逢い」(1963年ギ

「悪霊島」主題歌シングル
(1981年/オデオン/東芝)

〈夜霧のしのび逢い〉クロード・チアリ
(1964年/オデオン/東芝)

リシャ作品、65年日本公開）だ。本国フランスでヒットした日本人好みのメロディの売り出しを図った高島さんが、これに合った別物映画（ダ札り）を見つけ出し、なんと日本で合体させたのだ。思えば石坂敬一も、イギリス映画「ナイル殺人事件」（1978年作品、同年日本公開）で同様のことを試みている。エンド・テーマを日本制作のポップス曲（ミステリー・ナイル）に差し替え、これも映画と音楽共々ヒットした。

そして1980年代後半、CD時代が本格的に幕を開ける。1985～86年、LP盤のサーフェス・ノイズを忌み嫌うクラシックが先陣を切り、ポピュラー系の過去のカタログも次々と新商品としてリフレッシュしたが、ビートルズに慌てる理由はなかった。1987年、英EMI（パーロフォン～アップル）作品に米キャピトル編集の『マジカル・ミステリー・ツアー』を加えた13タイトルの12インチLPが順次CD化され、ここに初めてビートルズ"13のオリジナル・アルバム"が世界的にも世代的にも共有される。

（2017年10月号）

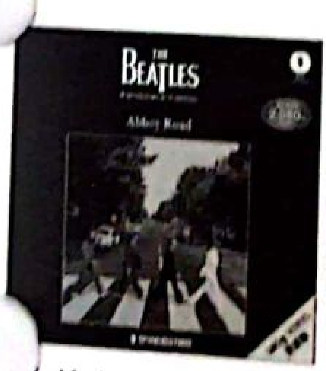
『ミステリー・ナイル』サンディ・オニール（1978年／イーストワールド／東芝）

20 ビートルズのアルバムB面

ビートルズのLPから学んだこと

日本におけるビートルズの受容史を60年代から10年単位で辿った前回の続編を書くつもりでしたが、8月末に遂に出ました！　って、前から分かっていたことですが、デアゴスティーニのビートルズ・コレクションです。しかもLPコレクションです。創刊号『アビイ・ロード』をターンテーブルに載せながら考えた。ビートルズからはいろいろなことを学んだけれど、ポップスのLP盤の存在、さらにAB面という概念を教えてくれたのもビートルズだった。

1964年の初夏、僕（中学1年生）は初めて自分の小遣いでレコードを買った。〈抱きしめたい〉のシングル盤だ。そしてレコード店通いを始めたある日、店頭に巨大なビートルズ盤を見つけた。家には〈運命〉と〈未完成〉を両面に収めた30センチLP盤とかあったけれど、ビートルズの"短い音楽"にこんな"大きなレコード"が必要とは夢にも思っていなかった。その『ビートルズ！（ミート・ザ・ビートルズ）』というLPを、僕は半年がかりで小遣いをためて手に入れた。そして針を落とすその瞬間まで、ラジオのように曲名が都度コールされるものと信じて疑わな



・ビートルズ・LPレコード・コレクション」第1号
（2017年／デアゴスティーニ・ジャパン）

かった。だって片面に〈運命〉1曲ではないのだ。7曲ずつ両面に並ぶ14曲は、シングル盤になっていた約半数を除いては未知のものばかり。しかし繰り返し聴くうち曲名などおのずと覚えるもので、アナウンスはまったく不要と納得し、同時に僕はポップスのLP盤がふたつの起承転結で構成されていることを知った。

20年後の80年代半ばに自らレコードを制作（ジャズが中心だ）するようになった時、だから2曲のオープニングと2曲のクロージングを想定しながら録音を進めたものだが、長くは続かなかった。AB面のないCDの時代がやってきたのだ。ジャズもロックも1988年にはCDが主流になっていたと思う。それから30年後の今こそビートルズのLPに再会する（あるいは初対面する）チャンスではないか。デアゴスティーニからは隔週1年がかりで、全23タイトルのビートルズLPが登場する。

ビートルズ最高のB面は？

LPを聴くとは、A面かB面を聴くことだ。50年前、僕ら（高校1年生）は「今日はまた『サージェント・ペパーズ～』のB面を聴こう」、そんな風に考えながら帰宅したものだ。ビートルズとほぼ同時代のアメリカン・バンド、ビーチ・ボーイズの『ビーチ・ボーイズ・トゥデイ！』B面に、僕らは翌年の『ペット・サウンズ』（『サージェント・ペパーズ～』に巨大な影

『ビーチ・ボーイズ・トゥデイ！』
（1965年／キャピトル／東芝）

『ペット・サウンズ』ビーチ・ボーイズ
（1966年／キャピトル／東芝）

響を与えたとされる傑作）への予兆を鋭く嗅ぎ取ったりもした。そういうわけだから、今回はビートルズのB面問題（というものがあるのだ）を考えたい。

前にも書いたけれど、まず困りものは『ヘルプ！』（1965年）B面だ。リンゴの歌うカントリー曲〈アクト・ナチュラリー〉はそもそもオープニングらしくないし、クロージングが弦楽入りバラードの〈イエスタデイ〉からロックンロールの〈ディジー・ミス・リジー〉では雑貨屋状態だ。A面はあんなに素晴らしいのにね！

対して甲乙つけがたく立派なのは『サージェント・ペパーズ～』（1967年）、『アビイ・ロード』（1969年）、そして『マジカル・ミステリー・ツアー』（1967年）のB面だ。ジョージのインド風瞑想曲〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉に始まり壮大な〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉に終わる『サージェント～』B面は極めて非A面的な、しかし素晴らしい異世界を形成し主張しているし、『アビイ・ロード』B面のメドレーは見事に完成し〈ジ・エンド〉を招来するのでA面にあっては困る。米キャピトル編集の『マジカル～』B面はLP未収録のシングル盤を機械的に並べただけだけれど、これほど充実したLPの片面は計画したって出来るものではない。いずれも後期ビートルズの圧倒的な制作力を誇らしげに伝えるB面ばかりだ。

しかしこの機会にあえてイチ押ししたいのは『リボルバー』（1966

年）B面だ。一般的にはA面人気の高いアルバムだと思うが、〈グッド・デイ・サンシャイン〉というちょっとオトナのビートルズ（当時の気分）に始まり、続く〈アンド・ユア・バード・キャン・シング〉〈フォー・ノー・ワン〉〈ドクター・ロバート〉という見すごされがちの3曲が、並びといい個々の出来といい、ある日気づいてみればなんとも素晴らしい。これを"発見"して、当時何度繰り返し聴いたことだろう。〈トゥモロー・ネバー・ノウズ（明日のことはわからん）〉というエンディングも実にいいではないか。

（2017年11月号）

CamScannerでスキャン

21 ♪イッツ・オールライト

ディジタル再生1億回突破

この連載が掲載されている「ザ・ビートルズ・クラブ」の月刊誌先月号のBeatles Newsに「今、聴かれているビートルズ・ソングス」トップ10が紹介されている。音楽配信サービスのスポティファイが再生回数をカウントしたものという。日本ではまだまだこれから、という感じもありますが、欧米では数年前からストリーミング配信の定期契約（サブスクリプション・サーヴィス）が、レコード（recorded music）ビジネスの主力になっている。スポティファイはその最大手で、昨年からビートルズ全曲の配信も開始した。

さて、気になるその順位は……？って、先月号にある通りだが、あらためてトップ5のカウント・ダウンを眺めると、次点〈イエスタデイ〉、5位〈ツイスト・アンド・シャウト〉、4位〈ヘイ・ジュード〉、3位〈レット・イット・ビー〉、2位〈カム・トゥゲザー〉と「なるほど」な楽曲が並ぶ。さてナンバー1は？

多くの方が〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉を予想（というか期待？）したのではないか。だいたいこの手のワールド・チャートは、ポール作のバ

ラードか、そうでなければジョンが主導した〈ア・デイ～〉、時にジョン作〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉がトップと相場が決まっているのだ。ところが結果は驚くなかれ、ジョージ作〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉。再生回数は1億回を突破したという。

〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉と言えば

〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉は『アビイ・ロード』B面冒頭の1曲だ。そして前回も書いたように『アビイ・ロード』B面が、ビートルズのアルバム中最強のB面のひとつであることは論を待たない。しかしそれは、たとえれば体操競技の団体総合の結果のようなもので、必ずしも突出した一選手に支えられているわけではない。かつて〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉が、単曲としてこれほどの栄誉に浴したことがあっただろうか？

ちなみに2009年9月、最新版リマスターCDが発売された時にEMIミュージック・ジャパン（現ユニバーサルミュージック）が行なったアンケートでは、〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉は……えーと12位だ。思ったよりはずっと上位でしたね。1位は〈レット・イット・ビー〉だ。

では海外はと言うと、2011年に米ローリング・ストーン誌が発表した100 Greatest Beatles Songsでは28位（1位は〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉）、2015年の英モジョ誌によるThe 101 Beatles Greatest Songs

では21位（1位はやはり〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉）というところだ。他にもビートルズ曲の人気投票は多々あるが、〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉がトップのチャートなんて、誓ってこれまで見たことがない。

日本は「アビイ・ロード」から〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉をシングル・カットした数少ない国だ（他にポルトガルなど）、〈オー・ダーリン〉と両A面風に（しかしB面に）カップリングされ、ジャケットには「日本だけで実現したゴールデン・レコード」とヘッドコピーがある。〈カム・トゥゲザー〉と〈サムシング〉のカップリングに続く「アビイ・ロード」からのセカンド・シングルだが、なんとアルバム「レット・イット・ビー」と同日（1970年6月5日）に発売されている。妙なものが妙なタイミングで出たもので、そこにいかなる特別な理由があったのかは知らない。結果的に日本では「レット・イット・ビー」からのセカンド・シングル〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉の発売が遅れた。すでにファースト・シングル〈レット・イット・ビー〉が（日本を含め）世界的に大ヒットしている時期のことだ。

ジョージの"歓びの歌"

といって僕は、〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉が嫌いなわけではまったくない。ビートルズ曲好感度ベスト10みたいなものがあれば、ジョンの〈アイム・オンリー・スリーピング〉（日常感がいいよね!）とかと並べて上位

〈オー・ダーリン／ヒア・カムズ・ザ・サン〉
（1970年／アップル／東芝）

CamScannerでスキャン

に投票するだろう。仄暗く、表情の少ない曲調が特徴的だったジョージの、これは「喜びの歌」だ。ビートルズ末期の『アビイ・ロード』の日々、ジョージはアップルの退屈な経営会議から逃げ出し、親友エリック・クラプトンのカントリー・ハウスで「長い冬」の終わりを告げる陽光を浴びた。そして「♪イッツ・オールライト」と歌ったのだ。

ディジタル配信の現代、『アビイ・ロード』B面という名"組曲"の前奏曲とも言える定位置に加えて、〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉は単曲として新たな陽光を浴びている。だとしたらジョージと一緒に声に出して歌いたいよね！「♪イッツ・オールライト」と。

（2017年12月号）

22 リンゴ・スターは映画スター

困りもの〈アクト・ナチュラリー〉？

ユキ・ラインハートさんがパーソナリティを務める月〜木オビ生放送（JFN系19〜21時）のFM音楽番組がある。「A・O・R」（Adult Oriented Radio）＊といって、このところ火曜の前半1部に隔週でビートルズを小特集している。デアゴスティーニの隔週刊『ザ・LPレコード・コレクション』の発売日だ。先頃、第5号『ヘルプ！』が特集された晩のこと、スタジオのロビーに入って行くと（というのは、毎週火曜後半の2部「ジャズ＆ヴォーカル・ナイト」にレギュラー出演させていただいているので）、ユキさんのチャーミングな声が聞こえてきた。

「映画に出るんだ」「地のままでいいんだ」「僕は映画スターになるんだよ！」

『ヘルプ！』の特集とは聞いていたから、映画公開当時のリンゴ・スターのインタヴューを読み上げているものかと思った。ところが続けて聞いていると、なんと『ヘルプ！』B面冒頭〈アクト・ナチュラリー〉の歌詞の内容を説明しているではないか。カントリーの大御所バック・オーウェンズのヒット曲のカヴァーで、リンゴ・スターが歌っている。

＊JFN系各局とネットしていますが、聴けない地域はラジコ（radiko）等でどうぞ！

CamScannerでスキャン

『ヘルプ！』のB面が、僕は出会ったその日（国内盤発売日の1965年9月15日だと思う）から好きではない。ビートルズのLPのB面について触れた前々回も、こんな風に書いてしまった。——「困りものは『ヘルプ!』（1965年）B面だ。リンゴの歌うカントリー曲〈アクト・ナチュラリー〉はそもそもオープニングらしくないし（後略）」

だってその頃世に出ていたビートルズのB①といえば、『ミート・ザ・ビートルズ』の〈プリーズ・プリーズ・ミー〉、『No.2』の〈ロール・オーヴァー・ベートーヴェン〉、『'65』の〈エイト・デイズ・ア・ウィーク〉が並ぶのだ。いずれも、盤を裏返し針をあらためて落として「さあ、もう半分聴くぞ!」と気合を入れ直すのに相応しい楽曲ではないか。

『ヘルプ！』以降も、ジャズっぽい〈グッド・デイ・サンシャイン〉や瞑想的な〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉、明朗な〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉というジョージの問題作・名作がそれぞれ『リボルバー』『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』『アビイ・ロード』のB①を占める。『ラバー・ソウル』の〈消えた恋 What Goes On〉だって、ムードメイカーとして悪くない。いずれもオリジナル曲だし。

「地のままで映画スターになるんだ」

しかるに『ヘルプ！』に限って呑気なカヴァー曲〈アクト・ナチュラリ

〈アクト・ナチュラリー〉
（1965年／オデオン／東芝）

CamScannerでスキャン

ー〉でB面がリセットされるのはなぜ？ どうしたの、ジョージ・マーティン？と長く思っていたが、なんだそういうことだったのか。つまり、A面に並ぶ映画のサントラ曲ではひとつも歌わず、しかし映画のいわば主役だったリンゴが、ここでようやく思いを語る（歌う）のだ。「僕は地のまま（アクト・ナチュラリー）で映画スターになるんだよ」

そんな話当たり前だろ、という皆さま、『ヘルプ！』のB面ファンの皆さま、これまで大変失礼いたしました。今後はもっと大事にします、『ヘルプ！』のB面。表が〈アクト・ナチュラリー〉、裏が〈イエスタデイ〉という当時の米キャピトル発のシングル盤も不思議だったが、ファンに向けて映画俳優リンゴを強調したかったのだろうな。元々リンゴは女のコに人気あったし。保守的カントリー・ファンを取り込もうとしたものとばかり僕は思っていましたが。

映画「ヘルプ!」はリンゴの愛称の由来である指輪（リング）趣味をモチーフにしているが、思えば「ハード・デイズ・ナイト」と「イエロー・サブマリン」はさらにリンゴの主役度が高い。仲間とはぐれたリンゴが奇妙なお荷物（ポールの叔父さんまたはNowhere Manのジェレミー）を連れて戻ってくるという筋立ても同じだ。3作とも、リンゴという自然なキャラがあってこそ生まれた物語に間違いはない。

そういえば1968年の伊仏米合作映画「キャンディ」で、リンゴはそれはそれは可愛いヒロイン（北欧の女優エヴァ・オーリン18歳）を襲う庭師の

映画「キャンディ」DVD
（廃盤）

CamScannerでスキャン

役をやっていましたが、あれは“アクト・ナチュラリー”ではないよね!

（2018年1月号）

CamScannerでスキャン

23 最も価値のあるレコード

世界一高価なシングル盤

ビートルズゆかりの地と言えなくもないアイルランド（リンゴを除く3人がアイリッシュ系）ですが、ギネスビールもまたアイルランドの首都ダブリン出身だ。僕はダブリンで本場のギネス飲んだことあるし、ギネスのいろいろな世界記録の話は長年耳にしてきたけれど、実はギネス・ブックそのものを手にしたことはなかった。それが遂に、ジャーン、本書でも助けていただいた編集者、亀井洋子さんが『ギネス世界記録2018』をプレゼントしてくれたのだ。

そして彼女が指差した音楽のページのとある一項は、――「もっとも価値のあるレコード（シングル）」。

解説はこうだ。「（1958年）ポール・マッカートニー、ジョン・レノン、ジョージ・ハリスンらによるザ・ビートルズの前身バンド、ザ・クオリーメン（イギリス）がリヴァプールで録音した〈ザットル・ビー・ザ・デイ〉〈イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デンジャー〉*収録の現存する唯一のシングルの価値は12万4,400ドル（約1,353万3,800円）と推定される」

シングル盤というより、バンドが経費を出し合って地元リヴァプールの

『ギネス世界記録2018』
クレイグ・グレンディ編
（2017年　KADOKAWA）

* 2曲とも『アンソロジー1』（1995年）に収められている。後者はR&B調のミディアム・バラードだ。

録音施設で1枚だけカットした10インチのアセテート盤だ。「アンソロジー1」(1995年)で初めて公式に登場した録音で、〈ザットル〜〉はバディ・ホリーのヒット曲(1957年)のカヴァー、〈イン・スパイト〜〉はポールとジョージの唯一の共作曲ということだが、ジョージのギター・ソロがあることから、ポールが気を配って共作者に加えたらしい。リード・ヴォーカルは共にジョンだ。

それにしても1千数百万円とは。

ポールが買い取って所有し歌う

いやはや驚いた、という話を本誌(ザ・ビートルズ・クラブ会報誌)編集チーフの葉山さんにしたら、なんと現在の所有者はポール本人なのだそうだ。そして現在、ポールのソロ・コンサートのレパートリーにもなっている。以下、葉山さんのメールより。──「(〈イン・スパイト〜〉を)最初にソロ・コンサートで演奏したのは、2004年のサマー・ツアー(ヨーロッパ)のようです。2005年も演奏しており、その後2016年のOne On Oneツアーで再びレパートリーに加え、現在のオーストラリア〜ニュージーランド・ツアーでも絶賛演奏中です」

そして、「(前回の)日本では確か、ビートルズのファースト・レコーディングと紹介して、〈ラヴ・ミー・ドゥ〉かと思いきや、という展開でしたが」

アセテート盤のレーベル

と書いた後に、2017年9月17日のマディソン・スクエア・ガーデンにおける演奏映像のリンクを張ってくれている。早速観てみると、曲前にポールのこんな感じの長めのMCがある。

「クオリーメンの5人（ジョン、ポール、ジョージ+ドラムスのコリン・ハントンとピアノのジョン・ダフ・ロウ）で総経費5ポンドを割り勘して1枚作り、皆で順に1週間ずつ手元に置いて聴いた。ジョンが1週間、ジョージが1週間、僕が1週間、コリンが1週間、けれどダフ・ロウは20年も持っていたんだよ!」

こういう時の所有権がどういうことになるのか知らないが、ポールがダフ・ロウから5,000ポンドを遥かに超える値段で買い取ったのは、1980年代初頭のことのようだ。でも、ポール所有のたった1枚のレコードの価値は、一体どうやって割り出したものなのだろう?

ちなみに「オークション史上最も高値で落札されたアルバム」はリンゴが所有していた『ホワイト・アルバム』の通し番号1番で、『ギネス世界記録2017』で認定されているとのこと。価格は実に79万ドル（約8,000万円）だそうだ。だ、誰が買ったんだよ！ 思えば第10回で国内盤『ビートルズ '65』の茶オビが「ひゃ、ひゃくごじゅうまんえん!」と驚嘆したものですが、ささやかな値段でしたね！

（2018年2月号）

24 『ホワイト・アルバム』50周年

「サージェント〜」翌年のビートルズ

昨年(2017年)は『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』、そして『マジカル・ミステリー・ツアー』(米12インチLP版がB面に収めた名シングル群を含む)の登場50周年でした。1967年はトータル・アルバム時代の到来とも、ビートルズのサイケデリック・ロック元年とも、ロックが自他ともに認めるアートになった1年であったとも言えるかも。

「〈抱きしめたい〉からわずか3年、ビートルズは、そしてロックはこれほど遠くまで来たのか」。当時の僕らの偽らざる感慨でしたが、さて続いてビートルズはどこへ向かったか？　誤解を恐れずに書けば"ジャズ"だ。1968年のビートルズ最初の作品は〈レディ・マドンナ〉のシングル盤(英米3月／日本4月)だが、イントロのラグタイム風のピアノは、1950年代以来英国を代表するジャズマン、ハンフリー・リトルトンのヒット曲〈バッド・ペニー・ブルーズ〉(1956年)のそれを翻案したものだ。また同曲は、録音にも英国のジャズの名手ロニー・スコットのサックス・ソロを加えている(発売時にはカットされたが)。

〈レディ・マドンナ〉
(1968年／オデオン／東芝)

CamScannerでスキャン

ちなみにリトルトン家は貴族の家系で、ハンフリーの甥ホン*・リチャード・リトルトンは名門イートン校を出るとロックのライヴハウスを立ち上げ、やがてこれをEMIに売却、2006年に勇退するまでEMIレコードの様々な要職を歴任した。

〈レディ〜〉に続いたのが〈ヘイ・ジュード〉のシングル盤（英米8月／日本9月）だが、こちらも〈レディ〜〉とは違った意味で“ジャズ”と親和性がないではない。コール・ポーター（米の大作曲家）を敬愛するというポール・マッカートニーの面目躍如たる名曲で、かつてのティン・パン・アリー生まれのスタンダード・ナンバーの列に並ぶような曲に類すると言えなくもない。ポールのこうしたメロディックな側面が、ビートルズを他と一線を画す巨大な“ロック”バンドとしたことは百も承知の上で、あえて書いておく。——前年の〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉〈ペニー・レイン〉〈愛こそはすべて〉〈ハロー・グッドバイ〉と並ぶ斬新なシングル盤攻勢と比べると、68年のシングル盤はなんて保守的なのだろう。

巨大なホワイト・ボード

そしてLP2枚組の『ザ・ビートルズ（ホワイト・アルバム）』が登場する（英米11月／日本翌年1月）。前作の架空のバンド名に対して実在

〈ヘイ・ジュード〉
（1968年／オデオン／東芝）

＊〈ホン〉は跡継ぎ以外の師弟に与えられる一代貴族の称号 “honorable”の略

のザ・ビートルズをセルフ・タイトルとし、ジャケットは満艦飾に対して白一色にしたもの。つまり『サージェント・ペパーズ〜』と対（あるいは対極）を為す。そんな風にも説明されるが、果たしてそこまで考えられたものか。ビートルズがバンドとしての求心力を失っていた時期でもあり、僕にはひとつのイメージが浮かぶ。4人が巨大なホワイト・ボードを壁に架け、こんな風に言うのだ。――「さあ、ここに皆でそれぞれ好きな絵を描こうではないか！ それがそのまま次の作品だ」

収められた30曲は各自のソロ作品の寄せ集めという色彩が強く、グループの共作・共演度は低い。つまり選別と精錬の過程を経ていないからか、収録曲の出来の標準は他のアルバムと比べて高くはない。2010年1月にEMIミュージック・ジャパン（当時）が実施した全213曲人気投票でも、本アルバムからのこんな曲が200位前後に集中している。〈コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル〉(190位)、〈ドント・パス・ミー・バイ〉(198位)、〈ロング・ロング・ロング〉〈ピッギーズ〉〈ワイルド・ハニー・パイ〉(以上200位同点)、〈ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード〉(205位)……。もっとも僕は“最下位”の〈ホワイ〜〉など大好きだったが。アルバム中の“最上位”はジョージの〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉(6位)、これにジョンの名曲〈ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン〉(33位)、ポールの〈アイ・ウィル〉(34位)や〈ブラックバード〉(42位)が続く。

改めて思うのは、当時ジョージ・マーティンが正しく主張したように、本作は楽曲を絞り込んで、贅沢なアルバム1枚にまとめられるべきだったということだ。もしビートルズ史をやり直すことが可能であるなら、まずはシングル・アルバムで出してほしかった。そして全30曲入りの2枚組『ホワイト・アルバム』は、50周年の2018年に世に出てほしかった、なんてね。そうしたら昨年に続いて2018年もどれほど刺激的な1年になったことだろう。もっとも、どの半数がシングル・アルバムの選曲に漏れたにしても、半世紀もマスターテープを倉庫に封印するなんて不可能だったには違いありませんが。

（2018年3月号）

CamScannerでスキャン

25 ジョージ・ハリスンの魅力

名曲〈アイ・ミー・マイン〉

中学校の英語の暗記を思い出しますが、「アイ・ミー・マイン」はジョージ・ハリスンの自伝のタイトルであり、文字通りジョージの「私」展の名であり、もとよりジョージが『レット・イット・ビー』セッション（1970年）に書き下ろした名曲だ。

1970年の夏の終わりだったと思う。僕は有楽町のスバル座の『レット・イット・ビー』のロードショーに出かけて行った。ビートルズは既に「解散状態」を伝えられていたと思うし、サントラ盤は熱心に聴いてはみたが、結局大好きなアルバムにはならなかった。（録音順は逆になりますが）『アビイ・ロード』の次がこれかよ、いいのかよ、くらいの感じだった。

同じ年の初春、僕は同じ映画館で「イージー・ライダー」を、盛夏には近くの丸の内ピカデリーで「ウッドストック　愛と平和と音楽の3日間」を見ている。ロックの時代の大波はビートルズさえも呑み込んで進んでいくかのようだった。これら2作と映画「レット・イット・ビー」の出来は比べるべくもなかったが、それでもいくつかの心に残る名シー

「ジョージ・ハリスン自伝　I・ME・MINE」
ジョージ・ハリスン・著／山川真理・訳
（河出書房新社／2003年 オリジナル原書は1980年刊行）

ンがあった。中でも、ジョージの歌う自作〈アイ・ミー・マイン〉をバックにジョンとヨーコがスタジオ内で優雅に踊るシーンだ。スバル座を後にする時、僕は多分〈アイ・ミー・マイン〉を口ずさんでいたのではないか。

2003年、フィル・スペクターによってストリングスを加えるなど過多な装飾が施された1970年版が"あるべき姿"に戻された時、つまり『レット・イット・ビー…ネイキッド』が発売された時、僕は同じく年末発売のジャズ・ヴァイオリニスト寺井尚子の新譜に〈アイ・ミー・マイン〉のカヴァーを録音することにした。『ジャズ・ワルツ』(サムシンエルス)が収めるのは、〈アイ・ミー・マイン〉のワルツ・パートを寺井のヴァイオリンが優雅に奏でるジャズ・ヴァージョンだ。

ジョージのB級グルメ的名曲

といって僕は、自分以外の〈アイ・ミー・マイン〉信者に会ったことはない(探したこともないけれど)。EMIミュージック・ジャパン(当時)のビートルズの全213曲人気投票(2010年1月発表)を見ても、中の下の136位だ。

ジョージ作の大名曲となると、〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉6位、〈サムシング〉7位、そしてストリーミング・サーヴィス

『ジャズ・ワルツ』寺井尚子
(2013年 サムシンエルス/ユニバーサル)

1億回突破（第21回参照）の〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉13位、これに〈タックスマン〉71位が続く。実に納得できる立派なトップ4だが、実はジョージのジョージらしい曲の魅力は、こうした大名曲ではない"B級"ナンバーにあるのではないか。そう、ステージでジョンとポールの半歩後ろでギターを抱え、ステップを踏み、勝手にカッコつけている感じ。あの佇まいがジョージの曲にも相応しい。と言うのも、僕が比較的初期に気に入ったジョージのオリジナルがそんな曲だったので（勝手言うんじゃねーよ）。

それは『ラバー・ソウル』（1965年）中の〈嘘つき女 Think For Yourself〉だ。ファズの効いたギターが全編をリードし、ジョージの淡々としたヴォーカルとのマッチングも実にいい。名曲だよね！（159位だけれど）。というわけで、僕としてはこの際（どの際？）先の〈アイ・ミー・マイン〉と〈嘘つき女〉を"ヒット曲でもなんでもないジョージの名曲"として明記しておきたい。『マジカル・ミステリー・ツアー』（1967年）の〈ブルー・ジェイ・ウェイ〉192位なんかもこれに加えておきたい。

シンガーとしてのジョージの魅力を何よりストレートに伝えてくれたのは、『ハード・デイズ・ナイト』（1964年）に収録の〈素敵なダンス〉101位だ。ジョンの作品だが、この曲にはジョージの力まないヴォーカルがよく似合う。映画中に演奏シーンがあるが、最後にジョージが「オーオ」と歌い終えるとすかさずジョンが言う。「その『オーオ』がいいん

CamScannerでスキャン

だ」。違うってば。「オーオ」も何もかもいいんだよね、この曲のジョージのヴォーカル。（2018年4月号）

CamScannerでスキャン

26 ビートルズ後のビートルズ その2

90年代の"発掘"

第19回でビートルズ解散後を10年紀ごとに1970年代、1980年代と書きましたが、優先すべき新ネタもあり半年ぶりの続編になります。ビートルズ1990年代です。1987年、遅ればせながらCD化を終えたビートルズは次の10年どこへ向かったか？

90年代ビートルズの大勢は、未発表（未レコード化）音源の"発掘"だ。口火を切ったのは『ライヴ・アット・ザ・BBC』（1994年11月発売／2013年に『Vol.2』リリース）だが、ライヴといっても必ずしも聴衆がいるわけではない。1963～65年に放送されたビートルズの英BBCラジオ出演時のスタジオ演奏を収める。この作品の成功（全英No.1）がきっかけとなった、というより同時進行したものと思われるが、続いたのが3巻の『ザ・ビートルズ・アンソロジー』だ。1995年11月に『1』、1996年3月と10月にそれぞれ『2』『3』が出ている。

ビートルズ以前のビートルズとは？　デッカ・レコードのオーディション・テープとは？に始まって、〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉など大名曲の制作過程や別テイクを惜しげもなく聴かせてくれるこ

「ザ・ビートルズ：アンソロジー」LDボックス

のお宝音源コレクションには、"新曲"も収められていた(公式213曲外)。ジョンが遺したテープに他の3人が音を重ねた〈フリー・アズ・ア・バード〉(『1』収録)と〈リアル・ラヴ〉(『2』収録)だ。とりわけ前者など日本でも小ヒットを記録し、新しいファンも獲得したのではないか。ともに解散後のジョンの作曲であり、公式213曲には含まれないが。ちなみに『1』～『3』のジャケットを並べると、ビートルズ史の小パノラマになる。デザイン(イラスト)は『リボルバー』のクラウス・フォアマンだ。

『アンソロジー』は同タイトルのTVシリーズと連動した音資料集で、映像商品全8巻11時間(VHSとLD)が先に発売された。そして、1997年の11月にまとめられたLDのボックス・セットが、僕が初めて直接関わったビートルズの国内発売作品だった。この時期から、僕のストラテジック・マーケティング本部(戦略制作本部)傘下に、東芝EMIの全映像作品を管轄する映像部が入ったのだ。映像部は高額な8枚組LDボックスになんらかのプレミアムを付けようとしていたが、本国からの答えは芳しくなかった。「なんとかしてください」と新しい部下(藤村美智子サンです)から半ば命じられるように、僕は折からのロンドン出張に出かけていった。

〈フリー・アズ・ア・バード〉
(1995年/アップル/東芝)

〈リアル・ラヴ〉
(1996年/アップル/東芝)

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノールと会う

その頃、東芝EMIとアップルの間にホットラインはなかった。いかに日本がビートルズ大国の仲間入りをしていたとは言え、ビートルズの全作品はこれまで以上に世界戦略商品となっていた。EMIの国際部がまとめる以上に、各国が個々に直接アップルと交渉すべき事項はあるべきではない。「それはそうですよね」。そんな話を当時のEMI社長ルパート・ペリーについでのようにしたら、「ぜひ行ってこい」と言う。「ニールに会ってこい。素晴らしい人物だから是非会うべきだ」。というわけで、僕は東芝EMIの人間として久々にアップル代表ニール・アスピノールと会見することになった。

アップルの事務所はロンドン中央部のEMIから郊外のヒースロー空港に向かう途中にあった。ロンドンを発つ日、空港に向かうリムジンに少々寄り道してもらい、1時間ほど待機してもらうことにしたが、しかし"会談"は1時間では終わらなかった。お互いに知りたいこと、話したいことが多すぎた。ビートルズの過去の何倍も、ニールがビートルズの明日を語ることに驚かされた。ポールとジョージの学生時代の仲間で、ビートルズのロード・マネージャーも務めたニールの中で、解散しても"ビートルズ"はまったく終わっていなかった。

結局僕らは3時間近く話し、僕はカナダのモントリオールへの最終便

CamScannerでスキャン

に乗り損ねた。同地のジャズ祭にあわせてEMIの国際ジャズ会議があったのだ。最終便の残っていたトロントまで飛んでタクシーでモントリオールに向かったが、カナダの恐ろしく広大で恐ろしく変化のない荒野を貫く一本道540キロ（ほぼ東京～大阪間）を車で数時間走る間、満天の星空が少しずつ明け、遠くの山並みが浮かんできたあの光景は、昨日のことのように覚えている。BGMはもちろんビートルズだ。

（2018年5月号）

CamScannerでスキャン

27 ビートルズ後のビートルズ その3

解散後のビートルズ作品

現役時代これ以上はない活躍を重ね、その上で解散後もファンを増やし続ける。これこそビートルズ最大の奇跡ではないか。そこで「ビートルズ解散後の歩み」を10年期ごとに1970～80年代（19回）、1990年代（26回）と眺めてきましたが、先を急ぐ前に、今回は作品編といいますか、1970年～現在、"ビートルズ後のビートルズ"の人気や価値の（とりわけ日本における）拡大に様々に寄与してきた主要作品たちを発売順に並べてみたい。

◎1970年代《ベスト盤の時代》

・『ザ・ビートルズ／1962年～1966年』（赤盤：1973年）
　前期実働バンド時代の2枚組ベスト。
・『ザ・ビートルズ／1967年～1970年』（青盤：1973年）
　後期スタジオ・バンド時代の2枚組ベスト。
・『ロックン・ロール・ミュージック』（1976年）、『ラヴ・ソングス』（1977年）
　対を成すテーマ別2枚組ベスト。

CamScannerでスキャン

◎1980年代《角川映画と公式13タイトル初CD化》

・角川映画「悪霊島」主題歌（1981年）

使用された2曲〈レット・イット・ビー〉と〈ゲット・バック〉をカップリングしたシングル盤。

・オリジナル13作CD化（1987年）

アメリカ編集の「マジカル・ミステリー・ツアー」を加えた13作を公式オリジナル・アルバムと認定。これに2巻の『パスト・マスターズVol.1』『同2』（1988年）を加えて、初めて"公式213曲"が揃う。

◎1990年代《発掘録音と最新リミックス》

・『ライヴ・アット・ザ・BBC』（1994年）

1963〜64年、英BBCラジオの放送用音源。

・『ザ・ビートルズ・アンソロジー1』『同2』『同3』（1995〜96年）

時代を追った未発表／レア・トラック集。

・『イエロー・サブマリン〜ソングトラック〜』（1999年）

初のリミックスCD。加えて最新版DVD／（後に）Blu-ray『イエロー・サブマリン』（ワーナー・ホームビデオ→ユニバーサルミュージック）で、映像とともに5.1chサラウンドを体験したい。

CamScannerでスキャン

◎2000年代《シングルCDベストと"ザ・ビートルズ最新作"、そして9-9-9リマスター》

・『ザ・ビートルズ1』(2000年)
初の1枚ものオールタイム・ベスト。日本で一番売れたビートルズ300万枚。

・『レット・イット・ビー…ネイキッド』(2003年)
"裸"は大歓迎だが、さてその結果は。

・『LOVE』(2007年)
5人目(以上)のビートルズ、ジョージ・マーティン(と息子ジャイルズ)が膨大な音源を再構成した"最新作"。ショーは現在もラスヴェガスで続演中。

・22年目のリマスターCD(2009年)
『パスト・マスターズ』を含めオリジナル14タイトルが2009年9月9日発売。

◎2010年代《大監督の記録映画と、解説付きLP盤の廉価な復刻》

・ロン・ハワード監督「ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK - The Touring Years」(2016年)

・隔週刊「ザ・ビートルズ・LPレコード・コレクション」×23(2017~18年

CamScannerでスキャン

／デアゴスティーニ・ジャパン）
欧州発LP付ブックレット全23巻。

僕（のストラテジック・マーケティング本部）が直接ビートルズを担当したのは、1997年〜2013年だ。ヴァーチャル・ビートルズの大活躍期というか、現役の60年代にある意味引けを取らない、実に刺激的な時代だった。

（2018年6月号）

CamScannerでスキャン

28 ビートルズ後のビートルズ その4

5.1chサラウンドの世界へ

本稿の19回、前々回、前回と、70年代以降およそ10年期ごとの"ビートルズ後のビートルズ"について書いている。だってビートルズを後ぐロック・バンドがあるとしたら、解散後のビートルズしかいないのだから。19回は1970&80年代、前回は解散以降の作品を俯瞰する総集編を書いた。今回は前々回の続き、1990年代の後期から。

『アンソロジーVol.1〜3』のLD8枚組ボックス・セット(1997年)が僕が初めて直接関わったビートルズの国内発売だが、この時アップル社長ニール・アスピノールと会う機会があり、ヒースローから次の仕事場モントリオールへの最終便に乗り遅れるほど話し込んだのは前々回書いた通りだ。会談の終わりには、ボックス・セットにプレミアムのペアウォッチを付ける許可も貰っていた。ニールは、いかなる形であれビートルズがグッズを無料で配布することがいかに特例的か、繰り返し強調していたものだ。

ついで関わったのが、90年代最後のビートルズ作品、映画初公開(1968年)から30年後の『イエロー・サブマリン〜ソングトラック〜』

「イエロー・サブマリン」DVD
(1968年作品/ユニバーサルミュージック)

CamScannerでスキャン

だ。僕にとっては国内発売に最初から全面的に関わった思い出深い作品になる。EMIのリミックス・プロジェクトと英ワーナー映画／DVDの5.1chサラウンド化が協調して進み（エンジニアはアビイ・ロード・スタジオのピーター・コビン）、プレミア上映の行なわれたリヴァプールの街は世界中からのファンはもちろん、コピー・バンドや4人のそっくりさんで溢れ返っていた。

それにしても『イエロー・サブマリン』で5.1ch化とは、ビートルズ史には結局ムダやムリがない。この先進的なアニメは、サラウンドな音響を30年間待っていたのだ。プレミアを見ながらそう思った。そしてこの成功と経験が、7年後のレヴュー『LOVE』のラスヴェガスの円形劇場の発想に繋がってもいると思う。

ちなみにこの時、テーマ曲〈イエロー・サブマリン〉にもはや刺激は残されていないだろうと考え、ここぞとばかり一般には知られていないジョンの名ロックンロール〈ヘイ・ブルドッグ〉を僕らはラジオ・キャンペーンの先頭に立てたが、それなりに奏効したと思う。

21世紀ビートルズへのプロローグ『1』

そして2000年代最初の年（にして20世紀最後の年）、『1』が登場する。初の1枚物オールタイム・ベストは大歓迎だったが、一瞬いくつ

かの不安がよぎった。ヴィジュアルはどうするのか? 写真を使用するとして、どの時期のビートルズに代表させるのか? ナンバーワン・シングル集と言うが、するとシングル・カットのない「サージェント・ペパーズ」からの曲はないのか? なぜか1位にならなかった〈ストロベリー・フィールズ〜〉抜きでいいのか? 発表順なら〈ラヴ・ミー・ドゥ〉に始まるが、地味ではないか?などなど。しかしニールの示してくれたジャケット案が、そうした不安を一瞬で払拭してくれた。

この時ニールは打ち合わせのため来日したが(66年の武道館以来?)、会議の席上、隣で何やらノートにスケッチしている。そして、「こんなデザインを考えているんだ」──『1』のジャケットの原案だった。ニールのスケッチのあまりに下手くそなこともあり最初はピンとこなかったが、いかに有効に活用すべきか、僕なりにその意味するべきところが次第にわかってきた。そう、これはディジタル時代の新しいビートルズの"国旗"なのだ(国境のない世界を歌う〈イマジン〉の精神に反するとか言わないでね)。

レコード会社というのは宣伝用に実に様々なノベルティ・グッズを作るものだが、旗を作った記憶は他にない。僕らは新ビートルズ時代の大中小の"国旗"をつくり、放送局や新聞社、出版社、CD店など同盟国、友好国の壁に掲げて貰った。"国歌"はもちろん〈レット・イット・ビー〉だ。個人的にはあまり好む曲ではないけれど、やはり一般に膾炙

CamScannerでスキャン

しており、さらに広がる可能性がある曲が"国歌"には望ましい。ニールの許可を得て〈レット・イット・ビー〉単曲入りのラジオ・プロモーションCDを1,000枚プレスし放送局に配布したが、日本独自のプロモ盤は極めて珍しいことだった。街に出回ることは稀だと思うので、中古盤を見かけたらゲットおすすめ！ （2018年7月号）

〈レット・イット・ビー〉プロモーションCD

CamScannerでスキャン

29 ビートルズ後のビートルズ　その5

『ザ・ビートルズ1』の主張

妙な言い方だが、『イエロー・サブマリン～ソングトラック～』(1999年) は『イエロー・サブマリン』なのによく売れた。30万枚を超えたと思う。そして、ビートルズのCD1枚ものオールタイム・ベスト盤の“アイディア”もすでに内々で浮上していた。

ベスト盤なんて本来“アイディア”ですらないし、しかもビートルズの場合は30年近くに亘って君臨する『赤盤』『青盤』(1973年) がある。これらとのなんらかの差別、新たな主張がなければ、“最新ベスト”もヒット曲の安売り叩き売りになりかねない。ニール・アスピノールのアップルが出した結論はこうだ。―― 英米チャートでナンバー1を記録した曲（公式213曲の1割を超える27曲）を発表順に並べる。なるほど恣意性はなく客観的でわかりやすい。しかるにちょっとしたファンなら、この“客観性”の綻びがたちどころにわかる、とは前にも書いた。名実ともに最高傑作『サージェント・ペパーズ～』(1967年) には、シングル・ヒット以前に世界的にシングル・カットがないのだ。それにジャケット・デザインはどうするの？

CamScannerでスキャン

ビートルズはヴィジュアル的にもサウンド的にも前後期で大きく変化・進化したバンドだが、『赤盤』『青盤』のジャケットはうまく出来ている。『赤盤』はデビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』(1963年)の写真の別テイクで、マンチェスター・スクエアのEMI本社ビル吹抜けの2階バルコニーに4人が並んでいる。『青盤』はその6年後の4人を同じ場所に並べたものだ。これら一見まったくの別バンドのどの表情を強調するのか。あるいはどう統合するのか。ベスト盤には文字だけのデザインもありがちだが、既にビートルズには究極の白ジャケ盤『ホワイト・アルバム』もあるしな。

そんな風に考えていたところに、来日中のニールが拙いスケッチを書いてくれたことは前回触れた。あまりに下手くそで最初はなんだかわからなかったことも。しかし眺めているうち、画像の意味するところ主張するところが焦点を結び始めた。必要なのはジャケットではなくシンボルなのだ。これまでの、そしてこれからのビートルズを表現するための。

発売の日、僕らは新しいビートルズの国旗を各所に揚げ、"国歌"〈レット・イット・ビー〉を可能な限り流した。渋谷ではタワー・レコードに大きな旗を据え、代々木公園からは赤地に黄色で「1」と大書した赤い風船を大量に飛ばした。「1」のタイトルは、まさしく0-1ディジタル時代のシンボルとしても相応しかった。

CamScannerでスキャン

女性と時代がリード

『1』は国内で最終的に300万売れた。それ以前の作品と桁違いの数字だが、新世紀を目前にして（2000年11月11日発売）、JK＝女子高生から主婦まで女性層がこれまでになく参加してくれたのは大きかった。思えばビートルズは主に男の文化であったと思う。少なくとも、ライヴを止めてスタジオ活動に専念してから（『青盤』の時代）はそうだ。しかし変化のこの時代、東芝EMIのビートルズ国内盤制作・宣伝のリーダーは、それぞれ女性が担当していた。制作が『アンソロジー』DVD以来の藤村美智子さん、宣伝が転職初年度の深澤伊津子さんだ。ともに青山学院出身、ともにNY留学経験があり、ともに個性的な美女である。何がとは言わないが（言えないが）、300万枚を実現した要素には、女性ならではのナイーヴな感性が世に伝えたものも多々あったと思う。

今回ふたりに短い質問を試みたところ、藤村さんのビートルズとの出会いは『赤・青盤』のCD（1993年）、この1曲は〈イン・マイ・ライフ〉とある種典型的だが、深澤さんは高校の男友達から貰った自家製カセットのジョン・レノン曲集で出会い、お気に入りは共にポール作の〈ブラックバード〉〈ヘルター・スケルター〉と二重に屈折している。

〈イン・マイ・ライフ〉は今やビートルズのベスト10級の人気曲に育っ

CamScannerでスキャン

だが、往時のシングル・ヒットではない。世界に（あらためて）広めたのは「赤盤」ではないか。2000年、木村拓哉さんが「SMAP×SMAP」（フジテレビ系）のビートルズ特集で「一番好きなビートルズ」と言って歌っていたことを思い出す（以下次号）。　（2018年8月号）

CamScannerでスキャン

30 ビートルズ後のビートルズ その6

『ゲット・バック』へ帰れ

『ザ・ビートルズ1』(2000年)は国内で300万枚を越えて売れ、今なお断トツで日本で一番売れたビートルズだ。英米のナンバー1ヒットばかり27曲詰まっているのだから当然だろうという声も聞こえてきそうだが、そんなことはない。英米は共に『サージェント・ペパーズ〜』(1967年)が『1』を上回っている。シングル・ヒットどころかシングル・カットもない対照的な作品だが、レコード文化の節目に聳え立つ傑作だ。

日本は「『サージェント・ペパーズ〜』後進国」とは以前にも書いた。『1』に続いて『赤青盤』『レット・イット・ビー』『ホワイト・アルバム』『アビイ・ロード』、その後にようやく『サージェント・ペパーズ〜』という辺りが日本のビートルズ・アルバム・セールス・ランキングではなかったかと思う。発表50周年の2017年を経て少しは成長したかもしれないが、まだまだ頑張らんといかん日本の『サージェント・ペパーズ〜』。一方にシングル(曲)、もう一方にアルバム(世界)あってこそのビートルズだ。デジタルの単曲配信がいかに進もうとこれは変わらないし、現在のいかなる一流アーティストに関しても同様だと思う。真に一流ならばだが。

CamScannerでスキャン

さて、20世紀最後（にして2000年代最初）の「1」に続く21世紀最初のビートルズは、『レット・イット・ビー…ネイキッド』（2003年）だ。そもそもの『レット・イット・ビー』（1970年）は、「ムカシのようにバンドで一発録音しよう」というジョンとポールの合意に始まった「ゲット・バック」セッションだがまとまらず、結局フィル・スペクターが装飾に装飾を加えて仕上げている。後から知らされたポールは激怒したというが、オーケストラを足した〈レット・イット・ビー〉や〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉（ともにポール作の名バラード）など、これはこれという感じでは。そもそもスタンダード系列の曲だから、着飾ると似合うんだよね。

ともあれ、フィルの過剰な装飾を外して裸にした本来の『レット・イット・ビー』（つまりありのままの「ゲット・バック・セッション」）というわけだが、ならば『ゲット・バック』に“戻る”ことをより明確なテーマにしてほしくはあった。結局〈レット・イット・ビー〉人気の高い日本でも、発売当初は猛烈なダッシュを見せたが、ロング・セラーにも定番にもなることは出来なかった。フィルの着せた華麗なドレスを剥ぐことに、誰もが必ずしも前向きではなかったのだ。マニアにも、幻の『ゲット・バック』の“完成形”（のひとつ）として届けた方がさらに受け入れられたのではないか。“ゲット・バック・トゥ・ゲット・バック”だ。

CamScannerでスキャン

“最新作”『LOVE』

そして2000年代の第2作、『LOVE』(2006年)が登場する。英EMIのプレス・リリースのヘッドコピーには、『〜ネイキッド』、本作ともに(あるいは前者だけだったかも)“The Beatles - A Brand New Album”とあったように記憶するが、前者は別ヴァージョン集であり、“5人目以上のビートルズ”ジョージ・マーティンが(息子ジャイルズとともに)120曲!のマルチ・トラックの隅々まで辿って再構築した『LOVE』こそ“21世紀の最新作”と呼ぶに相応しい。オビや広告には、シンプルに「ザ・ビートルズ、最新作」と直訳を入れたが、これに茶々を入れるライターがいたのには驚いた。「ビートルズが誰も制作に関わっていないのに云々」。何を言う。ジョージ・マーティンが統括しているではないか。

ビートルズの歴史はいくつもの奇跡の出会いに充ちているが、先鋭的にして大衆的という稀有な存在に育つには、マーティンは不可欠以上であったと思う。マーティンの楽理の知識とクラシックの素養、これを好奇心と共に受け入れたビートルズ、そしてポール・マッカートニーがロックンロールの一方で強い関心を寄せていたと思われるアメリカン・スタンダード。これらの要素がさまざまに作用して、先鋭的で大衆的で時にホーム・ミュージック的でさえある、というビートルズのワン&オ

「LOVE」通常盤CD

「LOVE」特別盤

ンリーの音楽は出来上がったのではないか。

(2018年9月)

31 ビートルズ後のビートルズ　その7

ニール・アスピノール最後の仕事

『LOVE』(2006年) は21世紀のビートルズの"最新作"だ。もともとシルク・ドゥ・ソレイユのラスヴェガスのショー (2006年〜) のサントラとして制作されたものだが、立派に自立した音楽作品になっている。ジョージ・マーティンが約120曲のマルチ・トラックにまで戻って紡ぎ出した、これはビートルズという絢爛(けんらん)たる音の織物だ。ショー自体も立派なもので、ミラージュ (ホテル) は客席数2,000席以上、各席毎のものを含めて6,000以上のスピーカーを備えた専用の円形劇場を新設した(2020年春現在も続演中だが、いい座席を確保するのは難しい)。

ちなみにミラージュの正面玄関前には人工の火山があって、一定時間ごとに噴火する。ヴェガスには水の都ヴェニスを再現したヴェネチアンもあれば、ピラミッド型のルクソールもある。ジェット・コースターはマンハッタンのビル群の谷間を駆け抜け、また超高層ビルの屋上を走る。一流のショーやこうしたアトラクションが街全体を巨大な遊園地にし、だからこそ家族連れやレジャー客が集まってくるわけで、カジノOKだからIR (統合型リゾート) ね、と言って済むほど簡単な話ではな

CamScannerでスキャン

い。どうも今回のカジノ法案（2018年7月20日成立）は合法ギャンブルの是非ばかりに話が行っているようで、今ひとつリアリティがないんだよな。閑古鳥の鳴くパチンコ屋ほど寂しい物はないもんね。政府は人工火山や円形劇場も頑張って誘致するように。

『LOVE』は結局ニール・アスピノールの最後の仕事になった。病を得て2007年4月引退、渡米して闘病を続けるが2008年3月23日、還らぬ人となった。享年66、在職中から検討や調整を重ねていたであろう英国オリジナル・アルバムの初CD化（1987〜88年）以来のリマスター（2009年）を耳にすることは出来なかった。とりわけ90年代以降の『アンソロジー』『1』『レット・イット・ビー…ネイキッド』『LOVE』といった解散後のビートルズの"大技"は、ニールがいたからこそ実現したと僕は思っている。ポール、リンゴ、ヨーコ、ジョージ（後にオリヴィア）という4人の強烈なアップル・レコード経営陣の意見をまとめるに際しては、ハイスクール時代に始まる半世紀の交流あればこそという場面も少なくはなかったろうと想像できるので。ニールはリヴァプール・インスティチュート以来、同窓のポール、ジョージと交流があった。

9-9-9の213曲カウントダウン

CDの登場以来ディジタル・サウンドは改良が重ねられてきたが、ビ

CamScannerでスキャン

ートルズは初CD化も慌てなかったし、2000年前後の"リマスター・ラッシュ"にも同調しなかった。全タイトルの改訂版が発表されたのは、ようやく2009年9月9日のことだ。僕らEMIミュージック・ジャパンはこの日"9-9-9"に向けてサイト上で全213曲の人気投票を実施、当日は赤坂BLITZ（現マイナビBLITZ赤坂）にファンをご招待し、集票結果をカウントダウンした。確か朝10時に始めて、トップの〈レット・イット・ビー〉が流れたのは19時半を過ぎていたと記憶する。なんでえ、やっぱ〈レット・イット・ビー〉かよ、とは僕も思ったが、26万人（複数回答できたと思うので、正しくは26万票）を集めた、目下のところ日本最大のビートルズ楽曲人気ランキングではある。以下にボトム5とトップ5のみ記しておくと――。

（213〜209位）

213　ハニー・ドント

212　マッチボックス

211　みんないい娘

210　シー・ラヴズ・ユー（ドイツ語版）

209　消えた恋

ドイツ語版が軽視されるのは仕方ないとして、なんとボトム3はすべ

「カウントダウン ザ・ビートルズ213」サイト

CamScannerでスキャン

てビートルズ最大のアイドルとも言われるカール・パーキンス絡みの曲ではないか！ うちボトム2を含め、リンゴの歌が3曲入っている。逸る気持ちで『ラバー・ソウル』（1965年）をB面に裏返した当時のファンの昂（たかぶ）りを一気に醒ました（かも知れない）209位はまあ仕方がないとして、212位、213位などリンゴのベストと思うが。〈オクトパス・ガーデン〉がお気に入りの皆さん、是非こういうリンゴも愛して下さいね。

一方のトップ5は以下の通りだが、〈イン・マイ・ライフ〉がなぜこんなに人気なんだよ、という疑問を含め、次回検討を加えてみたい。

（5〜1位）

5 ストロベリー・フィールズ・フォーエバー

4 ヘルプ！

3 ヘイ・ジュード

2 イン・マイ・ライフ

1 レット・イット・ビー

（2018年10月号）

CamScannerでスキャン

32 〈イン・マイ・ライフ〉問題

世界的人気の〈イン・マイ・ライフ〉

前回は、1987年の初CD化以来のリマスターCD発売時にEMIミュージック・ジャパンが実施した26万人アンケート、ビートルズ213曲人気ランキングのトップ5を最後に掲載させていただいた。

発売日の9－9－9、すなわち2009年9月9日に結果発表したものだ。そしてこう書いた。「〈イン・マイ・ライフ〉がどうしてこんなに人気なんだよ」。1位〈レット・イット・ビー〉に続いて2位だったのだ。

実はこのアンケートには続編がある。リマスター版で新たにファンになった方々、久々に戻ってきた方々のご意見が知りたくて、年末まであらためて投票を募ったのだ。以下が2010年1月1日発表の、発売後投票ベスト10だ。9月9日の順位を左の○数字で示している。

①＝1位　レット・イット・ビー
②＝2位　イン・マイ・ライフ
⑤↗3位　ストロベリー・フィールズ・フォーエバー
⑥↗4位　ア・デイ・イン・ザ・ライフ

CamScannerでスキャン

③↘5位　ヘイ・ジュード
⑩↗6位　ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス
⑨↗7位　サムシング
⑪↗8位　アクロス・ザ・ユニバース
⑧↘9位　イエスタデイ
㉓↗10位　アイ・アム・ザ・ウォルラス

総体的にポール系の作品（5位、9位）が値切られ、ジョン系（3位、4位、8位、10位）とジョージ（6位、7位）の作品がアップしている。とりわけ〈アイ・アム・ザ・ウォルラス〉は23位から10位へ赤丸急上昇だ。『マジカル・ミステリー・ツアー』（1967年）でこの曲を聴いた高校1年の時、曲調、構成はもとより、奇妙な歌詞に魅かれてクラスの仲間で回覧していたノートに訳詞を載せた記憶がある。それにしても10位はすげえ。時代は進むのだ。

おっと、テーマは〈イン・マイ・ライフ〉だった。不動の〈レット・イット・ビー〉に続いて、今回もやはり2位なのだ。率直に言って『ラバー・ソウル』（1965年）の全14曲中6番目くらいの曲だったぞ僕には。メロディがビートルズにしては今ひとつ流れていないし、タイトルが似ていた同時期のアニマルズの〈イッツ・マイ・ライフ〉（1965年）の方がずっと好きだった。木村拓哉がフジテレビ系の「スマスマ」でビートルズの

No.1に挙げて歌ったと前に書いたけれど、それが主たる理由ではない。だって欧米でも予想をはるかに上回る人気なのだ、〈イン・マイ・ライフ〉。2010年に米ローリング・ストーン誌が選んだオールタイム500の23位（ビートルズ中5位）、カナダ放送協会の選ぶ50曲の2位、英NME誌のサイトのミュージシャンが選ぶビートルズ50（2015年）の12位などなど。

その魅力はどこに？

仮説はこうだ。投票者の多くは73年のベスト盤『赤盤』でこの曲と出会ったのだ。『ラバー・ソウル』で聴くよりはるかに際立って聞こえそうではないか。といって、前後は『ラバー・ソウル』からの2大ラヴ・バラード、ポールの〈ミッシェル〉とジョンの〈ガール〉なのだが。当時この2曲はラジオでガンガンかかっていたが、〈イン・マイ・ライフ〉（ジョン作ともポール作とも言われる）を聴いた記憶はないぞ。いずれも英米でシングル・カットされてはいないが、シャンソン風の〈ミッシェル〉は67年度グラミー賞のソング・オブ・ジ・イヤーにも輝いている。しかし後年の耳には軟弱とも聞こえる2曲の間で得をしたのではないか、〈イン・マイ・ライフ〉。実際、『赤盤』CD（1993年）でビートルズと出会ったという藤村美智子さん（『ザ・ビートルズ1』、999リマスター・シリーズ他担当

CamScannerでスキャン

者）は、お気に入りは〈イン・マイ・ライフ〉と言っていた。なんでかと聞いてみたら「だっていい曲じゃないですか」。

他にも〈イン・マイ・ライフ〉信者の数人を取材してみたが、「叙情的なところがいい」という答えもあった。誰もが必ず挙げるのが、間奏のバロック風のキーボードの素晴らしさだが、ジョージ・マーティンが弾いたピアノを倍速で再生したものだ。ここにもまた"5人目以上のビートルズ"にして大衆化の立役者、ジョージ・マーティンの確かな存在感が（以下次号）。

（2018年11月号）

33 ポールとアメリカン・スタンダード

“ポール・マッカートニー・ジャズ”とは？

前回に続いて「〈イン・マイ・ライフ〉の人気過剰問題を考えるつもりでしたが、予定変更です。ポール・マッカートニー5年ぶりの新譜『エジプト・ステーション』が『タッグ・オブ・ウォー』(1982年) 以来の全米アルバム・チャートNo.1獲得、〈ハンド・イン・ハンド〉なんて、往年を思わせるいい曲だしね。そして10月末には昨春に続く来日公演と、世の中は急激にポール化しているので。

2014年春からJFN系全国ネットの生放送「A・O・R」毎週火曜日第2部20〜21時の「ジャズ&ヴォーカル・ナイト」の選曲とトークを担当している。ここしばらくは健康上の都合で出演を断念せざるを得ずプロデューサーという立場をご厚意でいただいているが、それとなんの関係があるのかというと、ポールいいではないか、10月初週（10/2）に「ポール・マッカートニー・ジャズ」特集で現場復帰しようではないか、そう思ったのだ。誰もご存じないと思うが「本籍地ビートルズ、現住所ジャズ」を自認してきた僕にぴったりではないか。

過去、番組で「ビートルズ・ジャズ」は幾度か特集している。僕の考える代表的ジャズ・カヴァーはもちろんウェス・モンゴメリー〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉だ。1967年『サージェント・ペパーズ』発売間もなくウェスが発表したジャズ・ギター版で、前にも書いたかもしれないが、今や僕には本家の長いエンディングにオーヴァーラップして、ウェス版のグルーヴィなイントロが浮かび上がってくる。

ただし〈ア・デイ〜〉の主たる作者はジョン・レノンということがあり、これまで「ポール・マッカートニー・ジャズ」という発想は僕には生まれてこなかった。ビートルズ中、というか当時のブリティッシュ・ビート勢

中、最もジャズ（というかアメリカン・スタンダード）に近い感性を持っていたのはポールなのにね！ ここはアーヴィング・バーリンやコール・ポーターやリチャード・ロジャースらティン・パン・アリー（ニューヨークの楽譜店街）のスター作曲家たちの系譜に連なるメロディ・メイカーとしてのポール・マッカートニーにスポットを当ててみようではないか。これは意外に新鮮な企画なのではないか。

「ポール・マッカートニー・ジャズ」10曲

そう思って選曲したのが以下の10曲だ。

まず10月の番組テーマは①〈イエスタデイ〉に。〈ザ・サイドワインダー〉などでロック・ファンにもおなじみ（のはず）のリー・モーガンの名トランペット演奏だ。続く②〜⑤はすべてポール自身が歌い、あるいは演奏する。②〈ハンド・イン・ハンド〉は前述の最新曲。③〈レッツ・ラヴ〉は1972年、ポールが大ポピュラー歌手ペギー・リーにプレゼントした1曲で、ペギーが歌いポールがピアノを弾く。既にスタンダードの風格がある。1957年のブロードウェイ・ミュージカル曲〈ティル・ゼア・ウォズ・ユー〉を、1963年にビートルズがポールの歌でセカンド・アルバムに録音した時、参考にしたのがペギー1961年のヴァージョンだったという。④〈マイ・ヴァレンタイン〉⑤〈バイ・バイ・ブラックバード〉は、ともに2012年のポールのスタンダード・アルバム『キス・オン・ザ・ボトム』（意味は「愛を込めて筆をおく」）より。前者は既にジャズメンも取り上げているオリジナル、後者は1920年代のポピュラー・ヒットだ。

残る5曲はすべてジャズの名手たちがポールの楽曲を演奏したもの。あらためて（ジャズ演奏の）素材としてのポールの楽曲の素晴らしさを確認していただければと思って選んだ。⑤との関連性は分からないが、⑥〈ブラックバード〉は『ホワイト・アルバム』（1968年）中の1曲。マイルス・デイヴィス（トランペット）の名ドラマーだったトニー・ウィリア

ムスが自己のクインテットでこの曲を取り上げた時（1991年）はやや意外だったが、今やジャズメンに最も人気の高いビートルズ・ナンバーの1曲かも。シャンソン的ともいえる⑦〈ミッシェル〉は女王サラ・ヴォーン1966年の歌で。『アビイ・ロード』発表間もなく録音された⑧〈ゴールデン・スランバーズ〜ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー〉の"B面メドレー"（1970年）は後の売れっ子、ジョージ・ベンソンがギターと歌で聴かせる。同じく70年代フュージョンの人気者スタンリー・タレンタイン（テナー・サックス）が『ハード・デイズ・ナイト』（1964年）の年に録音した⑨〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉は、こうして聴くとしっかりジャズ・ナンバーではないか。リズム・セクションのマッコイ・タイナー（ピアノ）とエルヴィン・ジョーンズ（ドラムス）は、当時無敵のジョン・コルトレーン（サックス）・カルテットのレギュラーだ。そして、現在最も人気あるピアニストのひとりブラッド・メルドーは2016年の⑩〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉他、好んでポールのナンバーを取り上げている。

ベスト10と収録アルバム

①〈イエスタデイ〉リー・モーガン『デライトフリー』（1966年／ブルーノート）
②〈ハンド・イン・ハンド〉ポール・マッカートニー『エジプト・ステーション』（2018年／ユニバーサル）
③〈レッツ・ラヴ〉ペギー・リー『レッツ・ラヴ』（1974年／アトランティック）

『デライトフリー』
リー・モーガン
（1966年／ブルーノート）

『エジプト・ステーション』
ポール・マッカートニー
（2018年／ユニバーサル）

『レッツ・ラヴ』
ペギー・リー
（1974年／アトランティック）

④〈マイ・ヴァレンタイン〉ポール・マッカートニー「キス・オン・ザ・ボトム」(2012年／コンコード)

⑤〈バイ・バイ・ブラックバード〉ポール・マッカートニー（同上）

⑥〈ブラックバード〉トニー・ウィリアムス「ネプチューンの神話 The Story Of Neptune」(1991年／ブルーノート)

⑦〈ミッシェル〉サラ・ヴォーン「ザ・ニュー・シーン」(1966年／マーキュリー)

⑧〈ゴールデン・スランバーズ〜ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー〉ジョージ・ベンソン「アビイ・ロード」(1970 年／A&M/CTI)

⑨〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉スタンリー・タレンタイン「ミスター・ナチュラル」(1964年／ブルーノート)

⑩〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉ブラッド・メルドー「ブルース・アンド・バラッズ」(2016年／ワーナー)

さて番組の反響はどうだったかと言うと、実は前日発熱してドクター・ストップがかかってしまったのだ。急遽ピンチヒッターを務めてくれた坂本涼子さん（ディスクユニオンのジャズ・プロデューサー）は冒頭、「楽しみにしていたのに熱出しちゃって」と僕の欠席を弁明してくれたが、「坂本さんが行方を子供扱いしているのがおかしかった」というのが手元に届いたご意見の最大公約数です。　（2018年12月号）

「キス・オン・ザ・ボトム」
ポール・マッカートニー
(2012 年／コンコード)

「ネプチューンの神話」
トニー・ウィリアムス
(1992 年／ブルーノート)

「アビイ・ロード」
ジョージ・ベンソン
(1970 年　A&M/CTI)

34 ジャズ書とビートルズ

再び〈イン・マイ・ライフ〉

第32回に続いて〈イン・マイ・ライフ〉問題を追及したい。ってはどの問題かよ、という声も聞こえてきますが、僕にはやはり解せないのだ。32回に書いたように、〈イン・マイ・ライフ〉は日本のビートルズ213曲人気ランキング（2009年の26万人アンケート）で〈レット・イット・ビー〉に続いて2位だったし、昨今の世界の同様のランキングでも必ず上位に位置している。

どうしてだよ。『ラバー・ソウル』の主役に遠い曲だったぞ。66年の発売当時も仲間内で話題にならなかったし、ラジオでもかからなかった。僕の周囲の関係者や音楽ファンに質問をぶつけてみても、「いい曲ですよねー」というのが大多数（と言うほど聞いていないが）の回答で、誰も僕のギモンに賛同してくれない。「いい曲」なのは僕でもわが家の犬でもわかる。しかしビートルズ213曲の2位かよ。100万歩譲っても〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉や〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉より上では困る。そうだ、ここは専門家の意見を学ぼう。

ということで『ランキング！ ザ・ビートルズ』（2013年／シンコーミュー

『ランキング！ ザ・ビートルズ』
（2013年／シンコーミュージック・エンタテイメント）

ジック)という本を思い出した。これには「日本のビートルズ"達人"100人のお気に入り」というアンケートが載っている。さて楽曲部門の結果はと言うと、(ジャーン!) 1位〈ア・デイ〜〉、2位〈ストロベリー〜〉。おお、さすが達人100人と思いきや、3位に〈イン・マイ・ライフ〉がいる。上位に入れた達人たちのコメントを読んでも基本「だっていい曲じゃん」以上の言葉はない。本当に達人かよ。別に「人生の最後に聴きたいビートルズ」というアンケートもあって、こちらは堂々の1位だ。なるほどこれならまだわからないではない。若き日を振り返る想定で若き日のジョンが書いた詞と曲(ビートルズってこういうの多いよね。ポール作という説もあるが、ジョンだと思う)には、そう思って聴くとこれ以上はない詩情や哀感がある。もしかしたら、ある時期のファンには、ジョンの非運の死とこの曲が重なり合っているのかもしれない。

とはいえ、213曲中の3位はないんじゃないの。大丈夫かビートルズ達人。なんとかしてくれ、ビートルズのシンコーミュージック。

ジャズ書中のビートルズ3冊

以上がなんだか長いマクラのようになってしまいましたが、そのシンコーミュージックから2018年11月に新著を出した。「ジャズは本棚に在り　ジャズ書と名盤」はジャズの名著、奇書、珍本92冊及び周囲のジ

ャズ本を取り上げ、同時に関連の名盤を紹介するもので、生きたジャズが身に付きます。類書もないし手に取ってみてくださいね。と言うか、何を隠そう（隠してないが）、92冊中3冊はビートルズ本なのだ。僕のような「本籍地ビートルズ、現住所ジャズ」という期間が長い人間は、ビートルズ抜きにジャズは語れないのだ。通読していただければ嬉しいけれど、ここではその3冊を簡単にご紹介させていただく。

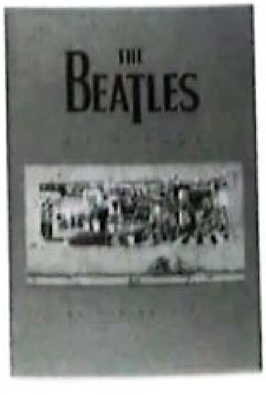
☆『ヒットチャートの魔術師　レコード・ビジネスの世界』高嶋弘之（1981年／紀尾井書房）

日本初アルバム『ビートルズ!』発売50周年の2014年に「『ビートルズ!』をつくった男　レコード・ビジネスへ愛をこめて」（DU BOOKS）として復刊。「ザ・ビートルズをつくった男」（1992年／新潮文庫）はブライアン・エプスタインだが、日本編集のアルバム『ビートルズ!』を作ったのは高嶋さん（当時東芝音楽工業）だ。ジャズも何もかも、僕らの世代の音楽はここから始まったのだ。

☆『The Beatlesアンソロジー』ポール・マッカートニーほか著、ニール・アスピノール統括、ザ・ビートルズ・クラブ翻訳、斉藤早苗監修（2000年／リットーミュージック）

同タイトルの映像作品（1995年）の重量級書籍版。「ビートルズ自

「ヒットチャートの魔術師
レコード・ビジネスの世界」
高嶋弘之
（1981年／紀尾井書房）



「The Beatles アンソロジー」
ポール・マッカートニーほか著、
ニール・アスピノール統括、
ザ・ビートルズ・クラブ翻訳、
斉藤早苗監修
（2000年／リットーミュージック）

CamScannerでスキャン

身によって記された初のビートルズ・ヒストリー」。アルバム「ザ・ビートルズ1」と前後して出たニール・アスピノールのもうひとつの大仕事だ。なぜレノン＝マッカートニーは連名で作曲したのか。僕はビートルズ（ポール）の曲とアメリカン・スタンダードの親和性をこの本で納得した。（〈イン・マイ・ライフ〉問題はともかく）実になんでも載っている本。

☆「ジャズ批評」193号（特集：ジャズファンが愛するビートルズ&ビートルズ・ジャズ）（2016年／ジャズ批評社）

読者や批評家のアンケートを集計したビートルズのジャズ・カヴァー・ランキングを掲載。ビートルズ・ファンとジャズを最初に繋いだのは、ウェス・モンゴメリー「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」（1967年）だった。逆に、この時ビートルズを認知したジャズ・ファン諸兄も少なくなかったと思うが。

（2019年1月号）

「ジャズ批評」193号
（特集：ジャズファンが愛するビートルズ&ビートルズ・ジャズ）
（2016年／ジャズ批評社）

35 イントロを考える

新年にビートルズのイントロを思う

2019年だ。1968年、スタンリー・キューブリックとアーサー・C・クラークの『2001年宇宙の旅 2001:A Space Odyssey』(MGM)に驚愕していた高校生には、こんな西暦が実際に訪れようとはまったく実感できなかったぞ、と考えてからさらに18年経つ。それにしても太陽系を鳥瞰(でいいのか? 鳥いないが)した日食の映像といい、これに被さるリヒャルト・シュトラウスの〈ツァラトゥストラはかく語りき〉の迫力といい、イントロから心を鷲掴みにする映画だった。新しい元号が始まる年の年初でもあり、今回はビートルズのイントロを語ってみたい。僕らは〈抱きしめたい〉のあのギター・イントロにいきなり心を鷲掴みにされたのだ。

〈アイ・フィール・ファイン〉のギター・イントロには驚いた。(ベンチャーズのテケテケテケはともかく)エフェクトのことなどまだよく知らない頃で、あの「ビヨーン」がいかに生まれているのか、まったく見当もつかなかったのだ。これより前の〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉のジャーンなどはギターの音ともわからず、いったいなんの楽器なのだと友人と首を

「『2001年宇宙の旅』オリジナル・サウンドトラック」
(1968年/ソニー)

CamScannerでスキャン

ひねったものだ。ギターの"いきなり一発"の後、前者は魅力的なリフが続くが後者はヴォーカルに突入する。

ギター・リフのイントロでは〈デイ・トリッパー〉など印象的だが、この分野ではローリング・ストーンズ〈サティスファクション〉や〈黒く塗れ〉、キンクス〈オール・オブ・ザ・ナイト〉系の作品に何歩か譲る気がする。ビートルズの得意技は、むしろ"いきなりヴォーカル"ではないか。ドラムス1拍半の直後"シー・ラヴズ・ユー"と歌が始まった時は「おおっ」と前のめりになった。いきなり"キャント・バイ・ミー・ラヴ"には45度まで傾いた。アルバム『ビートルズ・フォー・セール('65)』を発売日に買ってきて1曲目に針を下ろすなり"This happened once before"と〈ノー・リプライ〉が歌から始まった時は、前のめりにバタッと倒れた。『ラバー・ソウル』の〈ガール〉や『リボルバー』の〈アイム・オンリー・スリーピング〉〈フォー・ノー・ワン〉も"いきなりヴォーカル"の傑作だ。

加えて「1枚、2枚、3枚」の札束勘定で始まる〈タックスマン〉とか「シュッ」と忍者ごっこのごとき〈カム・トゥゲザー〉とかもあり、"いきなり肉声"はビートルズの特徴のひとつだ。会ったとたんに友達になったような親しさが生まれるし(生まれるよね?)、これも他と一線を画すビートルズの広い人気の一因ではないか。

〈プリーズ・プリーズ・ミー〉や〈恋する二人〉のハーモニカ・イントロもあるけれど、これはまあこれでいいと言うか。ただし英デッカの担当

者はハーモニカが嫌いでビートルズをオーディションで落としたという話を聞いたような気がするが、本当ならバカな話だ。とりわけユニークな（思えばビートルズならではの）イントロはやはり〈愛こそはすべて〉のフランス国歌ではないか。1967年夏の早朝、最初の世界同時中継「アワ・ワールド」*でブラウン管からこの誇らしげな革命歌（とその時は知らなかったけれど）が流れてきた時は、なんだか自分が偉くなったような気持ちになったものだ。

ビートルズのイントロ BEST3

というわけで勝手ながらビートルズのイントロBEST3（インパクト含む）を挙げさせていただくと、①〈ノー・リプライ〉②〈アイ・フィール・ファイン〉③〈愛こそはすべて〉ということになろうか。もちろんイントロだけいい曲なんて世の中に（多分）ないので、曲全体と重ねての評価ですが。

では逆にビートルズのベスト・エンディングは何か。これはもう何度も言うけれど（言ってないかな）〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉なんだよね。大作『サージェント・ペパーズ』はこの曲の長いフェイド・アウトとともに壮大な余韻を残して終わる。そして（きわめて個人的なものだが）僕の記憶の中ではそこにこの曲のウェス・モンゴメリーによるジャズ版の

＊番組の放送は1967年6月26日（月）3時55分〜6時3分。番組の正式名は「宇宙中継『われらの世界』—OUR WORLD—5大陸14か国を結ぶ〜」

グルーヴィなイントロがオーヴァーラップしてくるのだ。ということは何度も書いた気がするが、補足すると、僕の聴き込んでいた「サージェント〜」は米キャピトル盤で、（後でわかったのだが）B面最内周の〈インナー・グルーヴ〉がカットされている、ということも何度か書いたかな。テープを逆回転した数秒間の遊びのトラックだ。国内盤ではじきにフェイド・アウトし、英パーロフォン盤は針を上げるまで鳴り続ける。こちらで聴いていたらまた"記憶"も違っていただろうかも知れんが。

（2019年2月号）

CamScannerでスキャン

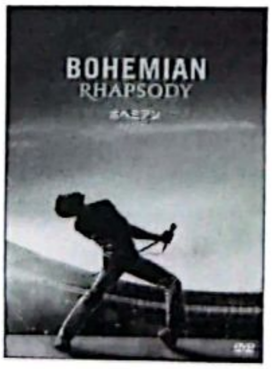
36 伝記映画

クイーンの伝記映画大ヒット中

クイーンの映画「ボヘミアン・ラプソディ」が大ヒットしている。世界的なもので、ゴールデングローブ賞の作品賞と主演男優賞に輝き、アカデミー賞も取る勢いなのだそうだ（本誌がお手元に届くくらいのタイミングで結果が出る*）。僕はようやく退院したばかりで人混みも厳禁なのでまだ観ていないが、友人知人の多くが「観た」「面白かった」「3度観た」などと言う。クイーンのドキュメンタリー映画とばかり思っていたが、なんと劇映画なのだ。なんでそんなものが大当たりするんだ。

僕は60年代ビートルズ世代に属し10年後のクイーンとは無縁だったが、1970年のビートルズ解散から数年後にミュージック・ライフ誌が出会った金の卵であることは知っていた。クイーンは、日本では女のコのアイドル・グループとしてスタートしたのだ（ビートルズもそうだったけれどね）。そしてそれが、世界最初の彼らの大成功だった。

僕がレコード業界＝東芝EMI（当時）に入社した1976年はクイーン人気が爆発した時期で、各所でフィルム・コンサートが開催されていた。様々なアーティストの映像を横断的に集めてホールで行なわれ



「ボヘミアン・ラプソディ」DVD
（2018年作品／20世紀フォックス）

＊2019年2月24日開催の第91回アカデミー賞では、5部門にノミネートされ、作品賞は逃したものの、主演男優賞、編集賞、録音賞、音響編集賞の最多4冠を獲得。

CamScannerでスキャン

た上映会だ。EMI原盤のクイーンは日本ではワーナーが発売していた(1984年から東芝EMI)。そのどこかで、僕は〈ボヘミアン・ラプソディ〉という曲を初めて聴いた。クラシックの要素が大いに入り込んでいて、(ピンク・フロイドの『原子心母』を初めて聴いた時と同じく)凄いロックもあるものだと思った。その頃はクイーンの評価は世界的になっていた。しかし40年後に伝記映画が大ヒットしようとは。なぜだ?

元東芝EMI(現ユニバーサルミュージック)の"クイーン"藤村美智子さんに電話取材を試みる。藤村さんはビートルズと同時にクイーンも担当していた。そしてクイーンのほうが明らかにホンネに近かったと思う。世代的にも容貌的にも性格的にも名前的にも"クイーン"だしね。僕らは彼女を美智子サマと呼んでいたのだ。

映画会社は音楽ものに後ろ向きというのが僕らの時代の常識だったが、美智子サマによれば一昨年公開の「ラ・ラ・ランド」や去年の「グレイテスト・ショーマン」などが大ヒットして、今や状況はまったく違うのだという。「ボヘミアン・ラプソディ」を配給した20世紀フォックスも最初から極めて前向きだったそうだが、これほど大ヒットするとはもちろん思っていなかった。「でもほんとうに面白いんですよ。クイーンのピークともいえるステージ、1985年のライヴ・エイドの20分(音楽はホンモノ)で終わるんですが、感動します。リピーターが多いです」

確かにクイーンの音楽はドラマティックでわかりやすい。クラシックに

もルーツがあるから一般性も高い。実は僕も1990年代半ばから美智子・サマと共にクイーンと深く関わった。僕の制作本部がEMIの全洋楽カタログを担当することになったのだ。アイスホッケーをテーマにした木村拓哉主演のドラマ「プライド」(フジテレビ系) がクイーンの〈ボーン・トゥ・ラヴ・ユー〉を主題歌に選び、挿入曲もすべてクイーンで揃えたのは15年前、2004年初頭のことだ。これに合わせて新たに編纂した日本独自のベスト盤『ジュエルズ』を僕らは大宣伝し、結果は150万枚を超える大ヒットとなった。あの頃はカラオケに行く度に最後は皆で〈ウィ・アー・ザ・チャンピオンズ (伝説のチャンピオン)〉を合唱したが、実に気持ちのよい時間であった。売れている真っ最中だしね。あらためてクイーンの音楽の動員力ある大衆性を実感し確認した日々でもあった。

ビートルズの伝記映画の可能性

とは言え、劇映画がこんなに当たるとは。ビートルズでこんなことは考えられなかったし、これからも (近い将来は) 考えにくい。それは多分、僕らがビートルズやビートルズの4人を知りすぎているからだ。「バック・ビート」(1994年) や「ノーウェアボーイ」(2009年、日本公開は翌2010年) は4人を役者が演じているけれど、ともに本格的デビュー前

CamScannerでスキャン

後、またはそれ以前のエピソードだ。モンティ・パイソンによるラトルズのテレビ映画「金こそはすべて」、なんてのはあったけれど、お笑いだから意味が違う。

「ボヘミアン・ラプソディ」はクイーン・ヒストリーの言わばクライマックスをマジに描いているが、同様の時期のビートルズ4人に別人が扮するなど、僕にはまったく想像がつかない。つまりビートルズ役の俳優が4人、アビイ・ロード・スタジオ前の横断歩道を渡ったりアップル・ビルの屋上で演奏したりするわけだけれど、どう思いますか？

しかし来る2020年は「レット・イット・ビー」公開とサントラ発売からちょうど50年、ということはビートルズ解散から半世紀だ。決定的な伝記映画を期待する気持ちもどこかにあるけれど、ちょっとムリだよなあ。そう思うのは僕だけだろうか。もしかしたらアップル内部ではすでに大企画が深く進行中なのかもしれないが。　　（2019年3月号）

CamScannerでスキャン

37 ルーフトップ・コンサート50周年

「レット・イット・ビー」改訂版

「クイーンの映画が当たったからビートルズも何かつくるらしいね」。久々に会った友人が何気なく言った。TVで朝知ったニュースだという。ビートルズの劇映画なんて当面あり得ないよね！── 前回そう書いたばかりだし気にはなったが、友人はそれ以上の情報も関心も持ち合わせていなかった。1月末のことだ。

そこでなんでもご存じの本誌（ザ・ビートルズ・クラブ会報）編集チーフ葉山さんに電話。「そんな動きあるのかな？」。「ルーフトップ・コンサートから50年の1月30日に「レット・イット・ビー」の新版を制作するという発表がありました。改訂版と言うより、膨大な映像素材からまったく新しい映画を創り出すというつもりのようです」

なるほど「レット・イット・ビー」は映画、CDとも1970年の公開で来年が50周年だが、それらが記録に残すアップル・ビル屋上のルーフトップ・コンサートはその前年のイヴェントになる。ビートルズが聴衆を前に行なった（約2年半ぶり）最後のコンサートからは、今年2019年がちょうど半世紀というわけだ。映画はグループの不和を伝えるところの多い

CamScannerでスキャン

ものだったが、新編の監督のピーター・ジャクソン（なんと「ロード・オブ・ザ・リング」の監督）によれば、残された55時間に及ぶ映像素材が伝えるのは、むしろ「4人が一緒に素晴らしい音楽を作る姿」だという。

メンバー間の不協和音や解散ムードを過度に強調しているという理由で、劇場公開後の旧「レット・イット・ビー」はVHS〜LD止まり（TV放映もあった）、いまだ正式にDVD化されたこともない（こんなのあり？というブートは多数出ているが）。僕がレコード会社でビートルズと深く関わっていた時代（1990年代後半〜2013年）にも、ボーナス映像付きの再公開やリストア版DVDの話は幾度か雑談には出たが、泡と消える以前に泡にもならなかった。誰も本気にはなれなかったということだろう。ただし、それが「レット・イット・ビー」の改訂である限り、である。しかし、同時期の素材からいかに異なる物語を生み出せるのか。

葉山チーフによれば、「当時のスタジオの雰囲気は険悪でも解散の予兆でもなかった」と最近ポールは語っているそうだ。新編の最後は、久々の公開ライヴに向けて「一緒に」準備を整えた4人が意気揚々とアップル・ビルの屋上に駆け上がって行き、ラスト・コンサートを繰り広げるのかな。ともあれ歴史にはいくつもの側面がある。旧「レット・イット・ビー」と新作にどんな隔たりがあるにせよ、どちらも“真実”ということか。

CamScannerでスキャン

旧アップル・ビルの下で

1999年の夏の終わり、僕は初めてリヴァプールを訪れた。ジョン、ポール、ジョージ、そしてちょっと遠いリンゴの生家をハイヤーで回り、クオリー高校の私学のように小ぎれいな佇まいに少々驚き、ペニー・レインの床屋の前の歩道に寝そべって写真を撮り、ストロベリー・フィールズ孤児院のフォーエバー感にしばし圧倒され、そこからしばらく坂を上がった教会の墓地のエリナー・リグビーの墓石をお参りした。夜はパブで無理矢理ハイサワーを作ってもらったが、これはビートルズと関係ない。折からのビートルズ・ウィークで街には見物客やコピー・バンドやそっくりさんが溢れ、ジョン・レノンのストリート演奏を聴いていると、隣に立って聴いているのも気づけばジョン・レノンという具合だった。この期間中に「イエロー・サブマリン」5.1chリストア版のワールド・プレミアがあり、僕らはチームを組んで取材と打ち合わせにやって来たのだ。

帰路ロンドンに立ち寄ったが、この際ルーフトップも取材しようということになった。今や雑居ビルとなっているメイフェア地区の旧アップル・ビルの了解をしかるべきルートで取り付け、当日出かけて行ったのは僕のほか、新聞、雑誌、TV、ラジオの関係者6～7名だったろうか。意外や閑静な街並の歩道に立ってビルの屋上を見上げ、当時の日

CamScannerでスキャン

撃者の気分を少々味わった後、いざ屋上へ。地上階の受付で取材許可は貰っていると伝えると、連絡は届いているが、しかし人数制限があるのだと言う。屋上に上がれるのは3〜4人ほどだったか。僕が団長の役割だが、じゃあまず僕ね、というわけには行かない。ヴィデオを含むカメラを優先して人選し、代表して撮影をお願いしたことを覚えている。

命がかかっているわけでもなんでもないが、何人かをエレベーターで送り出して階下に残った時には、沈没する船から乗客や乗組員を逃がし、最後に残る船長の気持ちをなぜか思ったりして。

(2019年4月号)

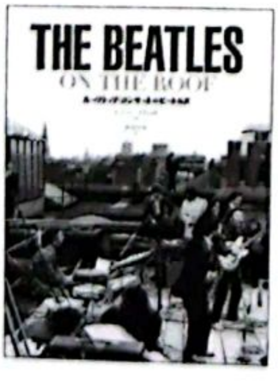
CamScannerでスキャン

38 さらにルーフトップ・コンサート

空からロックが降ってきた

1968年12月、アポロ8号は初めて人類を月の周回軌道に乗せ、翌69年の7月にはアポロ11号がついに人類を月面に立たせた。地球からの交信でニクソン大統領が「(この達成は)米国の誇りだ」と伝えると、ニール・アームストロング船長が「いいえ、人類の誇りです」と返す。おお、なんとバカな政治家、なんと感動的な宇宙飛行士。思えば50年前のあの頃は空ばかり見上げていた気がする。

この間にアポロ9(地球周回)も10(2度目の月周回)もあったわけだが、ロンドン、ウエストサイドの高級住宅地メイフェア地区の住人や通行人は、さらに69年1月30日の昼時、アップル・ビルの屋上も見上げなければならなかった。空から突然ロックが降ってきたのだ。今年邦訳の出た『ルーフトップ・コンサートのビートルズ』トニー・バレル・著/葛葉哲也・訳(2019年/DU BOOKS 原書は2017年刊『The Beatles On The Roof』)の登場人物欄には、このイヴェントを仕掛け準備した側、取材した側の関係者と並んで、「偶然聴いた人」12名の本名と素性や肩書が掲載されている。おそらくこの何倍もの数の市



「ルーフトップ・コンサートのビートルズ」
トニー・バレル・著
葛葉哲也・訳
(2019年/DU BOOKS)

井の目撃者が特定されているのだ。

当時8歳のヴィンセント・ランキン少年は祖母とレストランに向かう途中だったという。祖母が通行人に尋ね「ビートルズだよ、と教えてくれた」。驚嘆し大感激したファンもいれば、「えっ、ビートルズか」と偶然の遭遇を喜んだ野次馬も多かっただろう。しかし大多数はまず突然の騒音に驚き、「馬鹿げた行動」に呆れたであろうことは本書を読まずとも想像できる。僕は今赤坂のマンションでこの原稿を書いているけれど、隣のビルの屋上でいきなりロック演奏が始まったら、たとえそれがゴールデン・カップス再結成（無理だけれど）であっても最初は「おいおい」と思うだろう。

登場人物欄には「苦情を言った人」も掲載されているが、ここには1名の名前があるだけだ。まして世代間の価値観のギャップも甚だしかったあの時代、怒りや苛立ちを覚えた人々が少数派のわけはない。いつの時代も多くの批判者は声高で、しかも匿名なのだ。とはいえ、このイヴェントが歴史的な"コンサート"であったことが広く明らかになるにつれ、批判は風化していったわけだが（武道館もやや似ている）。

ルーフトップへの新たな旅

それにしても50年前、僕らはどの程度"ルーフトップ"を意識して

CamScannerでスキャン

いただろう。少なくとも僕は、時を置かずにニュースを知ったと思うが、ことさらなインパクトを感じた記憶はまったくない。67年の『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』やその前年のブライアン・ウィルソン（ザ・ビーチ・ボーイズ）『ペット・サウンズ』（キャピトル）以降、ロックは一方で"スタジオ主義"に邁進していた時代だ。ビートルズが今さらロックンロールのライヴ・バンドに戻ったと言われてもなあ、と困惑したくらいのものだ。

ましてルーフトップは、（当初はTV放映用の）屋外ロケであってもコンサートではなかった。47分の間にたとえば〈ゲット・バック〉は通しで3回演奏されている。しかもロック・コンサートといえば、ニューヨーク郊外の農場に40万人を集める1969年8月のウッドストックの準備が進められていたはずの時期だ。同年のTV放映を諦め、ルーフトップをクライマックスに翌年劇場映画として完成された『レット・イット・ビー』が、悪戯じみた無許可の小イヴェントをウッドストック並みの史実に育てたのだ。

前回書いたように、ルーフトップ50周年を機に、映画『レット・イット・ビー』（こちらは2020年に公開50周年）の元の素材全55時間分から『ロード・オブ・ザ・リング』のピーター・ジャクソン監督が新たな映像作品を紡ぎ出すのだという。さて、魔法のリングはビートルズのどんな"旅"を見せてくれるのか？——こんな風に書くとちょっと『ヘルプ!』

『ペット・サウンズ』ビーチ・ボーイズ
（1966年／キャピトル／東芝）

CamScannerでスキャン

みたいだよね！　　　　　　　　　　　　　　（2019年5月号）

CamScannerでスキャン

39 まだルーフトップ・コンサート

ビートルズはパクったか?

前回ご紹介したトニー・バレル著「ルーフトップ・コンサートのビートルズ」(DU BOOKS) の中に、こんな記述がある。——「「シンパシー・フォー・ザ・デヴィル (悪魔を憐れむ歌)」に続き、ジャン=リュック・ゴダールはアメリカでさらに過激な作品を作ろうとしていた。あるシーンでは、ニューヨークのミッドタウン地区スカイラー・ホテルのてっぺんで、ジェファーソン・エアプレインを撮っている」

「シンパシー〜」は「ベガーズ・バンケット」(1968年12月発売)録音中のローリング・ストーンズをドキュメントした映画「ワン・プラス・ワン」の米国公開時のタイトルだ。ちなみに「ワン・プラス・ワン」は、「以前ゴダールが撮る予定だったビートルズのドキュメンタリー用に、デニス・オデール (アップルの映像部門責任者) が用意したタイトル」だったという。

「シンパシー〜」は1968年11月公開、ジェファーソンの"ルーフトップ"は翌月の12月7日だという。これは実にビートルズの"ルーフトップ"(69年1月30日) の前月ではないか。YouTubeで見られる7分半ほどの映像はこうだ。—— バンドが屋上で演奏を始める。歩道や近隣のビルの

CamScannerでスキャン

窓や屋上に野次馬が集まってくる。警官がやって来て止める。——おお、ビートルズはこれをパクったのではないか、とも言われているようだが、ビルの屋上からいきなり大音量のロックが流れ出したら、起こることは大体同じだ。つまりパクリのポイントは屋上の無許可ライヴというわけだが、「レット・イット・ビー」監督のマイケル・リンゼイ＝ホッグはこの出来事を知らなかったらしい。

まさにこの月、リンゼイ＝ホッグが監督するザ・ローリング・ストーンズの「ロックン・ロール・サーカス」の撮影が始まっている。そのストーンズの前映像作品の監督、しかも大ゴダールの情報が耳に入ってこなかったとは少々うかつな監督と言わざるを得ないが、「レット・イット・ビー」には元々はるかに大仰なエンディングが想定されていた。チュニジア、ギリシャ、グランド・キャニオンなど特別な名所旧跡で野外コンサートを行ない、これをヘリコプターから空撮するというような。

これらがまったくまとまらず、「じゃあ、うちのビルの屋上でやってみっか?」みたいな結論にぎりぎりで急転回したわけだから、ホッグの頭にジェファーソンのルーフトップなど入り込む余地がなかったとしてもわからないではない。ましてジェファーソンは1曲で止められてしまったわけだし。

CamScannerでスキャン

屋上のジェファーソンを見よう!

実を言えば僕も、ゴダール〜ジェファーソンのルーフトップなんて、この本を読むまで知らなかったぞ。なぜだ? 1968年といえば高校2年生、ジェファーソンにもゴダールにも熱中真っただ中という時代のはずだが、大したニュースにならなかったのか。現在の僕の周辺の大ロック通といえばこの人、JFN系FMネット「A・O・R・Jazz & Vocal Night」*の制作ディレクター、土田博之さん50代に尋ねてみる。ご存じではあったが、数年前にどこかで初めて聞いた話だそうだ。そして早速YouTubeを立ち上げてくれた。—— 1曲7分半がすべてだが、やはりめちゃカッコイイなジェファーソン。大好きだったなグレイス・スリック。エキゾティックないい女で色っぽくて、声がまたいい。〈ホワイト・ラビット〉なんて、当時の僕の最大のヘヴィ・ローテーションの1曲だった。ジャニス・ジョプリンの先輩格で、最初のロック・クイーンと言ってもよいのではないか。そしていまだ、彼女以上のロック美女を僕は知らない。演奏の背後には、アルバムの発売元の親会社RCAの巨大なビルがドーンと聳え立っている。

曲は同年発売の『創造の極致』(RCA)から〈プーネイル・コーナーの家〉だ。この曲を完奏したところで警官がやって来て演奏は止められる。逮捕はされなかったようだが元々覚悟の上、普通に宣伝費を使

『創造の極致』ジェファーソン・エアプレイン
(1968年/RCA/ビクター)

*毎週火曜20〜21時生出演しています。ジャズ番組ですが、たまにロックやビートルズに"越境"したりもします。 中林敬時

うより、逮捕された際の保釈金に回したほうが有効だとも彼らは考えていたらしい。戦乱、騒乱と反抗の時代だったかんね。

それにしてももっと聴いていたいジェファーソン、もっと見ていたい動くグレイス・スリック。なんで止めたんだNYポリス。今回の話はこのままビートルズに戻りませんが、未見の方はとにかく見てくださいYouTube。"Jefferson Airplane／Rooftop"と入力すれば複数出てくるよ!

（2019年6月号）

グレイス・スリック自伝
「Somebody To Love? -A Rock-and-Roll Memoir」
Grace Slick, Andrea Cagan
（1998年／Grand Central Publishing→2006年／Warner Books・未訳）

CamScannerでスキャン

40 あの頃のアメリカン・バンド

東芝の3Bキャンペーン

前回はビートルズ前月のジェファーソン・エアプレインのルーフトップ・コンサート映像の話を書いたが、ご覧になった皆さん率直に驚いたり喜んだり。怒っている方はひとりもいません（それはそうだよね）。僕にとっては当時のアイドル、グレイス・スリックに思いを馳せる時間ともなった。〈ホワイト・ラビット〉も半世紀ぶりにしっかり聴き返したし。すると当時のアメリカン・バンドの記憶が次々と蘇ってきた。僕らの時代、ビートルズの次に出会う英国勢はローリング・ストーンズ（〈テル・ミー〉の頃）と相場が決まっていたが、米国勢ではどうだったか？

思い出すのは東芝音楽工業（後の東芝EMI）の3Bキャンペーンだ。65年発売のビートルズ『ヘルプ！』（オデオン）に、ベンチャーズの新譜『ノック・ミー・アウト』（リバティ）とビーチ・ボーイズのベスト盤を並べて、すべて豪華厚紙ジャケット仕様（本当に厚い）で売り出したものだ。僕は「ベンチャーズはBじゃなくてVだろ」と勝手に突っ込んでいたのでよく覚えている。

『ヘルプ！』は早々に入手し、輸入盤のスマートさを欠く厚紙ジャ

ケはまったく好きになれなかったけれど、僕は限られた資金をもう1枚分Bに割くことにした。東芝が好きだったのだ。赤盤は音もよかったし。〈アイ・フィール・ファイン〉のカヴァーで始まる『ノック・ミー・アウト』も捨て難かったが、ベンチャーズの音楽は既によく知っている。ビーチ・ボーイズも〈サーフィン・U.S.A.〉くらいは耳にしていたと思うが、僕はあえて『ベスト・オブ・ザ・ビーチ・ボーイズ』を選んだ。そして〈アイ・ゲット・アラウンド〉のファルセットとハーモニーに出会い、「おお、こんなロックもあるのか」と驚嘆した。プレスリーも同様だが、僕がベンチャーズにロックを感じなかったのは、ひとつに彼らが歌う人や演奏する人であっても曲を書く人ではなかったからだと思う。ロックは分業からは生まれない。アーティスト個々の主張であるべきだ。少なくとも僕はそう考えていた。

だから、同年のビーチ・ボーイズ（というかブライアン・ウィルソン）の新譜『ビーチ・ボーイズ・トゥデイ！』（キャピトル）を聴いた時には、とりわけB面に強く惹かれるものがあった。『ビートルズ '65（フォー・セール）』（1965年／オデオン）がリヴァプールの青春を描いていたのと同様、『トゥデイ！』B面は米西海岸のそれを描いていた。そしてこの世界は翌年の『ペット・サウンズ』（66年）に直結する。ビートルズ『サージェント・ペパーズ〜』（67年）と並び、僕らの時代の2大ロック・レコードと今も信じて疑わない作品だ。

花とロックのサンフランシスコ

しかし米国勢の多くは、モンキーズを持ち出すまでもなく英国勢と比較してショー・ビジネス臭が鼻につくところがあった。ロックを感じさせてくれたのは、まずバーズ。1965年〈ミスター・タンブリンマン〉でデビューし、1966年の〈霧の8マイル〉も素晴らしくインパクトがあった。けれど米国勢の底力が本当に伝わってきたのは、やはりシスコが爆発した1967年以降ではないか。ジェファーソン・エアプレインにドアーズやグレイトフル・デッドが続いた。1968年にはフィルモア・ウェストが開店し、ずっと後年の自伝（『マイルス・デイヴィス自伝』マイルス・デイヴィス、クインシー・トゥループ・著　中山康樹・訳〈1989年／シンコーミュージック・エンタテイメント〉）でジャズの帝王マイルス・デイヴィスは、「スティーヴ・ミラーというお粗末な野郎（sorry ass cat）の前座をやらされた」と言って怒り狂っている。お粗末じゃないんだけどね、スティーヴ・ミラー。ジェファーソンに続いてドアーズにも最初の〈ハートに火をつけて〉（1967年）から熱中したけれど、日本でブレイクしたのはイマイチの〈タッチ・ミー〉（1968年）からだ。大体レコード会社の宣伝って、ファンの気分からひと巡り遅れるんだよね。

デッドのデビュー・アルバム（1967年）までは手が出なかったが、中の大曲〈シスコ・ブルース Viola Lee Blues〉をカヴァーしてTVで聴

『マイルス・デイヴィス自伝』
（1989年／シンコーミュージック・エンタテイメント）

CamScannerでスキャン

かせてくれたのは（なんと）ヴィレッジ・シンガーズだ。そう言えば日本のグループ・サウンズって意外とビートルズはカヴァーしていないよね？という話はいずれ書けそうだ。

東芝EMIに入社した後のことだが、60年代末、アメリカの全ロック・バンドはシスコに集まっていたとLAの同僚（つまりキャピトルの社員）から聞き、なるほどと思った記憶がある。ただしひとつを除いては。そのひとつとは、NYを拠点にしたラヴィン・スプーンフルだ。〈デイドリーム〉も〈サマー・イン・ザ・シティ〉（ともに1966年）も大好きだったな。

（2019年7月号）

CamScannerでスキャン

41　あの頃のブリティッシュ・バンド その1

サーチャーズと〈ラヴ・ポーションNo.9〉

1964年（中1）の春、〈抱きしめたい〉のシングル盤を手に入れた。初めて自分の意志と小遣いで買ったレコードだ。ビートルズ以外のロック・バンドなんて何ひとつ知らなかったが、以来友人やレコード店や雑誌やラジオを通じて知識と情報は飛躍的に増えていった。生まれたばかりの"ロックの時代"の勢いに劣らず、僕の好奇心も若かった。

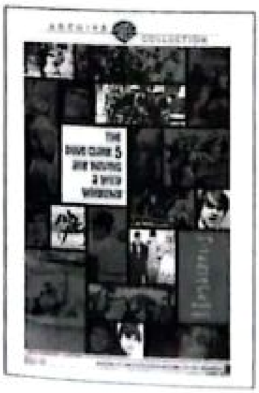
同じ年の終わりだと思う。ある日ラジオからサーチャーズ〈ラヴ・ポーションNo.9〉が流れてきた。いい曲だ。メロディといいハーモニーといいイントロなしで歌から出るところといい、一聴ビートルズかと疑った。ビートルズをここまで桁違いの大ロック・バンドにした理由をあげ出したらキリがないが、ポールの〈イエスタデイ〉などに代表される、アメリカン・スタンダードの系譜を引き継いだかのようなメロディックなレパートリーが茶の間に受け入れられた一方には、曲のアタマから僕らの心に跳び込んでくるような、この"いきなりヴォーカル"があったと思う。〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉〈オール・マイ・ラヴィング〉〈ノー・リプライ〉〈ガール〉などいくらもある。こちらはどちらかといえばジョンの得意技かな。

その後のサーチャーズはとりわけ〈バンブル・ビー〉(1965年)が好きだった。途中でブレイクがあり演奏が止まるので終わったのかと思い、同録し損なったのを思い出す。あの頃はカセットもラジカセもないから、ラジオの前にオープン・リールのデッキのマイクを立てて待ち構えて録るのだ。音はひどいよ。

デイヴ・クラーク・ファイヴと「5人の週末」

これより少し前、僕はレコード店の棚でデイヴ・クラーク・ファイヴ(DC5)〈グラッド・オール・オーヴァー〉のシングル盤を"発見"し、この時は見た目がビートルズかと思った。5人組だからすぐ違うとわかるが、初期のビートルズの(演出されたものと後に知るが)優等生感、清潔感に通ずるものがあった。ローリング・ストーンズの不良感に僕は今ひとつ馴染めなかった(いい子だったかんね)。あえてビートルズと差別化するために演出されたものと後に伝えられたし、今となってみればストーンズの方がはるかに"健全"なビジネス・ユニットだ。しかし当時の僕は、街でビートルズとすれ違うのはいいがストーンズは怖いなと思っていた。一般的なオトナの世界では、ビートルズですら長髪で不潔な不良だったけれど。あれって今ならリクルート・カットだよね。

DC5は、1965年に「5人の週末 Having A Wild Weekend」(英ワ



「Having A Wild Weekend」DVD
(1965年/Waner Achive/輸入盤のみ)

「5人の週末」サウンド・トラック盤
(1965年 オデオン/東芝)

CamScannerでスキャン

ーナー）という主演映画が公開されている。「ハード・デイズ・ナイト」の翌年、「ヘルプ！」と同年だ。前にも書いたけれど、これが実にもったいない映画だった。監督は後に名を上げるジョン・ブアマン（「未来惑星ザルドス」とか凄いよ！）だから出来は悪いわけないが、ビートルズみたいに音楽のPVにまったくなっていないのだ（「ハード・デイズ・ナイト」は史上最初で最長のPVといわれる）。たっぷり音楽も流れるし、テーマ曲扱いの〈忘れえぬ君（ホエン）〉なんて、映画を見終わる頃には美しいメロディが耳から離れないだろう。

だがしかし、音楽とDC5というバンドが映画の中で結びつかないのだ。リーダーでドラマーで主役（広告代理店の社員役）のデイヴ・クラークなど、音楽がヒットしたから次は役者でもやるかという感じ。イケメンだし、そもそも俳優っぽいんだよね。

リーダーではないが、同じくドラマーで映画の主役（格）のリンゴは、その点「ハード・デイズ・ナイト」でも「ヘルプ！」でもエラかった。もちろんメンバー全員が本人を演じるという企画と、リチャード・レスターの名脚本・名演出があってのことだが、ビートルズのリンゴと役者のリンゴがイコールだ。〈アクト・ナチュラリー（自然な演技）〉そのものなのだ。DC5は多分"週末"気分がいけなかった。ビートルズが"ハード"な昼夜を送っていたというのに。

1965年、DC5は困ったことに〈オーヴァー・アンド・オーヴァー〉とい

〈忘れえぬ君（ホエン）〉
（1965年　オデオン）

う童謡みたいな大ヒットを飛ばすが、僕はその前の〈エニイ・ウェイ・ユー・ウォント・イット〉の疾走感がたまらなく好きだった。〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉とかハーマンズ・ハーミッツとか、僕はメルヘンなロック（そんなのあるのか）が嫌いなのだ。〈イエロー・サブマリン〉もね。

1964年の非童謡的ロック・バンドといえば"彼ら"だ。彼らとも、僕は最初レコード店頭で出会った。そのシングル盤ジャケットには当時珍しくコピーが書かれていて、それはこうあった――「ビートルズをぶっ飛ばせ」。おいおいと思った。次号は"彼ら"の話から始めさせてください（次号に続く）。

（2019年8月号）

CamScannerでスキャン

42 あの頃のブリティッシュ・バンド その2

キンクスにぶっ倒されるな

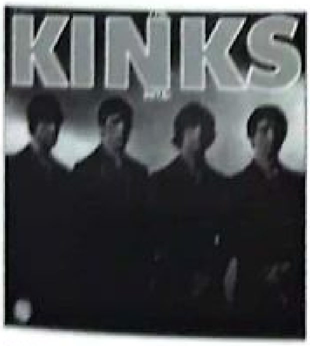
前号の最後に触れた非メルヘン的ロック・バンドとは、キンクスだ。行きつけのレコード店（扶桑新星堂）に並んでいたシングル盤は彼らの出世作〈ユー・リアリー・ガット・ミー〉だから、1964年か65年の初めの頃だろう。地味なジャケットは決して目を惹くものではなかったが、タイトル上の目立つところにこう書かれていた。――「ビートルズをぶっ倒せ!」。僕はずっと「ぶっ飛ばせ!」と記憶していたが、あらためて調べたら、なおさら乱暴というか「ぶっ倒せ!」だ。僕は「無礼者め! ぶっ倒されてたまるか」と瞬時に反応した。

当時シングル盤にもアルバムのオビにも一般的にはコピー（惹句）は入っていなかったから、発売元の日本コロムビアの担当者は、それなりの確信と決意でこの一文を入れたのだろう。「サントラ盤」といった情報以上のコピーを商品に必ず入れるようになったのは、1970年前後からではないか。よく覚えているのはピンク・フロイド『原子心母』（1970年／ハーヴェスト／東芝）だ。邦題もインパクトがあったが、オビのコピーは「ピンク・フロイドの道はプログレッシヴ・ロックの道なり」。

〈ユー・リアリー・ガット・ミー〉
（1964年／パイ／日本コロムビア）

プログレッシヴという聞き馴染みのない言葉に、何かただならないムードが漂っていた。邦題、コピーとも東芝EMIの石坂敬一先輩作。僕が同社に入社し洋楽部に配属された1976年にも、各ディレクターに「邦題とコピーで一発当ててやろう」という気分が色濃くあった。邦題には、さらに大先輩高嶋弘之氏の〈抱きしめたい〉という見事な先例がある。

さてキンクスのシングル盤だが、コピーは強烈でもタイトルは英題のママだ。担当者氏はもうひと頑張りすべきだった――〈お前に夢中〉とか〈君の虜〉とか（ともに却下だろうな）。だからというわけではないが、僕は〈ユー・リアリー〜〉をしばらく聴かなかった。そして、ある日ラジオから流れてきたキンクスの次のシングル〈オール・オブ・ザ・ナイト〉にそれこそぶっ飛ばされる。ファズの効いたギターの強烈なイントロが、どこか脱力的でしかし色っぽいヴォーカル（レイ・デイヴィスだ）を導入する。僕はたちまちファンになり、日本での初アルバム『ザ・キンクス・ヒット!!』（1965年／パイ／日本コロムビア）をエイヤッと買った。〈ユー・リアリー〜〉も、〈オール・オブ・ザ・ナイト〉の次のシングル〈ウェイティング・フォー・ユー〉も、次の次の〈セット・ミー・フリー〉も、すべて同工異曲なところがありつつめちゃカッコよかった。突っ走るような〈陽気にやろうぜ〉もね。こうして僕は（ビートルズあらため）キンクス・ファンを一時広言していたことがある。65年、中学2年の時だ。



『ザ・キンクス・ヒット!!』
（1965年／パイ／日本コロムビア）

キンクス、ビーチ・ボーイズに変身

しかし僕のキンクス熱は長続きしなかったようだ。というのは、1年ほどで『ザ・キンクス・ヒット!!』は『ビーチ・ボーイズ・パーティ』(1965年/キャピトル/東芝)に姿を変えてしまったから。当時のミュージック・ライフ誌には読者交換欄(だったかな)というのがあって、ある月そこにこんな投書が載った。「君の『ザ・キンクス・ヒット!!』と僕の『ビーチ・ボーイズ・パーティ』を交換希望」。YouTubeや音楽配信はもとより、貸レコード屋もなかったあの時代、新しい音楽を、ましてアルバムを聴くには何かを犠牲にするしかなかった。参考書とか間食とかデートとかパチンコ(まだやってないって)とかすべてを切り詰めて、ラーメン40~50杯分のLP代を捻出していたのだ。僕はウームと考えた。『ビーチ・ボーイズ・パーティ』は聴きたくて堪らなかった。録音スタジオに友人を入れたスタジオ・ライヴという形式に興味があったし、加えて〈恋する二人〉〈テル・ミー・ホワイ〉〈悲しみはぶっとばせ〉とビートルズ・ナンバーが3曲も入っている。といってキンクスを失うのはつらい。3日くらい考えたと思う。そして新しいもの、知らないものの誘惑が勝った。シングル〈バーバラ・アン〉はラジオでよくかかっていたけれど、交換で手に入れたアルバムの終曲(パーティの締め)に聴く同曲はまた格別だった。ビートルズの3曲はいずれもオリジナルを凌ぐには遠かったけれど。

「ビーチ・ボーイズ・パーティ」
(1965年/キャピトル/東芝)

CamScannerでスキャン

その後のキンクスはというと、〈キザな奴〉(1966年)がよかった。〈サニー・アフタヌーン〉(同)はラジオで最初に聴いた時少々意外だったがやがて大いに気に入り、シングル盤を買っておぼえて歌った。〈ウォータールー・サンセット〉(1967年)には新しいロックを感じた。レイ・デイヴィスっていいよね。僕は今でも3大ロック・ヴォーカリストを聞かれると(聞かれないけれど)レイ・デイヴィス、ジョン・レノン、ボブ・ディランを挙げることにしている。

ただし〈ダンディ〉(1966年)は困ったものだった。キンクス自身のシングルの他に、なんとあの童謡バンド、ハーマンズ・ハーミッツまでカヴァーしている。この曲にはかつてのハードボイルドな反メルヘン的ロック・バンドの面影なんて少しもないんだよね(次号に続く)。

(2019年9月号)

43 『ウィズ・ザ・ビートルズ』

村上春樹「ウィズ・ザ・ビートルズ」

前号に続き「あの頃のブリティッシュ・ロック3〜ヤードバーズ編」とか書くつもりでしたが、アマゾンから文芸誌「文學界」8月号の"お知らせメール"が飛び込んできた。表紙に「村上春樹2作同時掲載」とある。「連作短編『一人称単数』その4と5」とも。長編「騎士団長殺し」以来の新作がすでに書き始められているとは知らなかったから「へえ」と思った。そしてその2作中の1作（その4）のタイトルを見て、「へえ」は「えええ」に変わった。そのタイトルは「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」。

普通に考えれば、これは63年の英国オリジナルのビートルズのセカンド・アルバムのタイトルだ。アメリカや日本では当時の発売はなく、同じジャケット写真を使いながら64年『ミート・ザ・ビートルズ』のタイトルで米日別々にファースト・アルバムが選曲されている。いずれかの「ミート〜」ならまだしも、最新シングルをあえて外した英国盤『ウィズ〜』は実に地味なアルバムだ（大ヒットは記録したけれど）。そこから『ノルウェイの森』のような心に残るドラマが生まれるとは少々考えにくい。

「文學界」2019年8月号
（文藝春秋）

早速手に入れて読んでみると、小説のタイトルはまさしくアルバム名だ。しかも冒頭からすぐ、あのジャケットが美少女の胸に抱かれて登場する。場所は高校の廊下だ。——「彼女は一枚のレコードをとても大事そうに胸に抱えていた。『ウィズ・ザ・ビートルズ』というLPレコードだ。ビートルズのメンバー4人のモノクロ写真がハーフシャドウであしらわれたあの印象的なジャケットだ。そのレコードは、僕の記憶の中では、米国盤でも日本国内盤でもなく、英国のオリジナル盤だ。なぜかそのことはとてもはっきりしている」

時は1964年の秋の初めというから、こんなありそうもない話はない。ビートルズがアメリカ経由で日本で大ブレイクした年だが、当時は輸入盤、まして英国盤なんて手に入れるどころか目にするのも不可能に近かった。だから逆に、このシーンの幻想性が僕には際立って感じられる。そもそも高校の廊下を、ビートルズのLPをむき出しで抱いて歩いて来る絶世の美少女そのものがファンタジーだ。当時僕は中学1年だったが、高校だってそんなに変わるわけはないし。しかしひとたびこのシーンを記憶の中に置いてみると、なぜ著者が英国盤を選んだのかわかるような気がする。米国盤は青と茶が、国内盤は赤と橙が文字に配され、英国版だけが全面モノクロのデザインで沈むような趣がある。

小説はこの後別の少女との恋愛物語となりビートルズはほとんど登場しないが、この映像、小説中の「僕」が言うところの「そこにしか

「ウィズ・ザ・ビートルズ」
(1963年/パーロフォン/東芝)

ない精神の光景」が全編を背後から静かに支えている。そう、これは"ビートルズの時代"の物語なのだ。

カヴァー曲の素晴らしさ

「僕」がアルバムを「最初から最後まできちんと聴き通したのは、三十代も半ばになってからだった」。そしてこんな感想を持つ。――「そこにあるのは決して息を呑むような素晴らしい音楽ではない」。14曲中6曲がカヴァーだし、8曲のオリジナル曲も「『オール・マイ・ラヴィング』を別にすれば、とくに出色の出来とは言い難い」。これは多くのファンが共有する評価と言うか気分だと思うし、僕も同じだ。だからなおさら、小説のこのタイトルに驚いたのだが。たとえば『ラバー・ソウル』なら、第一印象も違っていただろう。

しかしあらためてこのアルバムを擁護するつもりで聴き直してみると、カヴァーの6曲が間違いなく素晴らしい。「僕」も〈ロール・オーバー・ベートーヴェン〉と〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉を「見事な出来」だと語っている。「所詮はカヴァー曲だ」と付け加えてはいるが、思えばローリング・ストーンズやアニマルズの初期のアルバムも、カヴァー曲で聴かせるところがあった。その意味では『ウィズ～』も、当時のブリティッシュ・バンドの基準で言えば上々、いや特上の作品と言えまいか。

CamScannerでスキャン

「僕」の選んだカヴァー2曲に加えて、僕は〈マネー〉も〈ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー〉も大好きだ。後者は日本では65年5月発売の独自の編集盤『ビートルズNo.5』までレコードに入らず、初めて耳にした時は、おお、なんてゴキゲンな曲！と思ったものだ。ジョンのレイジーなヴォーカルがいいんだよね。

(2019年10月号)

CamScannerでスキャン

44 『アビイ・ロード』50周年

50年目の『アビイ・ロード』

発売は『レット・イット・ビー』(1970年)が後になったが、『アビイ・ロード』はビートルズが最後に録音したアルバムだ。ジョージ・マーティンが『サージェント・ペパーズ〜』(1967年)以来2作(『ホワイト・アルバム』と『レット・イット・ビー』)スキップしてプロデューサーに戻っている。そしてマーティン抜きにはこのような形には纏まらなかったと思う。

英本国では50年前の9月26日、日本ではひと月遅れの10月21日の発売だが、その日を待ちに待ってレコード店に駆け付けた記憶はない。高3で受験勉強があったからね、なんてことはまったくなくて、おそらく〈カム・トゥゲザー〉と〈サムシング〉という世界共通の強力なる両面シングルがラジオでOAされまくっていたからではないか。A面のアタマから2曲だ。残りは慌てなくてもいいやという気分だったかも。レコードはまだまだ高価だったし、サイトでさわりを聴いてみるなんて夢の夢の時代だ。限られた購入資金はすでに“身内”のビートルズより、音楽誌で名のみ知る新人に投入すべきものだった。ロックが恐るべき進化を続けていた時代だ。ピンク・フロイドとかヴァニラ・ファッジとかグレイト

CamScannerでスキャン

フル・デッドとか、僕の気分は既にプログレ〜サイケデリック寄りだったかも。

ようやくフル・アルバムを聴いたのは年の終わり近かったかな。冒頭のA面2曲は歌えるほど聴いているが、さて続きはどうか。A③〈マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー〉の曲調はポールの〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉路線で、僕は好きではない（ジョンも嫌いだったらしい）。日本では翌年セカンド・シングルになったポールらしいロックンロールのA④〈オー！ ダーリン〉を挟んだA⑤〈オクトパス・ガーデン〉もまったく同様（童謡）だ。なんでロックが海の底の蛸を歌わなあかんねん。30年後、英EMIのビートルズの海外発売責任者との夕食中の雑談の中で、僕はビートルズが蛸を歌った時は困ったという話をした。せめて潜水艦止まりにしてほしかった。そして六本木キャバーン・クラブのコピー・バンドを聴きに流れたところ、扉を開けるなり〈オクトパス・ガーデン〉が。顔を見合わせて苦笑いしたものだ。なんで人気があるんだよ、あの曲。そしてプログレ風のA⑥〈アイ・ウォント・ユー〉がA面を締めるが、取り立てて語るような曲ではない（と思った）。

そんな感じだったから大きな期待もなく盤を裏返したが、ビートルズとの付き合い史上屈指の驚きと感激はB面に集中していた。ディジタル界では今やビートルズのNo.1ヒット（21回参照）という冒頭のジョージの傑作B①〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉の後に連なる9曲はすべてメド

CamScannerでスキャン

レーと言っていいほど緊密に繋がり合い、美しくも劇的な世界を形成している。「どこまで僕らを連れて行くんだビートルズ」と思った。前作『ホワイト・アルバム』へのある種の落胆（アルバム1枚に削ぎ落とすべきだった、というジョージ・マーティンに大賛成だ）を埋め合わせて大量に余りある満足があった。

名監督ジョージ・マーティン

あえてメドレー導入部と言いたいジョンのB②〈ビコーズ〉も、公式のメドレー1曲目、ポールのB③〈ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー〉も魅力的だが、圧巻はB⑧〈ゴールデン・スランバー〉だ。エリザベス朝の劇作家トマス・デッカーが1603年に書いた同タイトルの子守唄の歌詞に触発されたポールが、その一部を借りて新たに作り上げたという。「黄金のまどろみが君の両眼にキスをする」に始まる原詩を若干改変してブリッジの部分とし、前テーマに「かつて故郷に続く道があった」と望郷の思いを書き足している。ビートルズが一体だった“幸福な時代”を故郷になぞらえ、幼児の安らかな寝顔に重ね合わせたものか。

伊坂幸太郎のベストセラー『ゴールデンスランバー』(2007年／新潮社）は巨大な濡れ衣を着せられた主人公の孤独な、しかし過去の

『ゴールデンスランバー』伊坂幸太郎
(2007年／新潮社)

CamScannerでスキャン

友情に支えられた逃亡劇だが、要所で幾度か〈ゴールデン・スランバー〉が流れる。「（ポールは）バラバラになったメンバーをどうにかひとつにしようとしていた。故郷へ続く道を思い出しながら、だ。結局、バンドは元に戻らず、ポール・マッカートニーは後半の曲をつないでメドレーに仕上げた」（同書より）。

「未完成の曲をそこら中から集めてきたアルバム」とジョンが語っているように、メドレー中のジョンのB面3曲④～⑥〈サン・キング〉〈ミーン・ミスター・マスタード〉〈ポリシーン・パン〉はいずれも発展の余地もありそうだが、ここから抜けられては困るというくらい嵌まってもいる。メドレーというアイディアはポールに始まっているのだろうが、ここまでの完成品に仕上がったのは、ジョージ・マーティンの参加あればこそだ。

レコード・プロデューサーの在り方は様々だが、マーティンは極めて参加型で、とりわけ本作や『サージェント・ペパーズ～』に果たした役割は"5人目のビートルズ"どころかチーム・ビートルズの名監督と言ったほうが正しい。『サージェント・ペパーズ～』の終曲〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉のジョン（テーマ）とポール（ブリッジ）それぞれの作曲パートを見事につなげ、オーケストラを重ねたのもマーティンの技術と感性なのだ。

未発表テイク、つまりテスト・テイクや没テイクを集めた記念盤は特に好むところではないが、『アビイ・ロード』50周年記念エディションは〈ゴールデン・スランバー～キャリー・ザット・ウェイト〉の初期テイクが聴ける。ポールの中ですでに楽曲は完成しているが、マーティンがストリングスを重ねて、夢は黄金の輝きを放つことになるのだ。

（2019年11月号）

45 ビートルズとクリスマス

クリスマスを抱きしめよう

クリスマス・シーズンですが、思えば1960年代半ば、あんなにビートルズばかり聴いていたのにビートルズ・ナンバーでクリスマスを祝ったことがない。友達と集まっても、ターンテーブルに乗ったのは、1965年のシングル・ヒット〈ジングル・ベル〉を収める『ベンチャーズ・クリスマス・アルバム』とか、ビーチ・ボーイズ64年の贅沢なパーティ気分たっぷりの『クリスマス・アルバム』、あとは定番のビング・クロスビー"世界で1億枚"*の『ホワイト・クリスマス』(1949年)とか。もちろんビートルズにクリスマス作品がなかったからだけれど。

しかし僕のイメージの中では〈恋を抱きしめよう We Can Work It Out〉は結構なクリスマス・ソングだった。国内盤シングルの発売は1966年1月15日だが、英米では前年12月上旬に出ている。クリスマスを前にして初めて聴いたのはFEN(極東放送網。1997年よりAFN/米軍放送網)だったと思うが、全編オルガンが流れるミディアム・バラードで、どこかゴスペルの雰囲気も漂い、人生論風と言えなくもない歌詞も含めて、思えばあの12月の僕のクリスマス・ソングだったし、そ

〈恋を抱きしめよう〉
(1966年/オデオン/東芝)

* タイトル曲の、カヴァー・ヴァージョンを含めた総売り上げ。

CamScannerでスキャン

の後もこの曲を聴くとクリスマスを思う。ビートルズ初の両A面シングルで、No.1を記録した英米とは異なり、ペアの相方〈デイ・トリッパー〉の方が日本では人気があった。だから一般には意外に知られていない曲かもしれないし、クリスマスを感じたファンなんてめったにいないかもしれないが。

幻のクリスマス・ソノシート

ビートルズが1962年から（68年まで）ファンクラブにクリスマスのソノシートを配布していたことは知っていたが、なぜか僕らの仲間の誰ひとり気にしていなかったように思う。いわゆる新曲がなく、お遊びのトークが中心と分かっていたからか。そして何より、海外のファンクラブという存在自体が遠かったからだと思う。僕ら（1951年生まれ）のお姉さん世代のファンには入会してクリスマス・プレゼントを心待ちにしていた方々もいたようだが、しかし当時は船便中心だし、届いた時にはもう雛祭りの時期だったりして。

そんな"幻"の存在のクリスマス・ソノシート全7枚を各ドーナツ盤で復刻した『クリスマス・レコード・ボックス』が2017年に出ている。この機会にあらためて耳を傾けてみよう。

『クリスマス・レコード・ボックス』
（2017年 アップル／ユニバーサル）

CamScannerでスキャン

○1963年（10月7日録音）——〈ウェンセスラスはよい王様 Good King Wenceslas〉のやや悪ふざけな合唱に始まり、メンバーのメッセージを挟んで、〈赤鼻のトナカイ〉ならぬ〈赤鼻のリンゴ〉で終わる。皆はしゃぎ気味だが、ファースト・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』が全英No.1を快進撃中、間もなく〈抱きしめたい〉も世に出るという高揚期の録音だ。

○1964年（10月26日録音）——〈ジングル・ベル〉に始まり、メンバーが順にトニー・バーロウ（ビートルズの広報担当者）手書きのメッセージを読むが、あまりの悪筆でナンセンスな誤読を連発する。全米上陸し世界進出した年のビートルズの多忙ぶりが伝わってくる。20世紀初頭にアイルランドで生まれた童謡〈Oh, Can You Wash Your Father's Shirt?〉を少々歌って終わる。

○1965年（11月8日録音）——調子っ外れの〈イエスタデイ〉のアカペラに始まり、終わる。間はジョンが即興と思われる〈Happy Christmas To Ya List'nas〉と過激にアレンジ?した〈蛍の光〉を歌い、リンゴがフォー・トップスの〈セイム・オールド・ソング〉で続くが、すぐにポールが「著作権料がやばいぞ」と気づいてやめさせる。

○1966年（11月25日録音）——これまでのデレク・テイラーに変わりポールを中心にメンバーが台本を書き、寸劇とポールが提供しピアノを弾くオリジナル3曲で構成される。全編を通じてフィーチャーされるのは〈Everywhere It's Christmas〉だ。

○1967年（11月28日録音）——ここでフィーチャーされる4人の共作曲〈クリスマス・タイム・イズ・ヒア・アゲイン〉は1995年の『アンソロジー1』に合わせて発売された4曲入りEP〈フリー・アズ・ア・バード〉に収められ、ビートルズ唯一の"公式"クリスマス曲となった。悪くはないが、サビなしの単一メロの繰り返しは少々つらい。ラリっていれば別だろうが。

○1968年 ——メンバーが個別に録音した音源を編集しているのは、同年のホワイト・アルバムのレコーディングと同じだ。ポールの曲〈Happy Christams, Happy New Year〉とジョンの詩〈Jock and Yono〉〈Once Upon A Pool Table〉がフィーチャーされ、アメリカの歌手タイニー・ティムがウクレレの弾き語りで〈ひとりぼっちのあいつ Nowhere Man〉を歌う。

○1969年 ——バンドは実質的に解散状態で、前年版同様、別々に録音した音源を編集している。主にジョンとヨーコをフィーチャーし、ジョージは少しだけ登場し、リンゴは主演した映画『マジック・クリスチャン』(69年12月公開)を宣伝するためだけに登場。ポールはアドリブで〈This Is To Wish You A Merry, Merry Christmas〉という曲を歌っている。

メンバー全員でクリスマスを祝うムードがどんどん希薄になっていく。一体感あるバンドが解体へと向かうドラマをダイジェストしているかのようだ。

(2019年12月号)

CamScannerでスキャン

46 解散50年目のベスト・サイド・ランキング

50年目にビートルズを聴こう

2020年。ビートルズの事実上の解散から半世紀だ。有楽町すばる座で映画「レット・イット・ビー」を観た1970年のあの夏から50年目がやって来る。すばる座では前の年に「イージー・ライダー」も観たな。しかし先ごろ（2019年10月）閉館してしまった。ロック映画の大回顧上映とかしてほしかったのに。「レット・イット・ビー」の数週間前には、近くの旧丸の内ピカデリー（1984年現在地に移転）で「ウッドストック 愛と平和と音楽の3日間」を観た。ロックの文化が名実ともに大きく花開いたか、という時代だった。その最中にビートルズは解散してしまう。

だが僕（ら）はビートルズが実際どのような状態にあるのか、よくわからなかった。と言うか、気にもならなかったように思う。ビートルズの音楽はレコードを通じ、生活のいたるところで生き生きと主張し呼吸していたから。しかし実際に起こっていたことはこうだ。4月10日、ポールがデイリー・ミラー紙で脱退を発表。はい、そうですか、とはもちろんいかず、12月30日ポールはロンドンの高等裁判所にバンド解散を求め

映画「ウッドストック」のポスター

CamScannerでスキャン

る訴えを起こす。そして翌1971年3月21日に認められ、ここにビートルズは法的にも終焉を迎える。

サントラ盤『レット・イット・ビー』(英米5月発売)は英日では豪華写真集を同梱したボックスで最初発売された。国内盤(6月)は3,900円で、これでは受験生の身には手が出ない。LPのみの通常版2,000円が国内発売されたのは、ようやく71年2月のことだ。映画を観て、ジョンとヨーコがスタジオでワルツを踊るジョージ作〈アイ・ミー・マイン〉を特に気に入っていた僕は参考書代を削って手に入れたが、あれはビートルズの法的解散前だったのか後だったのか?

僕は1964年の春〈抱きしめたい〉でビートルズと出会った。以来解散まで同時進行で付き合い、音楽以上の多くを学んだ。世界観や英文法さえも。そして1997〜2014年、再び日々はビートルズと深く重なる。EMI〜ユニバーサルの担当役員として、ビートルズ国内盤の制作宣伝全般を統括することになったのだ。この間に発売された『ザ・ビートルズ1』(2000年)は300万枚以上を売り、国内盤断トツのベストセラーに間違いはない。なんでも売れればいいというものではないが、あの時は渋谷のタワー・レコード店頭で女子高生が『1』を手に取っているのを見て大いに喜んだりしたものだ。

もう一度、今度は50年後のファンの立場からあらためてビートルズの作品としっかり付き合ってみよう。いわば"全213曲を知ってから50

CamScannerでスキャン

周年"の記念イヴェントだ。さて、何から聴き返すか。どの曲が、どのアルバムが今の心に強く響くのか？ 「うーん」と悩むのではなく、ニコニコと楽しんで選んでみた。アルバムの片面単位だ。とりわけビートルズ中期以降のロックには、LP片面って作品価値を測る最小かつ有効な単位だものね。ジャズはその10年前からだ。ジャズ喫茶やロック喫茶は片面かけるごとにレコード変えたし、家でレコードを聴き返す時もだいたいそうなる（よね？）。だからレコード会社で制作を始めると、LP時代は片面単位でふたつ、心をそらさないドラマを組み立てるよう心掛けた。

ビートルズ・アルバムのベスト・サイドは何か

以下、現在の気分でビートルズ・アルバムのベスト・サイド10面をカウント・ダウンさせていただく。心に残る曲があること、そして一度針を落とすや最内周まで一気に聴かせてしまうドラマ並みの牽引力が評価基準だ。

⑩「ザ・ビートルズ／1967年〜1970年（青盤）」（国内盤1973年発売）A面

2枚組4面の第1面。幽玄な〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉に始まり、広大な〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉、祝祭的な〈愛こそはすべて〉の2曲で終わっていく超贅沢盛りサイド。間には〈サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド〉と〈ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンズ〉が挟まり、サイケな香りを発しつつも、その2曲の真ん中には箸休めのような〈ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・オブ・マイ・フレンズ〉が気配り？されている。発表順に並べただけで、よくこれだけ濃厚な21分間が出来上がったものだ。この時代のビートルズにあらためて耽溺したい。

実に立派なサイドだけれど、解散後に出たベスト盤だから遠慮して10位。

CamScannerでスキャン

⑨『リボルバー』(同1966年10月5日発売)B面

A面と迷うところではあるが、聴きなおすまでもなくやっぱB面だな。A面は強力な〈アイム・オンリー・スリーピング〉を装備するが、〈アンド・ユア・バード・キャン・シング〉〈フォー・ノー・ワン〉〈ドクター・ロバート〉の3曲が並ぶB面にかなわない。アルバムを聴き込んでいるうち、ある日ロールシャッハ・テストみたいにこれら"控えめな"名曲3曲が前面に飛び出してきたことを思い出す。

上記の4曲はいずれも主役の派手さとは縁がないが、しかし忘れがたい名曲ばかりだ。リード曲のジョージ作〈タックスマン〉なども含めて、それがこのアルバムの持ち味ではないか。思えば第20回でビートルズのアルバムB面をランク付けした時、やや過小評価されている感が強かったのであえてイチ押しにさせていただいたが、今回はハンデなしということで。

今日はもう深夜だからここまで。次回は第8位からカウント・ダウンします。

(2020年1月号)

「ザ・ビートルズ/1967年〜1970年」

「リボルバー」

CamScannerでスキャン

47 続・極私的アルバム片面ランキング

ビートルズ・アルバムのベスト・サイド続編

解散50年の今年2020年、心してビートルズを聴きなおそうではないか。それも、あのLPの時代に敬意を表してアルバムの片面単位で。レコードの外周にそっと針を落とし、慌てず迅速にリスニング・ポイントに戻って最初の一音を待つ。これがビートルズを聴く本来の正しい作法だ。では何から聴くか？　最も魅力的なビートルズの片面は？　ということで、ビートルズ片面ベスト10を選んでみることにした。極私的なものなので、皆様の評価と比べながら眺めていただけると幸いです。前号では10位「ザ・ビートルズ／1967年～1970年（青盤）」(1973年4月19日発売) 4面中のA面と、9位「リボルバー」(1966年10月5日発売)B面をご案内したところでページが尽きましたが、続きをお届けします。

⑧「ラバー・ソウル」(国内盤1966年3月15日発売)A面

〈ドライヴ・マイ・カー〉にはイントロから度肝を抜かれた。僕の知る最初のヘヴィ・ロックだ。お馴染み〈ノルウェーの森 Norwegian Wood〉が続くが、初出時の邦題は原題のカタカナ表記だった。しかし7月のキ

「ラバー・ソウル」

ングストン・トリオ、8月のブラザーズ・フォアという米の人気フォーク・グループによるカヴァーの邦題がともに〈ノルウェーの森〉。発売はテイチクと日本コロムビアだ。8月には東芝（リバティ）のジャンとディーンのシングル盤〈ポプシクル〉もB面に〈ノルウェーの森〉を収めている。そしてこれらの後の66年末に出た〈ペイパーバック・ライター〉をリード曲とする33回転4曲入りEP盤からビートルズもようやく〈ノルウェーの森〉。この辺りどういう経緯があったのか、〈ノルウェーの森〉の大誤訳者を自認する高嶋弘之先輩（東芝音楽工業の初代ビートルズ担当者）に伺ってみよう。

“Norwegian Wood”の正しい訳が“ノルウェー製の家具”であることは今や広く知られるところだ。

〈ノルウェーの森〉大誤訳の真犯人は？

高嶋さんによれば、〈ノルウェーの森〉と自分がタイトルした記憶は確かにあるという。製品にそれが反映されていないのは、デザイン部が訂正通知を見落としたのではないか？　その証拠を氏はとあるライターから知らされた。当時の青少年向け月刊誌「ボーイズライフ」（小学館）5月号の新譜紹介欄の解説に〈ノーウェジアン・ウッド（ノルウェーの森）〉の記載があるというのだ。つまり氏は、英題ばかりでは味気な

〈ペイパーバック・ライター〉
〈ノルウェーの森〉他4曲入りEP

いから（カッコ）付きでサブタイトルを加える気になった。制作／宣伝部が作成するメディア向けの資料には反映されたが、しかしデザイン担当者は通知をうっかり見過ごしたということだろう。村上春樹の大ベストセラー（1987年）など誰も想像もしなかった時代だ。ビートルズとは言えアルバムの“隅っこ”の1曲を軽視したからといって誰も責めることは出来ないし、またその程度の曲だったから高嶋先輩の記憶もあやふやなのでは。ちなみに村上春樹氏は神戸高校から早稲田の文学部演劇科に進んだ高嶋さん直系の大後輩なのだそうだ。

一般誌「ボーイズライフ」に載っているなら音楽誌「ミュージック・ライフ」に載っていないわけがない。そう思って同社資料室で「ラバー・ソウル」発売月の1966年4月号の新譜紹介を確認してもらう。案の定、その解説文にも「（ノルウェーの森）」とサブタイトルが明記されていた。

以上より大誤訳の真犯人は高嶋弘之とほぼ断定していいと思うが、氏には巨大な前科がある。〈I Want To Hold Your Hand〉を〈抱きしめたい〉にしたのだ。しかしこのタイトルだからこそ、ビートルズの新しい音楽はよりストレートに僕らに伝わってきたと思う。だから僕は〈抱きしめたい〉と〈ノルウェーの森〉を、高嶋先輩の2大誤訳にして2大傑作と呼んでいる。

CamScannerでスキャン

再びカウント・ダウン

話が大幅にそれたが、「ラバー・ソウル」A面はさらに〈ひとりぼっちのあいつ〉〈嘘つき女〉（いずれも高嶋流のいいタイトルだ）と続き、〈ミッシェル〉で終わる。贅沢だよね！

迷うところだが、第7位は「ビートルズ！」。高嶋さんが当時持てる最強の楽曲をぶち込んで作った日本のデビュー・アルバムだ。AB面どちらか選択に超迷うが、うーん、これは特例で両面にさせてくれ！

⑦「ビートルズ！（ミート・ザ・ビートルズ）」（同1964年4月5日発売）

AB面

今回も2面（＋1）しか進まなかったが、次回はいよいよベスト6。オリンピックで言う入賞作品に突入します。　　　　（2020年2月号）

「ビートルズ！（ミート・ザ・ビートルズ）」

48 極私的アルバム片面ランキング3

レコードは単曲に非ず

レコード（recorded music）の世界は今や単曲配信が主流となり、LP～CDのアルバムの時代は過去のものになりつつある。ある意味、LP以前のSP（片面1曲の78回転）の時代に遡っていると言うか。1950年代にLPが普及するまで、ポピュラー・レコードといえばジャケットのない単曲×2だったのだ。そして60年代、ビートルズがLPを単曲の足し算以上のものにする。ある時期から、ビートルズのLP=アルバムはジャケットも含めて、音楽を超えた世界だったな。新たな世界を旅する気分で、LPの片面ごとに針を下ろしたものだ。あの時代のようにアルバムを片面単位で聴こう。そしてビートルズのレコード文化を確かめよう。

アルバム片面ベスト6カウント・ダウン

では何から聴くか？　どの面がベストか？という極私的ランキングのカウント・ダウン、今回は6位から。今の気分まかせで選んでいますが、

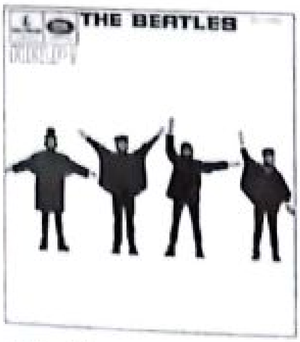
解散50周年という節目の年の気分ではある。

⑥『ヘルプ!』(国内盤1965年9月15日発売)A面

タイトル曲から流れるように佳曲が並ぶ。A面はすべてサントラ曲だが、映画を観ればその印象はさらに強まる。緑色の"戦場"の〈ザ・ナイト・ビフォア〉、カリブの青い海を背景にした〈恋のアドバイス〉と〈アナザー・ガール〉、アルプスの白い雪の中での〈涙の乗車券〉。すべてがピタリと嵌まっているが、曲が先にあったわけだから、これは監督のリチャード・レスターが偉い。前年(1964年)の映画第一作「ヤァ!ヤァ!ヤァ!〜ハード・デイズ・ナイト」に対してドタバタが過ぎる、と「ヘルプ!」を否定する向きもあるが、"映画的リアリズム"という意味では変わらないし、ビートルズというキャラを前作で学んだレスター以下制作陣がさらに遊びを加えた結果と思う。

⑤『マジカル・ミステリー・ツアー』(同1968年12月5日発売)B面

映画第3作(ただしTV映画)と連動したアルバムだが、B面はサントラではない。〈ハロー・グッドバイ〉〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉〈ペニー・レイン〉〈愛こそはすべて〉、いずれも1967年、『サージェント・ペパーズ』の前後に録音・発表されたシングル盤だ。こんな立派な曲たちをアルバムに入れずに放置するとは贅沢な、と思っていたが、救ったのは米キャピトルだ。英EMIはサントラ曲のみをEP2枚組に収めて発売したが、これらをA面にしてB面に上記シングル曲をま



「ヘルプ!」

「マジカル・ミステリー・ツアー」

とめたのだ。数々の乱暴を働いてきたキャピトルだが、この時は率直に「偉い!」と思った。

④『ハード・デイズ・ナイト』(同1964年9月5日発売)A面

映画第1作サントラ。『ヘルプ!』同様全曲素晴らしいし、タイトル曲イントロの「ジャーン」というギターの刺激的なコードに始まる16分半はあっという間だ。『ヘルプ!』との優劣がどこにあるかといえば、先に聴いた分だけ今もインパクトが鮮烈と言うか。

③『アビイ・ロード』(同1969年10月21日発売)B面

第44回で書いたばかりだから詳述はしないが、やはりメドレー中心のB面はアルバム片面の鑑だ。

②『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』(同1967年7月5日発売)B面

終曲〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉がそこに至るすべてを総括し、より印象的にしていると言うか。大技で着地を決めた体操競技、あるいは、スタンリー・キューブリックの映画の見事なエンディングを見るようだ。

①『ビートルズ '65』(同1965年2月15日発売)A面

これも第10回で書いたように、アルバムというものを教えてくれた。僕が初めて出会った"アルバム"であり、いきなりヴォーカルの強力なるイントロ〈ノー・リプライ〉を備えたA面だ。やはり最初に出会った衝撃って忘れないんだよね。

『ハード・デイズ・ナイト』

『アビイ・ロード』

『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』

CamScannerでスキャン

最後は駆け足になりましたが、これまでも触れてきた作品なので。記念すべき1年、あらためてビートルズをエンジョイしたいものです。

（2020年3月号）

『ビートルズ'65』

49 あの頃のブリティッシュ・バンド その3

〈幻の10年〉と幻の10万円

1967年のことだ。東京・吉祥寺の新星堂がボヤを出した。当時僕が回遊していた近所のレコード店のひとつだ。消防車がやって来て火はすぐ消し止められたようだが、熱で曲がり、放水で濡れたレコードは通常の売り物にならなくなった。結果、緊急で1日限りのバーゲン・セールを行なうという。都立高校入試の前日だったから、2月の下旬だったのではないか。僕は中3の受験生だった。

かなり悲惨な状況も想像して、被災したレコードの供養という気分で出かけていったけれど、商品の大半は目に見える損傷をまったくというほど受けていなかった。こうなると供養どころではない。ドーナツ盤1枚100円（当時の定価は370円）というので、この際とばかり僕は棚を漁った。気に入っている曲よりも聴いてみたい曲を買おう。

こうして手に入れたのがヤードバーズの〈幻の10年 Happenings Ten Years Time Ago〉だ。ヤードバーズは〈フォー・ユア・ラヴ〉(1965年) を聴いて以来大注目していた。続く〈ハートせつなくHeart Full Of Soul〉(同) や〈オーヴァー・アンダー・サイドウェイズ・ダウン〉(1966

〈幻の10年〉ヤードバーズ
(1966年／オデオン／東芝)

年）もえらく気に入った。なんというか、後に言うオトナのロックだ。〈幻の10年〉は当時の最新シングルだが、聴いたことはなかった。ラジオでもかからなかった。どういうわけかあの頃日本では軽視されていたな、ヤードバーズ。僕は買って帰り、愛聴曲となった。

その2〜3年後、名画座でミケランジェロ・アントニオーニ監督の「欲望」（1967年公開）を見た。音楽監督はジャズのハービー・ハンコックなのだが、ライヴハウスのシーンに突然ヤードバーズが登場し、〈ストロール・オン〉の演奏が始まる。マジかよ、と思ってみているうちにギターをぶち壊し始める。実に唐突だが、当時の彼らの“売り”だった。ただし真の“売り”は何より代々のギタリストの魅力で、エリック・クラプトンが去ったこの時期は、ジェフ・ベックとジミー・ペイジのツイン・リード・バンドだ。〈幻の10年〉はこのツイン・リード編成で発表した唯一のシングル盤だった。

さらにずっと後の80年代、「タモリ倶楽部」（テレビ朝日系）に「廃盤アワー」という廃盤チャートのコーナーがあって、眺めていたら1位はなんと〈幻の10年〉という。取引価格の平均は10万円だそうだ。僕は思わず椅子に座り直したが、何かで手放して手元にないことはわかっていた。かくて僕の100円の〈幻の10年〉は〈幻の10万円〉ともなった。

それにしても、当時日本で売れていなかったんだなあ、ヤードバーズ。レコードの廃盤価格の高騰は、多くの場合現役時代の悲劇的セール

「欲望」サウンドトラック
（1966年／MGM）

スの裏返しだ。袂を分かったクラプトンは既にクリームを結成しており、1967年後半の〈ストレンジ・ブルー〉に僕は一発で参ったが世の中はそうでもなかった。次の〈サンシャイン・オブ・ユア・ラヴ〉でそれなりに支持を上げたが、クリームが日本である程度ブレイクしたのはさらにその次の〈ホワイト・ルーム〉(1968年)だ。遅い!

60年代ブリティッシュ・ロックの10曲

ビートルズの"あの頃"(1964〜70年)の僕の英国ロック愛聴曲のカウント・ダウンを試みたい。ビートルズは除く。1バンド1曲、順位づけは無理があるけどエイヤッと決めた。

次点 ジミ・ヘンドリックス〈紫のけむり Purple Haze〉(1967年)
⑩スペンサー・デイヴィス・グループ〈ギミー・サム・ラヴィン〉(1966年)
⑨ドノヴァン〈サンシャイン・スーパーマン〉(1966年)
⑧アニマルズ〈イッツ・マイ・ライフ〉(1965年)
⑦ヤードバーズ〈ハートせつなく Heart Full Of Soul〉(1965年)
⑥ローリング・ストーンズ〈マザーズ・リトル・ヘルパー〉(1966年)
⑤ピーター&ゴードン〈愛なき世界 The World Without Love〉(1964年)
④デイヴ・クラーク・ファイヴ〈エニイ・ウェイ・ユー・ウォント・イット(1964年)

〈愛なき世界〉ピーター & ゴードン
(1964年/オデオン/東芝)

③ゾンビーズ〈テル・ハー・ノー〉(1964年)

②キンクス〈ウェイティング・フォー・ユー〉(1965年)

①クリーム〈ストレンジ・ブルー〉(1967年)

1966、67年の作品が多くなったが、「ラバー・ソウル」から「サージェント・ペパーズ～」に至るビートルズの大充実期にあたる。やがてピンク・フロイド「原子心母」はわが部屋の特大のヘヴィ・ローテーションになるけれど、1970年終わり近い作品だからビートルズの事実上の解散(70年4月)後だ。その頃にはジョン・レノンのソロ第一弾「ジョンの魂 John Lennon / Plastic Ono Band」も世に出ていた。

ちなみに⑤はポール・マッカートニーの曲だ。こんないい曲プレゼントしちゃうなんて、気前いいよねポール。当時のガールフレンドがピーター・アッシャーの妹ジェーンだったから、身内気分もあったのかもしれんが。

(2020年4月号)

〈ストレンジ・ブルー〉クリーム
(1968年　ポリドール　日本グラモフォン)

「ジョンの魂」
(1970年　アップル　東芝)

50 僕のビートルズBest 10

『ザ・ビートルズ1』も20周年

連載第50回。解散50周年の節目の年に50回を迎えるとは、偶然だが嬉しいではないか。そして思えば日本で300万枚の"オールタイム・ベスト"盤『ザ・ビートルズ1』も発売20周年だ。皆で「1」を聴いて二重にお祝いしよう！ しかしビートルズの豊穣の歴史はそれほど単純ではない。『1』は英米でNo.1シングル全曲を収めるが、ベースになるチャートは英ミュージック・ウィーク誌と米ビルボード誌だ。オフィシャル・チャート・カンパニーによる1970年代以降の前者は、1960年代はレコード・リテイラー誌のチャートを公式に採用している。これらのチャートでは、〈プリーズ・プリーズ・ミー〉〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉という名曲にしてヒット曲が（いかなる巡りあわせか）1位になっていない。一方、英国では小ヒットだった1962年のデビュー曲〈ラヴ・ミー・ドゥ〉が収められているのは、1964年5月、遅ればせながら米国でNo.1になったからだ。さらに『サージェント・ペパーズ〜』(1967年)、『ホワイト・アルバム』(1968年) というアルバム2作には、No.1シングル以前に英米ともシングル・カットがない、とは以前も書いた通りだ。

CamScannerでスキャン

ビートルズの10曲カウント・ダウン

46～48回でアルバム片面ランキングをカウント・ダウンしましたが、前回、60年代ブリティッシュ・ロックのベスト10曲を選んだところでもあり、50回を記念すべくビートルズでも同じことを試みたい。これまで書いてきたことを中締めする意味もあると思うので。以下、曲のオリジナリティ、インパクト、動員力、格などを勘案して選んだ私的ベスト10+次点をカウント・ダウンします。

次点　恋を抱きしめよう We Can Work It Out（1965年）

オルガン入りで少々ゴスペル風。〈抱きしめたい〉を連想させる邦題もいいよね！ 高嶋さん（ビートルズ初代担当者）作。

⑩アイ・フィール・ファイン（1964年）

イントロのギターの「ビヨーン」で耳を奪い、一気呵成に進む。

⑨ノー・リプライ（1964年）

ビートルズの"いきなりヴォーカル"の威力を何より伝える1曲。メロもいいんだよね。

⑧シー・ラヴズ・ユー（1964年）

⑦キャント・バイ・ミー・ラヴ（1964年）

初期から選ぶならこの2曲だな。ともにいきなりヴォーカル、またはそ

CamScannerでスキャン

れに近い。前者の "Yeah, Yeah, Yeah"(「ヤア、ヤア、ヤア」じゃないよ)とか、後者の "No, No, No, No" とか、歌詞にも耳を引くポイントがある。

⑥ア・ハード・デイズ・ナイト(1964年)

⑤ヘルプ!(1965年)

2本の映画の主題曲。前者はギターの「ジャーン」の後、後者は「ヘルプ!」のいきなりヴォーカルの後、曲は疾走する。追跡ソングというか、逃亡ソングというか。前者はファンがビートルズを追いかけ、後者はリンゴの指輪が怪しい教団に追いかけられる。

④ハロー・グッドバイ(1967年)

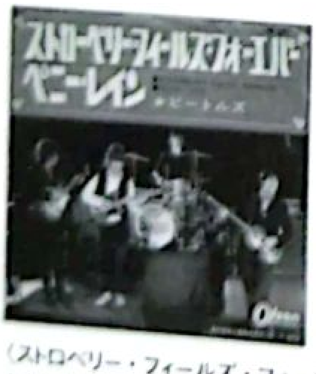
僕の一番好きなポールの曲。ポールらしい能天気な曲だが、のびのびしていい感じ。

③愛こそはすべて All You Need Is Love(1967年)

1967年の世界同時TV生中継「アワ・ワールド」で世界が初めて聴いた曲。ヘッドフォンして歌うジョンのカッコいいことと言ったら。ベスト3はいずれもジョン(主導)の曲。

②ストロベリー・フィールズ・フォーエバー(1967年)

両A面の〈ペニー・レイン〉と票を分け合った形になり1位にならず、「1」には収められていない。〈ペニー・レイン〉は米ビルボードで1位になり収められているが、僕は圧倒的にこちらが好きだ。幻覚的な世



〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉
(1967年/オデオン/東芝)

界に踏み込んでいるだけ一般性は低いかもしれないが。

①ア・デイ・イン・ザ・ライフ（1967年）

やっぱり50年経ってもベストはこの曲だな。ジョンのテーマとポールのサビを繋げたのがジョージ・マーティンというのもいいではないか。ビートルズの名曲を生んできた最強のチームだ。

ベスト4はすべて『サージェント・ペパーズ〜』セッションの前後に録音され1967年に発表された曲になった。ビートルズのもの凄い1年だ。そして前回書いたように、この年にはクリームやジミ・ヘンドリックスの音楽が僕らにも聞こえてくる。なんて贅沢な時代だったのだろう。

（2020年5月号）

CamScannerでスキャン

第1部後記

以上第1部には、月刊「ザ・ビートルズ」に2016年4月号から連載している「僕らのビートルズ」の最初の50回を収めた。同誌は1966年創立の「ビートルズ研究会」を前身とする世界最長で最大のファンクラブ「ザ・ビートルズ・クラブ」の会員限定の月刊誌だ。レコード会社在籍中からジャズ関係の原稿なら多数書いてきた。国内盤制作を担当していたブルーノートというレーベルを中核に新旧の情報の極めて近いところに自分がいると知ったので、僕自身の言葉でジャズの歴史と現在をお伝えしたかったのだ。

ザ・ビートルズ・クラブから本連載のお話があったとき、同じことを考え、引き受けさせていただいた。1997〜2013年、東芝EMI〜EMIミュージック・ジャパン〜ユニバーサルミュージックと社名は変わったが、16年間僕はビートルズの国内盤制作・宣伝部門のトップだった。この間には「ザ・ビートルズ1」（2000年）、「レット・イット・ビー…ネイキッド」（2003年）、「LOVE」（2007年）、オリジナル・アルバム初のリマスターCD化（2009年）などの大プロジェクトが次々と並ぶ。現役の60年代、「赤盤」「青盤」（1973年）の70年代に続く、いわば第3の黄金時代にして日本のビートルズが最大のセールスを記録した時代だ。

加えてそれ以上に、僕は1964年の日本デビュー時にビートルズの洗礼をダイレクトに受けている。中学1年生の1学期だった。フィルムの中のメンバーたちに嬌声を浴びせていた当時高校生以上のお姉さんたちには少々遅れたが、新しい音楽・文化としてのビートルズに直面した最初の世代という自負はある。日本では圧倒的多数の解散後のファンによって語られることの多いビートルズだが、現在進行形だった時代をお伝えできる。

かくてビートルズに絡む過去のさまざまな情景を頭に浮かべて原稿

をひねり出す月一度のイヴェントが始まった。毎回、いかに“ビートルズ的”な価値観が自分の中に根付いているか知る思いだった。自ら歌う曲は自ら作るべしという文化をロックの常識にしたのはビートルズだし、その音楽は決して同じところにとどまっていなかった。先鋭的でありながら同時に大衆性も備えていた。こうしたことはプロデューサーとしてレコード作りに関わるようになった時、おのずと身についていた基本だが、一般化した形で僕の“人生訓”のようにもなっているのではないか。意見は自ら持つべし、常識を盲信するな、刺激的なだけでは人は動かない、などなど。そして思った。もしビートルズがいなかったら、僕の“世界”はどうなっていたのだろう？

2019年10月に日本公開され小ヒットした英映画「イエスタデイ」*は、ビートルズのいない世界に主人公が迷い込む。ここだけ取り上げると、10年ほど前の日本の漫画「僕はビートルズ」**と発想は同じだ。こちらでは、主人公はビートルズの誕生前にタイムスリップする。パクリというより、あの時代にビートルズとのゼロからの出会いを経験した誰もが一度ならず考えることなのではないか。ビートルズなしの世の中はどうなっていたのだろう。そして自分は？　そこにあり得る違いに驚き、現実を取り戻すべく分身を、時を遡る旅に向かわせるのだ。

ビートルズと極めて近かったこれら遠近ふたつの過去に向かって、僕も心の旅を重ねた。もちろんビートルズのいる時代、あるいはいた時代への旅だが。そして心に浮かぶ映像のディテイルや周辺の空間、前後の時間、そこに流れている音楽を探りながら原稿を書いた。何を取り戻したわけでもない。あったままを確認し、時にそれ以上のものを発見する旅だった。この先もビートルズはさまざまな旅を受け入れ続けてくれるだろう。ビートルズは終わらない。

* 英米2019年6月、日本は10月公開の英映画。監督は「トレインスポッティング」(1996年)、「スラムドッグ$ミリオネア」(2008年)のダニー・ボイル。全編に多くのビートルズの楽曲が流れるが、歌っているのは主演のヒメーシュ・パテル

** 藤井哲夫原作、かわぐちかいじ作画。漫画誌「モーニング」(講談社)に2010年15号から2012年12号まで連載。

CamScannerでスキャン

第２部

英米日オリジナル・アルバム 58タイトル解説

多感な思春期にビートルズと出会い
リアルタイムでそのリリースやオンエア、来日などを経験し
また仕事でビートルズに関わった著者だからこそ書けた
ビートルズのアルバム58枚一気レビュー！

※ メインのタイトル部分には、基本的に原題のカナ表記を入れてあります（日本のみ発売のものについては、その邦題を表示）。日本独自の邦題がついていた作品には、キャプション部分にそれを表記しています

CamScannerでスキャン

第2部

英米日オリジナル・アルバム 58タイトル解説

多感な思春期にビートルズと出会い
リアルタイムでそのリリースやオンエア、来日などを経験し
また仕事でビートルズに関わった著者だからこそ書けた
ビートルズのアルバム58枚一気レビュー!

※ メインのタイトル部分には、基本的に原題のカナ表記を入れてあります(日本のみ発売のものについては、その邦題を表示)。日本独自の邦題がついていた作品には、キャプション部分にそれを表記しています

CamScannerでスキャン

01 プリーズ・プリーズ・ミー
Please Please Me

英 EMI（パーロフォン）1963.3.22

A ① I Saw Her Standing There ② Misery ③ Anna ④ Chains ⑤ Boys ⑥ Ask Me Why ⑦ Please Please Me
B ① Love Me Do ② P.S. I Love You ③ Baby It's You ④ Do You Want To Know A Secret ⑤ A Taste Of Honey 蜜の味 ⑥ There's A Place ⑦ Twist And Shout

---

セカンド・シングルであるタイトル曲には当初ミディアム・スローのテンポが設定されていたが、アップテンポを強く示唆したジョージ・マーティン（プロデューサー）は、結果を聴いてこれが最初のNo.1ヒットと断言したという。『アンソロジー1』[50] に聴かれる初期テイクには既に速めのテンポが設定されている。マーティンの確信通り、のこの曲の流れるような本テイクはビートルズ初の大ヒット（現ミュージック・ウィーク系ニュー・ミュージカル・エキスプレス誌1位、メロディ・メイカー誌2位）を記録。これを受けて2月に急遽制作され、3月に発売された英本国のファースト・アルバムだ。もっとも、こんなアルバムの存在自体、僕らは長い間全く知らなかったが。輸入盤、まして英国盤との距離は当時恐ろしく遠かった。

オリジナル8曲を含む全14曲は、既発売のシングル2枚が収める4曲=B①〈ラヴ・ミー・ドゥ〉とシングル裏面の同②〈P.S.アイ・ラヴ・ユー〉、A⑦〈プリーズ・プリーズ・ミー〉とシングル裏面の同⑥〈アスク・ミー・ホワイ〉に、1日で録音されたという10曲を加えたものだ。キャバーン・クラブでライヴ録音しようかというアイディアもあったようだが、デビュー録音以来のEMIスタジオ（後のアビイ・ロード・スタジオ）の第2スタジオが録音の場に選ばれている。

B⑦〈ツイスト・アンド・シャウト〉は、ジョンのシャウト・ヴォーカルをフィーチャーし、初期のビートルズを強く印象付けた1曲で、アイズレー・ブラザーズ前年のR&Bヒットのカヴァーだ。これをタイトル曲に、B⑤〈蜜の味〉、

CamScannerでスキャン

B④〈ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット〉、B⑥〈ゼアズ・ア・プレイス〉を加えた4曲が1963年7月に最初の7インチEP*を形成する。A⑤も60〜61年のミュージカル〜映画音楽のカヴァーで、アルバムに収められたカヴァー6曲がすべて当時の"最新ポップス・ヒット"であることは注目すべきだ。

ビートルズの新作（新録音）LPの内容／ジャケットが世界的に統一されるのは1967年の『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』[27]からで、本デビュー・アルバムがオリジナルの形で（東芝EMIのいわゆる"国旗オビ"シリーズの1枚として）国内盤で発売されるのはようやく76年6月のことになる。ただし66年5月、同内容のステレオ版（モノラルと同日発売）がタイトルを後出『ステレオ!これがビートルズVol.1』[21]と変え、ジャケットと曲順を大幅に変えて国内発売されている。翌月の初来日公演を迎える記念盤だ。

ジャケットはマンチェスター・スクエアのEMIの本社ビル（EMIハウス**）の吹き抜け2F内廊下に並ぶ4人を見上げて撮影されており、"赤盤"の名で知られる74年のベスト盤2枚組2巻の上巻『ザ・ビートルズ／1962年〜1966年』[35]にも転用されているが、最初に見た時「おお、これはデビュー盤の写真ではないか」と思った記憶がまったくない。本国のデビュー盤との距離はそれほど遠かった。

* LPのLong Playing（長時間演奏）に対するExtended Playing（拡張演奏）。日本ではシングル盤（ドーナツ盤）と区別して4曲盤をEPと呼ぶが、米CBSのLPに対抗して同RCAが開発した同じメディアだ。英米は45回転が中心、国内盤EPは33回転だった。

** シャーロック・ホームズのベイカー街の事務所近くで、1960〜99年EMIの本社が置かれた。

CamScannerでスキャン

02 ウィズ・ザ・ビートルズ

With The Beatles

英EMI(パーロフォン)1963.11.22

A ① It Won't Be Long ② All I've Got To Do ③ All My Loving ④ Don't Bother Me ⑤ Little Child ⑥ Till There Was You ⑦ Please Mr. Postman
B ① Roll Over Beethoven ② Hold Me Tight ③ You Really Got A Hold On Me ④ I Wanna Be You Man ⑤ Devil In Her Heart ⑥ Not A Second Time ⑦ Money

1963年5月8日付けから実に29週にわたって全英アルバム・チャート1位を独走した『プリーズ・プリーズ・ミー』[01]を襲って発売週から21週1位。英国内アーティスト初のミリオン・セラーを記録した。これ以前は、唯一1958年発売のサントラ盤『南太平洋』が数年がかりで100万枚を売っている。

すでに多忙を極めていたビートルズは、3ヵ月間7回のセッションを重ねて本アルバムを完成させており、新たに録音されたオリジナル8曲中にはポールの傑作A③〈オール・マイ・ラヴィング〉がある。ジョージ・ハリスンが初めて自作曲A④〈ドント・バザー・ミー〉を提供したのもこのアルバムだ。

とはいえ、当時の最新EP／シングル・ヒット〈フロム・ミー・トゥ・ユー〉〈シー・ラヴズ・ユー〉(ともに1963年9月発売)を一切含まず、聴くより前に曲目を一瞥(いちべつ)するだけで地味なアルバムに間違いはない。当時は、ある程度数字を見込めるアーティストのシングル盤や7インチEPと12インチLPの曲を重ねないのが、米英のポピュラー・レコード作りの一方の常識ではあった。

村上春樹はこの地味さを逆手に取って、先ごろ本アルバム名をタイトルにした短編を発表した(「文學界」2019年8月号／第1部第43回参照)。突出した魅力や楽曲がなく、ファンにさえ知られることの少なかったこのアルバムの劇中への不思議な登場は、なるほどあの"ビートルズの時代"の空気感を静かに、かつミステリアスに伝えてくれる。

とはいえA⑦〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉、B③〈ユー・リアリー・コ

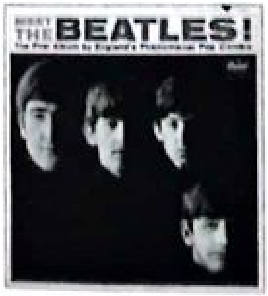
CamScannerでスキャン

ッタ・ホールド・オン・ミー〉、B⑦〈マネー〉と、モータウン生まれの魅力的なR&Bヒッツのカヴァー曲がいずれもジョンのヴォーカルで並ぶアルバムではある。マーヴェレッツ1961年のA⑦は前年設立のモータウン・レーベル初のNo.1ポップ・ヒットで、モータウン・サウンドがいよいよウケに入っていた時期だ。ビートルズのカヴァー・バンドとしての実力と個性を再確認させてくれる作品には間違いない。R&B曲をカヴァーしまくっていた当時のローリング・ストーンズやアニマルズに全く負けてないよね、このビートルズ、と思わせてくれる。

何よりジャケットが印象的だが、ロバート・フリーマン撮影のハーフ・シャドウの4人のポートレイトの原案は、ハンブルクの女流写真家アストリット・キルヒャー*（美女です）による。最初のハンブルク巡業時（1960年）にビートルズ**と知り合ってマッシュルーム・カットをデザインした女性ともされ、まさしく初期ビートルズのヴィジュアル監督だ。ビートルズ第5のメンバー、スチュアート・サトクリフ（ベース）と婚約するも、サトクリフが早世（62年）するという悲運に見舞われるが。

* 伝記に小松成美著「アストリット・Kの存在～ビートルズが愛した女」（1995年世界文化社／2001年幻冬舎文庫）。
** この時の編成はジョン、ポール、ジョージ、ピート・ベスト（ドラムス）とスチュアート・サトクリフの5人。

03　ミート・ザ・ビートルズ
Meet The Beatles



米キャピトル 1964.1.20

A ① I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ② I Saw Her Standing There ③ This Boy こいつ ④ It Won't Be Long ⑤ All I've Got To Do ⑥All My Loving
B ① Don't Bother Me ② Little Child ③Till There Was You ④ Hold Me Tight ⑤ I Wanna Be Your Man ⑥Not A Second Time

米キャピトルからのファースト・シングル〈抱きしめたい〉（1963年12月

発売、64年2月1日付初の全米No.1）への圧倒的な好反応の中登場した米キャピトルからのファースト・アルバム。3回のエド・サリヴァン・ショー出演、ワシントン・スタジアム公演、カーネギー・ホール公演と重なる2月の米初上陸への期待感高まる中での発売だ。

ジャケット写真は前項『ウィズ・ザ・ビートルズ』[02]のハーフ・シャドウ版が使われている。世界の多くの国々で、これが初めて心に刻まれる"ビートルズの顔"となった。タイトルは『ウィズ～』が『ミート～』に変更されている。米西海岸の名門キャピトルは1955年以来EMI傘下に入り、その音源を優先して米発売できる立場にあった。ビートルズも同様の扱いだが、本作には〈抱きしめたい〉以前の主役級のシングル曲／EP曲が一切入っていない。キャピトルの制作責任者デイヴ・デクスターJr.がそれらをすべて没にしたのだ。英国のヒット・ポップスが米国で通用するなど、当時は誰も考えられなかった。加えてデクスターJr.はジャズの歴史を再現した大作の制作やデューク・エリントン、ベニー・グッドマンら大物と契約するなどレーベルのジャズ強化に力のあった人物で、ロックンロールのような"子供の音楽"に特に関心はないと明言もしている。結果、ビートルズにも約1年間手を付けず、ヴィージェイ、スワンといった様々なマイナー・レーベルが1曲ごとに短期的な版権を手に入れることになった。

そんなデクスターが〈抱きしめたい〉を一聴、「この曲なら行ける」とキャピトルからの発売を決めたという"伝説"も残っているが、ともあれ"ビートルズと共に"というタイトルを使える実績も立場もなかったし、使う気もなかっただろう。まさしく〈抱きしめたい〉でキャピトルが、全米が、さらに日本を含む世界が"ビートルズに直面（ミート）"したのだ。

そして64年4月4日付けの全米シングル・チャートで、ビートルズは1～5位を独占する。（カッコ）内がそれぞれの販売元だ。

1位〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉（キャピトル）
2位〈ツイスト・アンド・シャウト〉（トーリー）
3位〈シー・ラヴズ・ユー〉（スワン）
4位〈抱きしめたい〉（キャピトル）

CamScannerでスキャン

5位〈プリーズ・プリーズ・ミー〉(ヴィージェイ)

米上陸後のブームの中、各社が持てるビートルズを競って売り出したからこそ起こった"奇跡"だったかもしれない。

ちなみに本作に半年先んずる63年7月、ヴィージェイがビートルズ最初の米国盤アルバム『イントロデューシング・ザ・ビートルズ』を世に出している。英のファースト・シングル〈ラヴ・ミー・ドゥ〉とB面の〈P.S.アイ・ラヴ・ユー〉を収めるが、翌年1月の第2版では、タイトル、ジャケット・デザイン、レコード番号のいずれも変わらないまま、これら2曲が英で大ヒットしたセカンド・シングル〈プリーズ・プリーズ・ミー〉とB面の〈アスク・ミー・ホワイ〉に差し替えられている。すべてが目まぐるしく展開していたのだ。

04 ビートルズ！
Meet The Beatles

東芝音楽工業（オデオン）1964.4.5

A ① I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ② She Loves You ③ From Me To You ④ Twist And Shout ⑤ Love Me Do ⑥ Baby It's You ⑦ Don't Bother Me
B ① Please Please Me ② I Saw Her Standing There ③ P.S. I Love You ④ Little Child ⑤ All My Loving ⑥ Hold Me Tight ⑦ Please Mr. Postman

米第1作［03］にジャケットとタイトルを倣った日本のファースト・アルバム。ただし米盤の寒色(青と茶)に対し、文字には赤とオレンジの暖色が充てられ、当時はこれしか知らなかったから比較しようはなかったが色彩感がとても良いと思った。そして収録曲は、戦略や事情に選曲を限定された英米と異なり、当時のありったけのものを並べている。たった今眺めてもこれ以上の選曲と曲順が考えられないのは、刷り込まれるほど当時聴き込んだからでもあろう。

LP盤と言えば片面1曲を収録するクラシック、〈運命〉や〈未完成〉しか知らなかったから、本作を初めてレコード店で目にしたときは思った。14曲は

どうやって聴き分けるのか。知らない曲が大半だし、"DJ付き"でしっかり聴かせてくれるのか？ 1,500円は中学1年生には厳しく、半年掛かりで手に入れたと思う。そしてDJの曲紹介なんて不要とよくわかった。

2014年6月、本作発売50周年を記念する『ミート・ザ・ビートルズ〈JAPAN BOX〉』は日本独自の選曲やジャケット・デザインが施された初期のアルバム5作（『ビートルズ！〈ミート・ザ・ビートルズ〉』、『No.2』[06]、『ビートルズがやって来る ヤァ！ヤァ！ヤァ！』[10]、『No.5』[15]、『4人はアイドル〈ヘルプ！〉』[17]）を紙ジャケで復刻しセットにしたものだ。ブックレット中で当時のミュージックライフ誌編集長星加ルミ子、東芝のビートルズ初代国内盤担当者高嶋弘之の両氏と鼎談させていただいたが、1960年代半ばの日本がビートルズをいかに受容したか、よくお分かりいただけるものになっていると思う。

05 ザ・ビートルズ・セカンド・アルバム
The Beatles' Second Album

米キャピトル 1964.4.10

A ① Roll Over Beethoven ② Thank You Girl ③ You really Got A Hold On Me ④ Devil In Her Heart ⑤ Money ⑥ You Can't Do That
B ① Long Tall Sally のっぽのサリー ② I Call Your Name ③ Please Mr. Postman ④ I'll Get You ⑤ She Loves You

米国キャピトル第2のこのアルバムで、キャピトルはヴィージェイからA②〈サンキュー・ガール〉、スワンから大ヒットB⑤〈シー・ラヴズ・ユー〉と、そのシングルB面であったB④〈アイル・ゲット・ユー〉という計3曲を取り戻している。当初の契約が満了したということだろう。これに米デビュー作に未収録だった5曲と、新曲2曲 B①〈のっぽのサリー〉とB②〈アイ・コール・ユア・ネーム〉が加わる。これら新曲2曲は本作が世界初登場だが、当時はそんなことは知る由もない。というよりこのアルバムの存在を知らなかった。

新興楽譜出版社（現シンコーミュージック・エンタテイメント）の月刊誌「ミュージックライフ」のラジオ・スポットに使用されたのがきっかけだったと思うが、ポールがシャウトする〈のっぽのサリー〉はやがて日本でヒットし、65年2月には〈アイ・コール・ユア・ネーム〉をB面にシングル盤も出ている（後述するように〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉と同日の発売だ）。

録音（3月1日）を終えて間もないこのリトル・リチャード〈サリー〉のカヴァーをいち早く収めたのは、チャック・ベリーのA①〈ロール・オーバー・ベートーヴェン〉とそれぞれAB面のトップに置くことでビートルズのロックン・ロール・バンドとしての魅力を強調しようとしたものと思われる。ヴォーカルは〈サリー〉がポール、〈ベートーヴェン〉はジョージだ。前者はビートルズのロックン・ロールといえばジョンで決まり、というところへ登場した大熱演だ。にしてもジョンのシャウト・ヴォーカル決定版〈ツイスト・アンド・シャウト〉も入れたかったな。そうすればジョン、ポール、ジョージのロックン・ロール揃い踏みになったのに。まだトーリーに版権が残っていたのかもしれない。ただしジョンはモータウンのA⑤〈マネー〉他で大活躍しているが。

06 ビートルズ No.2
The Beatles' Second Album

東芝音楽工業（オデオン）1964.6.5

A ①Can't Buy Me Love ②Do You Want To Know A Secret ③Thank You Girl ④A Taste Of Honey 蜜の味 ⑤It Won't Be Long ⑥I Wanna Be Your Man ⑦There's A Place
B ①Roll Over Beethoven ②Misery ③Boys ④Devil In Her Heart ⑤Not A Second Time ⑥Money ⑦Till There Was You

米国の『セカンド・アルバム』[05]のジャケット・デザインを借用した日本の第2作だが、2ヵ月前の『ビートルズ！』[04]にこれぞという曲を総動員した後だから内容の濃さは比べるべくもない。前作発売の時点で米国がシングル・カットして間もなかった2曲がかろうじてこちらに回っているが。キャピト

ルのシングルA①〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉とヴィージェイのシングルA②〈ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット〉だ。とりわけ前者A①をフィーチャーしたアルバムということになろうが、9月発売のサントラ盤『ビートルズがやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!』[10]がステレオ(別ヴァージョンだが)で同曲を収録しており、有難みも長続きはしなかった。

シングルのB面的な曲が多く並ぶ中で、オリジナルのB⑤〈ノット・ア・セカンド・タイム〉とモータウンのカヴァーB⑥〈マネー〉のピアノがとりわけ印象的だった。演奏しているはジョージ・マーティンだ。

07 ア・ハード・デイズ・ナイト
A Hard Day's Night

米ユナイテッド・アーティスツ 1964.6.26

A ① A Hard Day's Night ② Tell Me Why ③ I'll Cry Instead 僕が泣く ④ I Should Have Known Better 恋する二人 -inst. ⑤ I'm Happy Just To Dance With You 素敵なダンス ⑥ And I Love Her -inst.
B ① I Should Have Known Better 恋する二人 ② If I Fell 恋におちたら ③ And I Love Her ④ This Boy (Ringo's Theme) こいつ(リンゴのテーマ) -inst. ⑤ Can't Buy Me Love ⑥ A Hard Day's Night -inst.

英米では1964年7月6日の公開が日本では8月1日だから、当時としては"緊急上映決定"というところだろう。夏休みの客層を狙ったに違いないが、中学1年の僕が観たのは秋になって2番館に落ちてからだ。あの頃、映画もコンサートも演歌もジャズも不良の始まりだった。親を説得して、初めて友達同士で出かけた映画が確か「007危機一発(ロシアより愛をこめて)」(1964年4月日本公開)、これに続いて本作だったと思う。ともに吉祥寺のムサシノ映画劇場だ。僕らの世代はTVの「名犬ラッシー」や「ララミー牧場」でアメリカ文化の、ついで1964年には007映画とビートルズでイギリス文化の洗礼を受けたことになる。

主題歌の国内盤シングルは8月5日に発売され、もちろん仲間内で大きな話題になっていた。といっても、クラスで2人、300人ほどの学年で10人

CamScannerでスキャン

に届かない小さな仲間だったが。いきなりイントロの「ジャーン!」で耳を引くが、ギターのこの妙な和音がいかなる楽器によるものなのか、僕らには見当もつかなかった。そして疾走感あるテーマをジョンがリードする。映画の冒頭、この音楽とともにビートルズがロンドンのメリルボーン駅のプラットホームを走ってきたときは、すでに繰り返し観たことのあるシーンだという気になったものだ。

ユナイテッド・アーティスツ（UA）の先見の明ある契約で、サントラ盤の米発売の権利は同社のレコード部門に属し、米国独自の本作が生まれた。このアルバムの存在を知ったのは多分翌1965年だと思うが、「買い!」と思ったのは劇中で街を彷徨するリンゴの背景に流れる〈リンゴのテーマ〉つまり〈こいつ〉のジョージ・マーティンによるインスト版を収めており、そして何より、タイトル曲冒頭に「1-2-3-4」のカウントが入っているからだ。結局買えなかったけれど。

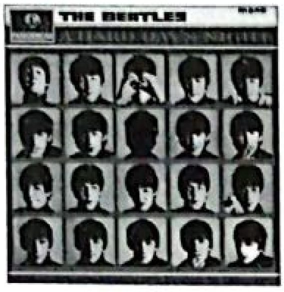
映画館は想像をはるかに越える喧噪に満ちていた。「キャー!」という嬌声は一時として止まない。そしてポール、ジョンと次々呼び叫ぶ声。「はーい」と大声で返事してみた。特にすべってはいなかったと思うが、館内がどっと沸いてくれるわけではない。それどころではないのだ。映画は期待をはるかに越えた素晴らしいものだった。一見リアリズム風だが、今まで列車内にいたはずのビートルズが車外を自転車で並走していたり、車内でライヴが始まったり、映画的虚構というか、映画的リアリズムを駆使した傑作だ。演奏シーンはすべてアイディアに満ち、どこを切り取っても出来のいいPV(プロモーション・ヴィデオ)を見るようだ。まだそんな言葉はなかったから後になって"PVの始まり"と呼ばれるが、メンバー4人の個性と魅力を描き分けていることを含めればその通り以上だと思う。この映画がどれだけビートルズを広く深く伝え、ファンを増やしたことか。

映画に勢いがあったからか、珍妙な邦題もまったく気にならず、素直に「『ヤァ!ヤァ!ヤァ!』観た?」とか話していた。邦題前半はデビュー直後の記録映画「The Beatles Come Town」の直訳（あるいは映画自体を取り違えた)らしいが、後半は〈シー・ラヴズ・ユー〉の印象的な「イエー、イエ

CamScannerでスキャン

ー、イエー」だ。「ヤア、ヤア、ヤア」じゃないぞ、とことさら突っ込まなかったのは現実的に伝わってくる音楽的、文化的刺激に対してどーでもいい些細な取り違えだったからと思うが、記号的な告知としては成功したのではないか？ ちなみに命名者は邦題の名手高嶋弘之先輩（東芝EMIの前身、東芝音楽工業の初代ビートルズ担当者）ではなく、ユナイト映画時代の水野晴朗だそうだ。

08 ハード・デイズ・ナイト
A Hard Day's Night



英 EMI（パーロフォン）1964.7.10

A ① A Hard Day's Night ② I Should Have Known Better 恋する二人 ③ If I Fell 恋におちたら ④ I'm Happy Just To Dance With You 素敵なダンス ⑤ And I Love Her ⑥ Tell Me Why ⑦ Can't Buy Me Love
B ① Any Time At All ② I'll Cry Instead 僕が泣く ③ Things We Said Today 今日の誓い ④ When I Get Home 家へ帰れば ⑤ You Can't Do That ⑥ I'll Be Back

英本国のサントラ盤で、ジョージ・マーティンのインストなしで、基本的にはビートルズの新曲ばかりを収めている。ただしA⑦〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉とB⑤〈ユー・キャント・ドゥ・ザット〉はヴァージョン違いだが新曲ではない。サントラ曲とほぼ同時期に録音されながら映画公開前のシングルに“抜擢”された両曲は、映画中にも極めて効果的に使われる。コンサートのシーンで改めて後者B⑤を聴けばその独特のリズムとメロディに惹かれること間違いないし、前者A⑦はこの映画のもうひとつのクライマックスというべき開放的な野外のシーンを飾る。多忙な中でわずかな時間を見つけたビートルズが、コンサート会場裏の広場で一時の自由を楽しむ。〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉をバックに走ったりぴょんぴょん跳んだりするのだ。貴重な時間を大人がこんなことに使うとは到底思えないが、これを納得させてしまうのがこの映画の力であり、作られたものであってもビートルズのキャラであると言うか。

A面に映画のサントラ曲が並び、ジョンのA③〈恋におちたら〉、ポールの

CamScannerでスキャン

A⑤〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉という2人の初期の名バラードが、ジョージの歌うA④〈素敵なダンス〉を挟む。映画ではジョージが最後に「オーオ」のひと声で〈ダンス〉を歌い終わるとジョンが「その“オー”がいいんだ」と茶々を入れる。本当にいいんだよね。

B面は〈ユー・キャント～〉を除いて映画撮影終了後のセッション（6月）の曲を集めるが、当時も今もサントラに昇格?させたかったな、と思う曲はない。しかし1976年、東芝EMIに入社して間もないころ、当時のビートルズ担当者石坂敬一大先輩に愚問と知りつつ「一番お好きな曲は？」と尋ねたら、B③〈今日の誓い〉という意外極まる答えが返ってきた。「イントロのギターの低音の“デゲデン”がいいんだ」。あれはどこまで本気だったのか。人の心の虚をつくのが得意な方だったから。あるいは愚問を珍答で救ってくれたのか？

09　サムシング・ニュー
Something New

米キャピトル 1964.7.20

A ① I'll Cry Instead 僕が泣く ② Things We Said Today 今日の誓い ③ Any Time At All ④ When I Get Home 家へ帰れば ⑤ Slow Down ⑥ Matchbox
B ① Tell Me Why ② And I Love Her ③ I'm Happy Just To Dance With You 素敵なダンス ④ If I Fell 恋におちたら ⑤ Komm, Gib Mir Deine Hand 抱きしめたい（ドイツ語）

UA盤からひと月遅れでキャピトルがようやく発売した「ハード・デイズ・ナイト」関連盤。契約に縛られていたのだろうか、映画には一切触れていないし、それどころかタイトル曲が入っていない。UA盤LP翌月にキャピトルからシングル盤は出ているのだが。

サントラ曲と非サントラ曲が英国盤とは逆の面に振り分けられ、例によって収録曲を全12曲まで減らしている。しかしいくら何でも〈僕が泣く〉がA面トップはないだろう。僕も泣くぞ。

CamScannerでスキャン

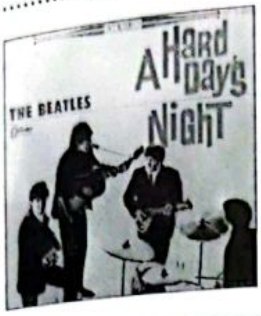
このアルバムから、米キャピトルはリンゴの歌うA⑥〈マッチボックス〉、ジョンの歌うA⑤〈スロウ・ダウン〉というロックンロールのカヴァー2曲を両A面にしたシングルをカットする。前者はカール・パーキンス1957年の、後者はラリー・ウィリアムズ1958年のシングル曲だ。リンゴとジョン、ロックンロール・シンガーとしてはカラオケのおっさんとスーパースターというくらいレベルが違うが、それぞれの最高ランクの歌を聴かせる。僕はビートルズを通じてロックンロールならぬロックと出会ったので、後者は前者の“僕らの時代”の進化・改新系、という勝手な思い込みがある。だからビートルズのロックンロールはやや遠巻きに聴いていたという感じだが、ジョンの〈ツイスト・アンド・シャウト〉はもちろん、これら2曲やポールの歌う〈のっぽのサリー〉、同じくポールが自作もした〈アイム・ダウン〉〈シーズ・ア・ウーマン〉などインパクトのある楽曲にはつい寄って行ってしまう。アメリカに倣って日本でもシングル・カットされた〈スロウ・ダウン〉は一時僕の部屋のヘヴィ・ローテーションだったな。ジョンが唇をブルルルンと振るわせるところがとりわけ気に入って練習したもんだ。

ジャケットの写真が魅力的だが、日本ではやがて〈アイ・フィール・ファイン〉のシングル盤（65年1月発売）に使用される。これを見て、おお、『サムシング・ニュー』ではないか、と思った記憶はないから、まだ米盤を（もちろん英盤も）知らなかった頃だ。

CamScannerでスキャン

10 ビートルズがやって来る ヤァ! ヤァ! ヤァ!

A Hard Day's Night



東芝音楽工業（オデオン）1964.9.5

A ① A Hard Day's Night ② I Should Have Known Better 恋する二人 ③ If I Fell 恋におちたら ④ I'm Happy Just To Dance With You 素敵なダンス ⑤ And I Love Her ⑥ Tell Me Why ⑦ Can't Buy Me Love
B ① Any Time At All ② I'll Cry Instead 僕が泣く ③ Things We Said Today 今日の誓い ④ When I Get Home 家へ帰れば ⑤ You Can't Do That ⑥I'll Be Back

英国盤と全く同内容の国内盤だが、ジャケットは全く異なる。UA盤、英EMI盤の別デザインは後に知ったわけだが、この国内盤ジャケを凌ぐものではなかった。国内盤は〈素敵なダンス〉の演奏シーンだろうか、音楽が聞こえてくるようだ。

本アルバム以降、国内盤の収録曲は英国盤に準拠していくが、ジャケットは次作『ビートルズ '65』[12]まで、まだオリジナル仕様になっていない。その次作は英国盤と同じ写真を使いながら、「The Beatles For Sale」というタイポグラフィの位置、サイズ、場所すべて主張が強く目立つ。邦題『ビートルズ '65』は同アルバムに対応する米国盤のタイトルで、わかりやすいから採用されたようだが、ジャケットには「For Sale」の記載があるのみだ。

CamScannerでスキャン

11 ザ・ビートルズ・ストーリー

The Beatles Story

米キャピトル 1964.11.23

ビートルズ物語 東芝音楽工業（オデオン） 1966.8.5

A ① On Stage With The Beatles ビートルズ登場 ② How Beatlemania Began ビートルズ・マニア誕生③ Beatlemania In Action 熱狂のビートルズ・マニア ④ Man Behind TheBeatles - Brian Epstein ビートルズを動かす男ブライアン・エプスタイン⑤ John Lennon ジョン・レノンのすべて⑥ Who's Millionaire？億万長者はだれか?

B ① Beatles Will Be Beatles 永遠のスター、ビートルズ ② Man Behind The Music - George Martin ビートルズ・サウンド 陰の男ジョージ・マーティン ③ George Harrison ジョージ・ハリスンのすべて

C ① A Hard Day's Night - Their First Movie ビートルズ 映画第1弾「ビートルズがやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!」 ② Paul McCartney ポール・マッカートニーのすべて ③ Sneaky Haircuts And More About Paul ビートルズ・カット誕生 ポールについてもう一言

D ① The Beatles Look At Life ビートルズの人生観 ② "Victims" Of Beatlemania ビートルズマニアの犠牲者たち ③Beatle Medley ビートル・メドレー④ Ringo Star リンゴ・スターのすべて ⑤ Liverpool And The World! 世界のリヴァプール

国内盤が出たのは来日公演後の8月で、米上陸の1964年のビートルズ現象をドキュメントした本セットとしては大いに時宜を逸していたし、いずれにしてもお喋りだらけで新曲なしの2枚組3,500円にはとても手が出なかった。思えば英語のヒアリングの勉強とか言って親に買ってもらうべきだったな。

流れる曲は〈抱きしめたい〉（A②）、〈スロウ・ダウン〉（A④）、〈ジス・ボーイ〉（A⑤）、〈ユー・キャント・ドゥ・ザット〉〈恋におちたら〉（B①）、〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉（C①）、〈ツイスト・アンド・シャウト〉（D①）、〈メドレー：今日の誓い〜すてきなダンス〜リトル・チャイルド〜のっぽのサリー〜シー・ラヴズ・ユー〉（D③）、〈ボーイズ〉（D④）など。うち〈ツイスト・アンド・シャウト〉は後にアルバム化（[38]）される64年8月23日のハリウッド・ボウルのライヴ録音だ。

米本盤のジャケットは二つ折りのフォルダーだったが、日本ではカートン・ボックスに収められた。

CamScannerでスキャン

12 ビートルズ・フォー・セール

Beatles For Sale

英EMI（パーロフォン）1964.12.4
ビートルズ'65 東芝音楽工業（オデオン）1965.2.15

A ① No Reply ② I'm A Loser ③ Baby's In Black ④ Rock And Roll Music ⑤ I'll Follow The Sun ⑥ Mr. Moonlight ⑦ Kansas City — Hey, Hey, Hey, Hey!
B ① Eight Days A Week ② Words Of Love ③ Honey Don't ④ Every Little Thing ⑤ I Don't Want To Spoil The Party パーティはそのままに ⑥ What You're Doing ⑦ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘

トータル・アルバム、あるいはコンセプト・アルバムという表現がロックの世界でいつから一般化したのか定かではないが、ビーチ・ボーイズ「ペット・サウンズ」(1966年)、これに刺激されたというビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」(1967年)[27]の時代には"新語"として耳にしていたと思う。テーマあるいは世界観を持つアルバムという意味だが、ジャズの世界には50年代から珍しくはない。「サージェント〜」はロック最初期の、あるいはビートルズ初のコンセプト・アルバムと語られ続けて来た。しかし、アルバムとは（本質的に）世界観を伝えるものだと僕に最初に教えてくれたのは、このアルバム「フォー・セール(ビートルズ'65)」だ。

どこか寂寥感のあるジャケットは"アイドル"のものに程遠いし、冒頭から2曲、A①〈ノー・リプライ〉、A②〈アイム・ア・ルーザー〉と恋の敗者の歌が並ぶ。いわばアンチ・ヒーロー的なムードが設定され、それはロックンロールの派手なカヴァー演奏も含めてアルバム全面に一貫する。僕はジャケットを一見、労働者の街リヴァプールで撮影されたものと思い込み、イギリスの地方都市の青春を描いた"哀しみのトータル・アルバム"と決め込んでいたが、写真はロンドンのハイド・パークで撮られたものということだ。それはそうだよね、超多忙なビートルズだ。しかしだったらなおさら、このアルバムのスーパースターらしからぬこの独特なムードは誰が設定したのか？

本作の当時、既にビートルズの名は日本でも広く伝わっていたと思うが、レコード・セールスではベンチャーズに大差をつけられていた。"エレキ"ギタ

ーが大ブームとなり、素人のエレキ・バンドが次々と結成され、これを審査する「勝ち抜きエレキ合戦」(65年〜66年／フジテレビ系)という人気番組も生まれた。「ベンチャーズの方が10倍売れていた」とビートルズの初代担当者高嶋弘之氏が言うのだから(誇張はあれ)間違いはない。ベンチャーズはファンの世代も幅もはるかに広かった。

この状況を一変、とはいかなかったが、「(それ以前の10倍となる50万枚以上」を売り上げ、ビートルズという"ブーム"に日本で初めてレコード・セールス上の大きな実体をもたらしたのがA④〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉のシングル盤だ。アルバム発売に先んずる65年2月5日、アメリカに合わせた(ただしカップリング違い)B①〈エイト・デイズ・ア・ウィーク〉のシングルと同時に発売されている。

当時の僕ら(中学生)より上の世代は、プレスリーや日劇のウエスタン・カーニバルなどロックンロールの延長でビートルズを聴いていたファンが多かったはずで、主たるレコード・マーケットであったこの層に刺さったことから生まれた大ヒットであったと思う。さらに言えば、この曲のジョンのヴォーカルには、賑やかさと裏腹の日本人好みの寂しさの余韻がある。やがて哀しき祭かな(芭蕉)という感じというか。66年6月の武道館公演がこの曲でスタートした時はビートルズのサービス精神に驚いたが、この年の世界ツアー全体のオープニング曲に選ばれたものだと後に知った。ブライアン・エプスタインがチケットの価格を抑えるよう指示するなど満を持しての武道館公演であったことを思えば、"日本最大のヒット"から逆算して選曲したものではないか。

僕(ら)はロックンロールの進化系としてのロックとビートルズに出会ったつもりだったから、「何を今さら」〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉という気分も少々あった。「ビートルズのロックンロールだったら〈スロウ・ダウン〉も〈のっぽのサリー〉もオリジナルの〈シーズ・ア・ウーマン〉もあるぜ」。本アルバム中の楽曲ベストはやはりA①〈ノー・リプライ〉だと思う。ちなみに高嶋氏が国内盤シングル〈エイト・デイズ・ア・ウィーク〉の両A面的なカップリングの相手に選んだのはこの曲だ。後に英米では、留守電メッセー

CamScannerでスキャン

ジのBGMの定番になったこともあるという。続くA②ともにいきなりジョンのヴォーカルから始まり、イントロなしの失恋ソング2連発のインパクトは強烈だった。

前にも書いたように国内盤はジャケットのタイポグラフィを大幅に変更し、邦題は『ビートルズ '65』と次項の米国盤タイトルを採用している。印刷ミスと思われる茶色の帯の"エラー版"が出回ったことがあり、驚愕の値段で売買されているのは第1部第10回に書いたとおりだ。

13 ビートルズ '65
Beatles '65

米キャピトル 1964.12.15

A ① No Reply ② I'm A Loser ③ Baby's In Black ④ Rock And Roll Music ⑤ I'll Follow The Sun ⑥ Mr. Moonlight
B ① Honey Don't ② I'll Be Back ③ She's A Woman ④ I Feel Fine ⑤ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘

『フォー・セール』米国盤である本作は英国盤のA⑦以降をバッサリとカットし、リンゴの歌うB①〈ハニー・ドント〉とジョージの歌うB⑤〈みんないい娘〉という2曲のロックンロール・カヴァーを残してB面のオープニングとエンディングとしている。タイトル同様、ジャケットも全く異なる。アタマから5曲が同じだから、最小限のアイデンティティは維持してはいるが。B面の2曲に挟まれているのは、『ハード・デイズ・ナイト』英国盤［08］から拾い損ねていたフツーの曲B②〈アイル・ビー・バック〉と、本アルバムの前月1964年11月に発売され、英米でNo.1を記録した最新シングルB④〈アイ・フィール・ファイン〉、その両A面扱いの片面B③〈シーズ・ア・ウーマン〉だ。

最新シングルをアルバムに初収録する一方で最新アルバムから6曲が節約されているが、これは『リボルバー』［25］まで続く米キャピトルのやり方だ。米国ではアルバムの作曲印税が曲数で按分される英日と異なり、

CamScannerでスキャン

曲数の増加に従い印税額も増える。ビートルズに限らず、一般に米国盤ポピュラー・アルバムの曲数が少ない（11〜12曲）のはそのためだ。加えてビートルズの場合、新曲を温存すれば頻繁に"新アルバム"を発売することができた。

14 ジ・アーリー・ビートルズ
The Early Beatles

米キャピトル 1965.3.22

A ① Love Me Do ② Twist And Shout ③ Anna ④ Chains ⑤ Boys ⑥ Ask Me Why
B ① Please Please Me ② P.S. I Love You ③ Baby It's You ④ A Taste Of Honey 蜜の味 ⑤ Do You Want To Know A Secret

ビートルズ初期の楽曲を纏めたアルバム。デビュー・シングルA①〈ラヴ・ミー・ドゥ〉、初の全英No.1シングルB①〈プリーズ・プリーズ・ミー〉がそれぞれAB面を開幕するが、これらを含め全曲が米キャピトルからは初発売になる。といってこれは"節約"の結果ではない。キャピトルが米発売のファースト・オプションを行使しなかった結果、前述のようにマイナー・レーベルに権利が渡っていた楽曲を集めたものだ。各レーベルとの契約が満了したか、あるいは取り引きした結果と思われる。

ジャケットの写真は『フォー・セール（ビートルズ '65）』英日盤［12］の見開きジャケットの裏面（いわゆる表4）に使われていたもので、日本のファンにも馴染み深いものだったが、それだけに収録する内容との違和感を覚える。

CamScannerでスキャン

15 ビートルズ No.5

Beatles No.5

東芝音楽工業（オデオン）1965.5.5

A ① Long Tall Sally のっぽのサリー ② Sie Liebt Dich シー・ラヴズ・ユー（ドイツ語）③ Anna ④ Matchbox ⑤ You Really Got A Hold On Me ⑥ She's A Woman ⑦ Ask Me Why
B ① I Feel Fine ② Komm, Gib Mir Deine Hand 抱きしめたい（ドイツ語）③ Chains ④ Slow Down ⑤ All I've Got To Do ⑥ I Call Your Name ⑦ Ths Boy こいつ

国内盤としては第5作にあたる。1965年5月5日に「No.5」発売とはいいではないか。アルバム未収録の楽曲を集めた日本独自の編集だが、キャピトルのように権利を放棄した結果でも意識的に"節約"を心掛けた結果でもまったくない。シングル盤のみで発売していたA④〈マッチボックス〉とB④〈スロウ・ダウン〉、B①〈アイ・フィール・ファイン〉とA⑥〈シーズ・ア・ウーマン〉、A①〈のっぽのサリー〉とB⑥〈アイ・コール・ユア・ネーム〉の6面6曲を基本に、やはり日本編集の2作「ビートルズ!」と「No.2」から外れていた初期の録音を加えたものだ。

中ではA②〈シー・ラヴズ・ユー〉、B②〈抱きしめたい〉のドイツ語版2曲が目を引くが、この時点で英国ではともに未発売、米国では前者がマイナー・レーベルのスワンのシングル盤、後者が『サムシング・ニュー』[09]に収められて世に出ている。1964年1月に公演で長期滞在したパリのEMIパテ・マルコーニのスタジオで録音されたもので、世界のビートルズへの第一歩となったドイツのファンに向けられたものだ。ビートルズは気乗りせず、ジョージ・マーティンに急かされてようやくスタジオ入りしたようだが、結果もそのレベルのものだ。しかしバンドが不調だったということではなく、これら2曲の後、ポールの新曲〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉が録音されている。英国第5のシングルとなる曲だ。

スモーキー・ロビンソン&ミラクルズ62年のヒット曲のカヴァー、A⑤〈ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー〉のジョンのレイジーなヴォーカル

CamScannerでスキャン

にはまり、アルバム中のこの曲ばかり聴いていたことを思い出す。

16 ビートルズ・シックス
Beatles Ⅵ

米キャピトル 1965.6.14

A ① Kansas City ~ Hey, Hey, Hey, Hey! ② Eight Days A Week ③ You Like Me Too Much ④ Bad Boy ⑤ I Don't Want To Spoil The Party パーティはそのままに ⑥ Words Of Love
B ① What You're Doing ② Yes It Is ③ Dizzy Miss Lizzy ④ Tell Me What You See ⑤ Every Little Thing

初めてビートルズの輸入盤に出会ったのは、おそらくこのアルバムだったと思う。ある日、新宿の小田急別館ハルクにブティック風のレコード店を見つけた。その壁に、このまったく見慣れないビートルズが飾ってあったのだ。一般のレコード店が輸入盤など一切扱っていない時代だ。輸入盤と出会うには、まずそれを扱っている店と出会う必要があった。

過半数の6曲が『フォー・セール』[12] からだが、タイトル、ジャケット、曲の並び、いずれをとっても関連性を感じさせない。2ヵ月後の8月に発売される『ヘルプ!』英国盤［17］に収録される新曲3曲のA③〈ユー・ライク・ミー・トゥー・マッチ〉、B③〈ディジー・ミス・リジー〉、B④〈テル・ミー・ホワット・ユー・シー〉が先行して公開されているが、本作を“発見”した時、僕はこれらを知っていた。ということは、新宿ハルクで購入したあの日は『ヘルプ!』国内盤発売（1965年9月）の少なくともひと月後以降のことだ。

内容にはさほど魅力を感じなかったが、米国盤というものを手にしてみたかった。A④〈バッド・ボーイ〉という、このアルバムでしか聴けない曲もある。B②〈イエス・イット・イズ〉もアルバム初収録だが、次作『ヘルプ!』からのファースト・シングル〈涙の乗車券〉（英米4月／国内5月発売）のB面として公開済みだった。その場でとはいかなかったが、僕はこの店に何度か通った後、エイヤッと購入を決めた。未知の1曲に2,500円は高過ぎだよなー

と思いつつ（国内盤のステレオは1,800円だった）。しかし米国盤のダイナミックな音作りを知ったのは収穫だった。塩化ビニールの材質のせいかスクラッチ・ノイズは派手だが、音楽の迫力はこれを上回る。ロックの音、というものを認識した気になった。

国内盤の音という意味では、東芝音楽工業の赤いオデオン盤*はかなりの高レベルにあったと思う。針飛びを気にしてか、各社の国内盤は一様にダイナミック・レンジ（音の大小の幅）を抑える傾向にあったが、東芝はそれよりも音楽をしっかり聴かせることを第一義に考えていた。ローリング・ストーンズやキンクスの国内盤と聴き比べて感じたことだ。

新宿ハルクで出会った米国盤は、もちろん本作ばかりではない。『ミート・ザ・ビートルズ』[03]や『セカンド・アルバム』[05]、そして『サムシング・ニュー』[09]も棚に並んでいたと思う。これらを手に入れることはなかったけれど、憧れのアイテムとなった。ビートルズを輸入盤で聴くということ自体が、何かファンとしてランク・アップするような気がしたし。といって、ホンモノのオリジナル、英EMIのパーロフォン盤は未だ見たこともなかったわけだが。ビートルズに限らず、ヨーロッパ盤が身近になったのは1970年代半ばではなかったか。

＊ 当時の東芝盤は本来透明の塩化ビニールに赤インクを混ぜており、"赤盤"と呼ばれた。日本だけの慣習であるオビと並んで、海外コレクターの狙うところだ。クラシック・ファンの「レコードは黒くあるべきだ」というクレームが勝って70年代前半にはすべてカーボン入りの黒盤になるが。ちなみにレコードが黒いのは、SPの原材料であるシェラックが黒かったからだ。また塩ビは透明だと気泡が目立つので、何らかの色を加える必要があった。

CamScannerでスキャン

17 ヘルプ!

Help!

英EMI（パーロフォン）1965.8.6

4人はアイドル 東芝音楽工業（オデオン）1965.9.15

A ① Help! ② The Night Before ③ You've Got To Hide Your Love Away 悲しみはぶっとばせ ④ I Need You ⑤ Another Girl ⑥ You're Going To Lose That Girl 恋のアドバイス ⑦ Ticket To Ride 涙の乗車券
B ① Act Naturally ② It's Only Love ③ You Like Me Too Much ④ Tell Me What You See ⑤ I've Just Seen A Face 夢の人 ⑥ Yesterday ⑦ Dizzy Miss Lizzy

映画第2作「ヘルプ!」の公開を最初に知ったのは、「ミュージック・ライフ」誌上に間違いはない。シンコー草野昌一社長と星加ルミ子編集長に率いられ、ビートルズを先頭に快進撃を始めてしばらくの時期で、書店より1日早く店頭に並ぶ西荻窪新星堂に僕は毎月19日（MLは当時毎月20日発売。後に17日発売に変更）にチャリを走らせたものだ。やがてサントラ盤からのファースト・シングルA⑦〈涙の乗車券〉がラジオから流れ始め、これにテーマ曲A①〈ヘルプ!〉続いた。ともにジョンの曲で、尺取り虫のようなリズム（ポールのアイディアらしい）の前者は今ひとつ好きになれなかったが、フーガ形式を思わせる後者は、僕の最も好きな初期ビートルズの1曲だ。なんてこった。なんて凄い曲を作るんだ。ビートルズの音楽は一貫して進化を続け、これについていくだけで、僕らは段階的に高次のロックを学んでいった。そんな風に思った最初の曲が〈ヘルプ!〉だった。

映画のサントラ曲が占めるA面は佳曲揃いだ。しかるにB面がどうもね、という意味では『ハード・デイズ・ナイト』[08] と同じだ。あるいはそれ以下だ。だってリンゴのカントリーB①〈アクト・ナチュラリー〉に始まり、フォーキーなB⑤〈夢の人〉、バラードのB⑥〈イエスタデイ〉、ロックンロールのB⑦〈ディジー・ミス・リジー〉と並んで終わっていくのだ。同じバンドとは思えないバラバラ状態ではないか。

〈イエスタデイ〉は名曲に間違いはないが、その録音第一報が「ミュージック・ライフ」に載った時の気分は今も覚えている。曰く「ストリングスを従えて

CamScannerでスキャン

ポールが単独で録音した」――ストリングスだって？ ビートルズはロックだろう。ポール単独だって？ ビートルズはバンドだろう。――今でこそポールの〈イエスタデイ〉的な側面がビートルズを（先鋭化の一方で）一般化、巨大化させてきた大きな要素と理解しているが、当時はこのニュースに、何すんだよポールと結構心配したものだ。

〈イエスタデイ〉は65年9月、〈アクト・ナチュラリー〉のB面としてシングル・カットされ、日本も翌月これに続いた。『ヘルプ！』からのサード・シングルだ。何とも妙な曲をシングルに選ぶものだと思ったが、（当然ながら）米日ともに大B面ヒットに結果している。

しかし〈アクト・ナチュラリー〉がなぜ選ばれたのか？ このタイミングでリンゴのキャラを際立たせたかったのに間違いはない。当時米国で「最も人気のあるビートル」と呼ばれたリンゴは、『ヘルプ！』の（『ハード・デイズ・ナイト』と同じく）主役格だ。そしてバック・オウエンズのこの曲はこんな風に歌う。――彼らがぼくを映画スターにしてくれる。僕は自然に演技するだけ。――まさしくこれは俳優リンゴのために書かれたような曲なのだ、とは第1部第22回にも書いた。

18 ヘルプ！
Help!

米キャピトル 1965.8.13

A ① Help! ② The Night Before ③ From Me To You Fantasy - inst. ④ You're Going To Lose That Girl 恋のアドバイス ⑤ I Need You ⑥ In The Tirol - inst.
B ① Another Girl ② Another Hard Day's Night - inst. ③ Ticket To Ride 涙の乗車券 ④ The Bitter End ⑤ You're Going To Lose That Girl 恋のアドバイス ⑥ The Chace - inst.

米キャピトルの『ヘルプ！』サントラ盤は、劇中でビートルズが歌った7曲、つまり英パーロフォン盤のA面7曲に、英国のトラッド・ジャズ・シーンで活躍するケン・ソーン楽団のインスト5曲が差し込まれている。国内盤は手に入

CamScannerでスキャン

れていたが、僕はこのアルバムが欲しくてたまらなかった。米国盤のサウンドの素晴らしさに開眼していたし、文字にオレンジ色と黄色をあしらったジャケットも英日盤よりはるかにヴィヴィッドだ。しかも、本作が外した英パーロフォン盤B面の7曲は前述のように僕には大事ではなかったし、これが何よりのポイントだが、アルバム冒頭に007の〈ジェームス・ボンドのテーマ〉が短く流れてA①〈ヘルプ!〉が立ち上がる。これ、超かっこいいんだよね!

19 ラバー・ソウル
Rubber Soul

英EMI（パーロフォン）1965.12.3
東芝音楽工業（オデオン）1966.3.15

A ⑴ Drive My Car ⑵ Norwegian Wood ノルウェーの森 ⑶ You Won't See Me ⑷ Nowhere Man ひとりぼっちのあいつ ⑸ Think For Yourself 嘘つき女 ⑹ The Word 愛の言葉 ⑺ Michelle
B ⑴ What Goes On 消えた恋 ⑵ Girl ⑶ I'm Looking Through You 君はいずこへ ⑷ In My Life ⑸ Wait ⑹ If I Needed Someone 恋をするなら ⑺ Run For Your Life 浮気娘

『ヘルプ!』[17] はタイトル曲や〈涙の乗車券〉がシングル・カットされてラジオでかかりまくっていたからアルバムの入手を急がなかったが、本作は前々作の『フォー・セール（ビートルズ '65）』[12] 以来で発売間もなくアルバムを手に入れ、ターンテーブルに乗せるのももどかしく針を下ろした記憶がある。今度はどんな世界を見せてくれるのか？　それはいかに始まるのか？　ビートルズのアルバム中、『フォー・セール』の〈ノー・リプライ〉と本作の〈ドライヴ・マイ・カー〉が僕にとってベスト1、2を争うアルバム開幕曲だ。前者の"いきなりジョンのヴォーカル"にも驚かされたが、最小限のメロディ・ラインをシャウトする"初期ハード・ロック"の後者も同様だった。

全曲オリジナルのアルバムとしては『ハード・デイズ・ナイト』[08] 以来2作目だが、アルバムを通じてサントラ盤に劣らぬドラマが聞こえてくる。先に『フォー・セール』をビートルズ最初のコンセプト・アルバムではないかと書いたが、多くのファンは本作にそれを感じたのではないか（そしてさらに多くのフ

アンが「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」[27]に）。アルバム自体のストーリー性を反映したものか、多くの曲に意欲的な邦題がつけられている。命名者は高嶋弘之だ。"I Want To Hold Your Hand"に〈抱きしめたい〉とあてたビートルズ初代担当者で、この一事をもって邦題の達人といっていいと思う。カタカナ化したら長過ぎるし、直訳とはいえ「手を握りたい」では奥手に過ぎるだろう。氏は、タイトルに新しいポップスの感覚を込めたかったと語っている。

ビートルズの全作品中、タイトルが最もよく話題に上るのがA②〈ノーウェジアン・ウッド（ノルウェーの森）〉だ。と言っても1987年、村上春樹「ノルウェイの森」（新潮社）が大ベストセラーを記録して以降の話で、それ以前はこの場合のwoodは小屋である、あるいは家具である（こちらが正解）といった誤訳の指摘はあっても、関心は限られていた。そして小説によって邦題がメジャーになってからの主たる論議は、誰がこのタイトルを付けたのか？になった。というのも最初の国内盤のオビにも日本語ライナーにも〈ノーウェジアン・ウッド〉としか記載がないから。最初に〈ノルウェーの森〉と邦題があるのは、66年7月発売のキングストン・トリオのアルバム「朝の雨」とシングル（テイチク）、これに8月のブラザーズ・フォアのアルバム「ビートルズ・ソングブック」（日本コロムビア）と、ジャンとディーンのシングル（東芝）が続く。これらのカヴァーの後、ようやく12月に本家のオリジナル録音にこの邦題が付く。〈ペイパーバック・ライター〉を主役とする4曲入りのEP盤だ。

この順番ならばビートルズがカヴァー版の邦題を頂戴したことになるが、高嶋先輩がそんなことをするはずがない。現在85歳にして頭脳明晰の大先輩の記憶を辿っていただくと、第1部第47回にも書いたが、こういうことのようだ。〈ノーウェジアン・ウッド〉で社内的にタイトルをオーソライズした後、これではイメージが広がらないと考えた先輩はカッコ入りで（ノルウェーの森）のサブタイトルで補足することに決める。そして社内に変更通知を回したが、これをデザイン部が見過ごしたか忘れたかしたのではないかというのだ。これを裏付けるように、ミュージック・ライフ誌65年4月号（3月発売）の新譜案内の解説中に〈ノーウェジアン・ウッド（ノルウェーの森）〉とある。解説者や

CamScannerでスキャン

編集者が勝手に副題を付け加えるわけはないから、高嶋先輩が作成し各社に配布した資料がそうなっていたということだろう。〈抱きしめたい〉と〈ノルウェーの森〉、ともに誤訳だが名邦題に間違いはない。

20 ラバー・ソウル

Rubber Soul

米キャピトル 1965.12.6

A ① I've Just Seen A Face 夢の人 ② Norwegian Wood ③ You Won't See Me ④ Think For Yourself 嘘つき女 ⑤ The Word 愛の言葉 ⑥ Michelle
B ① It's Only Love ② Girl ③ I'm Looking Through You 君はいずこへ ④ In My Life ⑤ Wait ⑥ Run For Your Life 浮気娘

英パーロフォン盤の開幕曲を『ヘルプ!』[17] B⑤に入っていた〈夢の人〉に、B面トップも同じくB②〈イッツ・オンリー・ラヴ〉に差し替え、曲順はそのままで米シングル盤〈ひとりぼっちのあいつ〉などを抜いている。なんとイージーな改変と思うが、あらフシギ、この並びで聴く『ラバー・ソウル』は実にフォーク・ロック色が強い。米国のバーズが〈ミスター・タンブリンマン〉や〈ターン・ターン・ターン〉を放った1965年の発表で、フォーク・ロックとの関係や、ブライアン・ウィルソン(ビーチ・ボーイズ)の『ペット・サウンズ』(1966年)への影響がしばしば語られても来た。少々意外に思ったりもしたが、成程これが米国で聴かれていた『ラバー・ソウル』なのだ。

〈ドライヴ・マイ・カー〉か〈夢の人〉か。どちらの曲に聴覚の焦点を合わせて聴くかでアルバムの全景が一変する。陰陽が逆転するロールシャッハ・テストのように。ちなみに〈夢の人〉は日本では隅っこの曲と思うが、米国やカナダではそれなりの人気曲だ。それはそうだ。大名盤にして大ベストセラーのオープニング曲なのだから。

CamScannerでスキャン

21 ステレオ! これがビートルズVol.1
Please Please Me

東芝音楽工業（オデオン）1966.5.25

A ① Please Please Me ② Anna ③ I Saw Her Standing There ④ Boys ⑤ Misery ⑥ Chains ⑦ Ask Me Why ⑥ Michelle
B ① Twist And Shout ② A Taste Of Honey蜜の味 ③ Love Me Do ④ Do You Want To Know A Secret ⑤ Baby It's You ⑥ There's A Place ⑦ P.S. I Love You

22 ステレオ! これがビートルズVol.2
With The Beatles

東芝音楽工業（オデオン）1966.5.30

A ① All My Loving ② Please Mr. Postman ③ Don't Bother Me ④ It Won't Be Long ⑤ All I've Got To Do ⑥ Little Child ⑦Till There Was You
B ① Roll Over Beethoven ② Money ③ I Wanna Be You Man ④ Hold Me Tight ⑤ Devil In Her Heart ⑥ Not A Second Time ⑦ You Really Got A Hold On Me

1966年、高嶋弘之がビートルズの来日記念ベスト盤を企画し、ジャケット・デザインも終わり、音質チェックのラフ・テスト盤までプレスしながら本国の許可が下りず発売できなかったという話は第1部第5回に書いた。『ステレオ!これがビートルズ』と邦題されたこれら2巻のアルバムはその代替案だが、内容はVol.1が英パーロフォン第1弾『プリーズ・プリーズ・ミー』[01]、Vol.2が第2弾『ウィズ・ザ・ビートルズ』[02]だ。いずれもステレオ・マスターを採用しているが、1960年代の英米ではステレオ版とモノラル版が同時発売されるのが普通だった。

曲目は同じだが、曲順は高嶋の手で丁寧に再構成されている。同じ日本の聴き手だからということが大きいのかもしれないが、僕などはこちらの方がはるかにしっくりする。Vol.1、2ともにA①は〈プリーズ・プリーズ・ミー〉〈オール・マイ・ラヴィング〉というシングル・ヒットで幕を開け、それぞれA②〈ア

ンナ〉〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉に続く。これら2曲は日本のファンがアルバムから選び出した人気曲で、ともに文化放送の電話リクエスト番組「ハロー・ポップス」でデイリーの人気No.1を続けたことがある。〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉は1964年6月に〈マネー〉と両A面的な扱いで、〈アンナ〉は1965年9月に〈ディジー・ミス・リジー〉のB面として、日本独自のシングルが発売されている。

ジャケットは全く僕の好むところではなかったが、ごくフツーの好青年らしき4人のわかりやすいポートレイトを並べており、来日に際して一般的なファン層への拡大を狙ったものと考えれば大いに理解できる。ステレオ・ブームも始まっていたところだし。

23 イエスタデイ・アンド・トゥデイ
Yesterday And Today

(A)

(B)

米キャピトル 1966.6.20

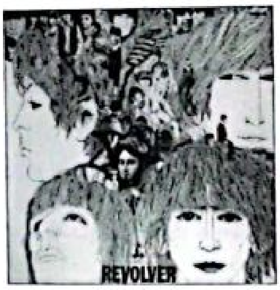
A ① Drive My Car ② I'm Only Sleeping ③ Nowhere Man ひとりぼっちのあいつ ④ Dr. Robert ⑤ Yesterday ⑥ Act Naturally
B ① And Your Bird Can Sing ② If I Needed Someone 恋をするなら ③ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ④ What Goes On 消えた恋 ⑤ Day Tripper

僕が手に入れた2枚目の米キャピトル盤だ。新宿の小田急ハルクで買ったが、まだ他に輸入盤を扱っている店を知らなかったかもしれない。しかしなぜ中学3年生がこのアルバムに大枚2,500円をはたいたのか？ A②〈アイム・オンリー・スリーピング〉、A④〈ドクター・ロバート〉、B①〈アンド・ユア・バード・キャン・シング〉という、次項の『リボルバー』英パーロフォン盤［24］のために録音されたジョンの新曲3曲を先取りしているのが最大のメリットだ。どれも

ジョンらしい素晴らしい曲ばかりだし。しかし僕が本作を入手したのは、英国盤と同内容の国内盤『リボルバー』が出た後だったと思う。シングル盤の両面としてのみ出ていたB③〈恋を抱きしめよう〉とB⑤〈デイ・トリッパー〉をアルバムで手に入れたかったのかもしれない。東芝の音を評価した上で、僕の米国盤サウンド信仰も始まっていたし。

ジャケットの目新しさに惹かれ、友人に見せびらかしてやろうとも考えたかもしれない。しかしこの時は知る由もないが、僕が手に入れたジャケット(A)は初版ではない。初版は後に"ブッチャー・カヴァー"(B)と呼ばれ、肉屋に扮した4人がバラバラに切り刻まれた血だらけのキューピー人形の断片を笑顔で抱えている。脱"アイドル"を宣言する意味もあったようだが、店頭に並ぶか並ばぬかのうちに批判が相次ぎ、米キャピトルは即座に回収してAに差し替えた。その結果、"ブッチャー・カヴァー"は正式発売されたビートルズ作品中、最もレアで高価な一枚になっている。

24 リボルバー
Revolver



英 EMI(パーロフォン)1966.8.5
東芝音楽工業(オデオン)1966.10.5

A ① Taxman ② Eleanor Rigby ③ I'm Only Sleeping ④ Love You Too ⑤ Here, There And Everywhere ⑥ Yellow Submarine ⑦ She Said, She Said
B ① Good Day Sunshine ②And Your Bird Can Sing ③ For No One ④ Dr. Robert ⑤ I Want To Tell You ⑥ Got To Get To Into My Life ⑦ Tomorrow Never Knows

英パーロフォン盤の"完全なる"『リボルバー』を聴くにつけ、先に録音が終わっていたとは言え、米キャピトルの"新作もどき"[23]に3曲を抜かれたジョンは心中穏やかでなかっただろう。しかもシングルとしてフィーチャーされたわけでもない。英国盤においても、これらは(ポールのB③〈フォー・ノー・ワン〉も加えて)やや控えめに収められているが、聴き返しているうちにある日突然光り輝く。ただしA③〈アイム・オンリー・スリーピング〉は一聴して気

CamScannerでスキャン

に入っていたかな。ジョンのレイジーなヴォーカルは本当に魅力的だ。

英国はシングルとアルバムを重ねないというポリシーを「フォー・セール」[12]と「ラバー・ソウル」[19]では（間のサントラ盤「ヘルプ！」[17]を除き）守り続けていたが、本作で初めてアルバムと同日にシングルをカットしている。A⑥〈イエロー・サブマリン〉の裏面にA②〈エリナー・リグビー〉を収めたシングル盤で、米キャピトルもアルバムと同日に、東芝はアルバムのひと月前の1966年9月5日に同じカップリングで発売している。そしてこの時を機に、アルバムの発売日とシングルの選択に、世界基準が設定されるようになった。

ジャケットを描いたドイツ人デザイナーのクラウス・フォアマンとビートルズは正式デビュー前のハンブルク時代に出会っている。その時フォアマンは、後にスチュアート・サトクリフと恋に落ちるアストリット・キルヒャーのボーイフレンドだった。

25 リボルバー
Revolver

米キャピトル 1966.8.8

A ① Taxman ② Eleanor Rigby ③ Love You Too ④ Here, There And Everywhere ⑤ Yellow Submarine ⑥ She Said, She Said
B ① Good Day Sunshine ② For No One ③ I Want To Tell You ④ Got To Get You Into My Life ⑤ Tomorrow Never Knows

「ラバー・ソウル」[20]米キャピトル盤には目論見らしきものが見えたのに対し、「リボルバー」は英パーロフォン盤の曲順をそのままに「イエスタデイ・アンド・トゥデイ」[23]に先取りした3曲をトルツメしただけという安易なアルバム。この頃になると、米キャピトルと言えどビートルズのアルバムをおいそれと改変できなかったと思うし、またビートルズのアルバム作り自体がそうしたことを拒否するところがあった。たまたま出揃った曲の足し算ではなく

CamScannerでスキャン

なっていたのだ。あえて言えば、オリジナルの『リボルバー』英国盤［24］から3曲を外すのみで一切加えている曲のない本作は、『リボルバー』的なものを維持してはいる。A①〈タックスマン〉、A⑥〈シー・セッド・シー・セッド〉、B⑤〈トゥモロー・ネバー・ノウズ〉などに顕著な、よりピュアな、あるいはヘヴィなロックへのアプローチだ。後のハード・ロック・ファンの多くは、『リボルバー』をビートルズのベストに挙げる傾向にある。

〈タックスマン〉は、ジョージ初のアルバム・オープニング曲だ。どこか客観的なジョージのヴォーカルがこの曲にはよく似合う。愛や人生を離れて税官吏を歌った、ある種実験的な曲としても話題になったが、ふた月前の5、6月には三文小説家を歌った〈ペイパーバック・ライター〉が英米日でシングル・カットされており、この"ジャンル"にはすでに進出済みだ。ビートルズ唯一の来日公演は『ラバー・ソウル』［19］と『リボルバー』［24］発売の間の1966年6月30日、7月1日、2日（7月はともに昼夜2回公演）の計5公演だが、発売を待つばかりの『リボルバー』の曲は一切演奏されず、シングルのみの〈ペイパーバック・ライター〉（日本で6月15日発売）がいちばんの新作だった。1部でも挙げたが、以下にセットリストを再録しておく。11曲35分間の短いステージだ。

①ロック・アンド・ロール・ミュージック②シーズ・ア・ウーマン③恋をするなら④デイ・トリッパー⑤ベイビーズ・イン・ブラック⑥アイ・フィール・ファイン⑦イエスタデイ⑧アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン⑨ひとりぼっちのあいつ⑩ペイパーバック・ライター⑪アイム・ダウン

CamScannerでスキャン

26 ア・コレクション・オブ・オールディーズ

A Collection Of Beatles Oldies

英EMI（パーロフォン）1966.12.10

オールディーズ 東芝音楽工業（オデオン）1967.2.5

A ① She Loves You ② From Me To You ③ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ④ Help! ⑤ Michelle ⑥ Yesterday ⑦ I Feel Fine ⑧ Yellow Submarine

B ① Can't Buy Me Love ② Bad Boy ③ Day Tripper ④ A Hard Day's Night ⑤ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑥ Paperback Writer ⑦ Eleanor Rigby ⑧ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい

1966年8月29日、サンフランシスコ（キャンドルスティック・パーク公演）で最後のツアーを終えたビートルズは長い休暇に入り、それぞれ映画出演や旅に熱中する。4人で集まることはなく、EMIとの年2作の契約を遂行するのは不可能だった。そこで編まれたのが、このビートルズ初の公式ベスト盤だ。ベスト盤だから昔の曲を集めたには違いないが、しかしオールディーズはないだろう、というのが第一印象だった。「バット・ゴールディーズ」とサブタイトルを続けて飾ったとしても。

選曲はこの時点のヒット曲、人気曲を過不足なく並べている。B②〈バッド・ボーイ〉を除いては。ヒット曲でもなければオリジナル曲でもないラリー・ウィリアムズのロックンロールのカヴァーだ。かつて米キャピトルが『ビートルズVI（シックス）』[16] に収めたこの曲は英国では未発表に終わっていたから、あえてここに収録したわけだ。でも、いくらなんでも唐突だよね。デビュー・シングル〈ラヴ・ミー・ドゥ〉というファン層の狭いブルース・ナンバーを外しているのは僕としては評価できるが、その代わりが〈バッド・ボーイ〉では元の黙阿弥以下だ。

ジャケットもピンとこない。スウィンギン・ロンドン*を代表するアーティスト、デヴィッド・クリスチャンによるものだが、これのどこがビートルズや。ジャケのこの男は誰やねん。ラッパ付き電蓄のイラストはどーいうつもりで描いたんや。タイトル同様ピント外れだ。『赤盤』[35]、『青盤』[36] や『1』[54] など、それなりのオールタイム・ベストが出ている現在、抹殺盤リスト入りだな。

CamScannerでスキャン

＊ 60年代後半、米サンフランシスコの"サマー・オブ・ラヴ"と同じく、ロンドンも新しい世代によるアート、ファッション、ロックの文化大革命の震源地となり、"スウィンギング・ロンドン"と謳歌された。

27 サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band

英 EMI（パーロフォン）1967.6.1
米キャピトル 6.2
東芝音楽工業（オデオン）7.5

A ① Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band ② With A Little Help From My Friends ③ Lucy In The Sky With Diamonds ④ Getting Better ⑤ Fixing A Hole ⑥ She's Leaving Home ⑦ Being For The Benefit Of Mr. Kite
B ① Within You Without You ② When I'm Sixty - Four ③ Lovely Rita ④ Good Morning Good Morning ⑤ Reprise Of Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band ⑥ A Day In The Life

2018年の第1回ナショナル・アルバム・デイ*を記念したランキングで、英国は本作を「最も愛されているアルバム」に選んだ。2019年米ローリング・ストーン誌は「史上最高のアルバム500」のトップにやはり本作を選んだ。まさしくビートルズのみならず20世紀ロックの絶対的最高傑作がこれだ。のはずなのだが、どうも日本ではこの話が素直に受け入れてもらえない。例えば「ランキング！ザ・ビートルズ」（シンコーミュージック・エンタテイメント／2013年）という本に「日本のビートルズ"達人100人"」が選んだアルバム・ベスト10があるが、『サージェント・ペパーズ～』は1位でないどころかなんと4位だ。あえて100人に言いたいが、キミたちはまったく"達人"ではない。『サージェント・ペパーズ～』を1位にした方々もこの際連帯責任だ。

なぜこんなことが起こるのかというと、日本の"達人"の多くが、ビートルズ解散後のファンだからではないか。巨大建造物のような本作があたかも一夜にして聳え立ったようなあの時代のインパクトを知らない。明確な世界観を主張する完成度の高いアルバムだから、70年代以降の多様化したロッ

クの時代に出会った"達人"には好みの合わない向きもあるのだろう。そうしたファンには、例えば百貨店のような「ホワイト・アルバム」[29]がいかようにも好みに応えてくれるのかもしれない。

加えて、本作からは英国に合わせて米国も日本も一切シングル・カットしなかったから、世の中に代表曲の記憶が共有されていない。トップ10シングルの有無がアルバム評価を必ずしも左右するとは思わないが、ミュージシャンがより広いファンに「俺の音楽を聴いてくれ!」と手を差し伸べるのがシングル盤だ。ベスト盤の「1」[54](2000年)の時だったか、東芝EMIのロック通の若い洋楽制作担当者を集めてビートルズ・ランチを開催したことがある。好きなのはあの曲この曲と話は大いに盛り上がるが、「どのアルバムに入ってたっけ?」と質問を挟むと正解が全く出てこない。人は音楽と"曲>アーティスト"の順で出会い、アルバムに至るには遠い距離があると改めて思った。例えば僕はオフコースの〈言葉にならない〉が好きでたまに歌うが、初出のアルバムを知らんもんね。つまり日本のビートルズ"達人"の多くはアルバムそのものに直面し評価するレベルに至っていないのではないか。

本作の頃には僕は高校1年生で、銀座のヤマハや十字屋にまでレコード漁りに足を延ばすようになっていた。両店とも当時としては輸入盤に大きなスペースを割いていたのだ。僕は輸入盤を買うことに決め、船便の入荷を待った。航空便は3,500〜4,000円だったと思うが、3週間ほど遅れて入ってくる船便は2,500円だった。夏休みのバイト代の大部をはたいて手に入れた時は、国内盤(2,000円)が出て既に1ヵ月は経っていたと思うが、この間にラジオで聴いた明らかな記憶はない。ラジオ局という"達人"のアルバムとの距離も遠い。

A面に針を落とすと、"ペパー軍曹の孤独な心クラブ・バンド"というグループのショーが幕を開ける。テント・ショーの趣だが、ただの入り口だ。A③〈ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ〉で、偽装のテント小屋は早々と背後の小宇宙の存在を明らかにする。この世界を自由な気持ちで旅してほしい。その果てには、驚くべきB⑥〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉との出会いが待っている。僕はごろごろ寝転がってアルバムを聴いていたと思うが、

CamScannerでスキャン

ポールの歌うサビが終わり、弦の不協和音の合奏が上昇を始めたころには背筋を伸ばしてステレオに向き合っていた。なんて壮大で、なんて冒険的な曲だ。その上で大衆性も失っていない。どこまで行くのかビートルズ。どこへ連れて行ってくれるのか。

これが"達人選"の4位なのだから（他のチャートも大なり小なり同じようなものだ）、日本は「サージェント・ペパーズ…」のみならずビートルズ後進国と言わざるを得ない。量的には世界第2のビートルズを擁する国が後進国とは。これって一流国と思っているうちに三流国、先進国と思っているうちに後進国になっていると思しき最近の日本と似ているよね！

第1部第6回でも書いたが、本作の英米日盤はそれぞれエンディングが違う。米国盤以外は〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉の長いエンディングの後にテープを逆回転させた数秒のバカ騒ぎ（やがて〈サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ〉と呼ばれる）があり、英国盤は最内周に刻まれて針を上げるまで繰り返す。国内盤は一度騒いで自らある〈フェイド・アウト〉ように編集されている。ポールのアイディアらしいが、「そんなにマジにのめり込まないでね」というドイツの劇作家ブレヒトの異化効果的なところがある。完成した作品への自信があればこその遊びと思うが。しかし米キャピトル盤にはこのバカ騒ぎがない。友人の国内盤を聴いて驚いたのなんの。おそらく米国では普及していたオート・チェンジャーとの兼ね合いがあって外したのだと思うが。プレイヤーのアームが最内周まで来ると自動的に上がってしまうのだ。

僕は米国盤で、客観性も冷静さも欠いた状態で（つまり異化効果なしで）アルバムを聴き終えたわけだが、だからことさら感動したということはない（と思う）。A&MのCTIレーベルは、本アルバム発売1週間後には〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉をジャズ・ギターのウェス・モンゴメリーでカヴァーし、これをタイトル曲にアルバムを制作した。さすがクリード・テイラー（CTIのプロデューサー）、シングルでも何でもない終曲を瞬時に選んで主役に抜擢したわけだ。秋の終わり頃に銀座十字屋に国内盤が並んでいるのを見つけ、好奇心で早速購入した。そこにはこの曲の全く新しい世界があった。世代的にも違いのあったジャズ・ファンとビートルズ・ファンの架け橋となった1曲だっ

CamScannerでスキャン

たと思う。〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉の長いエンディングにオーヴァーラップして、今も僕の頭の中ではウェスのグルーヴィなギターが流れ始める。

＊ 英国レコード産業協会と英国エンターテイメント小売業協会が"アルバム・フォーマットの音盤（LP）誕生70年"を記念して創設した「音楽アルバムを祝福する日」。第1回は2018年10月13日（土）、第2回は2019年10月12日（土）に開催された。

28 マジカル・ミステリー・ツアー
Magical Mystery Tour

米キャピトル 1967.11.27
東芝音楽工業（オデオン）1968.12.5
英 EMI（パーロフォン）1976. 11.19

A ① Magical Mystery Tour ② The Fool On The Hill ③ Flying ④ Blue Jay Way ⑤ Your Mother should Know ⑥ I Am The Walrus
B ① Hello Goodbye ② Strawberry Fields Forever ③ Penny Lane ④ Baby Your Richman ⑤ All You Need Is Love 愛こそはすべて

ポールがアイディアを出したというビートルズ初のテレビ用劇映画サントラ盤。英パーロフォンのオリジナルは12インチLPではなく、1967年12月8日にリリースされた、A①〜⑥を各面に振り分けた2枚組EPだ。東芝オデオンの国内盤は翌年3月10日の発売時はまずこれに準じたが、年末のクリスマス前には本LP盤も国内プレスしている。

映画は英本国では1967年12月26日にモノクロ、翌年1月5日にカラーでBBCが初放映したが、日本では68年クリスマスにTBSが放映予定を組んだ。9月28日に「ミュージック・ライフ」の企画で武道館で開催された「ビートルズ大会」で初上映され、10月6日日曜日、2度のTV放映権を手にしていたTBSは「ビートルズの不思議な旅」と題する午後の特番で初めて日本の電波に乗せた。しかしこの時、リールの放映順を取り違えるという稚拙なミスを犯し、ファンからのクレームが殺到して10日の再放送を余儀なくされてしまう。結果、クリスマスをピークに設定したプロジェクトはあえなく崩壊する。これを想定したに違いないLP盤の発売日も何か宙ぶらりんになってしまった。映画の内容そのままにプアな出発だったな。

CamScannerでスキャン

この作品も僕は最初から米キャピトル盤を手に入れていたが、むしろ眼目はB面にあった。映画については、内容のニュースが伝わって来れば来るほど興味を失う一方だった（ごめんねポール）。一方でB面は『サージェント・ペパーズ～』[27] 前後のシングル盤3枚をまとめており、その曲目たるやB①〈ハロー・グッドバイ〉（英米1967年11月）に始まり、B②〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉とB③〈ペニー・レイン〉の両A面シングル（同1967年2月）、そしてB⑤〈愛こそはすべて〉B④〈ベイビー・ユーアー・ア・リッチマン〉のシングル両面（同1967年7月）が並ぶ。わずか8ヵ月の間のなんという充実のラインナップ。しかもこの“合間”にシングルなしの『サージェント～』が出ているのだ。ビートルズの創作能力ここに極まれりという1967年だった。そしてこの年を締めくくったのが本作のサントラ・サイドだが、他が華やかに過ぎてやや沈んだ感がある。とはいえ、『サージェント～』B面冒頭の〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉から継続して作曲家ジョージの進境を示すA④〈ブルー・ジェイ・ウェイ〉には最初から惹かれたし、なによりジョンのA⑥〈アイ・アム・ザ・ウォルラス〉（シングル〈ハロー・グッドバイ〉のB面だった）が強烈だった。辞書と首っ引きで、そのサイケな歌詞の邦訳を試みたことを思い出す。メロには全く乗らなかったけれど。

アルバムの終曲〈愛こそはすべて〉は、1967年6月25日、通信衛星を使って世界24ヵ国を生放送で結ぶ世界初のTV番組「アワ・ワールド」で演奏するためにジョンが作曲したナンバーだ。日本時間では26日の朝5時（だったかな？）が英国代表ビートルズの出番で、早起きとは無縁の生活だったがこの日は朝4時前からテレビの前に座っていた。そしてイントロの〈ラ・マルセイエーズ〉が早朝の茶の間に流れて来た時の感激といったら。フランス国歌で元はフランス革命の革命歌とは、その時はもちろん知らなかった。演奏はストリングスを含むバック・トラックが前もって録音され、これにジョンのヴォーカル以下バンドの生演奏を重ねている。ビートルズを囲む仲間の中にはミック・ジャガー、キース・リチャーズ、エリック・クラプトン、マリアンヌ・フェイスフル、ピート・タウンゼントらの顔も見え、バック・コーラスで参加する。1967年は実にまったくビートルズのもの凄い一年だった。

29 ザ・ビートルズ（ホワイト・アルバム）
The Beatles

英 EMI（アップル）1968.11.22
米キャピトル（アップル）11.25
東芝 EMI（アップル）1969.1.21

A ① Back In The U.S.S.R. ② Dear Prudence ③ Glass Onion ④ Ob-La-Di, Ob-La-da ⑤Wild Honey Pie ⑥ The Continuing Story Of Bungalow Bill ⑦ While My Guitar Gently Weeps ⑧ Happiness Is A Warm Gun
B ① Martha My Dear ② I'm So Tired ③ Blackbird ④ Piggies ⑤ Rocky Racoon ⑥ Don't Pass Me By ⑦ Why Don't We Do It In The Road? ⑧ I Will ⑨ Julia
C ① Birthday ② Yer Blues ③ Mother Nature's Son ④ Everybody Got Something To Hide Except Me And My Monkey ⑤ Sexy Sadie ⑥ Helter Skelter ⑦ Long, Long, Long
D ① Revolution 1 ② Honey Pie ③ Savoy Truffle ④ Cry Baby Cry ⑤ Revolution 9 ⑥ Good Night

第1部第24回でも書いたように、落書きとは言わないが、ホワイトボードにメンバー4人が思い思いの絵を描いて埋めていったようなアルバムと言うか。だから『フォー・セール』[12] 以降のアルバムにあった世界観が、足し算で出来上がったこの（原始的な）アルバムからは見えてこない。もちろんいい曲はいくつもあるが、それ以上のことではない。今作では名目的なプロデューサーに甘んじるしかなかったジョージ・マーティンは言っている。「曲を厳選してシングル・アルバムに纏めたら傑作になっただろう」。その通りだ。過去に幾度もビートルズの音楽を研磨し輝かせてきたマーティンのマジックが加わるわけだし。この時期のビートルズは4人（というか主にリンゴを除く3人）が自由に録音し完パケを提出するような状況にあり、マーティンにも手の施しようがなかったのだろう。

1962年、オーディションでビートルズと契約したEMIのパーロフォン・レーベルのヘッド、ジョージ・マーティンは、持てる音楽的素養とセンスを惜しむことなく分け与え、彼らの粗削りな才能を世界のトップクラスのポピュラー音楽を生み出すものにまで磨き上げていく。しかし60年代半ば、EMIがマーティンに提示した社員プロデューサー契約の更新条件は、ビートルズが

CamScannerでスキャン

手にしていたものと比べるまでもなく極めて低いものだった。息子のジャイルズ・マーティンによれば、当時「マーティン家にビートルズの音楽が流れることはなかった」「ビートルズの話題はタブーだった」そうだ。かくて1965年、マーティンは独立して自身のエア・スタジオを設立し、外部プロデューサーとしてビートルズ作品の制作に関わり続けていく。例外はクレジットのみ載せた形の本作と、最初から蚊帳の外の『レット・イット・ビー』だ。

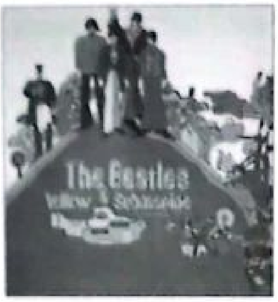
指揮官不在で求心力を欠いた本作だが、曲単位では、ポールのB⑦〈ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード〉とジョンのA⑧〈ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン〉のインパクトが僕には強烈な印象を残した。メロディックにしてアナーキーなシャウト・ヴォーカルともいうべき前者は、まさしく世界的騒乱の1968年の底流のようだった。構成的な後者は完成度も高く、ジョンの淡々としたヴォーカルが同じ時代をシニカルに見据えているようだった。

A⑦〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉もまた、ジョージの作曲がひとつの完成を見たかのごとき一曲だ。ギターを愛おしむような哀愁の調べにのって、ゲストのエリック・クラプトンがソロを取る。シングル・カットするならこの曲だろうな、と多くのリスナーが考える一曲かもしれないが、アルバム発売時点で英米日ともシングルは一切なく、英米はこの姿勢を貫いた。日本のみ、アルバムふた月後に独自のシングルを切っている。

〈ホワイル・マイ・ギター〜〉とA④〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉の両A面シングルだが、より強調され、ラジオ・チャートを席巻したのは後者だ。このシングルの選曲・推進者は東芝に入社したばかりの石坂敬一。やがて解散後の(『赤・青盤』からの)ビートルズの国内盤担当者として腕を振るい、"大人の文化"としてのビートルズを日本に定着させていくが、新入社員のこの頃はシングル盤のラジオ宣伝を担当していた。石坂の"理想主義"と童謡のような〈オブ・ラ・ディ〜〉は遠いが、ラジオ・ファンの広い人気という"現実"を実感したものだろう。この曲の宣伝に注力し、それが決して取っ付きのいいわけではない『ホワイト・アルバム』を手にする人々を増やす一助となったのは間違いない。

CamScannerでスキャン

30 イエロー・サブマリン
Yellow Submarine



英 EMI（アップル）1969.1.17
米キャピトル（アップル）1.13
東芝 EMI（アップル）3.21

A ① Yellow Submarine ② Only A Northern Song ③ All Together Now ④ Hey Bulldog ⑤ It's All Too Much ⑥ All You Need Is Love
B (all inst. by George Martin) ① Pepperland ② Sea Of Time ③ Sea Of Holes ④ Sea Of Monsters ⑤ March Of The Meanies ⑥ Pepperland Laid Waste ⑦ Yellow Submarine In Pepparland

ポールが推進したビートルズの"童謡路線"がファンの幅を広げたことには違いないが、僕は好きではない。だからこのサントラ盤にも映画にもとりわけ関心はなかった。どこで観たのかまったく記憶がないが、しかし映画の冒頭、灰色のロンドンの空を行く黄色い潜水艦が街をカラーに染めていくシーンを眼前にして、おお、と思った。これは素晴らしい作品なのではないか。ビートルズも同じだったらしく、制作半ばの試写を見て考え方を変え、自分たちも出演することに決めたのだ。エンディングでA③〈オール・トゥゲザー・ナウ〉を歌うシーンがそれだ。

当初ビートルズのアニメ映画化にメンバーは気乗りせず、一切新曲は書かず、既出の2曲（タイトル曲とA⑥〈愛こそはすべて〉と67年のセッションで没になっていた4曲（A②〜⑤）を提出するにとどめた。ただしこれら4曲はジョージがLSD体験を曲にしたA②〈オンリー・ア・ノーザン・ソング〉やリフの効いたジョンの魅力的なロックンロールA④〈ヘイ・ブルドッグ〉を含むなどそれなりのもので、いずれ4曲盤EPで発売しようというプランもあったようだ。

31 アビイ・ロード
Abbey Road

英 EMI（アップル）1969.9.26
米キャピトル（アップル）10.1
東芝音楽工業（アップル）10.21

A ① Come Together ② Something ③ Maxwell's Silver Hammer ④ Oh! Darling ⑤ Octopus's Garden ⑥ I Want You
B ① Here Comes The Sun ② Because ③ You Never Give Me Your Money ④ Sun King ⑤ Mean Mr. Mustard ⑥ Polythene Pam ⑦ She Came In Through The Bathroom Window ⑧ Golden Slumbers ⑨ Carry That Weight ⑩ The End ⑪ Her Majesty

スタジオ前の道の名をタイトルにし、ジャケットはその道を4人が渡る。そこにとりたてて驚くような発想はないが、1年後には、ロンドンはウェストミンスター地区の1931年以来のEMIレコーディング・スタジオは正式にアビイ・ロード・スタジオと改称し、ジャケットは夥しい数の追従者・模倣者を生んだ。ひとりだろうが何人だろうが、しかるべき道を左右に横切れば、そこはもう"アビイ・ロード"なのだ。

内容は、第1部第44回に書いたように僕はB面のメドレーが好きで繰り返し聴いた。とりわけB⑧〈ゴールデン・スランバー〉からB③〈ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー〉に寄り道してB⑨〈キャリー・ザット・ウェイト〉に至る流れといったら。メドレーのアイディアはポールだが、実際につないだのはジョージ・マーティンだ。ふたりの最後の共作にして最大の傑作といいたい。

CamScannerでスキャン

32 ヘイ・ジュード
Hey Jude

米キャピトル（アップル）1970.2.26
東芝音楽工業（アップル）4.26
英EMI（パーロフォン）1979.5.11

A ① Can't Buy Me Love ② I Should Have Known Better 恋する二人 ③ Paperback Writer ④ Rain ⑤ Lady Madonna ⑥ Revolution
B ① Hey Jude ② Old Brown Shoe ③ Don't Let Me Down ④ Ballad Of John And Yoko ジョンとヨーコのバラード

タイトル曲は米国におけるビートルズ最大のシングル・ヒット。A⑥〈レボリューション〉とのカップリングで1968年8月26日（国内盤は9月14日）に発売され、ビルボード誌9週連続1位、さらに〈抱きしめたい〉以来2度目の年間ランキング1位に輝いている。これをフィーチャーすべく米キャピトルが編纂したアルバムだが、実に奇妙な選曲になった。というか、アルバム化されていないビートルズのシングル曲を機械的に集めて発表順に並べたもので、"選曲"はされていないといった方が正しいかもしれない。考え方としては、後の補遺集『レアリティーズ』や『パスト・マスターズ』と同じだ。

A③〜B④は〈ハロー・グッドバイ〉（67年11月米発売）より後のシングル曲だ。冒頭に置かれた初期のヒット曲2曲A①〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉、A②〈恋する二人〉（ともに64年）がいかにも唐突だが、これらもまた米キャピトルにとっては初アルバム化なのだ。映画「ハード・デイズ・ナイト」を企画・制作したUAのレコード部門が優先的に発売したサントラ盤LPに2曲とも含まれているから、契約的に触れられなかったものかも知れない。

にしてもこの曲目を眺めて、やった！ これもあれもアルバムで持っていないぞ！ といって大喜びした米国ファンがどれだけいたのだろう。2週連続全米2位、400万枚に近いセールスという記録を残してはいるが。ビートルズの解散がリアルに見えてきた時期の発売だから、もうひと頑張りしてね！ という票も集めたかもしれない。ビートルズ最後のフォト・セッションから生まれたというジャケットにも何の工夫もなければ変哲もない。抹殺盤リスト入りだな、やっぱり。

CamScannerでスキャン

33 レット・イット・ビー
Let It Be

英 EMI（アップル）1970.5.8、box＝11.6
米キャピトル（アップル）5.18
東芝音楽工業（アップル）6.5

🅰 ① Two Of Us ② Dig A Pony ③ Across The Universe ④ I Me Mine ⑤ Dig It ⑥ Let It Be ⑦ Maggie Mae
🅱 ① I've Got A Feeling ② One After 909 ③ The Long And Winding Road ④ For You Blue ⑤ Get Back

発売上は本アルバムがビートルズ最後の“新曲による新作”ということになるが、録音は『アビイ・ロード』[31] よりこちらが早い。崩壊状態にあったバンドを立て直し「もう一度昔に戻ろう」というポールの提案に、「だったら本当の原点に帰ろうじゃないか」とジョンが応えて、長らくスタジオ活動しかして来なかったビートルズの“ライヴ・バンド・プロジェクト”は始まった。ならばリハから記録に残そう、ということで映画も生まれることになった。

このニュースをことさら歓迎した記憶がないのは、僕にとって既にビートルズがスタジオのバンドだったからだ。『ラバー・ソウル』あたりからだろうか、レコードはライヴ演奏の記録以上のもの、と信じるようになっていた。レコード作りとは、スタジオという理想の空間と設備の中で、音楽の最高の瞬間を永遠に盤上に定着させること。ある意味ビートルズから学んだ最大のことだ。

“プロジェクト”はゴールとなるライヴ会場をどこにするか決めかねていたが、第1部第37回に書いたような経緯で手近なアップル・ビル、つまり自社ビルの屋上が直前に選ばれた。いわゆる“ルーフトップ・セッション”だ。住宅街のビルの屋上のスーパーグループの無料コンサートは、イヴェントとしては魅力十分だが、レコード作りの場には程遠い。アルバムは1968年1月30日のルーフトップ・セッションと、翌31日のピアノ入りの曲のスタジオ・セッションからなるが、後者を含めビートルズの作品の標準に至っていないと思う。ビートルズはエンジニアを依頼していたグリン・ジョンズにアルバム化

を丸投げし、次なる『アビイ・ロード』[31] の準備に入った。本作のタイトルは、当初から『ゲット・バック』と決定していた。グリンはこのタイトルのアルバムを纏め上げたが、メンバーの賛同を得るには至らなかった。そしてマスター・テープは数ヵ月スタジオの倉庫に眠った後、ジョンとジョージのアイディアで、数々のヒット・ポップスで知られる名プロデューサー、フィル・スペクターの手に委ねられる。69年春に編集、リミックス、さらにドラムスとストリングスのオーヴァーダブが行なわれ、『ゲット・バック』は『レット・イット・ビー』に生まれ変わった。「昔に戻ろう」から「ありのままで」とは、極端な変化ではある。

本作は日本で最も売れたビートルズの新曲による新作アルバムだが、映画で話題が広がったことがあるにしても、牽引力は米日ともにファースト・シングルとなったタイトル曲、そして同じくセカンド・シングルとなったB③〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉のメロディだろう。ポール作の、ともに多くの日本人が好む、美しく覚えやすいバラードであることは書くまでもない。ちなみに英米ともに一番売れている新作アルバムはベスト盤を含めても『サージェント・ペパーズ～』[27] だ。

映画を日本でロードショー公開した有楽町すばる座は2019年10月21日に惜しまれて閉館した。現在『ロード・オブ・ザ・リング』のピーター・ジャクソン監督が、50周年の2020年公開に向けて同じ『レット・イット・ビー』の50時間分の映像素材から新たなドラマを紡ぎ出す作業を進めているという。『指輪物語』だったらビートルズにはとうのムカシに『ヘルプ!』があるなんて話もあるが、それがどんなものであれ、50周年の新版の公開にも関わって欲しかったな、すばる座。

34 フロム・ゼン・トゥ・ユー

From Then To You

アップル　1970.12.18

A ① 1963 ② 1964 ③ 1965 ④ 1966
B ① 1967 ② 1968 ③ 1969

ザ・ビートルズ・クリスマス・アルバム

The Beatles Christmas Album

アップル　1970.12.18

A ① 1963 ② 1964 ③ 1965 ④ 1966
B ① 1967 ② 1968 ③ 1969

1963年から69年、ビートルズは英オフィシャル・ファンクラブの会員にクリスマス・プレゼントを配布していた。メンバーのメッセージやジョーク、クリスマス・ソングの即席のコーラスなどを収めたプラスティック製のソノシートだ。各年度の内容については第1部第45回をご参照いただきたい。すでに事実上の解散状態にあったビートルズが新版を準備するわけもなく、1970年度は過去の7作を纏めたLP盤がプレゼントされた。タイトルは"彼らからFrom Them"ではなく"あの頃からFrom Then"で、ビートルズが健在だった"あの時代"をファンに伝える。米のファンクラブはソノシートを配布してこなかったが、ビートルズ最後のクリスマスだからか、このLPを会員に限定販売することに決めた。ジャケットはご覧の通り大きく異なるが。

一般に市販されない商品とはいえ、数万人の会員はいただろうからそれなりの数が出回ったはずだが、僕は現物を見たことがない。あるいは、所詮お遊びの録音と知って気にもしていなかったから見過ごしたのかも知れないが。

CamScannerでスキャン

35

ザ・ビートルズ／1962年～1966年（赤盤）

The Beatles / 1962～1966

英EMI（アップル）1973.4.19
米キャピトル（アップル）4.2
東芝音楽工業（アップル）5.20

A ① Love Me Do ② Please Please Me ③ From Me To You ④ She Loves You ⑤ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑥ All My Loving ⑦ Can't Buy Me Love
B ① A Hard Day's Night ② And I Love Her ③ Eight Days A Week ④ I Feel Fine ⑤ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑥ Yesterday
C ① Help! ② You've Got To Hide Your Love Away 悲しみをぶっとばせ ③ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ④ Day Tripper ⑤ Drive My Car ⑥ Norwegian Wood ノルウェーの森
D ① Nowhere Man ひとりぼっちのあいつ ② Michelle ③ In My Life ④ Girl ⑤ Paperback Writer ⑥ Eleanor Rigby ⑦ Yellow Submarine

世の中にビートルズ以上に巨大なロック・バンドがあるだろうか。少なくとも日本にはひとつだけある。解散後のビートルズだ。60年代半ば、人気もセールスもベンチャーズの遥か後塵を拝し、1967年の傑作「サージェント・ペパーズ～」[27] の評価もセールスも世界に遠く及ばず、1970年の最終作「レット・イット・ビー」[33] に至って最大の認知とセールスを獲得した。そんな中で、これまでになく次のビートルズ作品が待たれていたと思う。解散したのは承知の上だが、メンバーが個々にアルバムを発表し、4人の名前と個性が一般に広がり始めてもいた時期だ。そこへ登場し、解散後のビートルズのスタート・ラインとなったのが本作「1962年～1966年（赤盤）」と、次項の「1967年～1970年（青盤）」[36] という前後期2巻各2枚組のベスト盤だ。

前編である本作はビートルズがコンサート活動を続けていた時期、アルバムでは「リボルバー」[24] までの楽曲を収める。多くは英米のシングル曲あるいはそれに準ずる曲だが、C⑤（ドライヴ・マイ・カー）からD④（ガール）まで、全26曲中6曲を「ラバー・ソウル」[19] の収録曲が占めるのが目を引く。選曲はアラン・クラインとされる。自らの利益に走り、後に悪名のみ高い69年以来のビジネス・マネージャーだが、「ラバー・ソウル」の偏重

は最大公約数的なビートルズの魅力を伝える上では結果的に好判断ではあった。同アルバム中の決して（最初から）目立つ曲ではないD③〈イン・マイ・ライフ〉は、ある時期から不思議に人気が高いとは第1部で幾度か書いた。SMAPのころの木村拓哉がTVでビートルズのNo.1ソングに挙げていたが、日本の思わぬファンを動員したことはあるにしてもそれ以上ではない。〈イン・マイ・ライフ〉人気は世界的なものなのだ。本『赤盤』中に、D②〈ミッシェル〉と〈ガール〉の間という2曲の名バラードに飾られる好位置を手にしたことも大きな理由ではないか、と僕は秘かに考えていたが。

36 ザ・ビートルズ／1967年~1970年（青盤）

The Beatles / 1967～1970

英EMI（アップル）1973.4.19
米キャピトル（アップル）4.2
東芝音楽工業（アップル）5.20

A ① Strawberry Fields Forever ② Penny Lane ③ Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band ④ With A Little Help From My Friends ⑤ Lucy In The Sky With Diamonds ⑥ A Day In The Life ⑦ All You Need Is Love 愛こそはすべて
B ① I Am The Walrus ② Hello Goodbye ③ The Fool On The Hill ④ Magical Mystery Tour ⑤ Lady Madonna ⑥ Hey Jude ⑦ Revolution
C ① Back In The U.S.S.R. ② While My Guitar Gently Weeps ③ Ob-La-Di, Ob-La-Da ④ Get Back ⑤ Don't Let Me Down ⑥ The Ballad Of John And Yoko ジョンとヨーコのバラード ⑦ Old Brown Shoe
D ① Here Comes The Sun ② Come Together ③ Something ④ Octopus's Garden ⑤ Let It Be ⑥ Across The Universe ⑦ The Long And Winding Road

後編の『青盤』は何よりA面が素晴らしい。両A面シングル盤として先取りされたA①〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉、A②〈ペニー・レイン〉を含め、A⑥〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉までは『サージェント・ペパーズ~』[27]に結実するセッションからの曲だ。A⑤〈ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ〉を選んでいるのも嬉しい。ジョンの夢幻的な1曲で、（最近エリカ様*で思わぬ話題の）初期の合成ドラッグ、LSDをタイトルに織り込んでいるという理由から発表当時の英米では放送禁止になった。

CamScannerでスキャン

他の3面に取り立てて気に入るところはなかったが、後期のシングル・ヒットや人気曲をカヴァーしてはいる。しかも、『赤盤』のLP4面約60分に対し100分を収録する大徳用盤だ。僕は迷わずこちらを先に手を入れたが、世の中は圧倒的に赤盤を選んでいた記憶がある。もちろんレコードの価値は尺ではないし、人々はやはりビートルズのプリミティヴな楽曲をまずは選ぶのだな、と思った記憶がある。『レット・イット・ビー』[33]における"ライヴ・バンド"のルーフトップ・コンサートに直結するのは、確かに『赤盤』の時代なのだ。

＊沢尻エリカのこと。2019年11月16日に麻薬取締法違反で逮捕され、後に有罪となった。

37 ロックン・ロール・ミュージック

Rock 'N' Roll Music

英EMI（パーロフォン）1976.6.7
米キャピトル　6.10
東芝EMI（オデオン）6.20

A ① Twist And Shout ② I Saw Her Standing There ③ You Can't Do That ④ I Wanna Be Your Man ⑤ I Call Your Name ⑥ Boys ⑦ Long Tall Sally のっぽのサリー
B ① Rock And Roll Music ② Slow Down ③ Kansas City ～ Hey, Hey, Hey, Hey! ④ Money ⑤ Bad Boy ⑥ Matchbox ⑦ Roll Over Beethoven
C ① Dizzy Miss Lizzy ② Anytime At All ③ Drive My Car ④ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘 ⑤ The Night Before ⑥ I'm Down ⑦ Revolution
D ① Back In The U.S.S.R. ② Helter Skelter ③ Taxman ④ Got To Get You Into My Life ⑤ Hey Bulldog ⑥ Birthday ⑦ Get Back

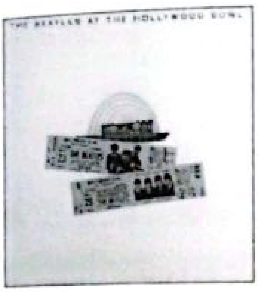
『赤盤』[35]のビートルズはあえて言うならロックンロール・バンドだ。そして『青盤』[36]の時代、これをはるかに越えていく。本作は『赤盤』の選曲を4年後に補強するアルバムとも言える。同じく2枚組だが、とりわけAB面はオリジナル曲だけで編まれた『赤盤』との重複が丁寧に避けられており、変わって人気のカヴァー曲が多くを占める。東芝EMIの石坂敬一の提案から始まった企画とも言われる通り、A①〈ツイスト・アンド・シャウト〉は世界的な人気曲にしても、A面を閉じる〈のっぽのサリー〉、B面を開く〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉というポイントの2曲は、ともに日本で圧倒

的な支持を得たナンバーだ。

D面は『ホワイト・アルバム』[29] 以降の楽曲を収めるが、D②〈ヘルター・スケルター〉の破壊力はロックンロールをはるか後方にして進化した“ヘヴィ・メタル”に近い。70年代以降のハード・ロック・ファンに信奉者が多いように思う。意味は“しっちゃかめっちゃか”だ。

38 アット・ザ・ハリウッド・ボウル

The Beatles At The Hollywood Bowl



英 EMI（パーロフォン）1977.5.6 ／米キャピトル 5.4
ザ・ビートルズ・スーパー・ライヴ！（アット・ハリウッド・ボウル）
東芝 EMI（オデオン）5.25

A ① Twist And Shout ② She's A Woman ③ Dizzy Miss Lizzy ④ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑤ Can't Buy Me Love ⑥ Things We Said Today 今日の誓い ⑦ Roll Over Beethoven
B ① Boys ② A Hard Day's Night ③ Help! ④ All My Loving ⑤ She Loves You ⑥ Long Tall Sally のっぽのサリー

ハリウッド・ボウルはLAのハリウッドにある野外音楽堂で、1万7,000人以上の観客を収容する。1964年8月23日と65年8月30日、この会場で開催されたコンサートのライヴ盤を計画し、英EMIはすべてを録音するが、観客の悲鳴や嬌声、音のバランスの問題などで諦めざるを得なかった。10数年後、元々企画に乗り気でなかったジョージ・マーティンが最新の技術でリストアし、本作は生まれた。倉庫に眠っていたマスター・テープをEMIに思い出させたのは、ビートルズのハンブルク時代の私家録音『ライヴ・アット・ザ・スタークラブ1962』を正式に発売しようというレコード会社が現れたからだ。ビートルズ・サイドはこれを阻止しようとしたが果たせず、“本物”のライヴ録音をぶつける道を選んだのだ。本作は、英米では『スタークラブ』の3週間前に発売されている。

先にも書いたように、生演奏の単なる記録としてのライヴ盤に僕はほとんど関心がないし、本作も取り立てて注目すべき作品とは思わない。ただし曲目は魅力的だ。A①～⑤とB②③の7曲が65年の録音だが、B②〈ア・ハー

CamScannerでスキャン

ド・デイズ・ナイト〉、B③〈ヘルプ!〉と、映画のテーマ曲の疾走感ある演奏が2曲続くのが嬉しい。翌年の武道館ではどちらもやってくれなかったが。

ちなみに米キャピトルの本社、通称キャピトル・タワーとハリウッド・ボウルは1マイルと離れていないところにあり、ともに特徴的な外観もあってハリウッドの観光ポイントになっている。後者はその名の通りボウル状の曲面でステージの屋根がデザインされ、前者は積み重ねたレコード盤を模した形状の円筒形のビルだ。

39 ラヴ・ソングス
Love Songs

英 EMI(パーロフォン)1977.11.19
米キャピトル 10.21
東芝 EMI(オデオン)11.5

A ① Yesterday ② I'll Follow The Sun ③ I Need You ④ Girl ⑤ In My Life ⑥ Words Of Love ⑦ Here, There And Everywhere
B ① Something ② And I Love Her ③ If I Fell 恋におちたら ④ I'll Be Back ⑤ Tell Me What You See ⑥ Yes It Is
C ① Michelle ② It's Only Love ③ You're Going To Lose That Girl 恋のアドバイス ④ Every Little Thing ⑤ For No One ⑥ She's Leaving Home
D ① The Long And Winding Road ② This Boy こいつ ③ Norwegian Wood ノルウェーの森 ④ You've Got To Hide Your Love Away 悲しみをぶっとばせ ⑤ I Will ⑥ P.S. I Love You

〈ラヴ・ミー・ドゥ〉も〈抱きしめたい〉も〈プリーズ・プリーズ・ミー〉も、初期ビートルズはすべて率直なラヴ・ソングだが本作が選ぶところではない。前年発売した『ロックン・ロール・ミュージック』[37]と対照をなす"ラヴ・バラーズ"と考えた方が、本作の内容に則している。ただし多数のカヴァー曲を収めていた『ロックン・ロール〜』とは異なり、全曲オリジナルだ。

A①〈イエスタデイ〉、A⑦〈ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア〉、B②〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉、C①〈ミッシェル〉、C⑤〈フォー・ノー・ワン〉、C⑥〈シーズ・リーヴィング・ホーム〉、D①〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉などポール作の人気曲がまずは目を引く。父親がジャズ・ピアノを弾き、

CamScannerでスキャン

幼いころからアメリカのスタンダード曲への憧れを持っていたというポールのこれら美しいメロディが、ビートルズに特別な立ち位置を与えたことは論を待たない。一般家庭のリヴィング・ルームに最も近いロック・バンドという立ち位置だ。

40 レアリティーズ（英版）
Rarities

英EMI（パーロフォン）1979.10.12
東芝EMI（オデオン）10.5

A (1) Across The Universe (2) Yes It Is (3) This Boy こいしくて (4) The Inner Light (5) I'll Get You (6) Thank You Girl (7) Komm, Gib Mir Deine Hand 抱きしめたい（ドイツ語）
B (1) Rain (2) She's A Woman (3) Matchbox (4) I Call Your Name (5) Bad Boy (6) Slow Down (7) I'm Down (8) Long Tall Sally のっぽのサリー

1978年12月、英パーロフォンは英国のオリジナルLP12作をボックス・セット「The Beatles collection」として発売する。ベスト盤等は除き、新曲を収録して発表されたアルバムすべてだが、英ではEP2枚組で発売された「マジカル・ミステリー・ツアー」が黙殺されており不完全なコレクションと言わざるを得ない。「レアリティーズ」はこのセット13作目のいわばボーナス・ディスクで、別テイク、別編集やオリジナル・アルバム未収録曲を集めている。しかし選曲は極めて恣意的で、シングルのみで発売されていたヒット曲〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉や〈レット・イット・ビー〉が収められているわけではない。確かに"レア"じゃないものね。

ボックス・セットの10ヵ月後にシングル・アルバムとして晴れて独立したのが本作だが、そんなコレクションだから単体で評価する意味はほとんどない。オリジナルは全部持っているからボックスいらないんだよね、というファン向けだったというか。次項の米キャピトル版も合わせて抹殺可。

CamScannerでスキャン

41　レアリティーズ（米版）
Rarities

米キャピトル 1980.3.24
レアリティーズ Vol.2 東芝EMI（オデオン）5.5

A ① Love Me Do ② Misery ③ There's A Place ④ Sie Liebt Dich シー・ラヴズ・ユー(ドイツ語) ⑤ And I Love Her ⑥ Help! ⑦ I'm Only Sleeping ⑧ I Am The Walrus

B ① Penny Lane ② Helter Skelter ③ Don't Pass Me By ④ The Inner Light ⑤ Across The Universe ⑥ You Know My Name ⑦ Sgt. Pepper Inner Groove

英パーロフォンの前記ボックス・セットと『レアリティーズ』を横目で?見ていたキャピトルが、ゼロから編んだ米国盤。選曲の基準は同じとはいえ、ベースとなるオリジナル・リリースも価値観も異なり、本作の内容となった。今さらなんでだよ、というA⑤〈アンド・アイ・ラヴ・ハー〉はエンディングの違う別ヴァージョンだし、米オリジナル・アルバムに漏れていたA①〜④を除いては大なり小なり別編集、別ミックスだ。

驚いたのはB⑦〈サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ〉で、わずか2秒のトラックだ。以前にも書いたように、米盤『サージェント・ペパーズ〜』は悪ふざけのようなこのエンディング部分を外している。"サージェント・ペパー内周の溝"というのは、タイトルというより説明だ。いずれにしてもこの2秒間はビートルズのアルバム中のクレジットを初めて手に入れたが、しかし一般に言う"ビートルズの全213曲"にはもちろんカウントされていない。

東芝EMIは英パーロフォン盤に続き、こちらも『レアリティーズVol.2』のタイトルで国内発売している。

CamScannerでスキャン

42 ビートルズ・バラッズ
The Beatles Ballads

英 EMI（パーロフォン） 1980.10.20
ビートルズ・バラード・ベスト20 東芝 EMI（オデオン） 12.21

A ① Yesterday ② Norwegian Wood ノルウェーの森 ③ Do You Want To Know A Secret ④ For No One ⑤ Michelle ⑥ Nowhere Man ひとりぼっちのあいつ ⑦ You've Got To Hide Your Love Away 悲しみをぶっとばせ ⑧ Across The Universe ⑨ All My Loving ⑩ Hey Jude
B ① Something ② The Fool On The Hill ③ Till There Was You ④ The Long And Winding Road ⑤ Here Comes The Sun ⑥ Blackbird ⑦ And I Love Her ⑧ She's Leaving Home ⑨ Here, There And Everywhere ⑩ Let It Be

つい3年前の1977年に英米日で出た『ラヴ・ソングス』[39]との内容の違いが今ひとつ判然としないが、企画の最大の動機はAB各面の最後に置かれたA⑩〈ヘイ・ジュード〉とB⑩〈レット・イット・ビー〉ではないか。ビートルズ最後期を飾る大人気“バラード”2曲だが、いわゆる“ラヴ・ソング”とは違う。精神性の高い前者はいわば人生訓、後者はジョンの息子ジュリアンを激励するメッセージだ。これらを活用したアルバムを作ろう!というわけだ。

全20曲1時間弱がシングル・アルバムに収められており、徳用盤ではある。が、うち半数は『ラヴ・ソングス』と重複する。それだけが理由ではあるまいが、米キャピトルは本作の米国発売をスルーしている。

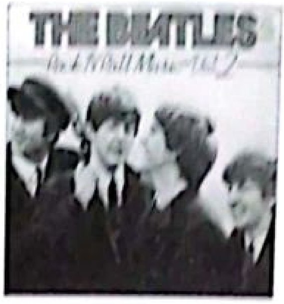
ジャケットはスコットランド出身のイラストレイター、ジョン・パトリック・バーンによる。『ホワイト・アルバム』[29]が『A Doll's House人形の家』と仮に呼ばれていたころに、候補のひとつとして描かれたものだという。廃物利用のあてがいぶちだ。一部の評価は高いようだが、僕の趣味ではないし、そもそもまったくバラードらしくもビートルズらしくもない。4人の表情も不気味だし、ジョンの生命力のない間延びした顔は、間もなく訪れる悲劇を予感させるようでもある。ジョンがマンハッタンの自宅前の路上で射殺されるのは、本作が英国で発売されてひと月半後の80年12月8日のことだ。あの頃の記憶を喚起する作品とはいえるが、抹殺可。

CamScannerでスキャン

43

ロックン・ロール・ミュージックVol.1
Rock 'N' Roll Music Vol.1

ロックン・ロール・ミュージックVol.2
Rock 'N' Roll Music Vol.2



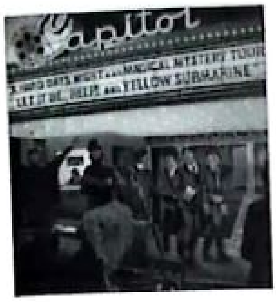
Vol.1、2ともに英EMI（ミュージック・フォー・プレジャー）1980.10.24
米キャピトル 10.24
東芝EMI（オデオン）11.5

ここには「ラヴ・ソングス」[39]と「バラッズ」[42]のねじれた関係はなく、ビートルズ最初のテーマ別コンピ「ロックンロール・ミュージック」[37] 2枚組を単純にシングル・アルバム2巻にばらし、新たなジャケットを付したものだ。ミュージック・フォー・プレジャーは英EMIの廉価版レーベルだから、発売の目的のひとつはビートルズ盤の値下げを試みたものかもしれない。その意味では、狭いジャンルからマニアックな曲までを多く集めた「ロックン・ロール・ミュージック」は、他を傷つけるところの少ないアイテムであったには違いない。

しかしいかに廉価盤とはいえ、ジャケットは手抜きにすぎる。構図を含め写真からは何ひとつオーラが伝わってこないし、これでは1960年代ロックの凡百の追従者たちとあまり変わらないではないか。この時代から1980年代前半、EMIのビートルズの扱い方はやや粗雑に見える。解散後のバンドを現役時代同様に扱うのは一般的には無理というものだが、ビートルズは「ラヴ・ソングス」[39]まではそれが可能であったように思う。とりわけスロースターターだった日本では。

リヴァプール・インスティテュートで同窓のポールとジョージと親交があり、ロード・マネージャーとしてビートルズを助けていたニール・アスピノールは、1968年、請われてアップルの社長に就任するが、最初は適任者が現われるまでの中継ぎくらいのつもりだったようだ。その企画力と実行力でアップルの求心力となり、"解散後のビートルズ"の新しい時代を作っていくことになるには、まだ数年待たなければならない。

44　リール・ミュージック
Reel Music



英EMI（パーロフォン）1982.3.29 ／米キャピトル3.22
東芝EMI（オデオン）4.21

A ① A Hard Day's Night ② I Should Have Known Better 恋する二人 ③ Can't Buy Me Love ④ And I Love Her ⑤ Help! ⑥ You've Got To Hide Your Love Away 悲しみはぶっとばせ ⑦ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑧ Magical Mystery Tour
B ① I Am The Walrus ② Yellow Submarine ③ All You Need Is Love 愛こそはすべて ④ Let It Be ⑤ Get Back ⑥ The Long And Winding Road

1982年、米国の「ハード・デイズ・ナイト」ニュー・プリント上映に合わせて米キャピトルが企画したビートルズ主演映画のサントラ曲集。A①～④が「ハード・デイズ・ナイト」(1964年初公開)、A⑤～⑦が「ヘルプ!」(1965年)、A⑧とB①が「マジカル・ミステリー・ツアー」(1967年)、B②③が「イエロー・サブマリン」(1969年)、B④～⑥が「レット・イット・ビー」(1970年)からだ。よくできた選曲と思うが、このアルバムをことさら記憶しているファンと出会ったことはないし、世界的にもセールスは期待を下回った。思うに、これらの曲が既に（最初から？）映画音楽を超えて自立したヒット曲だったからだと思う。ではこれを一般的なベスト物と思って聴くと、時代とスタイルが映画で区切られているから、間に入るべきヒット曲をいくつもスキップしている。実際、これら14曲はすべて『赤・青盤』[35・36]に発表順で収められているのだ。

本アルバムに伴い、収録曲中の7曲をメドレーにつないだトラックがシン

グル盤で発売されている。〈ビートルズ・ムーヴィー・メドレー〉とタイトルされ、4分間にA⑧〈マジカル・ミステリー・ツアー〉〜B③〈愛こそはすべて〉〜A⑥〈悲しみはぶっとばせ〉〜A②〈恋する二人〉〜A①〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉〜A⑦〈涙の乗車券〉〜B⑥〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉が順に並ぶ。スターサウンドと称するオランダのグループが1981年1月に発表し、世界的にヒットを記録したビートルズ・メドレー〈スターズ・オン45〉を多分に意識した企画だった。

45 20グレイテスト・ヒッツ(米国盤)

20 Greatest Hits

米キャピトル 1982.10.11 ／東芝 EMI（オデオン）12.1

A ① She Loves You ② Love Me Do ③ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ④ Can't Buy Me Love ⑤ A Hard Day's Night ⑥ I Feel Fine ⑦ Eight Days A Week ⑧ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑨ Help! ⑩ Yesterday ⑪ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ⑫ Paperback Writer
B ① Penny Lane ② All You Need Is Love 愛こそはすべて ③ Hello Goodbye ④ Hey Jude ⑤ Get Back ⑥ Come Together ⑦ Let It Be ⑧ The Long And Winding Road

46 20グレイテスト・ヒッツ(英国盤)

20 Greatest Hits

英 EMI（パーロフォン）1982.10.18

A ① Love Me Do ② From Me To You ③ She Loves You ④ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑤ Can't Buy Me Love ⑥ A Hard Day's Night ⑦ I Feel Fine ⑧ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑨ Help! ⑩ Day Tripper ⑪ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう
B ① Paperback Writer ② Yellow Submarine ③ Eleanor Rigby ④ All You Need Is Love 愛こそはすべて ⑤ Hello Goodbye ⑥ Lady Madonna ⑦ Hey Jude ⑧ Get Back ⑨ The Ballad Of John And Yoko ジョンとヨーコのバラード

英EMIからのビートルズの本格的デビュー・シングル〈ラヴ・ミー・ドゥ〉の発売日は1962年12月5日だ。これはデビュー20周年を祝福する20曲入りのベスト盤。ビートルズ初のシングル・アルバムによるオールタイム・ベストだ。米国と英国が同タイトルで別途20曲を選び抜いており、それぞれ一

見、さらに一聴した時の“完成度”は高い。と言って不動の20曲には遠く、ビートルズの世界ははるかに広大で両者には6曲もの異同がある。B①〈ペニー・レイン〉を加え、B⑦〈レット・イット・ビー〉、B⑧〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉で終わっていく米盤の方が上出来と僕は思うが。

英米盤を合体し、なぜかどちらにも収められていない〈サムシング〉を加えた全27曲が、後のビートルズ・ベスト決定版『1』[54]の収録曲だ。

47 パスト・マスターズVol.1
Past Masters Vol.1

英 EMI（パーロフォン）1988.3.8

CD ① Love Me Do ② From Me To You ③ Thank You Girl ④ She Loves You ⑤ I'll Get You ⑥ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑦ This Boy こいつ ⑧ Komm, Gib Mir Deine Hand 抱きしめたい（ドイツ語）⑨ Sie Liebt Dich シー・ラヴズ・ユー（ドイツ語）⑩ Long Tall Sally のっぽのサリー ⑪ I Call Your Name ⑫ Slow Down ⑬ Match Box ⑭ I Feel Fine ⑮ She's A Woman ⑯ Bad Boy ⑰ Yes It Is ⑱ I'm Down

48 パスト・マスターズVol.2
Past Masters Vol.2

英 EMI（パーロフォン）1988.3.8

CD ① Day Tripper ② We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ③ Paperback Writer ④ Rain ⑤ Lady Madonna ⑥ The Inner Light ⑦ Hey Jude ⑧ Revolution ⑨ Get Back ⑩ Don't Let Me Down ⑪ The Ballad Of John And Yoko ジョンとヨーコのバラード ⑫ Old Brown Shoe ⑬ Across The Universe ⑭ Let It Be ⑮ You Know My Name

“解散後のビートルズ”の新しい時代は、1987年2月に始まり翌年3月の本作（2巻）まで続く全213曲CD化とともに幕を開ける。CD時代は1980年代半ばには明らかに始まっていたが、ビートルズに慌てる理由はなかった。従来の契約にはないCDという新メディアを含む再契約を時間をかけてEMIと整え、最後に悠然と腰を上げげたという感じだった。この時期、CDの

CamScannerでスキャン

生産量は世界的にLPを超える。

CD化を機に、EMIとアップルはビートルズのカタログの世界基準を明確にした。英国版オリジナル新録音アルバム12タイトル（[01] [02] [08] [12] [17] [19] [24] [27] [29] [30] [31] [33]）に米国版LP『マジカル・ミステリー・ツアー』[28] を加えた13作だ。さらにこれらから漏れている楽曲や正式発売された別ヴァージョンをまとめ、新たにリリースしたのが本作の2巻だ。また、以降のビートルズはすべてCDオリジナルで、世界同時発売が基本となる。

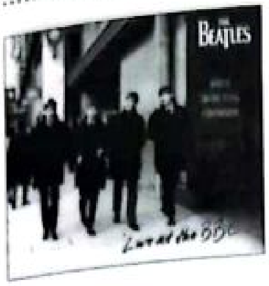
Vol.1の18曲、Vol.2 の15曲の計33曲は録音順に並んでいる。前者は1962年10月のレコード・デビューから1965年7月のシングル〈ヘルプ!〉B面の⑱〈アイム・ダウン〉まで、後者が1965年12月の両A面シングルで②〈恋を抱きしめよう〉とカップリングされた①〈デイ・トリッパー〉からビートルズ"最後の録音"まで。

Vol.1冒頭の①〈ラヴ・ミー・ドゥ〉はデビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』[01] に収録されたヴァージョンで、シングル盤のリンゴではなく、リンゴに少々不満を感じたジョージ・マーティンがドラマーをセッション・ドラマーのアンディ・ホワイトに替えて録音したものだ。Vol.2の終曲 ⑮〈ユー・ノウ・マイ・ネーム〉は1967年の『マジカル・ミステリー・ツアー』セッション中に生まれたが2年以上も未完成のまま放置され、その後作者ジョンの強い意思で1969年末までにヴォーカルやサウンド・エフェクトが重ねられて完成を見る。シングル〈レット・イット・ビー〉のB面として発表されたのは翌1970年3月のことだ。

CamScannerでスキャン

49 ザ・ビートルズ・ライヴ!! アット・ザ・BBC

Live At The BBC



英 EMI（アップル）1994.11.30

CD1 ① Speech : Beatle Greetings ② From Us To You ③ Speech : Riding On A Bus ④ I Got A Woman ⑤ Too Much Monkey Business ⑥ Keep Your Hands Off My Baby ⑦ I'll Be On My Way ⑧ Young Blood ⑨ A Shot Of Rhythm And Blues ⑩ Sure To Fall ⑪ Some Other Guy ⑫ Thank You Girl ⑬ Speech : Sha-La-La-la-La! ⑭ Baby It's You ⑮ That's All Right ⑯ Carol ⑰ Soldier Of Love ⑱ Speech : A Little Rhyme ⑲ Clarabella ⑳ I'm Gonna Sit Right Down And Cry ㉑ Crying, Waiting, Hoping ㉒ Speech : Dear Wack! ㉓ You Really Got A Hold On Me ㉔ To Know Her Is To Love Her ㉕ A Taste Of Honey 蜜の味 ㉖ Long Tall Sally のっぽのサリー ㉗ I Saw Her Standing There ㉘ The Honeymoon Song ㉙ Johnny B. Goode ㉚ Memphis, Tennessee ㉛ Lucille ㉜ Can't Buy Me Love ㉝ Speech : From Fluff To You ㉞ Till There Was You

CD2 ① Speech : Crinsk Dee Night ② A Hard Day's Night ③ Speech : Have A Banana! ④ I Wanna Be Your Man ⑤ Speech: Just A Rumour ⑥ Roll Over Beethoven ⑦ All My Loving ⑧ Things We Said Today 今日の誓い ⑨ She's A Woman ⑩ Sweet Little Sixteen ⑪ Speech : 1822 ! ⑫ Lonesome Tears In My Eyes ⑬ Nothin' Shakin' ⑭ The Hippy Hippy Shake ⑮ Glad All Over ⑯ I Just Don't Understand ⑰ So How Come ⑱ I Feel Fine ⑲ I'm A Loser ⑳ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘 ㉑ Rock And Roll Music ㉒ Ticket To Ride 涙の乗車券 ㉓ Dizzy Miss Lizzy ㉔ Kansas City ～ Hey, Hey, Hey, Hey! ㉕ Speech : Set Fire To That Lot! ㉖ Matchbox ㉗ I Forgot To Remember To Forget ㉘ Speech: Love These Goon Shows! ㉙ I Got To Find My Baby ㉚ Ooh! My Soul ㉛ Speech : Ooh, My Arms ㉜ Don't Ever Change ㉝ Slow Down ㉞ Honey Don't ㉟ Love Me Do

『アット・ザ・ハリウッド・ボウル』[38] 以来17年半ぶりの未発表音源による公式アルバムだ。"ライヴ" とタイトルにあるがコンサート録音ではなく、英国の公共放送BBCに残したスタジオ・ライヴ（スタジオでの生演奏）を厳選して収めている。ミュージシャンのユニオン（組合）が強い英国では当時レコードのOAが規制され、ミュージシャン自身の演奏が奨励されており、ビートルズもまたBBCラジオへの番組出演を重ねた。レコード・デビュー前の1962年3月から功成り名遂げた1965年6月まで、その数は計52番組に及び、全92曲、270テイク以上を残した。本アルバムはその中からジョージ・マーティンが選曲し制作したものだ。公式に発売された25曲（うちカヴァー13曲）と、オリジナルのCD1 ⑦〈アイル・ビー・オン・マイ・ウェイ〉を含むレコー

CamScannerでスキャン

ド録音を残していない31曲の、計56曲を2枚組CDに収めている。

総じてロックンロール・バンドのプリミティヴなパワーと、英国のラジオ・リスナーの度肝を抜いたであろう新しい時代の感覚が同居する。これを一級のレコード作品とは思わないが、ビートルズ初期の演奏の実力と音楽の動員力を伝える一級の記録ではある。

50 アンソロジー1
Anthology 1

英EMI（アップル）1995.11.21

CD1 ① Free As A Bird ② Speech : John Lennon ③ That'll Be The Day ④ In Spite Of All The Danger ⑤ Speech : Paul McCartney ⑥ Hallelujah I Love Her So ⑦ You'll Be Mine ⑧ Cayenne ⑨ Speech : Paul (McCartney) ⑩ My Bonnie ⑪ Ain't She Sweet いい娘じゃないか ⑫ Cry For A Shadow ⑬ Speech : John Lennon ⑭ Speech : Brian Epstein ⑮ Searchin' ⑯ Three Cool Cats ⑰ The Sheik Of Araby ⑱ Like Dreamers Do ⑲ Hello Little Girl ⑳ Speech: Brian Epstein ㉑ Besame Mucho ㉒ Love Me Do ㉓ How Do You Do It ㉔ Please Please Me ㉕ One After 909 - sequence ㉖ One After 909 - complete ㉗ Lend Me Your Comb ㉘ I'll Get You ㉙ Speech : John Lennon ㉚ I Saw Her Standing There ㉛ From Me To You ㉜ Money ㉝ You Really Git A Hold On Me ㉞ Roll Over Beethoven

CD2 ① She Loves You ② Till There Was You ③ Twist And Shout ④ This Boy こいつ ⑤ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑥ Speech: Eric Morecambe And Ernie Wise ⑦ Moonlight Boy ⑧ Can't Buy Me Love ⑨ All My Loving ⑩ You Can't Do That ⑪ And I Love Her ⑫ A Hard Day's Night ⑬ I Wanna Be Your Man ⑭ Long Tall Sally のっぽのサリー ⑮ Boys ⑯ Shout ⑰ I'll Be Back - take 2 ⑱ I'll Be Back - take 3 ⑲ You Know What To Do ⑳ No Reply - demo ㉑ Mr. Moonlight ㉒ Leave My Kitten Alone ㉓ No Reply ㉔ Eight Days A Week- sequence ㉕ Eight Days A Week- complete ㉖ Kansas City ~ Hey, Hey, Hey, Hey!

"アンソロジー・プロジェクト"は映像商品、書籍、録音（CDとLP同時発売）の3部門で構成されるビートルズ大回顧だ。1995年11月、本作の発売と、米ABCによるヒストリー映像の3日間の発売前放映（計5時間）に始まり、2000年10月、ビートルズ唯一の"自伝"とも呼ばれる書籍「ザ・ビートルズ・アンソロジー」*の世界13ヵ国同時刊行で完結する。

CamScannerでスキャン

他の2部門がビートルズを改めて広く紹介するものであったのに対し、録音部門は幻の録音の発掘というマニアックな色彩が強い。冒頭の"新曲"CD1①〈フリー・アズ・ア・バード〉を除き、このVol.1はデビュー前夜から『フォー・セール』[12]までの時期をカヴァーするが、いくつかの曲を聴いていると、記憶の中のサイレント映画がトーキーで甦ったような感覚がある。ビートルズの前身クオリーメンがリヴァプールのスタジオで自費録音しアセテート盤1枚2面を残した③〈ザットル・ビー・ザ・デイ〉と④〈イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デンジャー〉**、1962年元日の不調に終わったデッカのオーディションよりCD1⑮〈サーチン〉、6月6日のEMI／パーロフォンのオーディションよりCD1㉑〈ベサメ・ムーチョ〉と同㉒〈ラヴ・ミー・ドゥ〉、1963年11月4日プリンス・オブ・ウェールズ・シアターのCD2③〈ツイスト・アンド・シャウト〉前の、「安い席の方は手拍子を、そうでない方は宝石を鳴らしてください」というジョンの名高いフリなどなど。

新曲〈フリー・アズ・ア・バード〉は、1977年にジョンが作った未完成のデモテープにポールとジョージが手を加え、ELOのジェフ・リンの協力を得て完成させた。ポールとジョージとリンゴにとって、1970年1月3日の〈アイ・ミー・マイン〉以来24年ぶりのスタジオでの共同作業だった。シングル・カットされ、英米でベスト10入りを記録。

* 日本語版はザ・ビートルズ・クラブ訳、リットー・ミュージック刊

** 2018年、ギネスブックが世界で一番高価なレコードに認定（第1部第23回参照）

CamScannerでスキャン

51 アンソロジー2

Anthology 2

英 EMI（アップル）1996.3.18

CD1 ① Real Love ② Yes It Is ③ I'm Down ④ You've Got To Hide Your Love Away 悲しみはぶっとばせ ⑤ If You've Got Trouble ⑥ That Means A Lot ⑦ Yesterday ⑧ It's Only Love ⑨ I Feel Fine ⑩ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑪ Yesterday ⑫ Help! ⑬ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘 ⑭ Norwegian Wood ノルウェーの森 ⑮ I'm Looking Through You 君はいずこへ ⑯ 12-Bar Original ⑰ Tomorrow Never Knows ⑱ Got To Get You Into My Life ⑲ And Your Bird Can Sing ⑳ Taxman ㉑ Eleanor Rigby - strings only ㉒ I'm Only Sleeping - rehearsal ㉓ I'm Only Sleeping - take 1 ㉔ Rock And Roll Music ㉕ She's A Woman

CD2 ① Strawberry Fields Forever - demo sequence ② Strawberry Fields Forever - take 1 ③ Strawberry Fields Forever - take 7 & edit piece ④ Penny Lane ⑤ A Day In The Life ⑥ Good Morning Good Morning ⑦ Only A Northern Song ⑧ Being For The Benefit Of Mr. Kite - takes 1 & 2 ⑨ Being For The Benefit Of Mr. Kite - take 7 ⑩ Lucy In The Sky With Diamonds ⑪ Within You Without You - inst. ⑫ Sgt. Peppers Lonely Hearts Club Band - reprise ⑬ You Know My Name ⑭ I Am The Walrus ⑮ The Fool On The Hill - demo ⑯ Your Mother Should Know ⑰ The Fool On The Hill - take 4 ⑱ Hello Goodbye ⑲ Lady Madonna ⑳ Across The Universe

「1」と同じく"新曲"から始まる。冒頭のCD1①〈リアル・ラヴ〉は1979年にジョンが録音したデモテープにポール、ジョージ、リンゴが手を加えたものだ。他は1965年の「ヘルプ!」[17]から1968年2月の〈レディ・マドンナ〉までの録音セッションが残した未発表曲／テイクを集めている。

聴きものは「リボルバー」[24]セッションからのCD1⑰〜㉓及び「サージェント・ペパーズ〜」を生んだセッションからのCD2①〜⑥だ。スタジオにおけるレコード制作の方法論をジョージ・マーティンとともに確立した時期のビートルズが、マスター・テイクに着地するまでいかなるトライアルを重ねたか、その一端を知ることができる。

両者に挟まれた2曲のロックンロールのライヴ録音CD1㉔と㉕は少々場違いな感があるが、66年7月の武道館公演の公式レコード化だ。

CamScannerでスキャン

52 アンソロジー3
Anthology 3

英EMI（アップル）1996.10.28

CD1 ① A Beginning ② Happiness Is A Warm Gun ③ Helter Skelter ④ Mean Mister Mustard ⑤ Polythene Pam ⑥ Glass Onion ⑦ Junk ⑧ Piggies ⑨ Honey Pie ⑩ Don't Pass Me By ⑪ Ob-La-di, Ob-La-Da ⑫ Good Night ⑬ Cry Baby Cry ⑭ Blackbird ⑮ Sexy Sadie ⑯ While My Guitar Gently Weeps ⑰ Hey Jude ⑱ Not Guilty ⑲ Mother Nature's Son ⑳ Glass Onion ㉑ Rocky Raccoon ㉒ What's The New Mary Jane ㉓ Step Inside Love ～ Los Paranoias ㉔ I'm So Tired ㉕ I Will ㉖ Why Don't We Do It In The Road ㉗ Julia

CD2 ① I've Got A Feeling ② She Came In through The Bathroom Window ③ Dig A Pony ④ Two Of Us ⑤ For You Blue ⑥ Teddy Boy ⑦ Medley : Rip It Up ～ Shake Rattle And Roll ～ Blue Suede Shoes ⑧ The Long And Winding Road ⑨ Oh! Darling ⑩ All Things Must Pass ⑪ Mailman, Bring Me No More Blues ⑫ Get Back ⑬ Old Brown Shoe ⑭ Octopus's Garden ⑮ Maxwell's Silver Hammer ⑯ Something ⑰ Come Together ⑱ Come And Get It ⑲ Ain't She Sweet いい娘じゃないか ⑳ Because ㉑ Let It Be ㉒ I Me Mine ㉓ The End

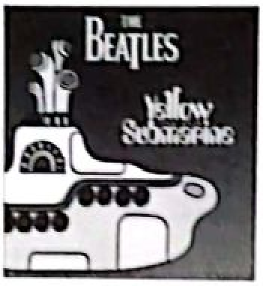
「3」に"新曲"はなく、オープニングはジョージ・マーティン1968年のオーケストラ録音だ。これに『ホワイト・アルバム』[29]、『アビイ・ロード』[31]、『レット・イット・ビー』[33]という最後期3作（1968～70年）の未発表曲／テイクが続く。大部を占めるのは、CD1②～㉗の『ホワイト・アルバム』セッションだ。マスター・テイクではエリック・クラプトンがエレクトリック・ギターのソロを聴かせるCD1⑯〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉の本作のヴァージョンは、ジョージが自身の生ギターの伴奏で歌っている。マスター・テイクでは炸裂するCD1②〈ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン〉や同㉖〈ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード〉の初期テイクはどこか控えめというか、小粒な演奏だ。

Vol.1～3のジャケットを並べると、ビートルズ史のパノラマになっている。初めてアップルにニール・アスピノールを訪ねた1997年、彼のオフィスの壁に原画が並べて飾られていたのを思い出す。改めて眺めて、「おお、そーだったよね」と思った。デザインはビートルズがハンブルクで知り合ったドイツ人ク

ラウス・フォアマンだ。「リボルバー」[24] のジャケットで1967年のグラミー賞ベスト・デザインを手にして以来のビートルズ作品になる。ハンブルク時代のビートルズからベースを譲り受けてミュージシャンとしても活動を始め、ジョンとヨーコのプラスティック・オノ・バンドや、ジョージやリンゴのソロ・アルバムにも参加している。

53 イエロー・サブマリン～ソングトラック～

Yellow Submarine Songtrack



英EMI（アップル）1999.9.13

CD ① Yellow Submarine ② Hey Bulldog ③ Eleanor Rigby ④ Love You To ⑤ All Together Now ⑥ Lucy In The Sky With Diamonds ⑦ Think For Yourself 嘘つき女 ⑧ Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band ⑨ With A Little Help From My Friends ⑩ Baby You're A Rich Man ⑪ Only A Northern Song ⑫ All You Need Is Love 愛こそはすべて ⑬ When I'm Sixty Four ⑭ Nowhere Man ひとりぼっちのあいつ ⑮ It's All Too Much

オリジナルのサントラ盤『イエロー・サブマリン』[30] の収めるビートルズは6曲、うち初レコード化の新曲は4曲のみで、B面すべてをジョージ・マーティン・オーケストラの演奏が占め、決して手を出しやすい作品ではなかった。劇中で流れるビートルズ曲は中期以降のものばかりで、オリジナルの発売から日の浅いこれらを（あえて?）極力外した結果だ。映画公開30周年記念盤の本作は劇中曲のほぼすべてを収め、ビートルズ初めてのリミックスを試みている。マルチトラックまで戻ったマスタリングのやり直しだ。映画の再上映及びDVD最新版（ワーナー映画とワーナー・ホームビデオ）のための5.1chサラウンドのミックスも同時進行で行なわれた。録音された時代を含め、サイケデリック的でポップ・アート的なアニメの世界で流された楽曲の数々は、そうしたトライアルを施すこれ以上はない素材であったと思う。

今さらタイトル曲ではないだろうと日本で僕らは②〈ヘイ・ブルドッグ〉をリード曲に立てた。ジョンの隠れたロックンロール名曲だが、この時に“発見”したファンも多かったのではないか。程よく知られていなかったので。

54 ザ・ビートルズ 1
The Beatles 1

英 EMI（アップル）1999.9.13

CD ① Love Me Do ② From Me To You ③ She Loves You ④ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑤ Can't Buy Me Love ⑥ A Hard Day's Night ⑦ I Feel Fine ⑧ Eight Days A Week ⑨ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑩ Help! ⑪ Yesterday ⑫ Day Tripper ⑬ We Can Work It Out 恋を抱きしめよう ⑭ Paperback Writer ⑮ Yellow Submarine ⑯ Eleanor Rigby ⑰ Penny Lane ⑱ All You Need Is Love 愛こそはすべて ⑲ Hello Goodbye ⑳ Lady Madonna ㉑ Hey Jude ㉒ Get Back ㉓ The Ballad Of John And Yoko ジョンとヨーコのバラード ㉔ Something ㉕ Come Together ㉖ Let It Be ㉗ The Long And Winding Road

英米でシングル・チャートNo.1を記録した曲だけを集めてベスト盤を組むという話をニール・アスピノールから聞かされた時、素晴らしい!と思った。これまでのベスト盤のような恣意性を排しているので。しかし同時に不満や不安を感じたのは、第1部28回で書いたとおりだ。それでは英米ともにシングル盤のない『サージェント・ペパーズ～』[27]や『ホワイト・アルバム』[29]から1曲も入らないではないか。そしてビートルズの変化と進化の8年間をいかなるジャケットで表現するのか。結論は、見事なタイトルとジャケット・デザインが選曲への危惧も払拭してくれた感じだ。タイトルを『1』と知り、ラフ・デザインを見せられて思った。なるほど、ビートルズの"全史"を総括するのは写真でもイラストでもない。象徴的な言葉とシンボルなのだ。"1"はトップ・スターに相応しいし、0か1かというディジタルの2進法がある程度浸透して、ある意味時代を象徴する数字にもなっていた。

僕らはこの"わかりやすい"アルバムでビートルズのファン層を改めて広めようと考え、従来のファンには耳ダコの〈レット・イット・ビー〉をあえてラジオ・トラックに選んだ。一般の新譜と差別せず、全国のラジオ局のヒット・チャート入りを狙ったのだ。これにはニールも大いに賛同し、ラジオ用の1曲入りプロモ・シングル作成を即座に許可してくれた。ビートルズは世界基準で動いていたから、日本独自に何かを進めてようとしてもめったに許可の下りない時代だったのだが。1,000枚ほど作成したと思うが、今や結構なコレクタ

ーズ・アイテムなのではないか。「1」は300万枚売れ、日本で最も売れたビートルズ作品となった。英米で最も売れたアルバムは『サージェント・ペパーズ〜』[27]で、「1」は両国ともこれに続いている。

55 レット・イット・ビー…ネイキッド
Let It Be...Naked

英EMI（アップル）2003.11.17

CD ① Get Back ② Dig A Pony ③ For You Blue ④ The Long And Winding Road ⑤ Two Of Us ⑥ I've Got A Feeling ⑦ One After 909 ⑧ Don't Let Me Down ⑨ I Me Mine ⑩ Across The Universe ⑪ Let It Be（⑫ Fly On The Wall - bonus EP）

『レット・イット・ビー』[33] はジョンとジョージにアルバム化を委ねられたフィル・スペクターが、「ゲット・バック」セッションにストリングスやドラムスのオーヴァーダブを駆使して完成させた。結果を聴いたポールは愕然としたという。蚊帳の外に置かれ、一切を知らされていなかったのだ。もとよりオーヴァーダブの多用は、かつてのライヴ・バンド時代への“ゲット・バック”を望んだポールの当初の発想の対極にある。そして30余年後、“着衣の『レット・イット・ビー』”は厚着を脱ぎ捨て、“裸の『レット・イット・ビー』”がその姿を現わす。着衣版から〈ディグ・イット〉と〈マギー・メイ〉が外され、ルーフトップ・コンサートで演奏されながら収録されなかった人気曲 ⑧〈ドント・レット・ミー・ダウン〉が加わる。曲順も大幅に変更されている。

ポールがピアノの弾き語りで歌うバラード④〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉や ⑪〈レット・イット・ビー〉を含めライヴ感を強調した『ネイキッド』はしかし、生まれたままの裸を見せてくれるわけではもちろんなかった。最新の技術が可能にした、いわばヴァーチャルな裸だ。捻じ曲げられていた真実がついに取り戻されたといったイメージが伝わり、発売当初の売れ行きは驚異的だったが、じきに鎮静化した。“着衣”にとって代わるどころか、“あ

CamScannerでスキャン

り得べきもうひとつの正式作品"のポジションを手にするにも至らなかったように思う。タイトルがやや短期的なセンセーショナリズムに走り過ぎていたこともあろう。加えてポールには悪いが、とりわけ上記バラードのフィル・スペクター・ヴァージョンが世に十分過ぎるほどなじんでいた。『ゲット・バック』にゲット・バックしたわけだから、今となっては『ゲット・バック』というタイトルで独り立ちさせておいた方がよかったかも。

56 LOVE
Love

英 EMI（アップル）2006.11.20

CD ① Because ② Get Back ③ Glass Onion ④ Eleanor Rigby ～ Julia - transition ⑤ I Am The Walrus ⑥ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑦ Drive My Car ～ The Word 愛の言葉 ～ Look What You're Doing ⑧ Gnik Nus ⑨ Something ～ Blue Jay Way - transition ⑩ Being For The Benefit Of Mr. Kite ～ I Want You ～ Helter Skelter ⑪ Help! ⑫ Blackbird ～ Yesterday ⑬ Strawberry Fields Forever ⑭ Within You Without You ～ Tomorrow Never Knows ⑮ Lucy In The Sky With Diamonds ⑯ Octopus's Garden ⑰ Lady Madonna ⑱ Here Comes The Sun ～ The Inner Light - transition ⑲ Come Together ～ Dear Prudence ～ Cry Baby Cry - inst. ⑳ Revolution ㉑ Back In The U.S.S.R. ㉒ While My Guitar Gently Weeps ㉓ A Day In The Life ㉔ Hey Jude ㉕ Sgt. Peppers Lonely Hearts Club Band - reprise ㉖ All You Need Is Love

カナダの曲技／舞踏団シルク・ドゥ・ソレイユのショウ「ラヴ」は、ビートルズがスターダムを駆け上がりやがて解散するまでを辿る。そしてフィナーレは感動の再結成だ。ラスヴェガスのミラージュ・ホテルは多数のスピーカーを備えた円形劇場を新設し、2006年6月30日に初演、現在も大好評続演中だ。2000年頃ジョージが友人との雑談の中で着想したらしいが、実現まで進めたのはニール・アスピノールだろう。ポール、ジョージとハイスクールの同窓で、デビュー以来ビートルズと行動を共にして来たニールだからこそまとめられたのではないか。ポール、リンゴ、ヨーコ、そしてジョージ未亡人オリヴィアというアップルの4人の権利者は、必ずしも同じ方向を向いているわけではない。『アンソロジー』[50～52]、『イエロー・サブマリン～ソングト

CamScannerでスキャン

ラック〜」[53]、「1」[54]、「レット・イット・ビー…ネイキッド」[55]などに続いて、2007年に健康上の理由で引退するニールが最後に手掛けたプロジェクトだ。

全編に流れるビートルズの音楽は、ジョージ・マーティンが息子ジャイルズをアシスタントに、マルチ・トラックまで戻って再構成したものだ。「アンソロジー」「イエロー・サブマリン・ソングトラック」「レット・イット・ビー・ネイキッド」で試みたものがすべてここに集約されている。①〈ビコーズ〉のアカペラに始まり、②〈ゲット・バック〉には〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉イントロのギターと〈ジ・エンド〉のドラムスとギター・ソロを導入するなど、全編様々な驚きに満ちている。"ビートルズ"を創り熟知するものだけが可能な技だ。㉒〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉は「アンソロジー」で紹介された生ギター・ヴァージョンにマーティンがストリングスを重ねているが、マスター・テイクと甲乙つけ難い。

僕らはオビにあえて「ザ・ビートルズ"最新作"」を謳ったが、「ビートルズがひとりも関わっていないのに最新作とは何事か」というレベルの低い批判を某ライターが某週刊誌に寄せたのには呆れた。ビートルズを知るほど、そしてマーティンを知るほど彼が音楽的に"5人目以上"のビートルズであることくらいわかるはずだ。そのマーティンが自ら手掛けた過去を総ざらいして創り上げた世界なのだ。オビの惹句を批判するのは結構だが、もう少しマシな理由を考えてやってくれ。こういう輩にはビートルズに関わらないでほしいものだ。

57 オン・エア～ライヴ・アット・ザ・BBC Vol.2

On Air - Live At The BBC Vol.2

英EMI（アップル）2013.11.11

CD1 ① And Here We Are Again - speech ② Words Of Love ③ How About It, Gorgeous? - speech ④ Do You Want To Know A Secret ⑤ Lucille ⑥ Hey, Paul… - speech ⑦ Anna ⑧ Hello! - speech ⑨ Please Please Me ⑩ Misery ⑪ I'm Talking About You ⑫ A Real Treat - speech ⑬ Boys ⑭ Absolutely Fab - speech ⑮ Chains ⑯ Ask Me Why ⑰ Till There Was You ⑱ Lend Me Your Calm ⑲ Lower 5E - speech ⑳ The Hippy Hippy Shake ㉑ Roll Over Beethoven ㉒ There's A Place ㉓ Bumper Bundle - speech ㉔ P.S. I Love You ㉕ Please Mr. Postman ㉖ Beautiful Dreamer ㉗ Devil In Her Heart ㉘ The 49 Weeks - speech ㉙ Sure To Fall ㉚ Never Mind, Eh? - speech ㉛ Twist And Shout ㉜ Bye Bye - speech ㉝ John : Pop Profile – speech

CD2 ① I Saw Her Standing There ② Glad All Over ③ Lift Lid Again - speech ④ I'll Get You ⑤ She Loves You ⑥ Memphis, Tennessee ⑦ Happy Birthday Dear Saturday Club ⑧ Now Hush, Hush - speech ⑨ From Me To You ⑩ Money ⑪ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑫ Brian Bathtubes - speech ⑬ This Boy ⑭ If I Wasn't In America - speech ⑮ I Got A Woman ⑯ Long Tall Sally ⑰ If I Fell 恋におちたら ⑱ A Hard Job Writing Them - speech ⑲ And I Love Her ⑳ Oh, Can't We? Yes We Can - speech ㉑ You Can't Do That ㉒ Honey Don't ㉓ I'll Follow The Sun ㉔ Green With Black Shutters - speech ㉕ Kansas City ~ Hey, Hey, Hey, Hey! ㉖ That's What We're Here For - speech ㉗ I Feel Fine - studio outtake ㉘ Paul: Pop Profile - speech ㉙ Ringo : Pop Profile - speech

『ライヴ・アット・ザ・BBC』[49]を忘れたころにやってきた続編。1963年1月～66年5月までにビートルズがBBC放送に残した40曲の演奏と23のインタヴューが、2枚のCD（あるいは3枚のLP）に纏められた。重複は一切なく、前作もリマスターされ新たなパッケージで『Vol.1』として同日に再発売されている。

これでもか、とばかり前期ビートルズのライヴ・バンドとしての実力を強調する。後にポールが「僕らは素晴らしかった」「なかなかイケてるちょっとしたバンド」と自賛するだけのものは間違いなく伝わってくる。しかしその後のスタジオから生まれる音楽の高みをビートルズに教えられた僕らの世代（1951年生まれ）には、こういう発掘を諸手を挙げて歓迎する、という気

分にはならない（よね？）。とはいえCD 1 ㉑〈ロール・オーヴァー・ベートーヴェン〉や同 ㉖〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉などのカヴァーや、それ以上に同 ⑨〈プリーズ・プリーズ・ミー〉、CD2 ⑪〈抱きしめたい〉などのオリジナルのフレッシュな演奏はつい何度も聴き返してしまうが。

58 ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル

Live At The Hollywood Bowl: Eight Days A Week

ユニバーサルミュージック（アップル）2016.9.15

CD ① Twist And Shout ② She's A Woman ③ Dizzy Miss Lizzy ④ Ticket To Ride 涙の乗車券 ⑤ Can't Buy Me Love ⑥ Things We Said Today 今日の誓い ⑦ Roll Over Beethoven ⑧ Boys ⑨ A Hard Day's Night ⑩ Help! ⑪ All My Loving ⑫ She Loves You ⑬ Long Tall Sally のっぽのサリー ⑭ You Can't Do That ⑮ I Want To Hold Your Hand 抱きしめたい ⑯ Everybody's Trying To Be My Baby みんないい娘 ⑰ Baby's In Black

1977年発表の『アット・ザ・ハリウッド・ボウル（邦題『ザ・ビートルズ・スーパー・ライヴ！』）』［38］の末尾に⑭～⑰の4曲を追加収録したリマスター版CD／LP。ロン・ハワード監督によるドキュメンタリー映画『ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK - The Touring Years』の公開（英米は2016年9月15日、日本は9月26日）に合わせて発売された。『ダ・ヴィンチ・コード』の監督だからそれなりに期待するところもあったが、結局は何の変哲もないライヴ・バンドの記録だった。しかもラスト・シーンはルーフトップ・コンサートの〈ドント・レット・ミー・ダウン〉だ。2020年春現在『レット・イット・ビー』の素材から新たな世界を生み出そうとしているというピーター・ジャクソン監督は、同じ"間違い"だけはしないでくださいね。

第３部

新旧・英日ビートルズ対談

このコーナーでは、ビートルズに縁の深い４人との対談をお届けする。
初代プロデューサーでビートルズを日本に広めた高島弘之
本場イギリスでビートルズに接した、行方と同い年のピーター・バラカン
行方のもとでビートルズ“第３期”を盛り上げた藤村美智子と
小社のビートルマニア吉田聡志だ。

CamScannerでスキャン

プレスリーの時代からの大きな変わり目だということを意識しましたよ。だから〈悲しき街角〉とか〈涙のワルツ〉みたいなオールディーズ的なタイトルは絶対に避けないといけないな、と。

ビートルズの存在を日本で知らしめた破天荒なアイディアマンのあの手この手の戦略とは?

1934年生まれ。
東芝レコード時代に、ビートルズ担当ディレクターとして日本語タイトルを決めると共に、自ら宣伝を展開して一大ブームを作り上げた。そのあと日本人アーティスト担当ディレクターとして、和製ポップス、カレッジ・ポップス・ブームを仕掛け、黛ジュン、由紀さおり、フォーク・クルセダーズ、谷村新司等をデビューさせた。東芝のあと、キャニオン・レコード（現ポニーキャニオン）を経て、ポリグラム・グループ（現ユニバーサル ミュージック）の中にあって、チャペル・インターソング社長、ロンドン・レコード副社長、ポリドール・レコード常務などを歴任。現在は、高嶋音楽事務所を主宰して、数多くの人気クラシック・アーティストをプロデュースしている。

CamScannerでスキャン

■ビートルズと出会い、"仕掛人"始動

行方　高嶋さんって何年に東芝に入社されたんでしたっけ？

高嶋　1959年の12月です。

行方　中途入社だったんですね。

高嶋　東芝のキャップ・レコード（アメリカのレコード会社）の募集があったので採用試験を受けたんです。キャップだから当然「英語はどうですか？」って面接で聞かれたんですよ。のちに僕の上司になる二荒（芳忠）さんから。ただね、僕は英語がダメなんです。中学生のときに英語教師と大喧嘩しちゃってね、「二度と英語は勉強するものか」って。それで早稲田大学に入ったときから演出家になろうと思っていたので、フランスものの芝居を自ら翻訳したりして、フランス語はものすごく勉強したんです。だから「英語は？」って聞かれたとき、その辺は僕の答え方の上手さですよ。「英語はともかくとしまして、フランス語はすごいですよ」って言ったんです。当時は大変なシャンソン・ブームですよ。そしたら二荒さんは「それは助かるなあ。うちはシャンソンが多いから」となって入ったわけですね。

歴代のEMIのポップス担当というのはシャンソンが中心だったから、東大の仏文でも優秀なふたりが入社していたんです。でも、ひとりは結婚でリタイア、もうひとりはソルボンヌへ留学。それでいよいよ「フランス語ができる高嶋」という触れ込みで、キャップからコンバートされたんですよ。

行方　異動先はオデオンですか？

高嶋　いやいや、EMIのポップスはクラシックもポップスも全部エンジェル。コロムビア・レーベルは日本コロムビアが持っていたんですけど、その頃に東芝が取り戻したんです。だからクリフ・リチャードは最初、日本コロムビアから発売になっていたんです。

行方　じゃあクリフを東芝に引っ張ってきて、オデオンで出して当たったんですね。これがある種、イギリスものの初ヒットというか。

高嶋　それまでアルマ・コーガン（クリフ・リチャード以前のイギリスのトップ・シンガー）でちっちゃなヒットはありましたが、大ヒットと言えるのはクリフのときですね。だけどもクリフのサウンド自体がアメリカのオールディーズと同じだから、イギ

CamScannerでスキャン

リスの音楽っていう印象がそんなになかったんです。

それで、ビートルズのサンプル盤がたしか、62年の10月か11月ぐらいに届いたの。イギリスは10月発売だけれども。

行方　シングル盤ですよね？

髙嶋　うん。届いたサンプル盤を、僕は「〈ラヴ・ミー・ドゥ〉？　なんじゃこりゃ？」くらいにしか思わなくて、発売しようともしなかった。その翌年に〈プリーズ・プリーズ・ミー〉のシングル盤、それからLPがきた。〈プリーズ・プリーズ・ミー〉がよかったから、僕は会社が購読していた「ニュー・ミュージカル・エキスプレス」と「メロディ・メイカー」を見てみることにしたんです。すると英語の分からない僕から見ても、ビートルズの記事が躍っている感じがしたのね。それまでのアーティストと違う、「これは？」と思うところがあって。それで「いい加減にやるとエライことになるな」と。

行方　サラリーマン的にエライことになると。

髙嶋　だからなんとかこれを、いろんなかたちでしっかり出そうと決意したわけです。一度出して失敗すると、次に売り出すのはすごいエネルギーがかかるんですよ。だから一気にいかないといけないなと思いまして。それから〈フロム・ミー・トゥ・ユー〉〈シー・ラヴズ・ユー〉〈抱きしめたい〉が出てくるわけだけど、〈プリーズ・プリーズ・ミー〉を持って僕はまず放送局をまわったんですよ。「イギリスで今こんなに話題なんだ」って。

行方　〈プリーズ・プリーズ・ミー〉だけを持っていったんですか？

髙嶋　他にも〈フロム・ミー・トゥ・ユー〉とかね。ところがクリフ・リチャードの大ヒットがあったっていうのに、「イギリス」そのもののインパクトが全然ない。「イギリスものは当たらない」って構えでね、放送局行っても誰もノラないわけよ。

行方　〈ラヴ・ミー・ドゥ〉をいきなり持ってこられても困るだろうけど、〈プリーズ・プリーズ・ミー〉はちょっと考えてよって感じですよね。

髙嶋　オーバーに言うと「今週インドでこれを出したら1位になったんですよ！」というのと同じ感じ。ただ、当時東京放送（TBS）の女性ディレクターが「髙嶋さん、売れるかどうか知らないけど、私はこの曲好きですよ」って言ってくれて。男っていうのはそれまでの出来事から判断するけどね、女性はそんなこと関係なく、聴いたもので反応するなってそのとき思ったんです。だから、女の子を対

象に売っていこうと、最初からアイドル路線でいきましたよ。

「作品はいいのに」とか、「イギリスでなくてアメリカだったら放送局も注目するのに」とか言ったってしょうがない。そうじゃなくて、すごいムーヴメントが起こっているように見せようと思ったんです。

当時東芝は、今の有楽町マリオンがあった場所にオフィスが入っていたもんですから、下に降りるとすぐに西銀座デパートがあった。その2階の京橋テーラーに飛び込んで、僕は大ハッタリをかますわけですよ。「エラいことが起こりましたよ。イギリスでビートルズっていうすごいグループが出てきた。間もなく日本に上陸する。そのときは彼らの着ている服を作れば絶対売れる。私は彼らの権利を全部任されていますから、ご近所のよしみでその権利を譲ります」って。

週刊「平凡パンチ」1964年6月15日号

行方　今で言うとほとんど詐欺ですね(笑)。

高嶋　「条件は全国で売り出すこと。ビートルズ4人の写真をジャケットの袖口に貼ること。それに、権利を譲ってあげるんだから30着は私にください」ってね。それを東芝のセールスマンと宣伝に着せて、銀座4丁目とかの盛り場を歩かせたんです。「ビートルズっていうすごいグループがやってくる」って言わせて。

行方　髪の毛ももちろん伸ばして？

高嶋　僕の部下の松井を「ちょっと来い」って五反田の床屋に連れて行ったんですね。そこで、理髪師の新人が練習する長い髪の毛のカツラがあるじゃない。それを松井に被せて切ってもらって、「早くも街の床屋に現れた、ビートルズ・カットを希望する青年」っていう映像を「日刊スポーツ」の中村さんっていう報道カメラマンに撮ってもらったんです。その映像をテレビの芸能ニュースで流してもらってね。

それから、「女性セブン」のカメラマンと記者を東芝へ呼んで「東芝全社員ビートルズ・カット」っていうのも撮ってもらいましたね。水に濡らした櫛で前髪をたらして正面から見ると、ビートルズ・カットになるんですよ。でもそれをやったの

は、わずか15人か20人ぐらい。それを、「ビートルズ・ブームがやってきた」っていう現象に見せたわけです。(編注:「ビートルズ・カット」は今でいう「マッシュルーム・カット」だが、当時は「マッシュルーム・カット」の名称はなかった)

その頃、音楽評論家の福田一郎さんが「ビートルズなんか日本で絶対成功しない」って言いまわっていたんですよ。それで福田先生が会社に来たときに、みんなの前だと失礼だから柱の陰に呼んで「先生、ビートルズは絶対ダメだと仰っているようだけど、ビートルズは間違いなく日本に上陸します。大ヒットします。僕は福田先生が大好きだから言いますけど、そのとき、評論家としてビートルズはダメだって言っていたら、申し訳ないけど福田一郎の名はこの世から完璧に消えます」って伝えたんです。

行方　でもきっと本当にそうなってましたよね。

高嶋　「先生、もう一度サンプル盤を渡しますから、お聴きください」と言ったら、1週間ほど経ってから会社にいらして「高嶋! ビートルズは売れるぞ! 日本で成功するぞ!」って。だから口コミはものすごく大切なんですよ。レストランなんかでも、「あの店美味しい」「あなた行ったの?」「いや行ってない」っていうのも多いんですよ。つまりは名前なんです。そういうふうにもっていかないといけない。その辺は僕、ちょっとしたカリスマ性あったね。

行方　確かに従来のメディアが取り上げるには、ビートルズは文化として本当に新しかったと思います。

高嶋　だけどね、実際売り出したらそんなに売れなかったんですよ。そこでどうしたかっていうと、マル秘って赤のハンコを押した「今週の売上速報」っていうB5サイズの紙を、「マル秘」だけ見えるようにして、モノがいっぱいの僕の机の上に紛れ込ませたの。そこへ放送局から新聞社までマスコミがいっぱい来るでしょ。僕が何気なく席を外すと、その紙をマスコミの人がパッと見るわけですよ。

行方　その紙に細工をしていたわけですか。

高嶋　ベンチャーズの売り上げの数字をゼロ1個落としてね。それを知った担当のアツミ(安海勲)はエラい怒ってたけど。

行方　そりゃあそうだ。

高嶋　「アっちゃん、しばらく辛抱しろ。実はビートルズがあんまり売れてなくて、ベンチャーズが売れてるって言うわけにはいかないだろう。ここはマスコミ

CamScannerでスキャン

にも騙されてもらわなきゃいけないんだ」って言ったの。新聞社だって、こっちが「世界的に」売り出しているときに、「実は売れていない」って記事なんて躍りませんからね。それで僕が席に戻っていったら「高嶋さん、今週ビートルズはどれくらいですか?」ってマスコミが聞くわけですよ、マル秘の紙を見ているけれども。でも、僕が自ら答えるとインチキくさいでしょ。だから部下の橋場に、「どうなんだ」って声をかけて、打ち合わせどおりの数字を言わせてた。

行方　昔はそういうセールス速報をみんな紙で回覧してましたからね。そういうものが机にあるのは不自然では決してなかった。それにしても色々と仕掛けられていたんですね。

■日本発売第一弾シングルの謎?

高嶋　そういえば、日本のビートルズ・ファンの中には、日本発売の第一弾は〈プリーズ・プリーズ・ミー〉だと言い張る人が多いんです。なんでだと思います?

行方　最初からそういうふうに決めていたんじゃないですか?

高嶋　そう、決めていた。だけど、アメリカのキャピトルが〈抱きしめたい〉を第一弾にするって分かったんです。アメリカが〈抱きしめたい〉を出したとすれば、当然キャピトルは力を入れるから「ビルボード」とかで上がってくるだろうと。そのときに日本の第一弾が〈プリーズ・プリーズ・ミー〉だとマズいなと思って、急遽〈抱きしめたい〉にしたんです。でもそこで、「ビートルズの日本デビュー盤〈プリーズ・プリーズ・ミー〉第一弾」ってジャケットに書いたコラムを落とすのを、デザインと僕が忘れた。そのために〈抱きしめたい〉を買った人は誰が見ても〈プリーズ・プリーズ・ミー〉が第一弾で出ていることになっていたわけですね。

行方　ただ、64年のほぼ同時期ですよね。私が中学1年のある日の朝礼のときに「なんてつまらないものに付き合ってるんだ」と思って、「今日の放課後はビートルズを買いに行こう」と決めたわけですが。そのときに「〈プリーズ・プリーズ・ミー〉と〈抱きしめたい〉の入ったレコードをください」って言ったんですから。そしたら「そういうのはないのよ、坊や」って2枚出されてね。2枚は買えないから〈抱きしめたい〉を選んだんだけど。高嶋さんは発売ギリギリで順番をひ

CamScannerでスキャン

っくり返したんですね。

高嶋　そう言えば、最初は〈抱きしめたい〉には本社のステレオの広告を入れていたんですけど、京橋テーラーの広告を出してあげたほうがいいなと思って変えたんですね。だから〈抱きしめたい〉はジャケットが2種類あるんですよ。よく会社が何も言わなかったな。普通だったら本社の広告を落とすんだから「お前何やってんだ」って言われますよ。僕のことだから恐らく、黙ってやったんだろうな。

行方　裏だけじゃなくて表も変わってますけどね。私が買った〈抱きしめたい〉は発売から早い時期に買ったにも関わらず、ジャケットがオリジナルじゃなかった。

高嶋　大村亨のビートルズの本（「ビートルズと日本　熱狂の記録」シンコーミュージック・エンタテイメント刊）には「日本でどちらが第一弾か、いまだに謎である」っていうようなことが書いてあってね、僕は大村に怒ったのよ。「なんで、お前俺に訊かないのか。俺に訊いたらすぐ分かるじゃないか」って。

行方　日本のビートルズって本当に解散後のビートルズのファンが多いんですよ。そういう人たちが声高らかに推測で書いたりする。「ビートルズよりデカいロック・バンドが、日本にはひとつだけある。それは解散後のビートルズだ」って私は言ってるんですけどね。それくらい当時と解散後のファンの間で価値基準が違ったりするんですよね。

■邦題の付け方

行方　ビートルズって、明らかにそれまでのマーケットに対する異文化ですよね。それを日本に絶対運び込むんだって意志の中で、色々おやりになったわけじゃないですか。それと同時に、とにかく高嶋さんの最大の功績のひとつが、やっぱりタイトルだと思います。〈抱きしめたい〉。これが「I Want to Hold Your Hand」のままだったら、まだto不定詞も習っていない中学1年生の私は買いに行かなかったと思う。だから〈抱きしめたい〉はすごいタイトルだと思いましたよ。誤訳だけど（笑）。

高嶋　NHK-FMの『しりすぎてるうた』という番組で、〈抱きしめたい〉のタイトルについてインタビューされたんですよ。そこでディレクターは半分がっかりしていましたね。何故なら〈抱きしめたい〉に至るまで「こういうふうに考えて作った

CamScannerでスキャン

んだ」ってことを僕にとくとくと語ってほしかったみたいなの。だけど「一瞬で浮かんだよ」って答えたから(笑)。そうしたら話のネタにならないよね。

行方 その辺がやっぱりセンスですよね。

高嶋 僕はプレスリーの時代からの大きな変わり目だな、ということを意識しましたよ。だからオールディーズ的なタイトルは絶対に避けないといけないな、と。〈悲しき街角〉とか〈涙のワルツ〉みたいなね。それがまず頭にあった。ただ英語もそんなに出来ないもんですから、もしタイトルが〈I Want You〉だったら〈アイ・ウォンチュー〉にしていたと思う。だから〈プリーズ・プリーズ・ミー〉〈フロム・ミー・トゥ・ユー〉〈シー・ラヴズ・ユー〉は全部そのままのカタカナ英語でしょ。「I Want To Hold Your Hand」はちょっと長かったので。

行方 これはレコード会社の常識的に縮めますよね。

高嶋 当時、洋楽は日本語タイトルをつけるっていうのが常識っていうか、鉄則だったから。

行方 特に高嶋さんたちが育てた洋楽文化っていうのは、そういうところにありますよね。大体、編成会議の前になると制作の担当はみんなウロウロしながらタイトルを考えていましたよ。

高嶋 編成会議で「今度こういうアルバムを出します」って提出するときに、タイトルをつけてなきゃいけないんですよね。

行方 特に洋楽なんて中身をいじれないから、外見をどう飾っていくかっていう世界。「タイトルは最初に目につくコピーである」と言うけど、本当にその通り。〈抱きしめたい〉というのは、「これは新しいな」「俺らの時代のものだな」っていう伝わり方はすごかったと思いますよ。しかもB面は〈こいつ〉っていうんですよね。

高嶋 ファンの間では不評のタイトルです。

行方 私は死語のような気がしましたけどね。

高嶋 竹内まりやさんが〈こいつ〉が大好きなんですよ。「Turntable」というアルバムで歌っているんです。

行方 へえ。英語で?

高嶋 英語で。素晴らしいですよ。

行方 〈こいつ〉?

高嶋　さすがに〈This Boy〉って書いてあった。それで娘（高嶋ちさ子）のコンサートに竹内さんがゲストで出られたことがあってね。そのとき、娘から楽屋に来てほしいって言われて行ったら竹内さんがいて「なんで〈こいつ〉なんですか？」って質問するんですよ。「竹内さん、A面が〈抱きしめたい〉でしょう。B面は〈こいつ〉以外にないでしょう」って答えたらエラい困った顔をしてた（笑）。「それは冗談としても、〈こいつ〉って三人称で語っても、これは自分自身のことを言っている意味で〈こいつ〉なんですよ」ってフォローしておいたけど。

行方　実に伝わりますし、私はそんなに違和感もなかったですけどね。あと、「あいつ」ならアリかなと。ただ、〈抱きしめたい〉のタイトルのインパクトは、やっぱり高嶋さんが思っているより大きいと思います。

高嶋　〈抱きしめたい〉は第一弾で出したということもあって印象深いものはあります。自分でつけて気に入っているタイトルは〈恋する二人〉ね。あのリズム感がタイトルに出たかな〜と思って。

行方　良いタイトルが多いんですよ。〈涙の乗車券〉はちょっと古かったけど（笑）。

高嶋　これは自ら突っ込んでいるところです。「おじさん、おじさん。オールディーズのタイトルは止めると言いながら〈涙の乗車券〉ってどういうことよ」って。ただ、今、詞を読み返してもやっぱり〈涙の乗車券〉。

行方　あとタイトルの話で聞いておかないといけないのは〈ノルウェーの森〉ですね。「高嶋さんの二大傑作にして、二大誤訳」って私は言ってるんですけど（笑）。

高嶋　最初はジョン・レノンが〈Knowing She Would〉としていた。ところがそれはスラングで「彼女ヤラせてくれるぜ」っていう意味だった。さすがにみんなから非難を受けて、ジョン・レノンが自ら〈Norwegian Wood〉に変えたって説と、ジョージ・マーティンが変えたという説、ふたつあるんです。いずれにしても、ジョン・レノンかジョージ・マーティンが〈Knowing She Would〉はまずいよ、knowing she would, knowing she would …〈Norwegian Wood〉」になったと。そういうふうになったタイトルを僕が間違えたとしても、そんなに意味のない変更だから。

行方　〈抱きしめたい〉と同じで、誤訳というより、やっぱり名訳だと思います。ただ、最初に日本で出た初版のアルバムには〈ノーウェジアン・ウッド〉って書いてあるんですよ。だからそれが若干の謎でね。その後すぐ、キングストン・トリオ

とかブラザーズ・フォアとかがビートルズ集で歌っていて、そこでは両方〈ノルウェーの森〉になっている。そうすると命名はテイチクないしはコロムビアということになりますが。

高嶋　最初、それを元「CDジャーナル」の藤本国彦さんから指摘されたんですよ。僕は〈ノルウェーの森〉って自分で付けた記憶があるから、なんでキングストン・トリオからそのタイトルなんだろうと。ということで調べましたら、大村亨が見つけてくれました。「ボーイズ・ライフ」という雑誌の「次回のビートルズのアルバムは？」ってところに〈ノルウェーの森〉とちゃんと入ってるんですよ。だから恐らく、僕が途中で〈ノーウェジアン・ウッド〉じゃなくて〈ノルウェーの森〉に変えて編集にちゃんと伝えたのに、編集はその前のオリジナルの〈ノーウェジアン・ウッド〉で出しちゃった、ということのようです。「ボーイズライフ」には、きちっと〈ノルウェーの森〉って書いてある。

行方　だけど当時の〈ノルウェーの森〉って、村上春樹もいない頃だから、どうでもいい曲な扱いだったんですよね。別に忘れたところで「忘れたか」くらいのもので。意味が〈抱きしめたい〉の比じゃない。でも明らかに始まりは高嶋さんなんですね。

高嶋　『ノルウェイの森』に関して言えばね、村上春樹はもともとあの小説に『雨の庭』ってタイトルをつけていたらしいですね。ドビュッシーの作品から。それで奥さんに本を読ませたら、「あなた、これは『ノルウェイの森』しかないでしょう」って言われたって。

行方　いきなり〈ノルウェーの森〉が流れてくるんですもんね、飛行機の中で。

高嶋　ビートルズのタイトルということを気にしたのか、彼は英語ができるからか、「Norway」だから小説の方は「ノルウェイ」って「イ」で終わってるけどね。村上春樹は神戸高校の後輩なんです。早稲田も演劇、ずばり後輩ですよ。だから彼に会ったら「ちょっと印税よこせ」って言いたいね。

行方　タイトルには印税ないですから（笑）。

■日本で次々に発売されたシングル

高嶋　日本でのデビューから2年間で、ビートルズのシングルを何枚出したと思

CamScannerでスキャン

います？

行方　結構出してましたよね。

高嶋　27枚。だからその中に〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉〈ミスター・ムーンライト〉〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉〈のっぽのサリー〉とか、ビートルズのオリジナルでない曲を相当突っ込んでいったんですよ。

行方　あの頃すごい勢いで出してますよね。しかも同じ日に3枚出したり。逆に〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉は、街で盛り上がっていたから突っ込んだ感じもあるでしょう？

高嶋　そうそう。ビートルズが日本に来たとき、1曲めが〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉で「あいつら分かってるな」って思ったね。

行方　私もそう思いました。あの年の世界公演は全部〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉で始まっているんです。だけど私が思うに、日本公演があるぞっていうんで、そういうセットにしたんじゃないかと。

ビートルズの初期のファンってロックンロールを引きずったファンなんです。だから〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉って交点が生まれた。あれが高嶋さんの時代の一番大きい、ビートルズのヒットですよね。

高嶋　一番売れていましたね。

シングルの話で言えば、イギリスは〈イエスタデイ〉をシングルで出してないんですよ。僕は日本で出したけど、A面にしていないんです。

行方　A面は〈アクト・ナチュラリー〉。アメリカもそうでしょう？

高嶋　そう。というのは、リンゴ・スターがアイドルっぽくてめちゃめちゃ人気が高かった。

行方　〈アクト・ナチュラリー〉って『ヘルプ！』の時期で、「俺は映画スターになっちゃうんだ。地のままでいいんだ」という詞なんですよね。リンゴ・スターをそのまま地で歌ったような。他人の曲ですけど。アメリカでもリンゴ人気がすでにありましたから。

でも、イギリスは極端にシングルにしていないんですよ。アメリカも元々そうだったんだけど、アルバムを買う層、シングルを買う層って分けるようになった。それはアメリカの60年代後半からの文化で、アルバム用の録音があって、シングル用の録音があって、両方が重ならないっていうね。ある種フェアではある

CamScannerでスキャン

けど無駄というか。

高嶋　イギリスは一番のお膝元だから、アーティストの意向はレコード会社に入るだろうし、プロデューサーのジョージ・マーティンの意向もあるだろうから。変なことできなかったんでしょ。

行方　シングルとアルバムが別商品っていうのはあの頃のひとつの常識だったんですけどね。ただ日本ではシングルを闇雲に出しているじゃないですか。あれってOKというか、クリアランスは取ってたんですか？

高嶋　何の？

行方　本国の許諾。

高嶋　そんなもん、取るわけないですよ。勝手にやりました。

行方　そういう時代なんですね（笑）。

高嶋　向こうから「出してくれ」「出してくれ」の時代ですから。僕が『ベスト・オブ・ザ・ビートルズ』（第1部5回を参照）を作ったときに、向こうはちょうどコンセプト・アルバムに突入していく。それまでLPっていったら、ベスト盤的なものだったでしょ。

行方　足し算でしたね。

高嶋　ちょうど時代の変わり目ですよ。

行方　『ベスト・オブ〜』を出そうとしたのが66年ですか？

高嶋　いや65年。「65年にビートルズが来日するよ」っていう噂を僕が流していたみたい。水原（健二）って部下に「俺、そんなこと言ってないよ」って言ったら「高嶋さんひとりで言いまくってましたよ」って（笑）。

行方　選曲がすごく良いんですよ。『ミート・ザ・ビートルズ』なんてこれ以上はないもんね、並び含めて。

高嶋　その辺はね、僕の好き加減でやりましたから。

行方　それが素晴らしい加減なんですよね。

■ビートルズと距離を置いた理由

行方　高嶋さんが実際にビートルズを担当されるのは、62年から66年まででですよね。『ラバー・ソウル』をもってビートルズから離れた。

高嶋　69年の11月いっぱいで東芝を辞めてますから、そこまでは一応僕の担当。だけどビートルズ来日後は、部下の水原に任せてた。

行方　来日時は公演を観に行かれたんですよね？

高嶋　もちろん。イヴ・モンタンでさえ厚生年金の2,000人くらいのホールで、手の届くくらいのところで大スターを観られたのに、ビートルズの武道館というのは全く手の届かないところに行っちゃったなと思いましたね。

行方　アリーナには客を入れなかったんですよね？

高嶋　入れなかった。それで一緒に食事する予定があったから、専務の石坂範一郎さんと加山雄三さんと3人でビートルズが泊まっているヒルトンホテル（現ザ・キャピトルホテル東急）まで行ったんですよ。そしたらブライアン・エプスタインに別室に呼ばれてね。要するに、ビートルズがいる部屋と廊下を隔てた向かいの部屋から4人と会ったわけです。同じ椅子の高さだから、目線は同じ。ところがイメージは、大河ドラマの織田信長の前に平伏する木下藤吉郎の心境だった。きれいな英語を喋られる石坂さんも震えるくらい大緊張しててね。僕は帰宅してから、沸々と怒りがこみ上げてきたんですよ。なんで俺が平伏しないといけないんだ。誰のおかげで日本に来れたと思っているんだ。人気を出してやったのは俺じゃないかと。俺の家にビートルズがブライアン・エプスタインと来て、「高嶋さんありがとう」と言ったって罰は当たらないだろうと。それで僕は「これからは日本モノをやってやろう」と思ったね。

行方　それで来日後に発売となった『リボルバー』は、水原さんが実際の担当になられたと。

高嶋　そうそう。僕よりも英語できるし。でも肝っ玉ちっちゃいから結局タイトルをつけられなくて、『リボルバー』から邦題がないんです。

行方　買ってる側はびっくりしましたよ。だって『ラバー・ソウル』は〈浮気娘〉とか邦題がつきまくってるのに、『リボルバー』になったらカタカナだけがズラッと並んで。

高嶋　邦題は何もなし。

行方　66年だから私は中3か。英語力も上がっていきますからね。「俺に合わせてくれてるのかな」なんて、そのくらいの感じでしたけど。

高嶋　でもね、この水原は、ジョン・レノンとオノ・ヨーコのプラスティック・オノ・バ

CamScannerでスキャン

ンドから出た「ジョンの魂」ってタイトルの名付け親なんですよ。これをジョンがオノ・ヨーコに訳してもらったんでしょう、エラい気に入って。「イマジン」の録音のとき、NYの小さいホテル全館を借り切ったらしいんですけどね、水原はそこに呼ばれて、3週間ジョン・レノンと一緒なんですよ。3週間もいたんだから、水原はもっと面白おかしくジョン・レノンの話を語ってくれればいいんだけどね、僕みたいに。
行方　そうですね。すっごい語る高嶋さんと、すっごい語る石坂（敬一）さんの間の谷間みたいな人。
高嶋　なんにも語らないのね、あいつ。だけど『ジョンの魂』なんて良いタイトルをつけてるんだよ。
行方　『イマジン』あたりのジョン・レノン関係の曲は結構邦題がついてるじゃないですか。あれはヨーコさんのお墨付きでつけたんですかね。
高嶋　どうだろうね。
行方　先方に日本語を理解する、ある種の然るべきパワーがあればつけやすいんですよ、タイトルって。だから水原さんが邦題をつけて持っていったのなら、ヨーコさんあたりが「いいんじゃない」ってことが有り得そうな話ですよね。

■ビートルズ後は邦楽でヒット・メイカーに

行方　水原さんにビートルズが移ってからは、高嶋さんは黛ジュンとかフォーク・クルセダーズとかを手がけるわけですよね。
高嶋　黛ジュンはね、最初ビクターから渡辺順子でデビューして、ものすごい歌が上手いって評判だったけどヒットしなかった。そんな彼女に、ラジオ関東の「全米TOP40」って番組を担当していた大谷亘さんが興味をもった。
行方　湯川れい子さんがDJをやっていた番組ですね。
高嶋　僕は大谷さんと仲がよかったんだよ。大谷さんは東和企画（プロダクション）の泉ちゃんにお金を出させて各社に売り込んだけど、どこも断られた。そこで大谷さんは「こうなったら高嶋を騙すしかない」ということで僕をラジオ関東の下の喫茶店に呼んだんですよ。店では大谷さんと泉ちゃんが「ビートルズも美空ひばりも歌えますからね。各社取り合いで、どこにしようかって相談をするために今日来たんですよ」と話し合っていたんです。全部嘘ですよ。でも僕は「大

谷さん、その女の子、僕にやらせてくれない」って持ちかけたの。すると大谷さんは「高嶋さんを信頼しているけれども、編成会議で落ちたってなったら、せっかく今決めようとしてる会社がかわいそうだよ」って。「大谷さん、僕の力知らないね？ 僕がOKって言ったら一発だよ」って言ったら、「本当!?」って、2分もしないうちに黛ジュン本人が出てきた。

行方　その場にいたんだ（笑）。

高嶋　いたんだよ、喫茶店で待ってたんだよ。

行方　じゃあ高嶋さんの邦楽一発目は黛ジュンだったんですね。その後がフォークル？

高嶋　そう。〈帰って来たヨッパライ〉は12月10日に発売を決めてたんだけど、記者から「東芝レコードから出るんですよね？」って聞かれて、僕嘘つくんですよ。「フィリップスがとったという話ですよ」って。すると謎が謎を呼んで、マスコミが動くわけですよ。その辺は僕ね、長けてたね。

行方　心理戦ですね。

高嶋　あと〈夜明けのスキャット〉。当時コマーシャルって有名人が歌うんじゃなくて、歌の上手い人が歌ってたの。いずみたくは由紀さおり（当時は安田章子）を随分使ってたわけです。だからいずみたくは、たまにはシングル盤でも出してやろうかっていう気持ちだったと思いますよ。いずみたくの事務所に、元東芝の岩崎敦子が入ってたんですが、彼女がテープをもって各社をまわっていたんです。安田章子は当時20歳。新人は遅くても18歳っていう時代ですから、どこもノラない。そんな時に、岩崎さんを見かけて声をかけたら「高嶋さん、歌謡曲はやらないよね」って安田章子の歌声を聞かせてくれて。綺麗な声だった。僕はその頃カレッジ・ポップスをやっていたけど、メリー・ホプキンの〈悲しき天使〉を聞いていたこともあって「これから綺麗な声の時代がくるかな」と思ったんですよ。それで岩崎さんに「いずみたくさんは力入れるの？」って聞いたら「力入れるって言ってますよ」って答えるし。だから僕は安田章子（後の由紀さおり）の顔を見ずに、声だけを聞いて決めたんですよ。するといずみさんの企画は「上品なお色気の歌」っていうんです。それが〈バラのため息〉。これは結局B面にしましたけどね。

行方　じゃあ、いずみたくさんの中では〈夜明けのスキャット〉はB面の曲だった

んですか?

高嶋　僕はいつも原盤制作(レコード会社外部の制作)をやるとき、A面B面を作って、もう一曲とんでもない企画を考えるんです、滑り止めにね。それで選んだのが、TBSでやってた詩を朗読する15分のラジオ番組(「夜のバラード」)のテーマだったんです。当時は〈夜明けのスキャット〉のタイトルはなくてインストゥルメンタルですけど。

行方　すでにあったんですね。歌ではないけれど。

高嶋　そう。それで僕は、詩の朗読で流れてて人気があるって知ったから、滑り止めにこれを入れておこうと思って録音したんです。ところがインストゥルメンタルを入れたら由紀さおりの企画にならないんで、「ルルル」で歌わせたんです。

行方　さすがですね。

高嶋　それから山上路夫さんに詞を頼んでね。でもワンコーラスは全部「ルルル」ですよ。「ルルル」はスキャットではないけど、その辺は適当な高嶋ですよ、〈夜明けのスキャット〉っていうタイトルをつけたんですよ。

行方　「ルルル」と「愛し合う〜」の感じがまたいいんですよね。

高嶋　それで編成会議に出したら、20歳でワンコーラス「ルルル」、誰もノリませんよ。いくら高嶋さんの曲でもこれはダメだって。そう言われたら喧嘩するディレクターがいるけど、僕はそういうことしないの、不毛な争いになるから。だから「いずみたくさんに金を出してもらったんで、僕はボツにするわけにはいかない。友達がビクターのディレクターをやってるから〜」って切り出すんだけど、もうそっから嘘ですよ。「ビクターから出ることになります。ビクターでヒットしても、僕の責任ではないということをみなさん確認しておいてください。それから今ダメだって言った人、後々のために一応手帳に名前を……」って言ったら「待て待て待て」と。それで「出すだけでいいから」ってところで発売が決まったんです。

でもね、当時新人の最初のプレス枚数は最低でも8,000枚だったのに、由紀さおりは5,000枚ですよ。当然宣伝費もないんです。そこで目をつけたのが電話代。会社で誰もチェックしない金なんです。「高嶋、電話かけすぎ」なんて誰も言いませんよ。それでいずみたくさんを会社に呼んで、僕はもともと神戸出身だからそっちのラジオ局とかに電話をかけるわけです。地方にね、東京の有名人から電話がかかってきたらぶっとびますよ。それでいずみたくさんに電話を

かわって「今度高嶋ちゃんとちょっとおもしろい作品を作ったんで、聞いてみ。てください」って言ってもらう。「テープを送りますから」と。それで、送らない。そのまま送ったらね、当時黛ジュンがあり、小川知子があり、ザ・タイガースがあり、そこに「ルルル」なんて誰が聴きますか。だけども誰かは何か言ってくると思ってた。太公望ですよ、釣り糸を垂らして待ってた。そしたらかかってくるんです「連絡をくれたテープはどうなってるんだ」と。そこですかさず「テープをコピーさせたらね、宣伝のやつが右から左にもっていくんですよ」「東京中で話題になっているらしい」って言うわけです。

それからね、TBSに行って「昨日文化放送で」って話題ができない時代ですよ。それを逆手にとって、当時TBSラジオの三浦部長に「これはお宅の番組のテーマですから、TBS以外では絶対かかりません。なんとかしてくださいよ」って言ったの。そしたら三浦部長が、六本木の中華料理店にラジオのディレクターを20人くらい集めてくれて「これはうちの番組のテーマだから他社ではかからない。高嶋を男にしてやろうじゃないか」と。それでやたらTBSで流れるようになった。

行方　それがあの大ヒットにつながるわけですね。それにしても高嶋さんはいろんなネタを持ってますね（笑）。

■ビートルズのライバルたち

高嶋　当時、東芝はベンチャーズがあったでしょう。ビーチ・ボーイズがあったでしょう。

行方　とにかく洋楽が圧倒的に強かった。

高嶋　プレスリーが残り火ながら強かった。それとローリング・ストーンズが恐ろしかった。こっちはアイドル路線で売ってるから、「本物のロックはこっちだ」なんて言われたら一発でイカれるなと思ってた。

行方　今でもそういうことを言ってる人、いっぱいいますけどね。

高嶋　ローリング・ストーンズは徹底的にマークしたね。

行方　結果から言えば、恐れるに足りないのがビートルズの音楽でしたね。なんだかんだ言って幅が広い。

高嶋　それとルックスの良さね。あれはブライアン・エプスタインがきれいにして売り出したでしょ。

行方　逆にストーンズはアンドリュー・オールダムが汚くして売り出したんですよね。私なんかローリング・ストーンズを知ったとき「街で出会いたくない人たちだな」と思いましたもん。

その脇でベンチャーズは、ビートルズの10倍くらい売れていたと。ただベンチャーズってそういう努力は特にしてないですよね？　ベンチャーズ・カットをどうしたとか、みんなで銀座でテケテケやって回ったって、そんなことをやらずに。なぜベンチャーズってあんなに売れていたんですか？

高嶋　非常にストレートで分かりやすいよね。おいしい編曲ですよ。〈アパッチ〉だって本当はシャドウズなんですよ。だけどベンチャーズのほうが派手だもん。

行方　日本って英語を分からずに洋楽を聴いている人間って今もいっぱいいますしね。そういう意味でいうと、映画音楽なんかもすごく強かった時代。インストが入りやすいのかな。

それで思い出したんですけど、65年頃、東芝は当時ビートルズとビーチ・ボーイズとベンチャーズを抱えててすごかったじゃないですか。そんなときに東芝が「3Bキャンペーン」っていうのをやったんです。

高嶋　そんなことやってたっけ？　全然知らない。

行方　高嶋さんは関わってなかったんですね。「ビートルズ」「ビーチ・ボーイズ」はいいけどベンチャーズは「B」じゃないだろ、と中学生ながらに思いましたよ。

高嶋　そりゃヒドイね。

行方　客を侮ってるんじゃないかと。

高嶋　ちなみにビートルズが来た頃の洋楽と日本もののシェア、どれくらいだと思います？

行方　東芝は洋楽6の邦楽4くらいじゃないですか？

高嶋　実際は85：15ぐらい。だってプレスリーが歌謡曲のように売れてましたからね。それが今逆転して、洋楽15の邦楽85。

行方　私の頃で7：3ぐらいでした。

高嶋　別に僕がやったわけじゃないけど、東芝から宇多田ヒカルが何百万って売れたときに、僕がビートルズに会ってひざまずいたときから「やっとここまで来

CamScannerでスキャン

たか」という思いでしたよ。
行方　今は割合以上に全体の量も減ってますけどね。
高嶋　ただ海外の良い作品もあると思うんですよ。それを売るために日本のレコード会社の洋楽担当者がなんの努力もしていないように思うね。
行方　〈夜霧のしのび逢い〉みたいなチャンスは常にあるわけですもんね。
高嶋　ちょっとさみしいね。ヒット曲っていうか、日本の国民が「ああ今年あれがあったな」というような歌を、レコード会社や音楽に携わる人間は作るべきですよ。
行方　私なんかビートルズと出会って、ミュージシャンはオリジナルを作らないとなっていうのはあります。
高嶋　オリジナルはやっぱり作らないとね。

■ビートルズ・グッズ・コレクション

高嶋　ビートルズの担当当時、時代が経ってもこんなに人気だなんて思っていなかったんですよ。思っていたら僕、ビートルズの大事なものをもっと取っておきましたよ。
行方　発売できなかった白盤は、ちさ子さんが「開運！なんでも鑑定団」で出していましたよね。
高嶋　『ベスト・オブ・ザ・ビートルズ』のサンプル盤ね。
行方　だけど、あれって会社のものですよ。
高嶋　そうそう。
行方　だからダメなんですよ、本当は売っちゃ。
高嶋　え？
行方　売っちゃダメ。
高嶋　50年経ってますよ。
行方　貸与品ですからね、サンプルって。
高嶋　僕がビートルズから唯一貰ったのはサイン入りの写真でね。これはファンの人から、オークションに出したら800万から値段がつくって言われた。でもね、万年筆でサインを書いてるから剥げてきてるんですよ。ちょっとなぞろうかなと思った（笑）。そしたら、万年筆に詳しいファンの人が「ここでもう（剥げるの

は）止まります」って。だから薄い茶色になってるの。

行方　修繕したら価値が下がってしまうところでしたね。

高嶋　そういえば、ビートルズがデビューした年かなんかに、クリスマスのプレゼント・レコード、ソノシートを作ったんです。

行方　イギリスで作ったんですか？

高嶋　イギリスで作ったの、1万枚。それをファンクラブに配ったのと、我々に1枚貰ってね。でも放送局の人に貸しちゃったの。そのままどこへいったか分からない。こうなると分かってたら「返せ！」って言ったんだけどね。

行方　それ貴重ですよね。69年ぐらいまで毎年あるんですよ。

高嶋　そうそう。ものすごい貴重ですよ。

行方　ただ内容は喋ったりするだけで大したものではないですよね。

高嶋　それから、1976年にレナウンが東芝と組んで、東芝から出たすべてのLPに1番から29番までの番号と帯をつけて、それをレナウンの商品を買った人だけにクイズの懸賞品で出したんですよ。木の箱に入っててね。それをうちの娘のマンションの管理人が持ってたんですよ。

行方　それは売り物じゃなくて？

高嶋　そう。その管理人が、家を引っ越すか何かで処分に困ったときに僕を思い出して「そうだ、お父さんにあげよう」っていうんで貰いました。北海道の釧路で講演会をしたとき、それを全部机に並べて見せてあげた。そしたらファンの人、喜んでましたよ。

行方　箱の中身は普通の盤？

高嶋　うん、だけど1番から29番まで番号がついてるんですよ。東芝から出たビートルズのアルバムが全部、発売順に29枚。

行方　私が1976年に入社したときは、アメリカ盤からヨーロッパ盤までを通しでズラーッと出していた時期だと思うんです。国旗帯をつけて。

高嶋　それだと思うよ。だけどレナウンとタイアップして、立派な木の箱に入ってる。

CamScannerでスキャン

行方　その木の箱がすごい貴重ですね。

高嶋　国旗のシリーズって何の企画？

行方　それは石坂さんとかコバヤシさんの時代に、ビートルズの出てた盤に全部番号を振って、そのオリジネーターの国の旗を帯に入れて出したんです。

ところでビートルズって帯の値段がすごい。『ビートルズ・フォー・セール』の帯の色が茶色のものがあって、帯付きで60万円。

高嶋　え!?　そんな茶色の帯なんか見たことない。

行方　たぶん印刷が間違えて、あるラインだけ茶色になっちゃったんですね。それが2018年あたりから60万円で売られて、いまやディスクユニオンの買取価格が70万円、最終的な売値が150万円。『フォー・セール』の盤だけだったら5万〜6万円なんです。帯いくらだよって話ですよ。

高嶋　帯の値打ちってすごいね。

行方　いまや英語で「Obi」って引くと出てくるっていいますよ。

高嶋　まさか50年経って、こういうところでビートルズの話をするとは思ってないから。それが分かっていたら、もっと大事に取っておいたよ。宝の山だよ。最初の〈プリーズ・プリーズ・ミー〉のレーベルが金色のやつとかは、エラい高いらしいよね。

行方　ああ、あれはゴールド・パーロフォンっていうんですよ。私持ってますよ。

高嶋　そう！すごいじゃない。僕は日本公演のプログラムさえも持っていないのに。

■ビートルズの魅力、再発見

高嶋　ビートルズの曲って、全曲やっぱり良く出来てますよ。

行方　本当に。スタンダードですよね。

高嶋　僕はジョージ・マーティンの本で知ったと思うんだけど、リヴァプールにビートルズみたいなグループ、当時いくつあったと思います？

行方　200。そんなにないか。

高嶋　200って言うだけ大したもんだけど、実際は400。だからね、当時は日本でも芸能の中心は東京だったじゃないですか。そんななか、松山千春が北海道から出てきたり、武田鉄矢が福岡から出てきたり。そういう状況がリヴァプールだっ

たんですよね。ロンドンにいる連中は誰も気がついていなかった。

当時EMIのトップ・プロデューサーはクリフ・リチャードのディレクターをしていたノリー・パラマー。一方、ジョージ・マーティンは日本でいうと文芸部（教育レコードなどを発売する部署）の担当者ですよ。ジョージ・マーティンはいつかノリー・パラマーのようになりたいと思っていた。これも本当に運だと思うんだけど、ブライアン・エプスタインがEMIに売り込みに行ったとき、ジョージ・マーティンはそこにいなかったんだよね。ノリー・パラマーとかトップクラスのプロデューサーたちがいて「こんなんだったらシャドウズのほうが遥かにいい」って蹴られて、デッカに行くんです。それからエプスタインは、どこもノラないから自主制作盤を作ろうと、EMIのレコード店に持っていく。そこには自主制作盤を録音する係がいて、その担当者が偉かった。「面白いのがあったら俺のところに持ってこい」と言っていた近くの音楽出版社に、その盤を届けたんだから。「御注進、御注進」ってね。そしたら音楽出版社も良いと思って、「いいのがあったら持ってきて」と前から言っていたジョージ・マーティンに電話した。そしたらすぐに飛んできて「これだったら一度会ってみたい」となった。ノリー・パラマーがビートルズを蹴ったその場にジョージ・マーティンがいたら「ノリー・パラマーがボロクソに言って断ってるから、これは俺がやるわけにはいかない」となっていたはず。だから運ですよ。

行方　ビートルズの巨大な運のひとつが、やっぱりジョージ・マーティンと出会ったことですよね。

高嶋　それとブライアン・エプスタイン。

行方　もちろん。ただ、音楽的にはやっぱりジョージ・マーティン。

高嶋　出しゃばらず、本人たちを伸ばす。

行方　ポールのセンスなんかも、ジョージ・マーティンと出会ってかたちになってますからね。それがビートルズの音楽をお茶の間にまで届けた。ローリング・ストーンズになくて、ビートルズにある部分です。

高嶋　プロデューサーの素晴らしさですよね。

行方　ジョージ・マーティンは評価し過ぎることはないですね。

高嶋　だってオーディションのときに〈ベサメ・ムーチョ〉を歌うぐらいに作品がなかったわけですよ、言ってみれば。

行方　〈ラヴ・ミー・ドゥ〉はやっていましたけども。〈ラヴ・ミー・ドゥ〉だったら私だ

って却下するかもしれない。〈プリーズ・プリーズ・ミー〉なんかも、ああやってアップテンポにしたのもジョージ・マーティンだっていうしね。全体のアルバム作りとか、音楽の組み立てとか……アレンジもやっちゃうし、楽器も弾いちゃうし。

高嶋　あとはやっぱりポールとジョンの作詞・作曲の能力、ヴォーカリストとしての上手さ。ビング・クロスビーとかフランク・シナトラとか、あの時代の上手さとは全く別。自分の思いをそのまま声にする能力、そしてエンターテイナーとしての上手さがあるからね。

行方　私なんかずっとジョンの曲や声が好きだったけど、改めてビートルズのことを考えたとき、やっぱりここまでビートルズをでかくしたのはポールだと思います。ポールってアメリカのスタンダードが好きじゃないですか。だからその系譜みたいなものを彼は引き継いでいるんですよ。映画音楽と同じで、結構お茶の間と直結している。ロック・バンドでお茶の間と直結してるのは、たぶんビートルズとクイーンしかいないと思う。クイーンはクラシック、ビートルズはスタンダードなんですよ。その部分でポールはエラい。親父がジャズ・ピアニストだからか、元々アメリカのソングライター・チームへの憧れが強くてね。だからポールが言いだして「レノン＝マッカートニー」になった。最初「マッカートニー＝レノン」だったのをジョンにどこかでひっくり返されたんですけど。ポールのその大きい憧れを正しく翻訳したというか、それに技術を付与したのがジョージ・マーティン。偉いですよね。

高嶋　ジョンとポールが一緒にいたときは、ちょっとでもアドバイスし合ったと思う。だからビートルズ時代の「これはポールだ」「これはレノンだ」ってありますけどね、そのときにちょっとしたアドバイスがうまく働いて、作品に活きていると思う。ポールとジョンがそれぞれ独立してからもいっぱい作品があるけどね、僕は数曲にしか興味がない。あのふたりが一緒にいたからこそ、ちょっとしたアイディアが全部活きていたんだと思う。

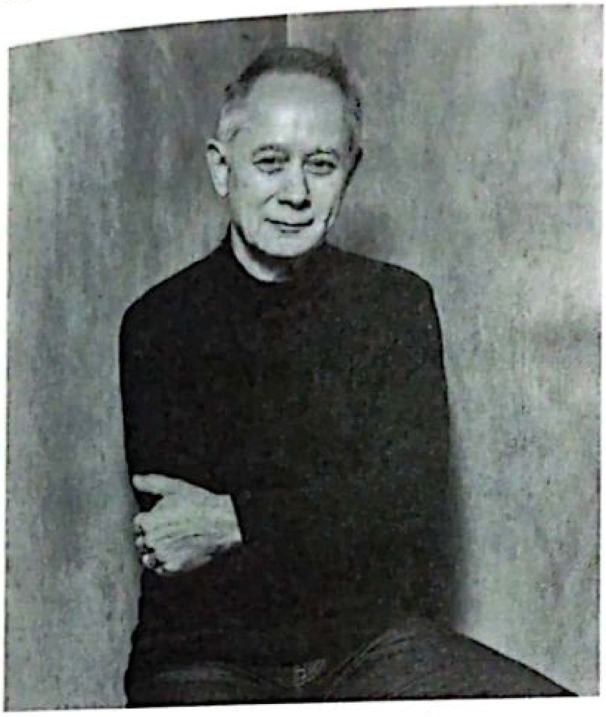
行方　〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉なんて、ジョンがメインのテーマを作ったところに、ポールがサビっていうか、ブリッジ部分をくっつけてね。これをジョージ・マーティンが一生懸命繋いで出来上がった。やっぱり大したチームですよね。だから出会うべき人たちが上手く出会ったなっていう気がします。本当に話が尽きませんね。

CamScannerでスキャン

ピーター・バラカン

Peter Barakan

曲で言えば1位は〈ツイスト・アンド・シャウト〉。もうダントツ。
これこそリアル・タイムで聴いた人間じゃないと、
たぶんこんなこと言わない。
今聴いても、いまだにあの興奮が毎回蘇ってくる。
すごいですよ、あれは。



ビートルズのホームである英国にて
リアルタイムで彼らに直面した
ピーターさんが語る衝撃体験

1951年ロンドン生まれ。
ロンドン大学日本語学科を卒業後、1974年に音楽出版社の著作権業務に就くため来日。
現在フリーのブロードキャスターとして活動、「バラカン・ビート」(Inter FM)、「ウィークエンド・サンシャイン」(NHK-FM)、「ライフスタイル・ミュージアム」(TOKYO FM)、「ジャパノロジー・プラス」(NHK BS1) などを担当。
著書に『ロックの英詞を読む〜世界を変える歌』(集英社インターナショナル)、『ラジオのこちら側』(岩波新書)、『わが青春のサウンドトラック』(光文社文庫)、『ピーター・バラカン音楽日記』(集英社インターナショナル)、『魂 (ソウル) のゆくえ』(アルテスパブリッシング)、『ぼくが愛するロック 名盤240』(講談社+α文庫)、『ロックの英詞を読む』(集英社インターナショナル)、『猿はマンキ、お金はマニ』(NHK出版) などがある。
2014年から小規模の都市型音楽フェスティヴァルLive Magic (https://www.livemagic.jp/) のキュレイターを務める。
ウェブサイトは http://peterbarakan.net
ビートルズを解散後に知った多くの人にその初期から中期の充実ぶりをもっともっと伝えたい!

＊ピーターさんは英語のカナ表記にはこだわりをお持ちなので、ここではそれに準じた表記となっています。

■イギリスでの人気ぶり

行方　私はビートルズと64年の春ぐらいに出会ってるんだけど、ピーターの出会いはいつなの？

ピーター　〈ラヴ・ミー・ドゥー〉のシングルが62年の秋に出てるけど、それに当時気づいたかどうかは正直覚えていない。とにかく第二弾のシングル〈プリーズ・プリーズ・ミー〉が63年1月に出て、それがチャートの2位までいってるから、当然ラジオで何度もかかってるし、彼らもテレビに出てるし、いろんな雑誌とかでも取り上げられてるし。だからそこでは確実に出会ってる。新人バンドで、まだちょっとアイドルっぽい取り上げられ方ではあったけれど、とにかくすぐに有名人になっちゃったからね。相当な衝撃を受けたね。

行方　私は日本で最初のビートルズ世代だと思っているけど、私が中学校1年のときに、高校生、大学生だった女の子たちのファンはもちろんいてね。彼女たちはビートルズをアイドルのように追いかけてたよ。それはもうキャーキャー言って。だって「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」のロードショーで、ジョンとかに抱きつこうとしてスクリーンを破っちゃったんだから。

ピーター　（笑）。ロンドンでは最初はアイドル扱いだったけど、それは僕らの年齢、14、15歳くらい。17、18歳の女の子が追いかけるなんてことはたぶんなかったと思う。

行方　さすがに映画館でキャーキャー言ってた中に、日本の14、15歳はいなかったと思うな。

ピーター　僕らよりもうちょっと上だと、違うタイプの音楽を既に聴いていたと思う。ただビートルズだけは、年齢を超えてみんなを巻き込んだ感じがある。音楽とはまた別にね、あの4人が一緒になったとき、特に初期の彼らが醸し出す空気。記者会見とかテレビに出たときのちょっとした一言とか。砕けてて、適度に生意気で、若者がみんな共感を覚えるような。ものすごく新鮮だった。あれで相当人気者になった。それこそお茶の間のみんながビートルズを好きになっちゃうような。捉え方はそれぞれみんな違うかもしれない。若者は若者で、女の子はキャーッて言ったり、僕ら男の子はその音楽が好きだったり。もうちょっと上だったら、エンターテイナーとして受け入れた。理屈じゃないよね。

CamScannerでスキャン

行方　日本では大人たちがネガティヴでね、「ビートルズ・ファンは非行の始まり」みたいな空気があったんだけど。そういう雰囲気はゼロ？　親御さんとかも否定的ではなかった？

ピーター　親父はクラシックしか聴かない人間だったから、あんまり関心がなかったと思う。母は好きでした。最初、ビートルズの髪が長いって言われてたでしょう？　あの程度の長さでもそういう時期だったから。僕らもすぐ髪を伸ばしたくなったんだけど、母はそれを肯定してくれたんですよ。

行方　公共放送がビートルズを流してるくらいだから、日本とは全然違ったんだね。

ピーター　ヘンなカツラだとか、キューバン・ヒールのブーツだとかいろんなグッズもあってね。「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」の後ろのほうのページに通信販売の広告があったけど、「あなたも真似できます」みたいなものがいっぱい売られてた。まだ2枚めのアルバムが出たくらいの時期で、レパートリーがないような新人バンドなのに。「ビートルマニア」ってよく付けた現象の名前ですけど、みんなそれに踊らされていたのかもしれない。まあでもレコードを聴くと、悪いレコードがないんですよ。みんな良かったから。

行方　自分で作って自分で歌うっていうインパクトはなかった？

ピーター　それはもちろんある。最初にそれを意識していたかどうかは覚えていないけど、買ってきたシングル盤を何回も聴くから、そのレーベルに書いてあることを見ちゃうんだよね。別にマニアじゃなくても、まだ11歳でも。だから、やっぱり「作詞・作曲：レノン＝ムカートニー」ってなっていることに気づく。「えー！　全部彼らが作ってるんだ」って思ったね。それまで聴いていた他のポップ・ミュージックとどこか違うなっていう、ワクワク感があった。それまでのエンターテイナーというと、みんな割にイイ子っていうか、そういう当たり前な常識みたいなものを持っていたと思うけど、それを一気にビートルズが覆してしまったからね。すごく「あ、違うな」っていう印象が強かった。

行方　そもそも〈ラヴ・ミー・ドゥ〉でデビューっていうのは、かなり珍しい選択だと思う。

ピーター　だと思います。

行方　曲自体が「さあ、みんな聴いてね」って感じとはちょっと違うしね。ビートルズのベストが年代順に編まれたとき、〈ラヴ・ミー・ドゥ〉から始まるのが私は

CamScannerでスキャン

いまだ許せないというか。

ピーター（笑）。

行方　ちょっと別物な感じなんだよね。でもピーターが〈プリーズ・プリーズ・ミー〉で出会ったっていうのは、日本において私が〈抱きしめたい〉で出会ったっていうのとほぼ一緒。それで、さっきピーターが言った「何か新しいものと出会った」っていうのも、不思議なことに私もまったく同じ感覚なの。プレスリーとか知ってはいたけど、レコードを買う気にもならなかったし、感情移入もなかった。だけどビートルズは「これは今までとちょっと違うぞ。私たちの時代のものだな」って思ったね。

ちなみに〈プリーズ・プリーズ・ミー〉ではアメリカ（キャピトル）はまだ重い腰を上げず、翌年に〈抱きしめたい I Want To Hold Your Hand〉でアメリカでようやく大成功。あのときのイギリス人としての気分はどうだった？

ピーター　アメリカって当時、遠い存在だったんですよ。「エド・サリヴァン・ショー」って言葉は知ってても、写真もたぶん見たことないし、どんな番組なのかも分からないし。そういうアメリカのテレビに出て、アメリカ人がみんな見て、いきなりアメリカのチャートで１位から５位までが全部ビートルズっていう、そういう話題は覚えていますよ。「わ〜売れてるなあ」って。ビートルズがようやくアメリカを制覇したとか、雑誌はそのように書きますからフンフンって読んでるけど、特に深く考えていない。

行方　その辺は国民性だね。日本人だったら威張っちゃうけどね。

ピーター　（笑）。

■ロックンロールとロックの境

行方　私の記憶の中で、ビートルズはロックンロールじゃなくて、ロックなのよ。これを言うとピーターはなかなか許してくれないんだけど。

ピーター　（笑）。

行方　私にはロックンロールとロックってすごく違うわけ。ビートルズからが「ロックだな」って、今でも思うんだよね。当時、どこからか、誰からか「ロック、ロック」って普通に言いだしていたけど、ロックンロールをロックと呼んだ始まりって

いつからなんだろう？

ピーター　僕の感覚というか記憶では、ロックンロールとロックが別モノで論じられるようになったのは65年ぐらいだと思う。

行方　私がビートルズに出会った64年の翌年だね。じゃあそうかもしれないな。65年ぐらいにロックっていう言葉が、自分が新しいと思ったものに当てはめられたんだろうな。

ピーター　たぶんそうだと思う。60年代の新しいロックっていう音楽の象徴として、僕がいつも思い出すのはザ・フーの〈マイ・ジェネレイション〉。ポップ・ミュージックじゃない、ロックンロールでもない。あれはロックだと思う。初めてロックと呼ばれたものが何かは具体的には分からないけど、時期的にはそんなところじゃないかな。

行方　ロックンロールを、普通にロックという言い方をすることはあったんだろうな。〈監獄ロック〉とか〈ロック・アラウンド・ザ・クロック〉もあるから。

ピーター　〈ドント・ノック・ザ・ロック〉とか。

行方　そのロックに新しい意味が込められた。それはロックンロールとは別物なのよ。

ピーター　フォーク・ロックっていう言葉が出てきますよね。それもね、たぶん〈ライク・ア・ローリング・ストーン〉のときだと思う。

行方　あとバーズじゃない？

ピーター　バーズもそう。同じ65年なんですよ。〈ミスター・タンブリーン・マン〉もそう。それからラヴィン・スプーンフルの〈魔法を信じるかい？ Do You Believe in Magic？〉もそう。65年にいきなりそういうロックに寄ったフォークのグループが次々出てくるから、フォーク・ロックという言葉がそこで誕生するんだけど、たぶんロックと言うようになったのは、そのあたりから。

行方　65年の終わりって、ビートルズでいうと「ラバー・ソウル」が出てる。その中の〈ドライヴ・マイ・カー〉って、結構ハード・ロックの始まりみたいなところがあるんだけど……アメリカ盤って編集違うの知ってるでしょ？

ピーター　僕はアメリカ盤のビートルズを1枚も持ってない。

行方　イギリスにいたら持つ理由もそんなにないか。ここで面白いのは、アメリカ盤の「ラバー・ソウル」の1曲めって、「ヘルプ!」に入っていた〈夢の人〉な

の。ちょっとフォーク・ロックっぽいやつ。『ヘルプ!』の隅っこのヘンな曲を1曲めにするなと私は思ったけど、改めて聴くとアメリカ盤の『ラバー・ソウル』って結構フォーク・ロックなアルバムなのよ。

ピーター なるほど、アルバムが違って聞こえるわけだね。

行方 そういう意味じゃ、『ラバー・ソウル』のアメリカ盤って、曲は少ないわ、ヘンな曲から始まるわ、しかしフォーク・ロックの名盤ではある。だから65年のフォーク・ロックのムーヴメントにキャピトルとしてはマッチさせてるんだね。アメリカでヘンに〈夢の人〉を好きなミュージシャンがいたりするんだけど、そりゃそうだ、『ラバー・ソウル』の1曲めだから。

ピーター なるほど。2000年代だと思うけど、イギリスのフォーク・ミュージシャンたちが『ラバー・ソウル』の曲を1曲1曲取り上げて企画盤として出した『Rubber Folk』っていうアルバムがあるくらいですからね。

行方 あれはビートルズが一番フォーク・ロックに近づいたアルバムだよね。

ピーター ボブ・ディランの影響を受けていた時期でもあるし。

行方 でも65年ぐらいにはロックという言葉が新しい意味を持って定着してるんだね。

日本でウエスタン・カーニバルが作ったロックンロール文化っていうのは、ある種アイドル文化でもあったわけ。だからその延長で、私なんかの上の世代っていうのは、明らかにロックンロールの延長でビートルズと出会ってるんだよね。だからそういう意味で面白いのは、チャック・ベリーの〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉ね。あれが当時、日本でビートルズ最大のヒット曲なんだよ。

ピーター あれは名演だと思う。ビートルズのカヴァーで、オリジナルにまったく負けていない、あるいはビートルズのほうが良いかもしれないっていうものがいくつかある。アイズリー・ブラザーズの〈ツイスト・アンド・シャウト〉も間違いなくそう。ビートルズのほうが決定版だと僕は思う。

行方 ビートルズのロックンロールのカヴァーってどれも良いよね。しかもある意味、カヴァーカヴァーしていないんだよ。

ピーター ビートルズで聴くまではどの曲も知らなかった。マーヴェレッツなんて名前すら知らなくて、チャック・ベリーもビートルズで聴いてから好きになったんだな、たぶん。初期のアルバムで彼らがカヴァーしている曲がほとんどモータウ

CamScannerでスキャン

ンのものだったり、あるいはチャック・ベリーの曲だったり、ほとんどがブラック・ミュージック。当時は、ビートルズのレコードで初めて聴いた曲ばかりだから、オリジナルは誰なのかさっぱり分からない。後になってもっと系統的に、その辺のことが分かってくるんだけど。

行方 だけどビートルズの音楽ってなぜかそんなにブラックブラックしていないんだよね。ストーンズとかと比べて。

ピーター 取り上げてる曲が、モータウンにしてもチャック・ベリーにしても、すごく幅広い層に受ける音楽だから。

行方 ビートルズは自分の音楽にしてるようなところがあるよね。

ちょっと話を戻すと、当時日本でのビートルズの売り上げってせいぜい万単位。その中で〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉は数十万という単位で売れた最初のシングル盤なんだよ。これはロックンロールの延長としてビートルズを聴いてきたファンと、新たなものに出会ったというファンが交差したんだと思う。

ピーター 年齢によって捉え方は変わるよね。

行方 だけど〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉がナンバーワン・ヒットでなくていいじゃない。〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉以上に好きな曲はいくらもあったわけだよ、当時僕らの手元に、既にね。〈シー・ラヴズ・ユー〉〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉〈ヘルプ!〉だってあるわけだし。いくらも曲はあるんだけど、あれが最大のヒット曲っていうのは、従来の音楽ファンが「ロックンロール」ってタイトルに安心したのかね。

ピーター ああ、そういうことか。

行方 安心したというか、納得したというか。だから曲が良いのはもちろんだけど、ビートルズっていう、非常に新しくて、やや手強くて近づきがたいものに近づけたんじゃないかと。だって星加ルミ子さんなんて『サージェント・ペパーズ』を聴いて初めてすごいと思ったって言ってたんだから。

ピーター 〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉はその2年以上前だからね。

行方 星加さんとか湯川れい子さんはプレスリー世代で、高嶋弘之さんもそうだな。やっぱりロックンロールなの。ロックンロールの延長でビートルズと出会ってる。

ピーター イギリスでは、「ロックンロール」って言葉の仲介がなくても、最初か

CamScannerでスキャン

ら誰もが身近に感じた地元の音楽だからね。しかも僕らの世代は、極々自然にのめり込んでいったし。日本とは事情が違うよね。

■スタジオ作品

ピーター　ライヴにも1回だけ行きました。64年1月2日。

行方　すごい初期だな。

ピーター　「ビートルズ・クリスマス・ショウ」っていうのを、同じ会場で2週間ぐらいかな。毎日2回まわしでやってたの。

行方　12月から？

ピーター　63年12月から64年の1月にかけて。イギリスでクリスマスの時期っていうと1月6日まで。大体クリスマス・ツリーも、いろんな飾りも1月6日まで出てる。十二夜っていうの。場所はキャパが2,500人くらいの大きな映画館。フィンズベリー・パーク・アストリアっていう会場で、のちにレインボー・シアターに名前が変わったところ。そのときはブライアン・エプスタインがマネジメントをする他のグループ、ビリー・J・クレイマーとシラ・ブラックとフォアモスト、あとコメディっぽいグループのバロン・ナイツっていうのがいて、それから若いコメディアンがひとり。あとロルフ・ハリスっていうオーストラリア人のおじさん、ちょっと変わったおじさんで当時人気があった。彼も出てたと思う。

写真提供：
ピーター・バラカン

行方　その後2年くらいでビートルズがツアーを止めて、スタジオのバンドになるじゃない。私にとってビートルズの大きな節目っていうのはそこで、その後のほう

CamScannerでスキャン

が私には刺激的でね。スタジオでアルバムを作るっていう関心とか、レコードの文化っていうのをビートルズから学んだ。最初にアルバムっていうものを意識したのは、もちろん「ビートルズ!」という国内編集のデビュー盤だけれど、「'65(フォー・セール)」、あれを聴いたときに、これはひとつの世界だなって思ったね。その後「ラバー・ソウル」「リヴォルヴァー」とかが続いて、「サージェント・ペパーズ~」のときは完璧にスタジオのバンドになってるじゃない。スタジオで、ある種繰り返し聴くべき音楽が生み出されている。ライヴは一過性だからね。私なんかレコードを作るようになって、一過性のライヴを記録するっていう気分になったことは一度もなくて、やっぱりなんらかの繰り返し聴くべきものに定着させるっていう気分がいつもあるんだけど、そういうものもビートルズから学んだね。

あの時期はロンドンにいてどうだったんですか? ビートルズの活動が生バンドからスタジオになっていく頃。これに関しては好き嫌いとか評価が分かれるところだけど。

ピーター ライヴを止めたのは、自分たちの演奏している音が自分たちで聞こえないっていう、もっともらしい理由があったから「ああそうか。そういうことか」って思ってた。その直後に出たのが『リヴォルヴァー』ですよね。ビートルズの好きなアルバムを選ぶとなると、確かに「ラバー・ソウル」か「リヴォルヴァー」のどっちかになる。「リヴォルヴァー」には若干嫌いな曲があるから、大体「ラバー・ソウル」に軍配上げちゃうんだけど。

行方 〈イエロー・サブマリン〉でしょう?

ピーター も、そうだし〈ドクター・ロバート〉があんまり好きじゃない。

行方 許せる範囲だけどね。

ピーター まあね。でもCDで聴くときは飛ばしちゃうね。「ラバー・ソウル」は1曲も飛ばす曲ないの、僕。

行方 B面1曲めがリンゴだけどね。

ピーター ああ、でも曲は悪くない。まあ僅差ですよね、とにかく。両方とも傑作だと思う。スタジオ技術の使い方は、僕が言うまでもないことだけど、あの当時はとにかくぶっ飛びましたね。67年になるとピンク・フロイドだとか、同じようにスタジオ技術を駆使したグループが出てくるけど、誰よりも先にビートルズがとんでもないことを既にやっちゃってるからね。67年の初めくらいに〈ペニー・レイ

ン〉と〈ストロベリー・フィールズ・フォエヴァー〉がシングルで出て、これもまた完全にお手上げ。

行方　67年っていうのはすごい一年だよね。ビートルズにとっても、ロックにとっても。

ピーター　音楽にとってもね。僕個人の事情でいうと、66年の秋からブルーズにすごくのめり込んでいった。ブルーズのレコードをめちゃくちゃ漁ってた時期に『サージェント・ペパーズ』が出たから、僕はちょっと馴染めなかった。それまでのビートルズとあまりにも変わっていたしね。今でもビートルズの好きなアルバム3枚に入らない。ただ中に好きな曲はあるし、アルバムの作り方としてはにわかに信じがたい完成度ではある。

行方　私なんかはあのアルバムはベスト3のうちに明らかに入るな。イギリスって『サージェント・ペパーズ』は売れ行きも評価もトップだよね。

ピーター　全体的にはダントツです。

行方　日本は結構4番めくらいだったりするの。その大きな理由は、日本のビートルズを語る人たちって、解散後のファンが多いんだよね。『サージェント・ペパーズ』のインパクトをリアルタイムで体験していないから。

ピーター　そうだね、それが大きいね。

行方　その後に出てきたいろんなグループと出会って、そこから逆にビートルズを辿っていくと、『ホワイト・アルバム』みたいなごちゃまぜの作品とかの評価が高かったりするんだよ。でもさっきピーターが言ってた、ブルースを集めていたら馴染まなかったっていうのはよく分かる。

ピーター　極々個人的な事情だけどね。

行方　あのアルバムはポール的な賑やかさをたたえているけど、ジョンの〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉、ジョージの〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉、あと〈ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ〉も幻想的で、あの辺がポールを抑えているね、「あんまりはしゃぐなよ」って。そういうバランスも含めて、あのアルバムには顕著にジョージ・マーティンの存在が出てると思う。

ピーター　最初の頃は、ジョンとポールのどっちの曲が好きかってあんまり意識したことはなかったけど『サージェント・ペパーズ』で初めて「これは明らかにジョンの曲。これは明らかにポールの曲」って思った。『リヴォルヴァー』でさえ、そう

いうことを意識しなかったんじゃないかな。〈トゥモロー・ネヴァー・ノウズ〉はジョンって感じだけど。僕としては、レノン=ムカートニーのふたりで作った曲が、ビートルズの中で好きな曲なんです。

行方 そういう意味じゃ〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉ってさ、ブリッジがポールでしょ?

ピーター そうそう。

行方 しかも繋げたのがジョージ・マーティンで、最強メンバーだよね。

ピーター あれはめちゃめちゃ良い曲だね。〈ウィズイン・ユー・ウィザウト・ユー〉の話が出たけど、やっぱりジョージ・ハリスンがソングライターとして、かなりすごいものを持っているなって初めて思ったところだね。

行方 そうだね、あの辺からだね。

ピーター 『リヴォルヴァー』までのジョージの曲、悪くはないんだけどちょっと……。〈タックスマン〉なんかは良いよね。

行方 〈タックスマン〉良いね。後のほうの時代だと〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉。

ピーター 『アビー・ロード』だね。

行方 ジョージは確かに〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉あたりから、あと『マジカル・ミステリー・ツアー』の〈ブルー・ジェイ・ウェイ〉とかで才能が開花している。

ピーター 確かに。

■意外なる(!?)アルバムと曲のベスト3

行方 アルバムと曲のベスト3を選ぶとしたら? 今の気分でもいいけど。

ピーター アルバムは『ラバー・ソウル』『リヴォルヴァー』、3位を何にするかだな。

行方 『アビイ・ロード』とかは入らないの?

ピーター 入らない。嫌いな曲があるから。意外に『ウィズ・ザ・ビートルズ』なんかもすごく良いアルバムだと思うな。カヴァー曲も素晴らしいよ。選曲も演奏も。

行方 これは面白いね。意外というか……非常に地味な。

ピーター 地味じゃないですよ。〈プリーズ・ミスター・ポストマン〉が入ってるでしょ、〈ロール・オーヴァー・ベートーヴェン〉も入ってるでしょ、〈ユー・リアリー・

ゴタ・ホールド・オン・ミー〉でしょ……。

行方　あと〈オール・マイ・ラヴィング〉かな。

ピーター　それもあるし、〈マニ〉もあるし。

行方　要はカヴァー曲が素晴らしい。

ピーター　だから初期のビートルズ、それが僕にとって大きな魅力のひとつだったんだよね。

行方　でも『ウィズ・ザ・ビートルズ』をベスト3に入れてくれたことで面白くなったね。

ピーター　本当にすごく好きなアルバムなんですよ。曲で言えば1位は〈ツイスト・アンド・シャウト〉。

行方　おお！　オリジナルじゃないんだ。

ピーター　もうダントツ。これこそリアル・タイムで聴いた人間じゃないと、たぶんこんなこと言わない。あの〈ツイスト・アンド・シャウト〉を聴いたときの興奮といったら、一生忘れない。今聴いても、いまだにあの興奮が毎回蘇ってくる。すごいですよ、あれは。

行方　確かに、私も最初にシングル盤で買って聴いたときのインパクトはすごかった。とにかくシャウトするし。

ピーター　あのアルバム、既にシングルで録っていた曲以外を1日で録音するんだけど、ジョンが風邪引いてて。その最後に録ったのが〈ツイスト・アンド・シャウト〉。テイク2までしか録れないっていうくらい、喉が枯れてて。当時はそんな事情なんてもちろん知らないけど、あのすごい興奮っていうのは、たぶんそういうことに微妙に関係してるんだろうな。

行方　じゃあシングルの2位は？

ピーター　〈ストローベリー・フィールズ・フォレヴァー〉。

行方　おお、いいね。それは私と同じ2位だな。私は〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉が1位だから。

ピーター　出た当時、こんな音楽は聴いたことがないって思った、とっても不思議な曲。〈ペニー・レイン〉と両A面扱いのシングルだったけど、完全に常識を逸脱したシングル・カットでしょ。ビートルズじゃないと、まずあり得ない。

行方　あれは相当ジョージ・マーティンが絡んでるんだよね。

ピーター　まあそうだね。『アンソロジー』が出た頃には、どのように編集されたかって話とかも全部出てくるけど、当時はなんにもそういう話を知らないし、スタジオ技術なんて分からない。でもめちゃくちゃ不思議な曲でありながらも、すごい魅力をもった曲だったね。

行方　本当に同じ意見だな。だから私は最初から〈ペニー・レイン〉より全然好きだった。両A面だけど結果としては〈ペニー・レイン〉に一歩譲った形にはなったが。

ピーター　イギリスでは両面とも1位になってない。2位止まりだった。あのとき1位だったのはエンゲルベルト・フンパーディンクの〈リリース・ミー〉だったそうだよ。

行方　じゃあ好きな曲の3位。

ピーター　僕ね、A面よりB面のほうが好きっていうのがいくつかあるんだけど、そういった意味でどれを3位に選ぶか……。〈こいつ This Boy〉にするか〈イエス・イット・イズ〉にするか。

行方　〈こいつ〉ときたか。

ピーター　〈This Boy〉、すっごく良くない？

行方　どうかなあ。私は映画で観て良い曲だなとは思った、〈リンゴのテーマ〉ね。最初にシングルで聴いてたときは……普通だったけどね。

ピーター　僕はA面の〈抱きしめたい〉よりも好きだった。

行方　それはまた！

ピーター　〈イエス・イット・イズ〉も〈涙の乗車券 Ticket To Ride〉のB面でしかなかったんだよね。〈Ticket To Ride〉は嫌いじゃないけど、そのB面の〈イエス・イット・イズ〉のギターとか、ジョンのヴォーカルが大好き。

行方　〈今日の誓い Things We Said Today〉はどう？

ピーター　あれも良い曲ですよ。

行方　石坂敬一さんがナンバー・ワンって一時言っててね。ヘンなこと言うなって思ってた。

ピーター　あれもB面だったっけ？

行方　〈ア・ハード・デイズ・ナイト〉のB面。

ピーター　どれにしようかな。〈イエス・イット・イズ〉にしよう。誰も挙げないや

CamScannerでスキャン

つ。でも本当に好きな曲です。

行方　〈ツイスト・アンド・シャウト〉〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉〈イエス・イット・イズ〉って、なんかこう……幅広い。

ピーター　やっぱりビートルズ初期のロックンロール・バンド然とした感じが好きだけど、そればかりではもちろんない。僕は、63年に安いギターを買ってもらったんですよ。最初ちょっとだけレッスンを受けたけど全然面白くないから、フォーク・ソングの本を買ってきてコードを弾いたり、あとはやっぱり自分たちの好きな音楽を耳コピしたりしてね。でもストーンズだったら出来るけど、ビートルズは全然出来なかった。E♭m7とか、まだギターを弾き始めたばかりの少年にとってコードのひとつひとつが難しいし、普通に3コードを覚えれば出来るような曲っていうのがないじゃないですか。チャック・ベリーのカヴァー以外は。だから「ビートルズの曲って意外に難しいんだな」っていうのは初期の頃から意識してたな。

行方　あれってやっぱり、ジョンとポールがジョージ・マーティンから学んだ知識や感覚なんじゃないかな。

ピーター　どうなんだろうね。一部、そういうことがあるかもしれないけど。

行方　ジョージ・ハリスンが持ち込んだ部分も大きいかもしれないね。

ピーター　何よりもデビュー前、ハンブルグで約2年、毎晩5〜6時間、もっと長いかもしれない、何回も何回も演奏してたわけじゃない。たとえば小一時間やって、ちょっと休んで、またやって、また休んで、またやって……って。安いバーだけど、お客が長時間いたらしくて、同じレパートリーを毎回何回も繰り返すわけにはいかなかった。自分たちが知ってる、ありとあらゆる曲を演奏しないと間が持たないっていう事情があった。そうなると当然、そういうスタンダード曲だとかいろんなタイプの曲を、お客さんが喜ぶようなロックンロールのアレンジにしたりして、彼らなりに工夫してた。だからビートルズの音楽がすごく幅広いのは、必然、必要に迫られてそうなったっていう部分もかなりある。あと、演奏力が抜群というのも、毎晩毎晩たくさん演ってたからだと思うな。場数を踏んでやっぱり上手くなるものだから、誰でも。他のどのバンドよりも、そういう意味では抜きん出ていたと思う。あの時代にね。

CamScannerでスキャン

■映画について

ピーター　ついこの前、久しぶりに「ハード・デイズ・ナイト」の映画を観た。

行方　リヴァイヴァル・ロードショーをやったんだよね。

ピーター　僕が観たのは東京・立川でやってた、期間限定の極音上映だったんだけど、あの映画を観ていない人はいまだに意外に多くて。観たとしてもDVDとかだしね。大きいスクリーンで観るとまた迫力が全然違うから。あれは良かったよ。

行方　また出来の良い映画なんだよね。

ピーター　良く出来てる。ほとんど現実に近い。

行方　本当にPVなんだよね。

ピーター　1時間半のね。

行方　監督のリチャード・レスターってすごいよ。「ヘルプ!」も立派な映画だもんな。

ピーター　あれは好きになれなかった。

行方　好き嫌いはともかく、映画としては完成されてますよ。

ピーター　リチャード・レスターって珍しくイギリスに住んでたアメリカ人だよね。ピーター・セラーズも一員だったグーンズっていうコメディ集団の短い映像、10分あるかないかぐらいのものだと思うんだけど、それをリチャード・レスターが撮ってるんですよ。グーンズって、ジョンが若いときにすごく憧れていたけど、ピーター・セラーズのレコードを作ってたのがジョージ・マーティンです。

行方　ジョージ・マーティン、お笑い音楽得意だもんね。

ピーター　そうそう。ジョン・レノンがジョージ・マーティンのことを肯定的に思ったのも、それが大きな理由のひとつだったらしくてね。またそのグーンズの映像を作ってるからリチャード・レスターを信頼出来るっていうところがあったみたい。

「エイト・デイズ・ア・ウィーク」っていうドキュメンタリー映画は観ました?

行方　あれどうだった?

ピーター　すごく面白かった。

行方　あれ、監督はロン・ハワードだよね。私は普通の記録映画だと思ったけどね。

ピーター　だってそれ以上の期待は何もしてなかったから。普通の記録映画と

CamScannerでスキャン

して良かったよ。

行方　ロン・ハワードだからもうちょっと期待してたんだよ。しかもルーフトップで終わるのが、あまりにも当たり前じゃないかっていう。私はどっちかっていうとスタジオのビートルズ派だから。

ピーター　ライヴ・バンドとしてのビートルズを撮った記録映画だから、そういう意味ではすごく面白かった。よくこんな映像集めたなと思った。

行方　解散のときはロンドンだよね？

ピーター　もちろん。大学1年生。

行方　ビートルズ解散というニュースを聞いてどう思ってた？

ピーター　ついにここまで来たかって感じだったね。もう既に散々いろんなこと言われていたから。人間関係が良くないってことはみんな知ってた。時間の問題だってね。既にソロ・アルバムが出始めてたでしょう。

行方　まあ、ことさらに解散っていうのも、私もあんまり気にした記憶がないんだよね。それが50年前。だけど、ソロ・アルバムが出始めてたこともあるし、ビートルズとしてやるべきことを完全にやりきった感じがあるし。あとはやっぱり『レット・イット・ビー』でライヴ・バンドに戻れ、みたいになるじゃない。フィル・スペクターがいじりまくっているけども、ある種ライヴ・バンドとしてのビートルズの記録に違いはない。そういう意味じゃ「今更そんなもん、聴かせるなよな」って気分でもあったからね。

ピーター　確かに（笑）。

行方　映画の「レット・イット・ビー」はどう思った？

ピーター　さっき行方さんも言ってたけど、「こんなもの今更見せないで」。あれって解散してからだっけ？　映画出たの。

行方　事実上の解散をしてからだよね。

ピーター　あのアルバムね、出荷がプラチナムで返品がゴールドっていうことで有名だったんだよ。あんまり売れなかった。

行方　ロンドンのファンはやっぱり立派だね！

CamScannerでスキャン

藤村美智子　吉田聡志

Michiko Fujimura　*Satoshi Yoshida*

私がもしリアルタイムでビートルズを知ってたら、
ジョージ・マーティンのファンになってましたよ（笑）（藤村）

星加ルミ子さんと長谷部宏さんは
シンコーの宝物だと思っています（吉田）

**レコード会社と音楽出版社、
それぞれの立場のふたりは、ビートルズと
どのように出会い、付き合ってきたのか**

藤村美智子
レコード会社勤務（東芝EMI／EMIミュージック・ジャパン／ユニバーサルミュージック）。1996年「アンソロジー」（LD-BOXとVHS）の日本版制作が、仕事におけるビートルズとの出会い。その後、1999年「イエロー・サブマリン ～ソングトラック～」から2016年「ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル」まで、17年間にわたりビートルズの公式CDや映像作品の日本における制作担当を務める。2000年に発売した「ザ・ビートルズ 1」は300万枚を超えるセールスを記録。又、アップル・コーブスと交渉を重ね「ミート・ザ・ビートルズ〈JAPAN BOX〉」等の日本独自企画やマーケティングを行方氏指揮のもと数多く展開。この間には、クイーンやジョン・レノン、ジョージ・ハリスン、コールドプレイ他の洋楽アーティスト作品も担当。クイーンの日本独自企画CD「ジュエルズ」(2004年)は160万枚を超える売上を達成した。

吉田聡志
1960年生まれ。チューリップのファンで「ミュージック・ライフ」を愛読していたことが理由で、1983年、新興楽譜出版社（現シンコーミュージック・エンタテイメント）入社。営業部、広告部、「キワス」編集部、企画開発部などを経て、現在、著作権部　SHINKO MUSIC RECORDS取締役。ビートルズ関連では数多くの出版企画、CD企画、イベント制作を担当し、社内では"ビートルズ・コンシェルジュ"的な存在。最近ではクイーン展ジャパンの展示監修／キュレーションを担当。ビートルズで一番好きな曲はと聞かれたら、（ペイパーバック・ライター）（2020年2月10日現在）。

■「赤盤」「青盤」と解散後のファン

行方　日本って英米と比べてビートルズの評価が若干特殊なんだよね。日本にはビートルズを凌ぐロック・バンドがひとつだけある。それは「解散後のビートルズである」って私は言ってるんだけども。ふたりはまさに解散後のファンだよね。ビートルズとの出会いっていつ？　レディファーストで藤村さんから。

藤村　私の直接的なビートルズとの出会いはCDの『赤盤』『青盤』（1993年）の頃ですかね。

行方　『赤青盤』のCD世代ってあるんだね。

藤村　ただ、小学校の歌唱読本に〈レット・イット・ビー〉や〈イエスタデイ〉が載っていて、その作詞・作曲はレノン＝マッカートニーとされていたので、曲名と人名は知っていました。他にも、〈レット・イット・ビー〉は小学校の掃除時間に毎日放送されていたので、刷り込まれていましたしね。ですが「これが"ビートルズ"なんだ！」という出会いは、恐らく『赤盤・青盤』。

行方　つまり教科書みたいなものに載っていたものだから、わりとポジティヴな記憶として残っていたわけだ。

藤村　そうです。

行方　それは素直な子供だったんだね。私なんか教科書に太宰治が載っていたから、全然読まなかった。教科書に載っていなければ、太宰も漱石ももっと早く読んでいたのに。第1部の原稿に書いてあるけれど、音楽の教師がビートルズをヘンに見下していて、「なんですか、あの髪を長くしてボサボサにした人たちは」って言うわけ。それが音楽室だったもんだからベートーヴェンとかモーツァルトの肖像画入りの年表が壁に貼ってある。ふたりとももちろん長髪だから、「先生、彼らはなんなの」って聞いたの。以来その先生に目を付けられてさ。私らの頃はビートルズの音楽って、演歌と同様に非行の代表みたいな感じだった。

藤村　あと、私が大好きだった邦人アーティストが「ビートルズを尊敬している」みたいに言っていたのも影響があると思います。具体的に言えば、私はゴダイゴの大ファンでしたから、タケカワユキヒデさんがビートルズ好きっていうことで知っていましたね。

CamScannerでスキャン

行方 そうか。「赤青」を聴き込む中で、気に入った曲は？

藤村 〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉が好きでしたね。だから「青盤」ばっかり聴いていた記憶があります。

行方 さて、では吉田さんのビートルズとの出会いは？

吉田 僕も偶然なんですけど『赤青』です。でも圧倒的にアナログLPです。

行方 つまり1973年だ。

吉田 初出のアナログLPですね。きっかけはチューリップなんですよ。

行方 チューリップってかなりビートルズだったもんね。

吉田 リーダーの財津和夫さんがすごいフリークですから、言葉の端々に「ビートルズ」って出てくるんです。それでビートルズを聴くようになりました。だから藤村さんのゴダイゴと似ているかもしれない。

行方 ふたりとも好きな邦楽アーティストから入っているんだね。

吉田 それまでは一切洋楽も聴いていないし、ビートルズのビの字も知りませんでした。

行方 ビートルズが出現したとき、日本にはそういうグループなんか一個もなかったんだよ。ウエスタン・カーニバルなんかの時代で、ロックンロール的なものはいくらもあったけど、いわゆるJロック的なものはなかった。

吉田 やがて東芝さんは「ニュー・ミュージック」って言うようになりました。

行方 カレッジ・ポップスを経てニュー・ミュージックかな。ニュー・ミュージックも全くビートルズと無縁ではないんだよね。

藤村 むしろ縁があるくらい。

行方 だからそれを、皆さんは逆に辿ってきたと。

藤村 そうですね。

吉田 当時の諸先輩に聞くと、発売順にビートルズを聴いているじゃないですか。当然リアルタイムなので。僕らの世代って、順番がめちゃめちゃなんです。

行方 そうそう。順番もめちゃくちゃだし、時代的な重みとかも伝わってない気がするね。

吉田 はい、全然ないですね。さっき行方さんがおっしゃってたような、「髪が長いから不良」って時代ではないですし。僕たちの頃は、むしろビートルズはちゃんとしてる人たちっていう感じでした。

行方　結局日本は「サージェント・ペパーズ」後進国なんです。時代へのインパクト抜きで出会っているのが大勢だから。あれ、日本じゃセールス4番目ぐらいかな。
藤村　セールスはそんなに良くないですね。
行方　イギリスはトップ、アメリカも2位ぐらい。私みたいな現役からのファンにとって「サージェント・ペパーズ」って、〈抱きしめたい〉からずっと付き合ってきている中で、「来そうだ、来そうだ」っていう予感と共にやって来るのよ。あの期待感と驚きというのが、解散後に出会ったファンにはない。だって73年にビートルズに出会うと、もうとっくにピンク・フロイドとかがいろんなことやってるでしょ。
吉田　いろんなバンドが。ツェッペリンもいるし。
行方　逆に、そこまで運んで来たのは誰なのよっていうのが、やっぱり欠落していると思うんだよね。ただそういう時代的な意味とは別に、絶対的な尺度でも「サージェント・ペパーズ」はやっぱり立派なアルバムだと思うけどね。日本は評価がちょっと低いな。
藤村　確かにそうですね。
行方　吉田さんは『赤青』を買って、何が気に入りました？
吉田　これは東芝さんに是非言いたい。このブックレット（写真）がとっても良かった。当時2冊入っていて、1冊はディスコグラフィがカラーで載ってたんですよ。それもイギリス・オリジナルじゃなくて日本盤が中心。これにハメられちゃったんですよ。

行方　確かに解散後に出会えば、一通りの全録音と一緒に出会えるわけだもんね。
吉田　そうなんです。この資料だと「ビートルズ！Meet The Beatles」が日本

のデビュー・アルバムになってるんですよ。

行方　そう、私の時代は「輸入盤なんてどこにあるんだい？」って感じだったから。

吉田　このディスコグラフィがとにかく衝撃的で。「これ全部聴かなきゃいけないんだ」みたいな強迫観念に近いものがあって、何から買おうかって真剣に毎日悩むわけです。

行方　私なんかは発売日のことを大体覚えてるけどね。出た日に買ったか、買えなかったか、友達の誰が買ったかとか。

吉田　その日に買うという経験が一切ないので、全部復習なんですよ。

行方　復習の大まかなアウトラインは、その『赤青』で掴めるわけじゃないですか。その中でビートルズって、ものすごく変化と進化を遂げてるじゃない。やっぱり「〈ラヴ・ミー・ドゥ〉じゃ、俺だってオーディション落とすぞ」みたいなところがあるけど、そこから〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉だ、〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉だにいくわけでね。そういう意味で言うと「この辺が好き」っていうのはありました？

吉田　たまたま僕は『青盤』から買ったんですよ。両方を一度には買えないから。

行方　それは意外と珍しいよね。

吉田　そうかもしれないです。何も知らないハナタレ坊主の中学生が、1曲めの〈ストロベリー・フィールズ～〉から聴くわけです。だからA面の1曲めというのがやはりインパクトが大きいですね。いまだに〈ストロベリー・フィールズ～〉を聴くと、『青盤』の1曲目が思い浮かんで、その曲順で頭の中で流れるんですよ。

行方　私で言うところの『ミート・ザ・ビートルズ』だな。〈抱きしめたい〉が終わると自然に〈シー・ラヴズ・ユー〉が流れてくる。

吉田　まさにそのまま十何年かズレた感じだと思います。

行方　『青盤』には〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉も入っているしね。

吉田　シングル以外も当然名曲揃いです。

行方　オールタイム・ベストの『ザ・ビートルズ1』(2000年)って、〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉はもちろん入ってないし、英米のベスト1曲集だから、2位止まりの〈ストロベリー・フィールズ～〉も入ってないんだよ。『青盤』は両方入っている。あの時期は他のロック・バンドの音楽のレベルが高くなってたってことも

CamScannerでスキャン

あって、ジェファーソン・エアプレインとかドアーズとか、『青盤』はああいう刺激と覇を競っているところがあった。
吉田　洋楽は今と違って流行ってたというか、クラスに必ず何人かはファンがいました。ビートルズはみんな好きでしたが。
行方　我々のときはせいぜい2〜3人。学年で大体あいつとあいつ、って分かるくらいのもんでね。だから60年代って、高嶋弘之さんがよく言うんだけど、ベンチャーズのほうが10倍売れてた。明らかに一般に伝わっていた。1965年の〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉が日本のビートルズ最初の特大シングル・ヒット（50万枚）だけれど理屈はわかる気がする。ビートルズをロックンロールの延長で聴いてる人が多かった。〈ロック・アンド・ロール・ミュージック〉をシングルに選んだ高嶋さんはもとより、紹介者の方々、湯川れい子さんとか星加ルミ子さんといった大先輩方もプレスリーらロックンロールのフォロワーなんです。そういう意味で言うと、1958年に始まる日劇のウエスタン・カーニバルもあって、ロックンロール的、ロカビリー的なノリっていうのは世の中に伝わっていたんだろうけど、ビートルズはそれを明らかに一歩超えたところにあった。それが「ロックンロール〜」と高らかに歌ったわけだから、伝わりやすかったんだね。そういう説明抜きに感覚的に繋がった最初の世代が我々な気がするんだよね。
吉田　ちゃんと繋がってますよね。僕らの世代は土台がないんですよ。ビートルズが影響を受けた音楽を聴いてビートルズにいったんじゃなくて、何もないところから、いきなり213曲、ボン！
行方　それでもいきなり〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉だから、それは素晴らしい。少なくとも〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉のどこにもロックンロールはないからね。

■ビートルズとクイーン

行方　たまたまロックンロールの話が出たから聞きたいんだけど、ロックっていつからなんだろう？　70年代には普通に「ロック」って言ってたと思うんだよね。
吉田　色々説はありますけど、〈ロック・アラウンド・ザ・クロック〉から数える人もいますね。

行方 〈ロック・アラウンド・ザ・クロック〉の発表が1954年。ただあれはいわゆるロックンロールだよね？ 私はロックンロールが嫌いじゃないけど「好きだ」なんて思ったことはないし、ことさらプレスリーも聴かなかった。私はビートルズと出会ったその日から、「ロック」と出会ったんだと思っていたような気がするんだけど、まあ50年以上前の記憶だからな。「ロック」って新しい音楽が生まれて、それに付き合ってるんだって感覚が強かった。逆にふたりは、そんなもんがとうに切り離されてたんだね。

吉田 そうですね。特に「ロックとは何か」みたいなことは考えなかった。

藤村 少なくとも、私の周りの女子の中で「ロック」って言う人はほとんどいませんでした。まして洋楽のロックを話題にする子なんていなくて、あえて言えばベイ・シティ・ローラーズぐらい。ビートルズを好きっていう子がいた記憶はありません。男の子は分からないですけど。

行方 その頃って多分、解散後のビートルズのある種低迷期なんじゃないの？ つまり「赤青」が出た後。

藤村 そうですね、低迷期だったのかも。むしろクイーン等のアーティストの方が注目されていた気がします。

行方 その頃クイーンの超勃興期だったからね。吉田さんはクイーンが同時代なんだね？

吉田 そうです。クイーンは僕が中学生のときにデビューしました。

行方 私のビートルズと一緒だ。

吉田 ビートルズで体験できなかったそういうことが、そのままクイーンでできた。来日も観たし、まだ次の新譜がどんな内容か分からなくて、買ってきて聴けるっていう。

行方 藤村さんはクイーンは後追いになるんだよな？

藤村 そうですね、友人の家で聴かせてもらったぐらいのことは覚えてますけど、70年代に真剣にリアルタイムで好きだったわけではないです。

行方 でもベイ・シティ・ローラーズは終わっちゃったけど、クイーンは終わらないよね。やっぱりビートルズとクイーンの共通点は、茶の間の大人へのパイプを持ってたことかな。フレディ・マーキュリーのクラシックと、ポールのアメリカン・スタンダードのセンスという。映画音楽とかミュージカル曲のノリだよね。だ

CamScannerでスキャン

からビートルズとクイーンはロック・バンドでありながら、一般の人の生活空間に入り込んでる。

藤村　しかも小学校の本に出るくらいだから。

行方　ローリング・ストーンズがいかにライバルだって言っても、全然茶の間的には問題外でしょ？

吉田　ストーンズは全然茶の間じゃないですからね。

行方　そういう意味ではビートルズとクイーンは特殊だよね。

吉田　お茶の間感というのはビートルズとクイーン以外にはそんなにないですよね？

行方　全くといっていいくらいないね。

藤村　カーペンターズとかは？

行方　あれは逆にロックの先鋭感がないから。単に良い音楽であればいくらでもあるんだよ。ただNo.1ロック・バンドと言いつつ茶の間までっていうのは、ビートルズとクイーンくらい。ビーチ・ボーイズも実質はあるけど、日本人はハーモニーに弱いから今ひとつ広がらない。台所でビーチ・ボーイズを聴いてる主婦とかいないもんな。

■『ザ・ビートルズ1』の頃

行方　ふたりとも違う時期の『赤青』で出会ってるんだね。

吉田　やっぱデカイですよ、これは。存在としては圧倒的に重要ですね。

藤村　正直、これを聴いてると『ザ・ビートルズ1』はちょっと物足りないですよね、ベスト盤としては。

行方　『ザ・ビートルズ1』は2000年だよね。

吉田　『ザ・ビートルズ1』、当時持っていたのを持ってきました（写真）。

行方&藤村　懐かしい！

藤村　それ、私も持ってないの

CamScannerでスキャン

に！ 私たちが作った販促物！

吉田　後生大事にしています。

行方　このアルバムのリード曲としてラジオ用の〈レット・イット・ビー〉1曲入りプロモCDを配布したんです。ビートルズのこういうサンプラーをアップルがOKするって非常に珍しいんですよ。

吉田　記者発表で配布すると知ったから、無理やり入れてもらった覚えがあります。

藤村　作りましたよね、記者発表用の封筒！

行方　あと旗とかね。それまでの「赤盤・青盤」にしても、「ビートルズ・バラード・ベスト20」とかにしても、わりと恣意的なベスト盤があるけども、「ザ・ビートルズ1」は「英米でナンバー1になった曲」っていうかっちりした規則がある初めてのベストだからね。ただその話を聞いたとき、やっぱり同時に「なんだよ、〈ラヴ・ミー・ドゥ〉から始まるのかよ」とか「〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉が入らないけどどうしてくれるんだ」とかあったけど（笑）。一番気になってたのが、「ジャケットはどうするの？」っていうこと。ビートルズの8年間ってものすごい変化と進化があるから、オールタイム・ベストと謳ったときのジャケット・デザインが問題だった。

吉田　送り手側としてはすごく大変な問題ですね。

行方　「赤青」は二期に上手く分かれてたからね。あのジャケットはEMI本社のビルの中の吹き抜けで、7～8年くらい空けて撮った写真だよね。

吉田　同じアングルでね。

行方　そうやって二期に分けられたらいいけど、オールタイムを1枚にするのは大変なんじゃないのって思った。だから来日したニールにそういうふうなことを言ったんだよ。

藤村　会議室でね。

行方　そうしたら「1」って描いたの。

藤村　青く塗ってましたね、こっち（「1」ではなく、地の部分）を。

吉田　赤青にする発想だったんですか？

行方　或いはペンがなかったのか、一色で描かれてた気がする。

藤村　あのときに、ニールはこのジャケットを思いついたんですよね。

CamScannerでスキャン

行方　そうなのかなあ？　進んでいたアイディアを伝えてくれたと思っていたが。

藤村　あのときに思いついたって聞いた気がします。会議の最中に突然描き始めたから。本人に聞いたわけじゃないですが。

行方　そうかもしれないね。あれはある意味歴史的な瞬間だよな。ビートルズってそういう意味でシンボル化されていなかった。だから「1」って見たとき、勝ちだなと思ったね。それで旗を作った。

吉田　旗はどのように活用したんですか？

行方　雑誌や放送局などの支援者の事務所に飾ってもらったり、東芝EMI全社のプレゼンの入り口にズラーッと並べたり、渋谷を「1」一色にする計画で商店街に飾っていただいたり。

藤村　発売日記念イベントの渋谷ジャックですよね。そのときには皆でジャケットをデザインしたトレーナーを着てましたね。

行方　とにかく全部赤黄だよな。

藤村　そうそう。

行方　ルーフトップ・コンサートもやったもんな。

藤村　やりました。たこ焼き屋さんの上で（笑）。

行方　ビートルズのコピー・バンドをいくつかお願いしてね。

藤村　渋谷3ヵ所ぐらいでライヴをやりましたよね。それと代々木公園と。スタンプラリーみたいにして、最終的に代々木公園で抽選会をしてビートルズ・グッズをプレゼント。

行方　歩く先々に「1」の旗があって……。

藤村　「1」のティッシュを配ったりして。

吉田　ビートルズを知らない人も「何だこれ」ってなりますね。

行方　あの頃レコード店に行くと、女子高生が結構「1」を手にしてるのを見てやっぱり嬉しかったね。藤村さんが制作の担当で、深澤伊都子さんが宣伝をリードしてくれてね。女性だから届く何かってやっぱりあったと思う。

藤村　私たちのチームの女性陣の多くは、自分自身がビートルズをあまり知らないところからプロジェクトに関わったので、ビートルズって名前とビートルズの音楽が結びつかない若い世代に何とかリーチしたいという思いがありました。だから新しいファン開拓に向けて新機軸のプロモーションをしてきたつもりでは

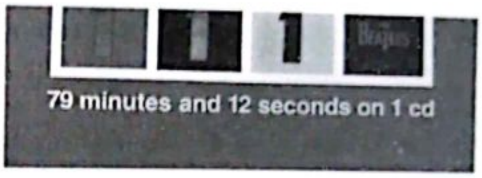
CamScannerでスキャン

あります。『ザ・ビートルズ１』みたいに誰にでもわかりやすい商品がたまたま入ってきたので、よりやりがいがあったっていうのはありますね。

行方　やっぱり『1』みたいなシンボルって大事だよね。ラグビーのW杯で観客が日の丸振ってるのと同じ。One Teamだよね。そういうのも含めてニールの功績はデカイ。

藤村　ホント、良いタイトルとジャケットですよね。

吉田　しかもここに「79分12秒」って書いてあるんですね。



藤村　「収録分数ギリギリまで入ってますよ」っていうアピール。

行方　東芝EMIのルールは79分までしか入れちゃいけないんじゃなかったっけ。海外は80分を超えたりもしてるけどね。

吉田　27曲入っていて１枚、というのもウリですから。

行方　ところで石坂敬一さんは『赤青』からの制作担当だったよね？

藤村　そうです。

行方　あの人は解散後のビートルズ担当者。高嶋さんが「冗談じゃねえ」って言った後、押し付けられたのが水原健二さんで、高嶋さんよりも「英語ができるんだけど、真面目で慎重だから邦題を付けなかった」らしい。だけど〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉だけは付けてほしかったって言ってたな、そういえば。

吉田　長い。

行方　長いよな。

吉田　〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉も当時なら付きそうですよね。

行方　高嶋さんなら何か付けそうだよね。それで『赤青』も成功した結果、EMIは『ロックン・ロール・ミュージック』と『ラヴ・ソングス』っていうそれぞれ2枚組のベストを出すんです。石坂さんが言い出しっぺらしいんだけどね。これら自体は『赤青』を補填するものというのか、種目別コンピなんです。1977年には『ハリウッド・ボウル』が出てるけどこれは記憶にある？

吉田　あります、あります。ビートルズの生ライヴって、噂では色々知ってても当然聴いたことのない世代ですから、それが出たときは「ついに出たか!」って

いう感じでした。けど聴いてみたら……音が悪くて。

行方　うるさいし。

吉田　何度も聴くというよりは、参考資料みたいな位置づけでしたね。

行方　まして〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉で出会ってると、ライヴ時代のビートルズなんてもういいやって感じでしょ？

吉田　自分の好みからはちょっと外れたとこにいました。その後のアルバムには『レアリティーズ』がありますね。

行方　『レアリティーズ』も最初LP盤だもんね。英日で1979年、アメリカで80年に発売された。

吉田　『レアリティーズ Vol.2』も出ましたよね。

行方　『レアリティーズ Vol.2』ってアメリカの『レアリティーズ』なんです。イギリスで『レアリティーズ』を出したけど、アメリカはアメリカで選曲して出した。アメリカなりの"レアリティー"を別に組んで。日本はイギリス編集盤とアメリカ編集盤を両方出したから、『レアリティーズ』の1、2だってわけ。曲目が重なってないのもすごいけどね。ただし「赤青」後のビートルズって、それほど恵まれた時代になかったわけで、次の時代は『アンソロジー』と共に始まるんじゃないの？

吉田　藤村さん担当だよね？

藤村　はい。映像作品の。

行方　あの頃、東芝EMIの全映像商品は映像部が担当していて、そこに藤村さんがいた。『アンソロジー』のLD-BOXとVHSを担当することになって、藤村さんはビートルズとめぐり逢ったんだよね。

藤村　そうです。

行方　その映像部が私の本部の管轄になったんだよね。よく覚えてるんだけど、イギリスに出張するって言ったら、LD-BOXにオマケを付けたいから許可を取ってきてくれって、すごい迫力で藤村さんが言うんだよ。

藤村　ウソォ〜！

行方　おっかない部下が出来たもんだと思った。心強かった。

吉田　最初VHSでしたっけ？

藤村　そう、VHSとLD。

行方　藤村さんは「こんなもん、オマケないと売れないじゃないですか」って言

い切ってたな。

藤村　単体で発売した後、BOX化された商品だったので。

行方　私がビートルズに関わった最初の商品なんだよ。それで藤村さんの勢いに押されてロンドンに行って、ニール・アスピノールに会ってきた。ニールは68年にアップルの代表になったけど、どっちかって言うと頼まれてなってる感じで。ジョージとポールの同級生だからね。最初はニールも、適任者がくるまでの腰掛けで、そんなに長居する気はなかったみたいなんだけれど。彼は賢い男だよね。彼がリードした解散後のビートルズって、「アンソロジー」をはじめ非常に大きいと思う。

吉田　信頼されてたんですかね。

行方　信頼以上にツーカーの仲だったからかな。いかに社長とはいえ、上には彼を雇っている4人の権利者がいる。そこをまとめるのが大変なんだよ。だからニール以降は若干迷走してるよな、現在のビートルズは。

藤村　そうかもしれませんね。

行方　わからないでもないよね。逆にニールが解散後のビートルズのあまりにも素晴らしい時代を作ったっていうことは言える。

吉田　彼がハブになって、4人の連絡とか上手く取っていたわけですね。

行方　最初はジョン以外みんないたし、ヨーコだってニールには一目も二目も置いただろうしね。だからニールの時代に大きな出来事があるよね。

藤村　そうですね。

行方　1987年のCD化っていう大イベント。ビートルズはCD化に二の足踏んでたんだよ。つまり最初の契約条件が、当たり前だけど良くないの。ビートルズが世の中で最後だったんじゃないかな、CD化。

吉田　フライングが1枚ありましたよね。

行方　日本でね。最初、行方さんがね（笑）。行方洋一さんは坂本九、弘田三枝子、欧陽菲菲、渚ゆう子、奥村チヨ、小川知子、ザ・ドリフターズ等の数々のヒット曲を手がけた名エンジニアで、“行方サウンド”で知られました。私は東芝EMI の最終面接で社長から「君は行方さんの親戚ではないのかな?」と質問され、「残念ながら違います」と答えた思い出があります。

　話を戻すと、『赤青』は2枚組、2巻4面だったでしょ。その後もベストはある

CamScannerでスキャン

んだけど、みんな帯に短し襷に長しみたいなベストで、大して目立ちもしなかった。だから20世紀の終わりに、オールタイムが1枚になったってインパクトは大きい。説明が簡単だし。

藤村　そこでさらにお茶の間に浸透した感がありましたよね、ビートルズが。

行方　そうだね。だから『赤青』の次に重要なのはこの時期になるだろうね。

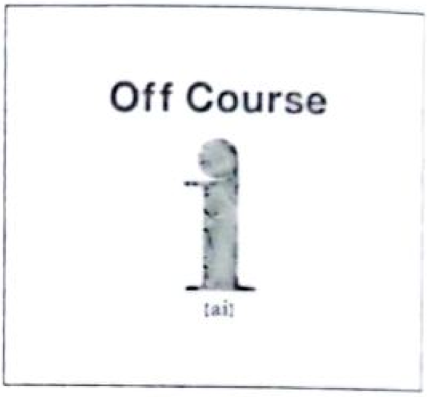
吉田　入門編的な分かりやすい作品として、CD時代に『1』の功績はとても大きいと思います。

藤村　今のユニバーサルの若い社員で、ビートルズに出会ったのは『1』だって言う人はすごく多いです。

行方　やっぱりヴィジュアルのインパクトと共にあるからね。私はこれをパクってオフコースの『i【ai】』(2006年)ってベスト・アルバムを作った。あれも良く売れたんだよ。

藤村　あの後色々、これに似せたジャケットが出てましたね。

行方　コンセプトをひとことで説明出来て、しかもひとつの絵柄で説明できる、商品として大変素晴らしい作品です。これが日本におけるビートルズのダントツのアルバムだよね。



『i【ai】—オール・タイム・ベスト—』
オフコース
(2006年／エキスプレス／ユニバーサル)

藤村　あっと言う間に300万売れたと思います。日本だけで。

行方　オーストラリアが在庫をそっと出荷してきたんだよな。もちろん『1』を売ろうとしてのことだったけど作りすぎたらしくて。日本はとにかくセールス的には『1』がダントツで品切れ状態。一方でイギリスは『サージェント・ペパーズ』。

藤村　『1』よりもですか？

行方　『サージェント・ペパーズ』、ついで『1』。それからアメリカはなぜか『ホワイト・アルバム』が1位なんだね。

藤村　不思議。

吉田　国民性の違いなんですかね。

行方　だから必ずしも、世界のどこもかしこも『1』がトップセラーではない。

CamScannerでスキャン

吉田 このとき、推し曲は〈レット・イット・ビー〉でしたっけ？
行方 〈レット・イット・ビー〉にあえてしたんだよね。さすがに〈ヘイ・ブルドッグ〉みたいな知られざる1曲というわけにはいかないから。
吉田 王道って感じですね。ビートルズのシングルの中で、日本で最も売れたのがこの曲って書いてあります。
行方 だって「悪霊島」（編注：1981年公開の角川映画。横溝正史原作、篠田正浩監督、出演に鹿賀丈史、室田日出男、古尾谷雅人ほか）の挿入歌にもなってるからね。

■解散後の新展開

行方 『1』の後が『レット・イット・ビー…ネイキッド』だね。
藤村 『アンソロジー』のDVDとかも出しましたけどね。
行方 『アンソロジー』の本も出てるしな、2000年に。『アンソロジー』は本とDVDとCDとレコードがあるけど、一緒に出たっていうだけで、それぞれあんまり関係ないね。あれはひとつに海賊盤対策だね。
吉田 僕らの世代は海賊盤とかどうしても手を出し気味ですからね。『アンソロジー』があればこれ以上のアウトトラックはないんだろうなと、「これで全部出たんだ」って思っていました。
藤村 音源的にはね。
行方 『ネイキッド』はどうだった？
吉田 〈ドント・レット・ミー・ダウン〉が入っていたのと、ポールが望んだミックスということで聴いたんですけど、「こういうものもあるんだな」くらいでした。ビートルズが気に入っていないと言われてるフィル・スペクターの『レット・イット・ビー』ですが、それを何百回と聴いてる人間としては超えなかったですね。
行方 やっぱりフィル・スペクターのヴァージョンを俺ら聴きすぎてたからね。
吉田 そうなんです。あれが染み込んじゃってるんで。いくらこっちが本来の姿だと言われても、半分お勉強みたいな気持ちで聴いてました。
行方 そうだね。だからあれはものすごいスピードで売れ始めて、あっと言う間に止まったね。

藤村　初動はすごかったです。

行方　年内どこまで売れるのかって話してたのに、年明けたら全く売れなかった。

藤村　初日はすごかったですよ。あのときテレビの露出が集中しましたからね。

行方　やっぱり『ネイキッド』って短期的な関心はそそるんだよ。ただカタログとして定着させるにはちょっとね。『ネイキッド』とはいえ、服を脱いでないから。厚ぼったい何かを纏ってる感じだからね。

吉田　そうですね。

行方　何であれ〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉と〈レット・イット・ビー〉は、元のアルバムで耳タコみたいになっちゃってるな。

吉田　〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〉のオーケストラなしヴァージョンって、絶対一度は聴いてみたいし、売りだったじゃないですか。聴けて「ああ良かった」なんだけど、心の底では「やっぱりこっちのほうが好き」みたいな。甘々のストリングスがもう頭に染み付いちゃってる。

行方　でもポールとしちゃ知らない間に手を加えられたわけだから、どこかで落とし前をつけなきゃっていうのがあったんだろうな。ただ『ネイキッド』版の『レット・イット・ビー』は『ゲット・バック』〔編注：1969年1月から行なわれたゲット・バック・セッションをもとに、制作が予定されていたアルバム。このときの音源はフィル・スペクターの手が加わり『レット・イット・ビー』として発売された〕にゲット・バックすれば良かったとは思ってるけどね。『ゲット・バック』はジャケットも出来上がってたわけじゃない。そうすると『レット・イット・ビー』と一緒なんだけど。ただ『ゲット・バック』が出たぞっていっても、一日10万枚売れるほどの関心は引かなかっただろうね。ただ、今も残っている気はする。曲順も違うでしょ。

吉田　違いますね。

行方　『レット・イット・ビー』なんてジョージ・マーティンは首突っ込んでないわけだから、彼がいたらもっと良いアルバムになっていたんじゃないかな。そう思うのは『ホワイト・アルバム』なんかもそうだね。あれは何でも入れ過ぎだよ。

藤村　そうですね。

行方　『ネイキッド』があって、次が『LOVE』。ミュージカルの『LOVE』って今でもやってるんだよ。

藤村　まだやってるんですか？

CamScannerでスキャン

行方　うん。なかなか日本じゃやれないだろうな。「LOVE」のために円形劇場を作ったくらいだから。

藤村　ミラージュというホテルの中にね。

行方　全体にいっぱいスピーカーがあって、各椅子にスピーカーがあって。あれを作らないと日本では出来ないね。でもあの音楽はジョージ・マーティンだからこそ作れた気がする。

藤村　ジョージとジャイルズ（・マーティン：ジョージの息子）が頑張った。

吉田　あれでジャイルズが正式に、ジョージ・マーティンの意志を継いだビートルズのプロデューサーとして認められた感じがします。

行方　そういうふうにジョージがしたんだね。だってジョージの代理みたいにして日本に来たんだよ。ジャイルズに「家じゃビートルズばかり鳴ってただろう」って話したら、「家じゃビートルズの話と音楽はタブーだった。ビートルズはこんなに稼いだのにEMIはロクな給料をくれない。だからすぐ『あんたどこの金持ちの音楽を聴いてるの』って夫婦ゲンカになるんだ」って言うの。それでジョージは独立するんだよ。でもレコード会社からしてみれば、ヒットするたびにいっぱい払ってたらそれはそれで大変だよな、桁が違うから。それにしては随分低いなと思うくらいの給料だった、ジョージ・マーティンの自伝によれば。

藤村　早く独立すれば良かったんですよね。ビートルズと一緒に。

行方　ただ、エア・スタジオを作って独立してからも、結局は外部プロデューサーとしての位置付けなんだよ。これも結構セコくてね。だから『ホワイト・アルバム』を遠目に見てるし、『レット・イット・ビー』に関しては、むしろ蚊帳の外に置かれてる感じでね。

吉田　ジョージ・マーティンが編曲に関わっている曲ってすごく多いじゃないですか。編曲著作権を取ろうとかそういう考えはなかったんですかね。

藤村　その当時はなかったんですかね。

行方　そういうつもりで付き合ってたわけじゃないんだろうね。

藤村　ジョージが亡くなったのって結構最近ですよね。

行方　2016年。たかが4年前だよ。

吉田　随分前のような気がしたけど、そんなもんか。ビートルズ周りは最後ジャイルズに任せたって感じですかね。

CamScannerでスキャン

行方　ジャイルズもビートルズ漬けで育ったわけじゃなくて、結局ある時期から親父に特訓されてるんだよね。

藤村　『LOVE』ぐらいからですね、たぶんアビイ・ロード・スタジオで色々な素材のこととか全てを引き継いだんですね。

行方　ジョージ・マーティンって英国紳士な感じだったよな。

藤村　そう、本当に格好いい。私がもしリアルタイムでビートルズを知ってたら、ジョージ・マーティンのファンになってましたよ（笑）。

吉田　それ結構マニアックじゃない？

■日本の人気投票に物申す！

行方　『LOVE』の後はやっぱり“999”だよな。2009年9月9日に初めてのリマスター。

吉田　あれは大きい出来事ですよね。

行方　あのときに213曲のカウント・ダウンとかやってね。すごい時間がかかったよね。

藤村　赤坂BLITZ（現マイナビBLITZ赤坂）で。朝10時くらいからやりませんでしたっけ。

行方　夜7時半とか8時くらいまでかかった。200曲を甘く見てた。

藤村　だって全曲ですもん。

吉田　あのとき黒いステレオのボックスとモノラルの白いボックスが同時に出たんですよね。

行方　そうです。

吉田　ファンはこれ以上買わなくていいんだなって思いました（笑）。

藤村　ファンの方々には沢山の出費をしていただいて、いつも申し訳ないなと思ってました。

行方　あの人気投票はどんな順番だったっけ？

藤村　1位〈レット・イット・ビー〉、2位〈イン・マイ・ライフ〉、3位〈ヘイ・ジュード〉（以下、4位〈ヘルプ!〉、5位〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉、6位〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉、7位〈ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロー

CamScannerでスキャン

ド〉、8位〈イエスタデイ〉、9位〈サムシング〉、10位〈ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス〉)。

行方　それを見て俺は「何なんだ」って思ったの。〈イン・マイ・ライフ〉が2位なんて普通ないよね？

吉田　〈イン・マイ・ライフ〉、なんでそんなに人気なんだろう？　ただ、ジョンが死んでから、ジョンのビートルズ・ナンバーってちょっと見方が変わったような気がするんですよね。それまではジョンの曲、ポールの曲って普通に見てたんですけど、亡くなってからは思い入れが違ってるんですよ。神格化されたというか。亡くなってるジョンの曲、いまだに日本に来て頑張ってる現役のポールの曲、みたいに。それで僕の場合は、〈ストロベリー・フィールズ〉の評価がまた上がっちゃうんですけど。でも〈イン・マイ・ライフ〉ってジョンが死んでから人気が出たとか、そういうことじゃないですよね？

藤村　どうなんですかね。でも行方さんたちの時代には明らかにそうじゃないですよね。

行方　だってあれ『ラバー・ソウル』だよ。確かにジョンが亡くなったとき、アメリカの放送局なんか大量にオンエアしてたけど。

藤村　私はそんなこと全然関係ないですよ。純粋に聴いてすごく良い曲だと思う。

行方　でも2位かよ……。

藤村　外国人も好きなんですよね。〈イン・マイ・ライフ〉〈ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア〉〈イマジン〉とかっていうのは、同じところにある感じの曲。

行方　その中で言うとジョンの2曲はスタンダード的な系列だよね。〈ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア〉はポールだけど、アメリカン・スタンダードを書くようなメロディ・メイカーのセンスっていうのは、結局ジョンにもあったんだよな。

藤村　そうですね、普遍的な感じがします。曲も分かりやすければ、英語なのに歌詞もすごく分かりやすいっていう。私も〈イン・マイ・ライフ〉好きですよ。

行方　「ビートルズ1」が出るタイミングだったから2000年だと思うんだけど、キムタクも番組の中で一番好きなビートルズの曲として〈イン・マイ・ライフ〉を挙げたんだよ。私なんか〈イン・マイ・ライフ〉って、『ラバー・ソウル』の、どっちかって言うと隅っこの、比較的脇役度の高い曲なわけ。だからキムタクがああ

CamScannerでスキャン

いうふうに公言するのはちょっと意外だなと思ったんだ。確かに海外のミュージシャンのインタビューでも〈イン・マイ・ライフ〉を挙げてる人は多い。ただ、『赤盤』を聴いてると、〈ミッシェル〉〈イン・マイ・ライフ〉〈ガール〉って並んでるから、その効果があるんじゃないかな。

吉田　オイシイところに挟まれてる。

行方　そういう意味じゃ、ほんわかしたバラード2曲の間で、ジョージ・マーティンのキーボードが結構立っててね。

吉田　一理ありますね。ただ、それから何十年も経ってからの総選挙で2位っていうのは、ちょっと分からないですね。

藤村　今『ラバー・ソウル』とか『リボルバー』の評価がものすごく上がってますよね。ビートルズの作品の中で、世界的に。

行方　私の印象だと、私より下の世代で『リボルバー』の評価が結構高いね。つまりハード・ロックの連中なんだよ。それこそディープ・パープルとかツェッペリンとか、あそこに直結するものを『リボルバー』からは感じるんじゃない。それとアメリカ人って〈夢の人〉を好きな人が結構いるんだよ。なんであんな隅っこのヘンな曲が好きなんだろうって思ったら、あれアメリカ盤の『ラバー・ソウル』の1曲目なんだよね。1曲目がヘヴィ・メタルっぽい〈ドライヴ・マイ・カー〉か、フォーク・ロックっぽい〈夢の人〉かで、アルバム全体のイメージが違う。

吉田　1曲目っていうのがやっぱり大きいですね。

行方　それにしても『リボルバー』のファンの多さに私は結構びっくりする。みんな〈トゥモロー・ネバー・ノウズ〉とか好きでしょ。

藤村　私たちみたいな後から追いかけた人間にとっては聴きやすい。好きですよ。

吉田　ジョージ・ファンも好きですよ。3曲入ってますよね。

行方　あれは両面ともジョージから始まるのか。

吉田　そうなんです。ジャケットでもジョージが結構目立ってませんか？　それもあるのかなと。ジョージ・ファンはみんな『リボルバー』が好き。

行方　あの頃からジョージは本腰入れて目立ってきたよね。

藤村　ジャケットがまた良いんですよね。

吉田　ジャケット良いですよね。Tシャツで着たい感じ。

CamScannerでスキャン

行方　そのデザイナーが「アンソロジー」のジャケットを作ったクラウス・フォアマン。

吉田　繋がってるんですよね。

■「サージェント・ペパーズ」の疑問が解決

行方　吉田さんは音楽出版の専門家だよね？　ビートルズってさ、イギリス盤のアルバムだと基本14曲入ってるじゃない。でもアメリカはそれを11曲に減らしてる。ビートルズに限らず、フランク・シナトラなんかも11曲、12曲なんですよ。後になって知ったんだけど、アメリカってアルバムでも著作権使用料が曲数按分されないんだよね。

吉田　そうです、1曲ごと。

行方　だからクラシックの「ベスト100」って私らが売り出して上手くいったのがあるんだけど、アメリカでは出せないんだよ。100曲分払わなきゃいけないから。

吉田　その違いは大きいですね。

行方　それで「サージェント・ペパーズ」って最後にバカ騒ぎが入ってるじゃない、数秒間。

吉田　イギリス盤はそこだけ繰り返してましたね。自分で針をあげない限りはずっと。

行方　そうそう。日本盤はそういう意味じゃ合理的で、何回か繰り返して勝手にフェイド・アウトするんだよ。でもアメリカ盤にはないんだよ。私は無理してアメリカ盤を買ったのに、友達のには入っているそれが入ってなかったの。すごく損した気分だった。

吉田　それだけでも損した感じになりますね。

行方　それで質問なんだけど、「サージェント・ペパーズ」のその数秒って1曲にカウントされるの？

吉田　最後の曲のアウトロか単なるSEとして扱うかもしれないですね。つまり1曲にカウントしない。

行方　アメリカ盤のLPはそこをケチってはいないってことか。

吉田　そうですね。

CamScannerでスキャン

行方　じゃあオートリターン機能（編注：レコードの演奏が終わると、プレイヤーのアームが自動的に戻って再生が終わる機能）が普及していたから、アメリカでは無駄だっていうんで省いたんだね。

吉田　短い曲でいえば、『アビイ・ロード』の最後の〈ハー・マジェスティ〉ってあるじゃないですか。あれはもう完全に1曲扱いです。

藤村　213曲の中に入ってますね。

行方　さすがに『サージェント・ペパーズ』の最後は213曲に入ってないよね？

藤村　あれは入ってないと思います。

吉田　あとはもう1曲、〈ストロベリー・フィールズ〉の最後にSE入ってるじゃないですか。逆回転の。あれは完全にアウトロだから〈ストロベリー・フィールズ〉で1曲。〈ハー・マジェスティ〉はタイトルも付いてるし、〈ジ・エンド〉とは別の曲だから2曲。『サージェント・ペパーズ』のあれは〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉のアウトロかSE扱いだと思います。

行方　そうだよね。1曲分ケチって、数秒削ったのかなとか色々疑ったわけだよ。ビートルズに始まったことではないけど、アメリカはそれまで一生懸命削ってたからね。アメリカ基準でやることで、新譜も増えたし余分なアルバムがいっぱい生まれたじゃない。それが二重に良かったっていうところもあるんだろうけどね。

■映像で見るビートルズ

吉田　78年に、来日のときの再放送があったんです。

行方　武道館のね。

吉田　あれも僕ら世代にとっては大きい出来事で。日本公演の話っていろんなところで聞くけど、誰も見たことがなかったんです。放送も当時1回されただけなんですよね？

行方　そうそう、その日にね。

吉田　60年代の日本でのリアルな姿を見られたのが、とても大きかったですね。

行方　なんだかんだ言ってビートルズ・ファンって少数派で、多くはどっちかって言うと、センセーションを横目で見てたみたいね。「武道館の大成功をもって60年代から日本でもすごい人気だった」っていうのは、ちょっと違う。少なくと

も、ビートルズのセンセーションにだけ付き合った人間というのが多分いっぱいいるから。

吉田　でしょうね。警官とか反対派がいっぱい出てくるじゃないですか。街宣車に乗って「ビートルズ帰れ」みたいな。あの映像を見て、これくらいビートルズが社会を動かしたんだなっていう、リアルな体験ができましたね。

行方　武道館じゃなきゃ別に街宣車も来ないんだけどね。「日本の伝統をなんと心得る」っていうことだったから。曲目自体はハリウッド・ボウルのほうが全然良いでしょう?

吉田　全然良いです。

行方　あの公演の35分はなんかヘンだね。〈ベイビーズ・イン・ブラック〉なんて、なんで演るんだよって。

吉田　初期のヒット曲はほとんどないですからね。

行方　私の中では、あの選曲はせいぜい50点ぐらいかな。あの公演で何も音楽が聞こえなかったって言う人が多くいたんだけど、それがさっき言ったセンセーションに付き合ったメディアとか文化人。ファンは聞こえたと言ってるし、私もテレビでしか観てないけど聞こえた。つまり、聞こえないって言ってた文化人にとっては、ビートルズの音楽自体がハナから騒音だった。人間の耳って、わりと必要なものを聴き分ける能力って高いんだよ。

藤村　ちゃんと脳が聴いてますよね。

行方　そう。まあまあそんな時代ではあったね。

吉田　あと、僕にとって非常に大きかったのが、映画の三本立てなんです。「ハード・デイズ・ナイト」「ヘルプ!」「レット・イット・ビー」があれば、半日でデビューから解散までを経験できるわけですよ。

藤村　そうか、「レット・イット・ビー」まであればできますね。

行方　私は64年の中学校1年のある遅い春ぐらいのときに初めて〈抱きしめたい〉を買うわけだけど、その夏に「ハード・デイズ・ナイト」が公開されるんだよ。あの映画って、すごい良く出来てるじゃない。

吉田　ドキュメントか作り話か、分からなくなるくらいに。

行方　あれが史上最初のPVって言われたりするでしょう。音楽のシーンどれひとつ取っても良いよね。我々の頃は「レット・イット・ビー」が出来る前だから、

CamScannerでスキャン

よく「ハード・デイズ・ナイト」と「ヘルプ!」の二本立てをやってたよ。この二本は何十回も観てるね。「イエロー・サブマリン」はどうだった?

吉田　三本立ての一本が時々「イエロー・サブマリン」に入れ替わることがありました。キャラクターが面白かった覚えがありますね。矢印男みたいなものとか。

行方　結局「ハード・デイズ・ナイト」も「ヘルプ!」も「イエロー・サブマリン」も、リンゴははぐれてブラブラしてるんだよな。

吉田　よく言えば主役。

藤村　一番演技力があった。

行方　そうだよ、"アクト・ナチュラリー"だよ。私は「イエロー・サブマリン」は気が進まなかったんだけどね。まず〈イエロー・サブマリン〉って曲が好きじゃないし。ビートルズの童謡路線はいまだダメで、〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉とか、一番ダメなのが〈オクトパス・ガーデン〉だし。と、思ってたら、あの映画ではいきなりイントロで灰色の街をカラーに染めていくじゃない、潜水艦が。そのアニメーション自体が当時斬新だったんだよね。これはまた良いものと出会ったなって思ったね。

藤村　アニメーションは本当に素晴らしい。

吉田　メンバーもあれを見るまでは、結構バカにしてたって話がありますよね。

行方　そうそう、あれのラッシュかなんかを見て、出演することにしたんでしょ。

吉田　〈エリナー・リグビー〉の涙を流すシーンとか、とっても印象的です。通常のPVよりも、劇中の〈エリナー・リグビー〉のほうがインパクト大きいですもん。

行方　そうかもしれないね。そういう意味では、その三本は実に立派な映画に立派なPVだっていうね。

2015年には『1』のDVD付きがでましたよね。あれも結構衝撃的で

『1』収録の全27曲のPVを、あるものは既存の映像に手を加えて完、あるものは新たに作った(編注:デラックス・エディションの『1+』には3曲のボーナス・ビデオを収録)。あれ結構良いPV多かったもんね。

映像を全部リストアして、すごくきれいでした。

きれいだったし、新たに作ったPVが結構入ってましたよね。

長い時間かけて丁寧に使ったと、アップルのジョナサンが言っていました。

行方　ニールの片腕みたいなやつね。
藤村　彼が映像担当として、2015年版『1』の映像ヴァージョンを手掛けたそうです。
吉田　現役時代はなかった〈ワーズ・オブ・ラヴ〉かな？　全部作り直してた。
行方　〈ワーズ・オブ・ラヴ〉は『1』には入ってなかったよね。
吉田　『1+』のDVDです。隠れた名曲というか、端っこの端っこの曲じゃないですか。それをアニメと合わせたPVにしてたんです。
行方　不思議なものを選んだもんだね。
藤村　デラックス・エディションに入ってるんですよね。『1』の27曲以外に何曲か。
吉田　僕ら世代は1回の飯を抜いたってデラックス盤を買うんです。一番高いのを買うしかないんですよ。なんで大変なんですよ、いつも。
行方　そういえば、今また「ハード・デイズ・ナイト」を劇場で公開してるんだよね？
吉田　そうです。国内はうちが権利を預かってるので。音はそれなりにリマスタリングを繰り返して、今の映画館の音響設備に合ったクオリティまで上がってます。
行方　これは観てほしいね。「エイト・デイズ・ア・ウィーク」はどうだった？
吉田　ちょっとマニアックな気がしました。
行方　私は「なんでロン・ハワードがこんなことやるんだよ」って思ったね。「ダ・ヴィンチ・コード」（ロン・ハワード監督作品）みたいなものを観るつもりで観に行ったのにさ。しかも勘弁してほしいのは、最後がルーフトップ・コンサートでしょう？
藤村　そうなんですよね。
行方　ねえ。今、「ロード・オブ・ザ・リング」のピーター・ジャクソン監督がビートルズの新しい映画を作ってるじゃない。どういうことになるのかね。
吉田　映画っていうメディアになるんだったら、もっと広く浅くでもいいから、いろんな人が観て楽しんでもらえるような作品に仕上がったらいいなと思いますけどね。
行方　「エイト・デイズ・ア・ウィーク」と同じように期待して、同じように裏切

られるの嫌なんだよな。ビートルズの『指輪物語』なら『ヘルプ！』だろうって、私は言ってるんだけど。

吉田　はい、座布団一枚！（笑）。

行方　映画もそうだけど、ここのところ『アビイ・ロード』50周年記念盤のリリースとかもあったよね。50周年を期に、解散後のビートルズにはもうひと頑張りしてもらいたいね。シンコーさんからは長谷部宏さんの写真集が出たんだっけ？

吉田　2019年に出た『ROCK THE BEST』という写真集の豪華版が、2020年3月に発売されます（編注：9月に延期）。

行方　星加ルミ子さんもシンコーさんから本を出してるよね。

吉田　エッセイの『私が会ったビートルズとロック・スター』ですね。星加ルミ子さんと長谷部宏さんはシンコーの宝物だと思っています。ビートルズにあれだけの回数、生で会って、写真を撮ってるのって日本ではあのおふたりのコンビしかいないんです。だからこれからもいろんなところに登場していただいて、当時の貴重な体験とかビートルズの話を、今の子どもたち、ティーンエイジャーに伝えていきたいと思っています。

CamScannerでスキャン

謝辞

対談を引き受けてくださった高嶋弘之さん、ピーター・バラカンさん、藤村美智子さん、吉田聡志さんには病室に来ていただくという大変な手間をおかけした。この3年半白血病と付き合っている。この病気は大手術こそないものの、治療の過程で全身が無防備状態になり、元気と自覚していてもしばしば病院に幽閉される。健康人にはチンピラ程度の、内外の反社会的ならぬ半肉体的勢力のつまらない悪さも時に大ごとになる。これを監視し、感染から身を守るための入院だ。だから本書発行のスケジュールを守るには、病室までご足労頂くしか方法がなかった。皆さん快くご了解いただきお相手してくださったが、病院のパジャマを着て点滴の管をフル装備し、時にベッドでゴロゴロする病人との対談がいざ始まると、実は驚き呆れ辟易なさっていたのではないか。しかし内容はいずれも素晴らしい。

高嶋弘之さんは近頃は娘さんのヴァイオリニストちさ子さんとTVで共演することも多い。いわば毒舌娘の放言パパだが、ことビートルズに関する限り"持ちネタ"は講談や落語のように整理と改訂が繰り返し施されている。記憶違いでは？とギモンを投げると、数ヵ月後には改訂版を当然のように披露されている。一見の放言は、実は緻密に組み立てられているのだ。今回の対談でも、持ちネタ最新版を名調子とともにご確認いただいたと思う。高嶋さんは無類のアイディアマンで感覚も秀でた方だ。ビートルズの新しい音楽、新しい文化としての側

面を即座に見抜き、広い層めがけて社会現象あるいは言葉に落とし込んだ。「ロングヘアー」「丸首スーツ」や、"I Want To Hold Your Hand"をより直截に表現した邦題〈抱きしめたい〉など。これら日本のビートルズ最初期における"三種の神器"は伝統を無理なく否定しており、以後のビートルズ的な新文化の一般的な浸透に果たした役割は測り知れない。

ポピュラー音楽のソムリエとも言いたいピーター・バラカンさんとの付き合いは長いが、なぜかビートルズを集中的に語り合ったことがない。同じ1951年生まれ、十代を60年代スウィンギング・ロンドンに過ごしたロック通というバイオグラフィは、東京ローカルで同時代を過ごした者には興味津々以上のものがあるが、話題に上らなかったのはふたりともにビートルズが当然のように原点にあったからではないか。今回ようやく実現した"ビートルズ二都物語"は、お読みの通り想像を超えて面白い。驚きのひとつは、英国デビュー翌年の1963年に母親と一緒にビートルズの音楽と出会っていることだ。その翌年の1964年の日本では、教師やママが背を向ける「不良の音楽」だったのにね！

藤村美智子さんはビートルズに加えてクイーンも担当する心強い部下だった。美しいものに目がなく、世代的にもフレディ・マーキュリーの方がよりホンネだったと思う。名前も美智子サマだしね。「ビクイーンの方がよりホンネだったと思う。名前も美智子サマだしね。

ートルズ1』(2000年)、クイーン『ジュエルズ』(2004年)と300万枚、170万枚の巨大ヒットをもたらしてくれたが、両グループとも美智子サマが国内盤制作史上ただひとりの女性担当者だ。女性らしい感性がファンを拡大したところも大いにあったと思う。

ほぼ同世代のシンコー吉田聡志さんはビートルズ現役の60年代に"10年遅れて来た青年"だが、70年代以降のビートルズへの熱中は筋金入りだ。本文中にも書いたが、ビートルズ以降にビートルズを凌ぐ唯一のロック・バンドは"解散後のビートルズ"だと僕は思っている。その巨大なバンドの同時代者であるおふたりの体験や感想には、"現役のビートルズ"の同時代者が改めて学ぶところも多々あった。

そしてもうひとり、現実の対談はかなわなかったが、東芝EMIの大先輩石坂敬一さんも各所にご登場をお願いしている。2016年12月31日に71歳で急逝された。新入社員の頃から限りない回数飲みに誘って下さった。古今東西に及ぶ幅広い話題の中で幾度となくビートルズの話もしたが、僕の質問に答えていただいたと言った方が正しい。さらに石坂さんにはビートルズに触れた著書や雑誌原稿が多数ある。これらから学んだビートルズ観/ビートルズ論は本書にいくつか引用させていただいているし、あるいは自然と原稿の奥に潜んでいるに違いない。高嶋さんが準備した巨大な土地に大人の文化の種を蒔き、これらを数々の大輪の花に育て上げた、いわば中興の祖だ。いくつか

の原稿は石坂さんと会話しているような気分で書いた。

もうふたり、石坂さんと同じ形での海外からの登場人物がいる。プロデューサーのジョージ・マーティンと、ビートルズの会社アップル社長のニール・アスピノールの両氏だ。ふたりがいなければ、藤村さんや僕らが国内盤を手掛けた時代の大作『ビートルズ1』や『LOVE』(2006年)は生まれていないし、ふたりの理解と協力がなければ日本におけるフルの広報活動も展開できなかった。ニール・アスピノールは解散後のビートルズの名プランナーにして実行者、マーティンは音楽的に"5人目以上のビートル"だ。アスピノール氏は2008年、マーティン氏は2016年に世を去られている。

本書の母胎となった 第1部「僕らのビートルズ」の連載原稿を依頼してくださったのは、ファンクラブの斉藤早苗代表と会員限定の月刊誌「ザ・ビートルズ」の葉山真編集長だ。1997年〜2013年の（60年代のファンに続く）僕の第2期ビートルズ大接近時代、さまざまなプロジェクトでご一緒させていただいた。そしてレコード会社の役員を退任して2年半後、ビートルズの原稿を依頼してくださったのだ。正面から初めて書くビートルズだ。その辺りのいきさつは第1部の後記で触れた。この連載が本書の企画にも直結したわけだから、おふたりにはいくら感謝しても足りない。

CamScannerでスキャン

解散50周年という節目を迎えて本書の企画は生まれた。最初にお話しさせていただき、かつ全面的な編集を引き受けてくれたのがシンコーミュージック・エンタテイメントの播磨秀史さんだ。他の版元は考えられなかった。60年代、僕らは同社のミュージック・ライフ誌の最新ビートルズ情報を毎月心待ちにしていたのだ。即座にゴーサインをいただき、シンコーきってのビートルズ通である吉田聡志さんが対談に参加してくださった。装丁はシンコーミュージックのデザイン部長を長らく務められた小林敏明さんが引き受けてくださった。

EMIで2000年代に僕の有能な部下だった阿部裕行さんはその後シンコーに転職し、イヴェント制作のヘッドとして本籍地ヘヴィ・メタルやビートルズ、クイーンの様々なトークショーなどを企画されている。本書に関しても魅力的なイヴェント化を考えてくださることと思う（よろしくね!)。2017年末、シンコー刊の阿部克自写真集「ジャズの肖像　ポートレイチャーズ」を監修し、トーク・イヴェントも開催させていただいたが、シンコーの方の阿部ちゃんが総合プロデューサーだった。書籍の編集者はもちろん播磨さんだ。

同書に続いて2018年秋刊行の「ジャズは本棚に在り　ジャズ書と名盤」でも播磨さんと仕事させていただいた。そしてこれが、何10年も存じ上げているヴェテラン編集者富永虔一郎さんとの初仕事だ。本籍地は文芸書という富永さんは僕のお兄さん世代のビートルズ・ファン

CamScannerでスキャン

でもあり、(僕ら初代前夜のファン*ということになるが、しかし) 大いに頼りにし助けていただいた。本書の当初の具体化を熱心に進めてくださったのは富永さんだ。

こちらは若き750 (ナナハン) ライダー女子編集者の亀井洋子さんとは、デアゴスティーニの隔週刊LPマガジン「ジャズLP コレクション」(2016年9月27日創刊、2019年12月17日完結) で出会い、この間の同『ザ・ビートルズLPコレクション』全23巻 (2017年8月29日創刊、2018年7月3日完結) でもご一緒した。ともにヨーロッパ企画だが、日本語版を監修させていただいた。改めてビートルズのLPに針を落とすという“儀式”があの時代の記憶を呼び覚ましてくれ、本書の企画にも明らかにつながっている。亀井さんはギネスブック日本語版の編集などもされており、その辺りも世界No.1の記録多数のビートルズっぽい。ギネスはもちろんアイルランドのお酒だし、ビートルズのリンゴを除く4分の3はアイリッシュの血統でもある。対談周りの取材と整理を引き受けていただいた。

以上の方々に加え、僕の最初のビートルズ本の出版に至るすべての登場人物の皆様に深く感謝したい。こんなこと、50年前の高校生ファンは夢にも考えなかった。そして最大の感謝を、たった今本書を手に取ってくださっている読者の皆様に捧げます。

──ビートルズは終わらない。

* 武道館体験者でもある富永さんは"ビートルズ・ゼロ (ないし0.5) 世代"の呼称を主張なさっている。「ニール・セダカ世代じゃカッコ悪いので」とのこと。

CamScannerでスキャン

行方均さんへの追悼文

私は行方均さんのことを、いつ頃からか忘れたけれど「ナメちゃん」と呼んで来た。

彼が東芝EMIに入社したのは1976年だから、もうビートルズはとっくに解散していたものの、70年代といったらロックもポップスも洋楽全盛時代。私はほとんどあらゆる洋楽の雑誌には書いていたし、ラジオでは「全米TOP40」と言う番組が4年前から始まっていて16年は続いたから、ピンク・フロイドやローリング・ストーンズなどを扱う東芝の担当者は、ナメちゃんの親分にあたる石坂敬一さんを筆頭に、新型コロナウイルスで言うならば、それこそ3密状態で接触していたので、ナメちゃんも当然その中の一人だったのだと思う。

そんなナメちゃんが、やがて1997年から6年間にわたって、ビートルズの国内盤を発売するセクションを統括していた事は知っていたけれど、ナメちゃんと言ったら、決してビートルズやロックの人ではなく、ジャズ畑の人だったのだ。

膨大な量の優れたジャズの作品を、洋楽ディレクターやA&Rマンとしてだけではなく、CD制作からライヴのコンサートまで縦横無尽にプロデュース。1988年にブルーノートの姉妹レーベル「サムシンエルス」を日本の東芝EMI内に設立。200タイトルに及ぶ作品の多くを海外でも発売して、中にはグラミー賞にノミネートされた物もあり、消えかかっていたジャズに大きく貢献。ミスター・ブルーノート

と呼ばれるような存在になっていたのだった。

そんな人だったから、ノラ・ジョーンズからはお父さんのように慕われていたし、ことのほかニューヨークには強くて、ハーレム発信の大ヒット・ミュージカル「Mama, I want To Sing」の原作者でプロデューサーのヴァイ・ヒギンセンと、日本公演に関する話し合いで会うことになった時などは、1983年の日本初演のとき以来、すっかり私の親友になっていたヴァイと、同行してくれたナメちゃんと3人で、ハーレムの中やマンハッタンのバーとかレストランを、まるで赤坂か六本木にでも居るような感覚で、夜ごと楽しく歩いた事が忘れられない。

やがてナメちゃんは2012年に、EMIミュージック・ジャパン最後の代表取締役会長に就任。

ユニバーサルミュージックの副社長を経て2014年に独立。自分の会社NAMES（ビートルズのマネージャー、ブライアン・エプスタインの会社NEMSをもじって命名。実はナメスと読める(笑)）を設立。冗談めかして自分のことを業界のラストエンペラーと呼んで笑っていたけれど、石坂敬一さんが2016年に他界する日まで、超個性の強い先輩と後輩、ライバルとして、石坂さんと共に洋楽業界を支え続けてくれた有名人だったと言っていいだろう。

でも、実は凄かったのはその後からで、ナメちゃんは石坂さんが他界する5ヶ月前の2016年7月に、大好きなお酒が最近あまり

CamScannerでスキャン

飲めないからと、近所の病院で「念のために」血液検査をして貰ったところ、なんと急性骨髄性白血病と診断されて翌日入院。

それから68歳で亡くなる2020年3月13日までの3年8ヶ月。臍帯血移植などの治療を受け、回復と再発を繰り返しながら、病室に備えたパソコンに向かって原稿を書き続け、外出許可を取っては「ジャズ100年の名演奏500時間」などの長時間ラジオ番組などに出演。亡くなる数日前まで異色の新人歌手CHIKO（チコ）のレコーディングを続け、2019年には映画「私が殺したリー・モーガン」や「ビル・エヴァンス～タイム・リメンバード」他の字幕を手がけ、ジャズ・ピアニスト大西順子や松永貴志のCD、ケイコ・リー、TOKUと言った人たちのコンサート・プロデュースに、「ジャズ書と名盤　ジャズは本棚にあり」や「ブルーノート年代記」などの本格的なジャズの本を出版。新聞や雑誌などに連載を書き続けて来たのだった。

その間には私との対談が隔週刊のMUST JAZZ CD COLLECTIONに載ったり、私自身も何回か病室を見舞ったりもしていたのだが…。

まさかまさか、その見事な人生を彩る最後の本となるのが、ジャズとは全く関係の無い、ナメちゃんにとっても初のビートルズ本「ビートルズは終わらない」になるだろうなんて、予想さえもしていなかった。不覚にも、私はナメちゃんがビートルズ・ファンク

CamScannerでスキャン

ラブで出している月刊ザ・ビートルズに、これだけの連載を続けていたなんて、全く知らなかったのだから。

ナメちゃんは、一時の危篤状態から奇跡的な回復力で意識を取り戻した最後の数日間。刷り上がって来た分厚いゲラと、カラー印刷の表紙を病室に飾って、それは嬉しそうに眺めていたと聞く。

昔はギョロリとして怖かった目が、最近はすっかり優しくなって、それでも最後の最後まで、音楽への情熱と好奇心が消えることの無かったナメちゃん。貴方がビートルズ本を出すなんて、石坂さんに見せて、うらやましがらせて上げたかったよね。

今日は2020年4月14日。日本の新型コロナウィルスに感染した人の数は7,645人。世界の感染者数は191万人を超えたそうで、まだ終息のめどは全く立っていない。ナメちゃんはそんなこと知らないで済んで、本当に良かったね!

またこれから先、止まない雨も、明けない夜も無いのだから、何がどうなろうと、音楽とビートルズとナメちゃんは、きっと永遠に不滅です。

音楽評論・作詞

湯川れい子

行方 均（なめかた・ひとし）

1951年（ビートルズ来日記念日の）6月29日生まれ。早大政経学部卒業。東芝EMIに入社し、80年代よりブルーノート／サムシンエルスを中心にジャズ・レコード／CDを制作。『ブルーノート・ベスト5&クロニクル』（2019年／ソウオト書店）、『ジャズは本棚に在り ジャズ書と名盤』（2018年／シンコーミュージック・エンタテイメント）他ジャズ関係の編著書も多数。書籍の映画「ビル・エヴァンス タイム・リメンバード」（2019年公開／配給オンリー・ハーツ）などの字幕の翻訳、ラジオDJなども務める。1999年～2013年、東芝EMI～EMIミュージック・ジャパン～ユニバーサルミュージックで『ザ・ビートルズ1』などビートルズの国内盤発売を統括する。EMIミュージック・ジャパン最後の代表取締役会長。2020年3月13日に逝去。享年68。

ビートルズは終わらない

2020年6月18日　初版発行

著／行方 均

編集／播磨秀史（書籍編集ルーム）、亀井洋子（アッシュ）
ブックデザイン・DTP／小林敏明
特別協力／プロデュース・センター
協力／行方順子、石坂典子、富永虔一郎、水谷イタル、大村 亨、池上信次、菊池幸子

発行人／草野夏矢
発行元／株式会社シンコーミュージック・エンタテイメント
〒101-8475
東京都千代田区神田小川町2-1
TEL 03-3292-3271（書籍編集ルーム）03-3295-4191（営業部）
FAX 03-3292-3283（書籍編集ルーム）03-3295-0006（営業部）
E-mail info@shinko-music.co.jp
URL http://www.shinko-music.co.jp

編集人／笹川孝司

印刷／図書印刷株式会社
製本／株式会社若林製本工場

© 2020 Hitoshi Namekata
Published by SHINKO MUSIC ENTERTAINMENT Co., Ltd.
ISBN978-4-401-64924-2
Printed in Japan

■定価はカヴァーに表示してあります。
■本書の記事及び写真の無断転載は固くお断わりいたします。
■本書の無断複製は著作権法での例外を除き禁じられています。
　また、代行業者等の第三者による本書のデジタル化は、たとえ私的使用の範囲内であっても一切認められません。
■万一、乱丁・落丁の際はお取り替え致します。

CamScannerでスキャン